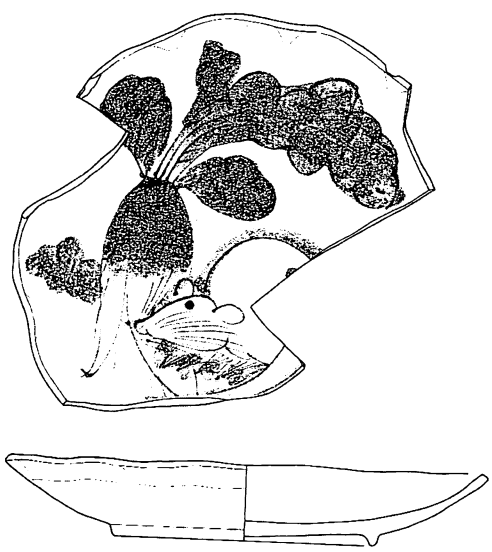
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第181集

山梨県中巨摩郡甲西町

宮沢中村遺跡

一般国道52号(甲西道路)改築工事
中部横断自動車道建設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2000・3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局

山梨県中巨摩郡甲西町

宮沢中村遺跡

2000・3

宮沢中村遺跡出土磁器

巻頭図版 2

遺跡全景（江戸後期の遺構群、北から望む）

1　3号建物礎石

2　遺跡全景（南から望む）

1　5面2号杭列

2　5面1号杭列

1　3号建物出土陶磁器

2　3号建物周辺出土陶磁器

1　3号建物周辺出土磁器

2　3号建物周辺出土陶器

1　3号建物周辺出土容器類

2　7号建物出土陶磁器・土器

1　1号溝出土磁器

2　1号溝出土陶器・土器

1　3号溝出土陶磁器

2　3号溝出土陶磁器・土器

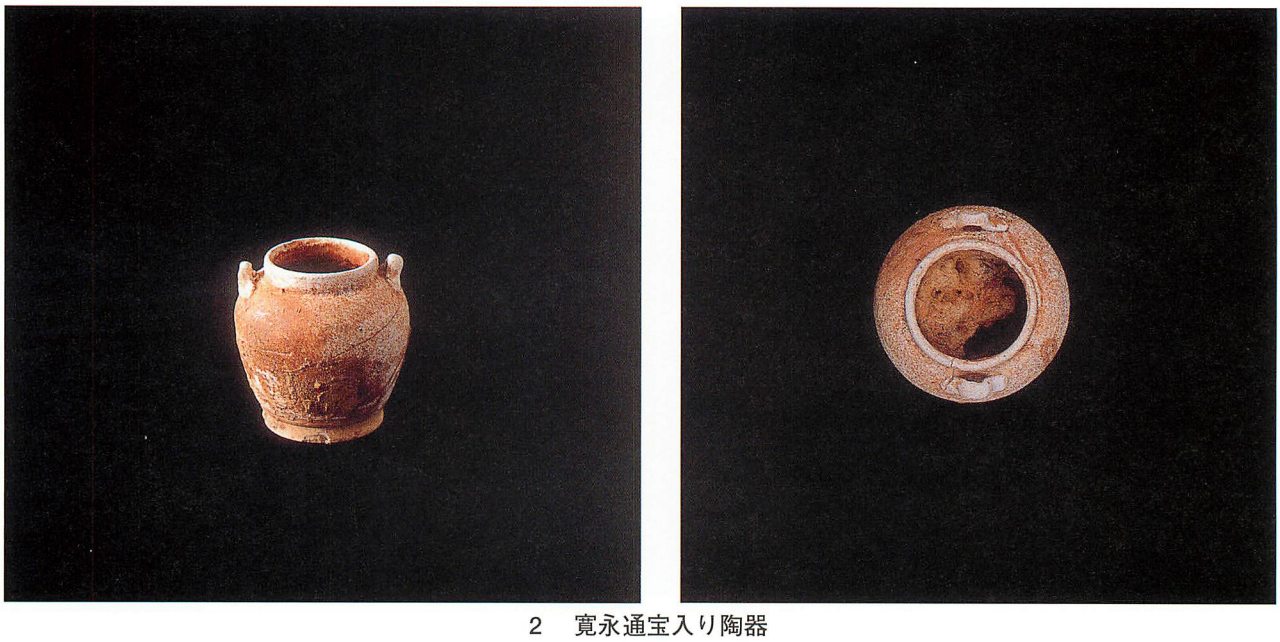
1　7号溝出土磁器

2　7号溝出土陶器・土器

1　21号溝出土陶磁器・土器

2　各溝出土陶磁器・土器

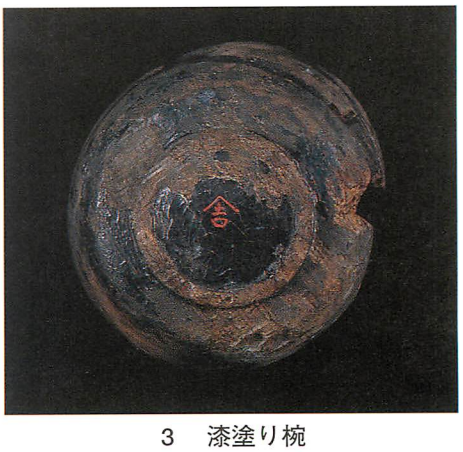
1　井戸出土陶磁器・土器



2　寛永通宝入り陶器

1　漆塗り椀

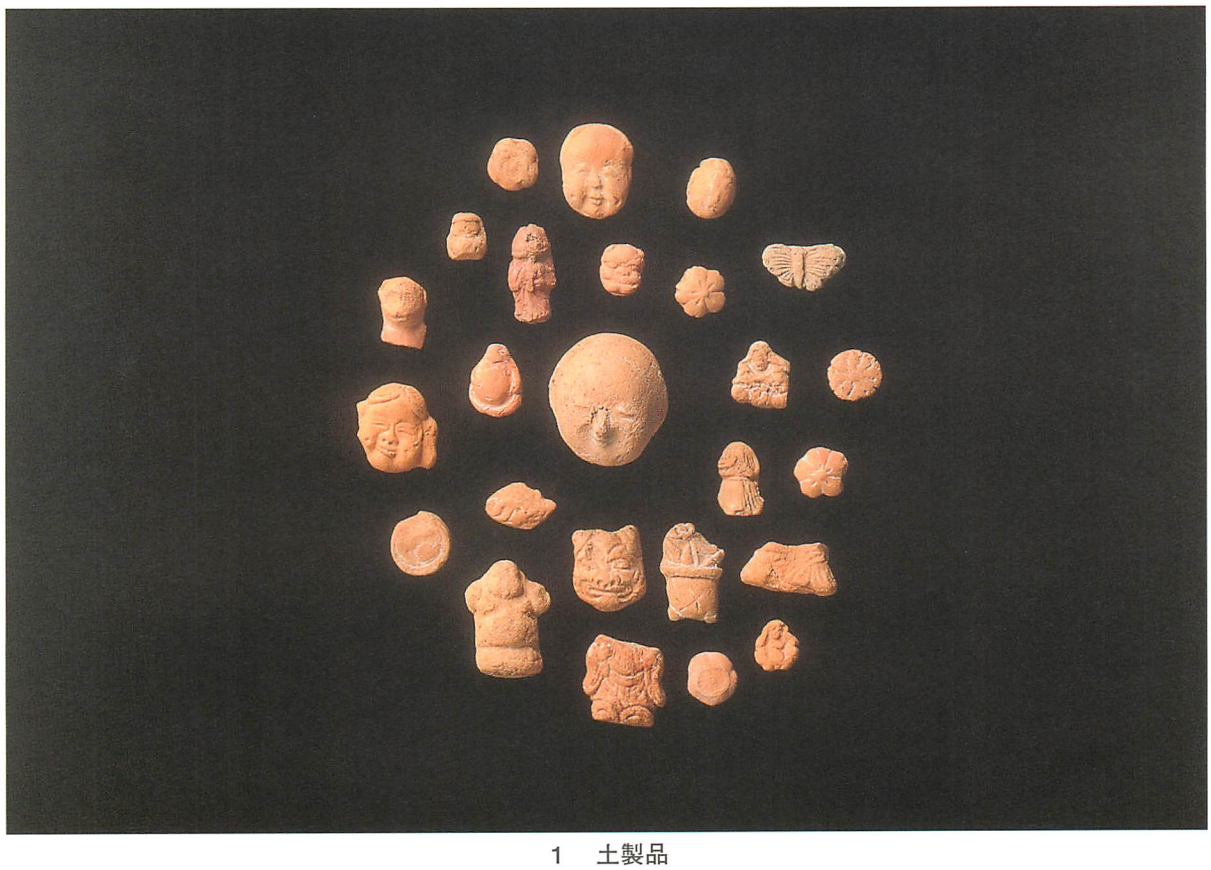
2　漆塗り椀



3　漆塗り椀

1　漆塗り椀

2　金属製品



1　土製品

2　4面建物群柱根

巻頭図版16　宮沢中村遺跡から出土した昆虫化石の顕微鏡写真

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

1．ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
　左上翅　長さ12.5㎜（試料７；標本11）
2．ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* Hope
　右上翅　長さ13.0㎜（試料７；標本９）
3．コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda*（Faldermann）
　右上翅　長さ9.5㎜（試料７；標本45）
4．カナブン *Rhomborrhina japonica* Hope
　左上翅上半部　長さ12.5㎜（試料７；標本９）
5．シロテンハナムグリ
　Protaetia orientalis（Gory et Perchelon）
　前胸背板　最大幅11.0㎜（試料７；標本88）
6．タマムシ *Chrysochroa fulgidissima* Schonherr
　右上翅下半部　長さ16.2㎜（試料３；標本９）
7．コメツキムシ科　Elateriae gen.et sp.indet.
　右上翅下半部　長さ8.4㎜（試料７；標本３）
8．ガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky
　右上翅　長さ23.0㎜（試料６；標本10）
9．ヒメゲンゴロウ *Rhantus pulverosus*（Stephens）
　左上翅　長さ7.5㎜（試料５；標本８）
10．コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse　頭　部　最大幅2.8㎜（試料７；標本26）
11．エンマコガネ属 *Onthophagus* sp.
　左上翅　長さ5.2㎜（試料７；標本５）
12．クロマルエンマコガネ *Onthophagus ater* Waterhouse
　前胸背板　最大幅4.2㎜（試料７；標本57）
13．マグソコガネ *Aphodius rectus*（Motschulsky）
　右上翅　長さ3.8㎜（試料７；標本44）
14．エンマムシ科 Histeridae gen. et sp. indet.
　左上翅　長さ6.0㎜（試料７；標本13）
15．双翅目 Diptera fam, gen. et sp. indet.
　囲蛹　長さ9.0㎜（試料７；標本７）
16．アオゴミムシ属 *Chalaenius* sp.
　左上翅　長さ9.5㎜（試料７；標本20）
17．アトボシアオゴミムシ *Chalaenius naeviger* Morawitz
　右上翅　長さ9.2㎜（試料７；標本65）
18．スジアオゴミムシ *Haplochlaenius costiger*（Chaudoir）
　右上翅　長さ12.0㎜（試料７；標本91）

序

本書は山梨県埋蔵文化財センターが平成６年度（1994）及び平成８年度（1996）に調査を行なった、宮沢中村遺跡の発掘報告書であります。この調査は建設省と日本道路公団とが実施する、一般国道52号（甲西道路）改築工事および中部横断自動車道建設工事に先立つものであります。この事業にかかわって富士川右岸地域を中心に10箇所以上の遺跡の発掘がすでに終了しておりますが、特にこの地域には扇状地が発達しており、さらにその先端には沖積地が形成されるといった、地形状の特質がみられます。

宮沢中村遺跡は、扇状地末端と沖積地とが接する地帯に位置しており、洪水の常習地であったところでもあります。しかしこの地域には、明治時代に全村移転してしまった旧宮沢集落が形成されており、遡った戦国時代には大井氏が依ったとされる富田（とだ）城があったともいわれている歴史あふれる地域でもあります。

発掘調査では、旧宮沢集落の一部を構成していた民家や寺跡が発見され、江戸時代後期の農村の実態をつかむのに重要な資料が提供されました。さらに下層からは鎌倉時代と推定できる水田跡、杭や網代を用いた護岸施設などが発見され、生産の場の状況をつかむこともできました。

これまであまり知られていなかった、沖積地での近世集落の実態や水利施設の在り方など、新しい資料を提供することができたものと自負しております。今回の成果が広く活用されることができれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係者、関係機関並びに調査・整理作業に従事された方々にお礼を申し上げる次第であります。

2000年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　大　塚　初　重

例　　言

1　本書は、建設省が行なう一般国道52号（甲西道路）改築工事、および日本道路公団が行なう中部横断自動車道建設工事に伴い発掘の行なわれた、山梨県中巨摩郡甲西町宮沢字東宮沢に所在する、宮沢中村遺跡の調査報告書である。

2　『宮沢中村遺跡』という名称は、かつてこの地に宮沢集落の中村地区があったという経緯に基づくものである。

3　調査は、山梨県教育委員会が建設省並びに日本道路公団より依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施したものである。調査期間は、1994年（平成６）４月25日から1995年（平成７）１月20日、1996年（平成８）７月１日～７月11日、同年11月26日～12月16日である。

4　本書の編集は新津　健、田口明子が行なった。

5　執筆は新津　健が行なったが、人骨についての鑑定・原稿執筆は京都大学霊長類研究所教授茂原信生氏に、昆虫の分析・原稿執筆については愛知県立明和高校教諭森勇一氏に依頼した。

6　調査中に地層については、帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏にご指導いただいた。

7　報告書をまとめるにあたり、陶器類については南足柄市教育委員会市川正史氏のご教示を得た。

8　植物種子類の分析は株式会社パレオ・ラボに、樹種同定はパリノサーヴェイ株式会社に依頼した。

9　遺物の実測・トレース・図面整理等は、石原由美子、斉藤律子、清水真弓が行なった。
磁器類の実測・トレースについて一部は（株）シン・技術コンサルに委託した。

10　遺物についてのカラー写真は、日本写真家協会会員塚原明生氏にお願いした。

11　本報告書にかかる記録図面、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

12　発掘調査や整理作業にあたっては以下の諸氏・諸機関に御指導・御協力を賜った。記して謝意を表する。
青沼藤雄、井上栄一、井上玲治、小川和茂、大橋瑠美、畑　大介、広瀬和弘、古屋兼雄、降矢哲男、甲西町役場、甲西町教育委員会、甲西町文化財審議会、帝京大学山梨文化財研究所

凡　　例

1　遺構・遺物図面の縮尺は次のとおりである。

［遺構］　発掘区域図　1/3000、全体図　1/400、建物跡　1/60、溝　1/60、井戸・桶・土坑　1/40、水田跡　1/200、

［遺物］　陶磁器・土器類・石製品・金属製品・その他の生活用品　1/3、玩具類　1/2、大型甕類　1/6、古銭　1/1、

2　遺構平面図の小穴中の数字は深さを表わす。

目　　次

序
例言・凡例
第１章　調査の経緯と概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の概要……1
　第３節　調査組織……4
第２章　地理的・歴史的環境……5
　第１節　立地と周辺の遺跡……5
　第２節　遺跡の層序……9
第３章　発見された遺構と遺物　……11
　第１節　１面の調査　……11
　　［概要］
　　(1)　１号建物跡　……11
　　(2)　溝、暗渠　……12
　第２節　２面・３面の調査　……12
　　［概要］
　　(1)　建物跡１号～７号　……12
　　(2)　溝・池１号～22号　……15
　　(3)　井戸及び溜状施設１号～７号　……20
　　(4)　設置桶・土坑１号～５号　……21
　　(5)　墓　……22
　　(6)　参道　……23
　　(7)　包含層出土遺物　……23
　　(8)　その他の遺物　……24
　第３節　４面の調査　……25
　　［概要］
　　(1)　建物跡群　……25
　　(2)　溝　……26
　第４節　５面の調査　……26
　　［概要］
　　(1)　１号杭列　……26
　　(2)　２号杭列　……27
　第５節　６面の調査　……27
　　［概要］
　　(1)　水田　……28
　　(2)　流路　……28
第４章　自然遺物についての調査・検討　……29
　第１節　山梨県宮沢中村遺跡から産出した
　　昆虫化石群集と古環境　……29
　第２節　植物遺存体　……34
　第３節　モモ核　……42
　第４節　宮沢中村遺跡出土の江戸時代人骨　……46
第５章　遺構・遺物の検討　……54
　第１節　宮沢集落の沿革と発見された遺構
　　(1)　宮沢集落の変遷と水害　……54
　　(2)　発見された遺構の性格　……55
　第２節　生活用具の組合せ　……56
　　(1)　全体　……56
　　(2)　容器類の比率
　　―磁器・陶器・炻器・土器　……58
　第３節　宮沢集落変遷の歴史的意義　……61

・図面類（第１図～第130図）　……63
・出土遺物一覧表　……189
・写真図版　……215

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

本遺跡は甲府盆地西端の富士川右岸地域に位置している。この一帯に建設省が行なう国道52号のバイパスおよび日本道路公団が行なう中部横断自動車道の建設が計画された。このことから山梨県教育委員会と建設省甲府工事事務所とでは事業計画地内における埋蔵文化財の保護についての協議に入り、平成元年度（1989）から山梨県埋蔵文化財センターによる工事区域内の遺跡所在確認調査が始められた。その結果、第１期工事区間にあたる南巨摩郡増穂町大椚～中巨摩郡白根町在家塚の８㎞間に10箇所の遺跡が確認できた（挿図２）。

宮沢中村遺跡は平成３年度（1991）の試掘調査により発見されたもので、同時に確認できた甲西町内の遺跡としては、中川田遺跡、大師東丹保遺跡がある。この地域は、甲府盆地西側の巨摩山地やそれに続く市之瀬台地方面から広がる複合扇状地と、東側からの富士川沖積地とが接する場所にあたっており、湧水地が多い反面、洪水もまた受けやすいといった特徴的な地域である。試掘調査の成果では、水田跡や護岸施設も顕著に確認できており、低湿地状の遺跡が多く埋没する地帯として今後も注意する必要がある。

本遺跡のある東宮沢地区にはかつて集落が形成されていたものの、度重なる水害のため明治年間に全村が移転したと記録されている。試掘調査の結果でも、江戸後期を中心とした出土品が多く、建物跡や溝跡などが発見されたことからこの事実が裏付けられることとなった。

なお、平成元年度から平成５年度までは建設省甲府工事事務所と協議・契約のもとに発掘調査を実施してきたが、平成6年度からは日本道路公団とも協議・委託を行ない、事業を遂行することとなった。

発掘調査の対象は、平成３年度の試掘調査の成果と旧宮沢村の広がりとを考慮した上で、道路幅25～35ｍ、長さ約120ｍの範囲とした。試掘時から出水が激しかったことから鋼矢板で調査区を囲み、排水施設を設けながら本調査を行なった。その結果、洪水による砂礫層をはさみながらも明治から鎌倉時代まで６面を数える生活面を確認することができた。調査は平成６年（1994）年４月25日から平成７年（1995）１月20日まで実施された。この際に調査できなかった墓地部分については、移転終了後の平成８年（1996）７月１日～７月11日および同年11月26日～12月16日に行なわれ、全ての調査が終了した。報告書作成のための主な整理作業や執筆は平成10年度（1998）・平成11年度（1999）に実施した。

[文化財保護法に基づく手続き]

・平成６年（1994）４月12日遺跡発掘通知、文化庁長官に提出（教学文第４～43号）
・平成７年（1995）２月６日遺物発見通知、小笠原警察署長に提出（教学文第２～10号）
・平成８年（1996）７月１日遺跡発掘通知、文化庁長官に提出（教学文第６～110号）
・平成８年（1996）12月19日遺物発見通知、小笠原警察署長に提出（教学文第12～66号）

第２節　発掘調査の概要（挿図１　発掘区域図）

調査は道路工事が行なわれる幅25～35ｍ、長さ約120ｍを対象として行なった。調査区には一辺が５ｍの方眼を設定し、東から西にＡ～Ｇ、南から北に１～60の番号で表記した（挿図１）。

調査区全体を長さ5.5ｍ～７ｍの鋼矢板で囲み、出水に備えるとともに、安全面をも考慮した。排水については、発電気を用いた２㌅ないし３㌅の排水ポンプによる24時間稼働を行なった。このような体制にもかかわらず、台風時には遺跡全体が水没するという事態も生じ、洪水常習地のため集落移転を余儀なくされたという、厳しい立地環境を思い知らされることもあった。

調査は、まず重機により表土や洪水砂礫層を剥ぎとることから始め、ベルトコンベアを用いながら人力により全面を掘り下げていった。これにより、６面にも及ぶ生活面を確認することができた。第１面は明治時代以降の生活面であるが、発掘区南側に移転直前の建物跡の一部が確認されたにすぎない。また発掘区北側には、水田下

に設けられた土管を用いた暗渠排水施設が発見されている。２面、３面は本遺跡の主体をなすもので、江戸時代後期の集落跡である。４面は洪水によりわずかしか残っていなかったが、戦国末から江戸初期の遺物を伴う建物群の一部が確認できた。５面からは杭列や網代垣を用いた護岸施設が発見され、６面からは水田跡が検出された。これらの面は鎌倉時代の面とみなされるものである。

以下に各面からの遺構・遺物の概要を記す

［１面］

１号建物とした遺構が発掘区南側にわずかながら残っていた。出土した磁器から明治初め頃の遺構とみられ、全村移転した時期の建物跡とみられる。旧宮沢集落が移転した後、かつての建物跡は畑として耕され続けたことから、この明治期の遺構はあまり残っていない。ただ建物跡の土地は何度も土盛りされていることから周囲より１段高く、見分けが付きやすい。このような土地を地元の方は古屋敷とよんでいる。それぞれ各家が古屋敷とよぶ畑地を持っており、全村移転前の土地所有が今なお続いている場合が認められる。

発掘区北側部分は、旧宮沢集落形成時にも水田であったとみられ、ここからは暗渠の溝を始めとした排水施設がよく残っていた。特に土管や桶の水溜めも認めらたことから、明治以降までも下がる施設であろう。

［２面・３面］

本遺跡の主体をなす面であり、江戸時代後期（18世紀後半～19世紀後半）の農村跡で民家１軒と寺域とが発見された。遺構の種類からみると、建物跡６軒、溝・池22基、井戸ないし溜め７基、桶の設置５個、土坑３基、墓７基、参道一本、石垣１列、等がある。建物については１軒が民家である他は、本堂・庫裏・七面堂などの寺にかかわる施設である。溝や池については、低地に立地する村であることから、水路としての役割をもつものであり遺構数も多い。

なお、宮沢集落は駿信往環の荊沢宿と市川代官所とを結ぶ「市川道」に面して形成されたもので、発見された寺の参道もこの市川道から境内に入っていく通路である。この寺は「法浄寺」といい、集落移転後も大正末期までこの地に残っていたとされる。

出土遺物については陶磁器類が最も多いが、溝の覆土中からは椀や下駄・桶・曲物などを始めとした木製品が多く出土した。陶磁器類は遺跡全体から出土しているが、民家も含め日常生活品に加え灯明具や仏具も顕著である。金属類では寛永通宝、かんざし、煙管、金具類がある。他に土製玩具もあり、全体として江戸時代庶民の生活の匂いあふれるものが多い。また、湿地であることから、モモ核・ウメ・ウリ類などの植物種子も出土している。

なお、この２面は遺跡全体に広がっており、民家の箇所では１面下約80㎝の深さである。寺の境内部分では１面は確認できず、地表下50㎝程度と浅い箇所に砂利敷の堅い面が確認できる。この面を剥がすと数㎝から十数㎝程度で別の堅い面や溝などが検出できる。これを３面としたが、２面に継続する部分もあり、両面をあわせて江戸後期の生活面とした。

［４面］

２面・３面から80㎝～１ｍ下げたところ、発掘区の南東隅を中心にわずかながら生活面が確認できた。ここを４面として精査したところ、柱根の残る柱穴群が発見された。配列からみて、複数の建物がたてられていたとみられる。柱根には面取りのある六角のものもあることから、通常の民家ではなく、寺ないし館のような施設であった可能性もある。土坑内から志野皿片や灰釉陶器皿片が出土したことから、16世紀末から17世紀初頭の面と考えられている。

［５面］

４面以下には砂利が厚く堆積しており、相当激しい洪水が何度も襲ったことが窺われる。この砂利層の間に薄いながらも粘土層が残っており、面としての広がりを持っていた。この面を中心に２条の杭列が走っているのが確認できたことから、これを５面として調査を行なった。杭は全て角割りのもので、網代を伴う部分もある。おそらく水田にかかわる護岸施設であろう。この５面は、４面下約1.2ｍ（第２面からは約２ｍ下）の深さのとこ

挿図１　発掘区の位置（1 / 2,000）

ろにあることから、戦国時代以前の面と考えているが、杭や網代の様子が大師東丹保遺跡のものと共通することから、鎌倉時代と考えている。

［6面］

5面以下には再び砂利層が続くが、約80㎝ほど下げたところに良好な粘土面となった。この面を追ったところ畦畔に囲まれた水田を確認することができた。水田は一辺が約10ｍとみられる。確認された層位や水田の規模、それに出土遺物からみて、平安時代を遡るものではなく、5面に近い時期の面とみておきたい。なお、この面までの深さは現地表から4ｍ近くとなっている。

この粘土層は厚さ30㎝ほどあるが、その下は再び砂利層となっている。しかし鋼矢板の規格や出水の激しさからこれ以下の調査はできなかった。

第3節　調査組織

調　査　主　体　山梨県教育委員会

調　整　機　関　山梨県教育委員会文化課

調　査　機　関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　新津　健（山梨県埋蔵文化財センター主査・文化財主事）
田口明子（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

作業員・整理員　秋山進也、秋山とみ、秋山正文、麻生菊江、井上時江、今津　勝、内田武子、大木つや子、乙黒さつき、折居きく、金丸初子、黒田美江子、佐久間竹雄、斎藤利男、斎藤直江、佐藤勝子、佐野とみ江、鈴木福子、瀧沢かねじ、丹沢政一、樋口市蔵、樋口京子、樋口とよ子、樋口瑠璃子、深沢　繁、望月和子、山崎正行、横内定平、依田友弘、渡辺あけみ、渡辺俊夫、石原由美子、斉藤律子、清水真弓

協力者・機関　井上栄一、小川和茂、井上玲治、古屋兼雄、降矢哲男、青沼藤雄、広瀬和弘、甲西町役場、甲西町教育委員会、甲西町文化財審議会

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　立地と周辺の遺跡（挿図２）

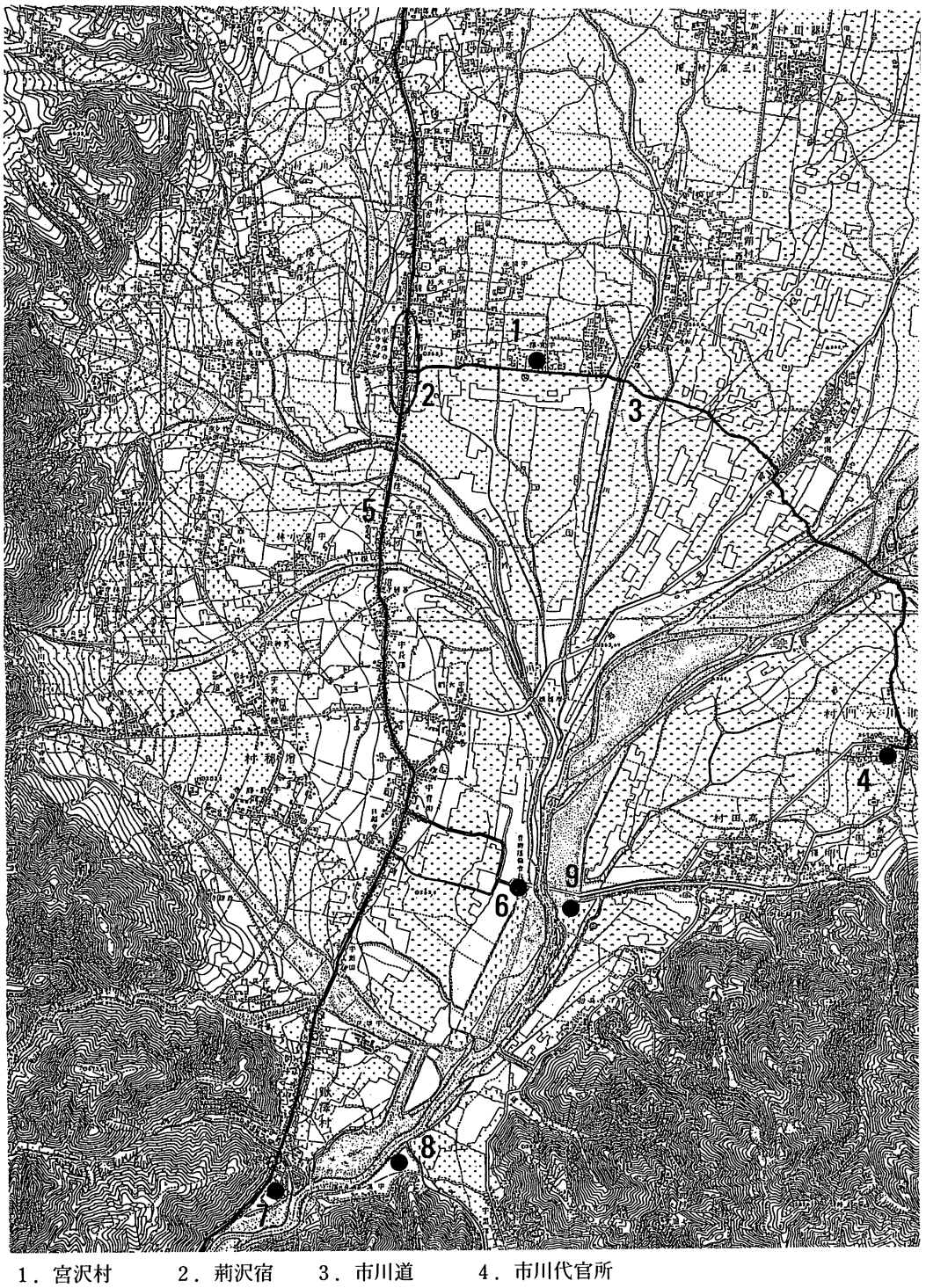
本遺跡は富士川右岸の標高244ｍを測る沖積地に位置する（挿図２）。この地域は、赤石山脈（南アルプス）の前衛である巨摩山地に連なっており、遺跡の西方前面には標高2000ｍを超える櫛形山を望むことができる。この山地のさらに前面には市之瀬台地などの標高400ｍ前後のなだらかな丘陵が続いている。これらの山地や丘陵を源流として、坪川（市之瀬川）や滝沢川が流れだし複合扇状地を形成している。したがってこの地域は、標高400ｍ前後の丘陵地帯、標高300ｍ台の扇状地、標高200ｍ台の沖積地といった特徴的な地形の組合せから構成されており、それぞれの地形には各種の遺跡が残されている。特に丘陵から扇状地にかけては縄文時代から古墳時代の遺跡、扇端部には古墳時代から平安を経て、中世の遺跡、沖積地には中世を中心に近世までの遺跡がそれぞれ多い傾向がある。これまで発掘調査が行なわれた遺跡の例から、この傾向をみてみよう。まず標高400ｍラインの丘陵上の遺跡としては、平岡の長田口遺跡や六科丘遺跡などの縄文中期を中心とした集落遺跡がある。さらにこの丘陵突端には、六科丘古墳や物見塚古墳（17）などの前期古墳が富士川を見下ろすかのように構築されている。この台地を下がると扇状地になるが、標高300ｍ付近には『塚原』の名が示すように後期古墳群が広がっている。かつては相当数が確認できたとされるが、今は多くが煙滅しわずかに住村古墳（18）が甲西町指定の文化財として残っている程度である。この古墳群をやや下った扇央部には縄文中期の環状集落が発見され、円錐形土偶を始めとして重要文化財に指定された出土品のある鋳物師屋遺跡がある（16）。さらにこの遺跡は、隣接する〆木遺跡と一体となった平安時代の集落でもあり、古代の大井郷の一角を占める可能性ある遺跡としても重要である。

この扇状地中央部を国道52号が南北に走っている。これはかつての駿河と信州とを結ぶ駿信往環にほぼ一致する主要道である。これを越えると扇状地末端部へと近づき、「大井」「清水」「鮎沢」という地名も残るような湧水地帯へと入っていく。この湧水から流れ出す小河川により解析された標高250ｍ前後の微高地を中心に、弥生時代から中世の遺跡が発達している。弥生後期の住居が発掘された住吉遺跡（13）、弥生・古墳・中世の遺構・遺物がある清水遺跡（12）、古墳時代中期の住居が発見された村中遺跡（14）、古墳時代から平安時代の土器が出土した滝沢通り遺跡（15）などである。

以上のようにこの地域は大きく三種類の地形区分ができ、それぞれに適した時代の生活が営まれていたことが確認できる。今回の調査対象となった甲西町内における中部横断道の建設は、これまでの地形区分では最も東よりの扇状地末端から、沖積地にかけての部分を通過することになる。これに伴う発掘調査により、この地域区分における遺跡の在り方を一層明確にすることができる。特に、宮沢中村遺跡に隣接して中世鎌倉期の大師東丹保遺跡（2）が発見されたことは、沖積地に面してこれまであまり知られていなかった時期の遺跡がこのような沖積地に面して所在することがわかり、意義深いものがある。宮沢中村遺跡からも最下層からは、大師東丹保遺跡と同じく鎌倉期とみられる水田や護岸施設も発掘されており、同じ範囲の遺跡ととらえてよいのかも知れない。さらに上層には戦国から江戸初期の建物が発見され、最終的には江戸後期から明治の集落として発達したものである。水害を受けやすい低位面に、このような継続性をもった生活跡があることは、中世以来の村落形成とその変遷を考える上でも重要な資料が提供されたことになる。

ここで近世～近代の遺跡を示したものが挿図３である。１が宮沢中村遺跡（旧宮沢集落の一部）であり、この村落は市川道に沿って発達している。市川道は駿信往環の荊沢宿（2）と市川代官所とをつなぐ主要道である。さらに駿信往環を荊沢宿から南下すると鰍沢河岸（7）に至る。鰍沢河岸は、青柳河岸（6）や黒沢河岸（8）とともに富士川三河岸と呼ばれるもので、江戸蔵前までの年貢米回送や海産物運搬にかかわった富士川舟運の基地である。明治になってからも、人員輸送や物資運搬の拠点として内陸部の経済をささえた重要な場所であった。このような歴史環境の中で、宮沢集落が営まれていたのであるが、度重なる水害のために明治30年～40年代にか

挿図２　遺跡位置図（１/25,000）



1．宮沢村　　2．荊沢宿　　3．市川道　　4．市川代官所
5．西郡道（駿信往還）　　6．青柳河岸　　7．鰍沢河岸
8．黒沢河岸　　9．青柳の渡し（高田の渡し）

挿図３　宮沢村と関連施設（１/40,000）（明治21年大日本帝国陸地測量部地図に加筆）

けて全村とも移転を余儀なくされ、現在の宮沢集落の地に移ったものである。

最後に、国道改良・中部横断道建設に伴う調査により発掘された遺跡の概要を挿図2を参考に記す。今回の第1期工事区間での遺跡北限は櫛形町七ツ打遺跡（10）（中世・近世）である。大規模な集落遺跡としては櫛形町から若草町にかけて広がる十五所遺跡（9）、村前東A遺跡（8）がある。これらは弥生から奈良平安の集落であるが、特に十五所遺跡からは方形周溝墓群が発見されている。これらの遺跡は厚い砂利層下に埋没しており、これまで遺跡などないと言われていた御勅使川扇状地における、新たな知見をもたらしたものである。

さらに南下した扇端部には新居道下遺跡がある（7）。ここからは古墳時代中期と平安時代の集落が調査されている。また近世近代の瓦製作用の粘土採掘跡も発見されており、この地域の地場産業を支えた原料が砂利層下に堆積していることも確認できたことになる。

新居道下遺跡の南に現在の県道が走っているが、これを境に水田地帯となる。すなわち扇状地末端がこの県道付近となっており、この一帯には湧水も多い。この南側に位置するのが二本柳遺跡である（6）。ここからは戦国時代に栄えたとされる福寿院という寺院跡や平安時代にさかのぼる水田跡が調査されている。甲西町域も含め、扇状地末端部から沖積地にかけては中世の遺跡が形成されるという傾向があり、二本柳遺跡もこれにあてはまるものである。滝沢川を越えると甲西町域に入り水田地帯が続くが、この一帯からは連続して水田跡が発見されている。向河原遺跡（5）、油田（あぶらだ）遺跡（4）、中川田遺跡（3）などである。特に向河原遺跡からは弥生初期の小区画水田が、油田遺跡からは弥生以降平安時代の水田が発見されている。

これらの遺跡のさらに南方に位置するのが鎌倉時代を中心とした大師東丹保遺跡（2）である。すでにふれたように、この付近は扇端部の湧水地帯にあたっており12、13などの遺跡が知られている。宮沢中村遺跡の下層にも鎌倉時代とみられる水田や護岸施設があり、大師東丹保遺跡の居住施設から続く生産域とみられるものである。このような遺跡群の中でも、宮沢中村遺跡は最も低位地区に位置しており、近世集落の立地に関する問題が提供されたとも言えるものである。ことに中世前半では水田域、戦国期から居住域となる歴史経過の背景をつかむことが今後の課題でもある。

以上のように、今回の一連の調査により、扇状地から沖積地にいたる土地利用の実態が解明されつつあることは意義深いものである。

その後さらに北方の工事区間での調査が進み、平成11年10月時点では白根町や八田村にて弥生、奈良・平安時代、中世の集落遺跡が発見され、その調査が行なわれているところでもあり（百百遺跡群、立石遺跡、石橋北屋敷遺跡など）、釜無川右岸における遺跡の実態が把握されつつある。

参考文献

甘利亀雄「地形と地質」『甲西町誌』1973
甲西町教育委員会『住吉遺跡』1981
櫛形町教育委員会『物見塚』1983
櫛形町教育委員会『六科丘』1985
櫛形町教育委員会『鋳物師屋遺跡』1994
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第60集『七ツ打C遺跡』1991
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第72集『二本柳遺跡』1992
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第77集『中川田遺跡』1993
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第87集『油田遺跡』1994
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第131集『大師東丹保遺跡』1997
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第129集『向河原』1997
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第147集『新居道下遺跡』1998
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第集『十五所遺跡』1998

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第148集『鰍沢河岸跡』1998
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第集『村前東A遺跡』1999

第2節　遺跡の層序（挿図4）

本遺跡の調査では6面にわたる生活面が確認でき、それぞれに伴う遺構が調査された。これらの面にかかわる層序について概観する。

調査区は水田あるいは畑として耕されていた。特にかつて建物があった所は周囲よりも数段高く土盛りがなされていたことから、ここは畑として利用されている。このような箇所では江戸時代後期の面である第2面までは地表から約80㎝～1mの深さがある（挿図4－2）。これに対して水田下の場合は、地表下50㎝程で第2面となる（挿図4－1）。

なお、発掘区の南東側（3号建物が建つ敷地）の一部では地表下30～40㎝の深さで礎石の根石とみられる残存が確認でき、わずかながら磁器破片も出土したことから、これを第1面とした。おそらく明治30年代に移転した建物がここにあったものであろう。しかしこの面はその後の耕作によって殆ど残っていない。また、発掘区の北端寄りの地区からは水田下に暗渠施設が残っており、これも明治以降の面ということで第1面に含めた。

さて、第2面についてであるが、これは出土した陶磁器から江戸後期の生活面とみなしたものである。民家部分では盛り土した上に礎石や根石が配列し多くの陶磁器類が出土する。また、寺域では細かい砂利が敷かれており、堅い面をなしている。民家と寺域の境や境内には池が掘られ溝が走っている。これらの埋土中からも膨大な量の陶磁器や木製品が出土した。

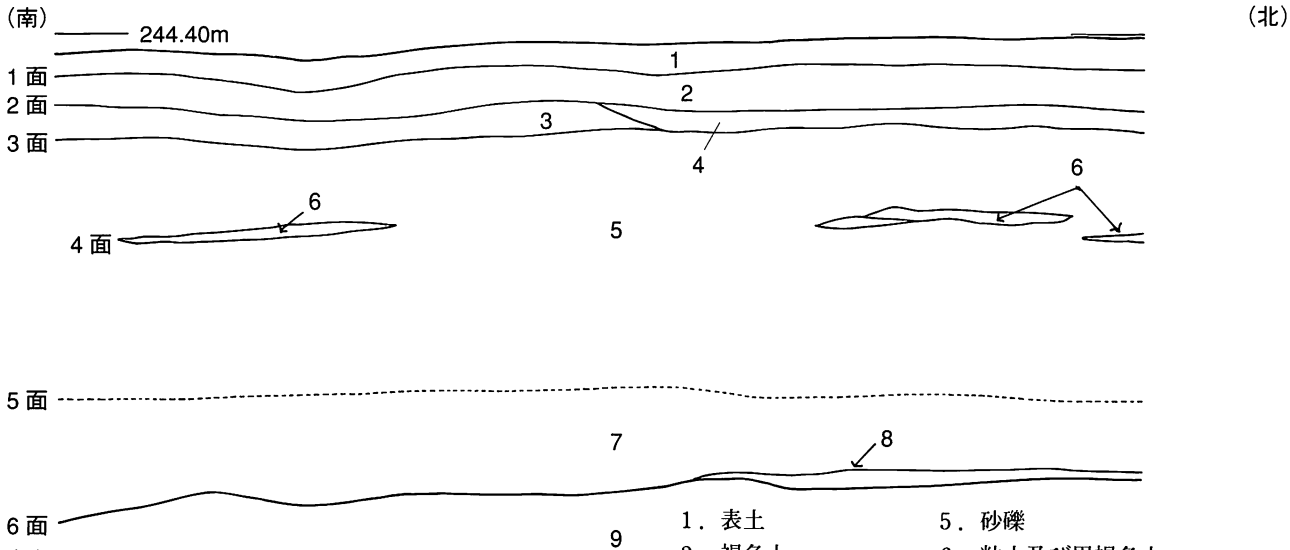
さらにこの2面を剥ぐと、間層をはさみ10～20㎝で再び砂利混じりの堅い面となる。これを第3面とした（挿図4－1）。この面でも新たに溝や池も発見された。やはり江戸後期の面であるが出土した陶磁器には、18世紀前半のものも含んでいる。なお第2面で確認できた3号建物面には逆流による薄い洪水砂が被っており、この面も水害を受けたことが分かる。

第3面下は洪水による自然礫層が堆積していたが、3号建物敷地部分では、60～80㎝下げたところに堅い面があり、柱根が並んで確認できた。これを第4面とした。建物中央の土坑から大窯の灰釉陶器破片や志野皿破片が出土したことから、16世紀末から17世紀初頭の建物とみなした。第4面はほかに一部が確認できただけで発掘区の大半は砂利層であったことから、大規模な洪水により流出してしまった面と思われる。

第4面下は引き続き砂利層が続くが、地表下3m近い深さのところに杭列が確認できた。部分的に粘土面も残っているが、大半は砂利層中に打ち込まれた杭であるが先端はさらに下層の粘土面に至るものもある。杭列は2条あり、東側のもの（2号杭列）では網代を伴っていた。杭は全て角杭で、作り方や大きさは大師東丹保遺跡で調査された鎌倉時代のものと同じであったことから、同じ時期の護岸施設とみなし、この面を第5面とした（挿図4－1）。

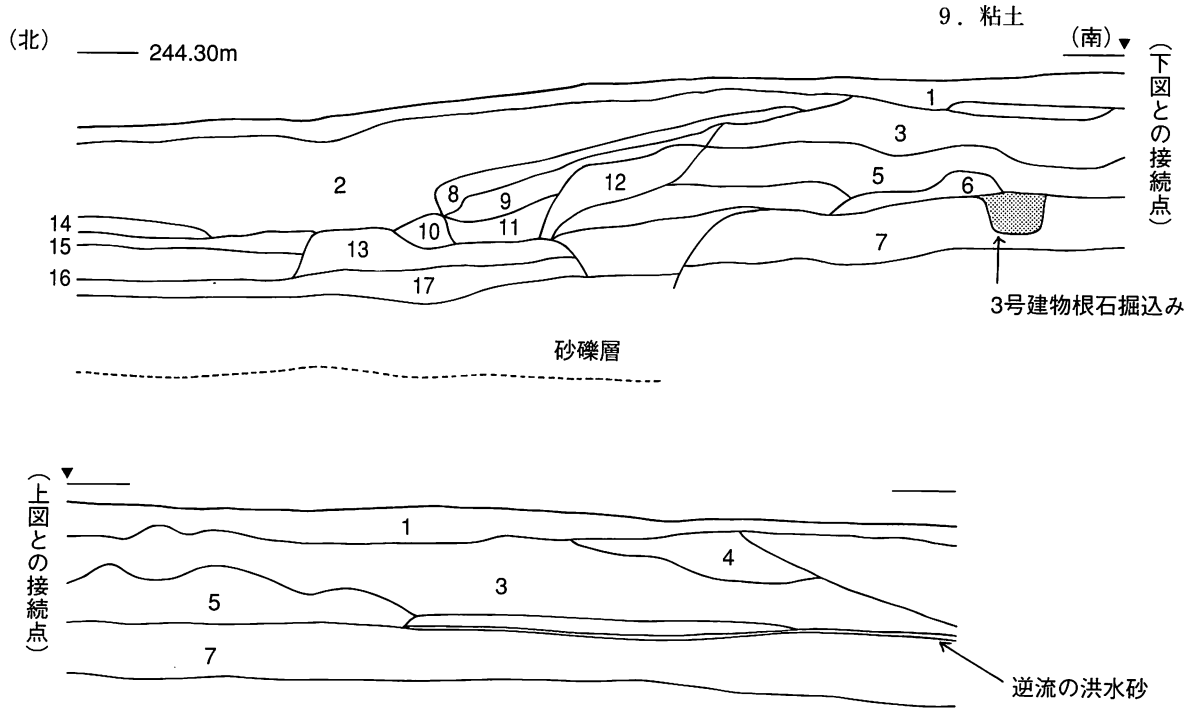
第5面の80㎝程下は良好な粘土面が広がっていた。この面に堆積していた細砂を取り除くと畔が確認でき、水田であることがわかった。この面からは弥生土器や平安時代の土師器破片が出土しているが、いずれも磨滅しており流れ込みであるとみられる。したがって時期決定は難しいが、水田規模が1辺10m程度と、これも大師東丹保遺跡の鎌倉期の水田に類することや層位関係からやはり鎌倉期頃のものと考えている。この面を第6面とした。

さらに下の層については、鋼矢板の規模や安全面から掘り下げることはできなっかたが、第6面の粘土層は30㎝ほどの厚さがあり、さらに下層は砂利となっていることは確認できた。



(1) 発掘区西壁断面

1．表土
2．褐色土
3．黒褐色土（かたい）
4．黒色土（溝覆土）
5．砂礫
6．粘土及び黒褐色土
7．砂利
8．青色細砂
9．粘土



(2) 発掘区東壁断面（江戸期）

1	表土（盛土）
2～7	盛土（黄褐色土）7の上面が建物面
8～12	盛土（黒褐色土）遺物多い
13	黒褐色土
14～16	1号溝覆土（粘質土）
17	青灰色粘土

0　2m

挿図4　遺跡の層序（1/60）

第３章　発見された遺構と遺物

宮沢中村遺跡の発掘調査では、明治時代の面とみられる１面から中世前半期とみられる６面までの各生活面が確認できた。以下面ごとに、発見された遺構と遺物について記述していく。

出土した遺物には磁器、陶器、土器、土製品、木製品、金属製品、石製品、瓦、銭貨などがある。これらのうち図示したものは全て一覧表（189頁～213頁）にまとめてある。

陶磁器や土器類については以下の基準により分類してある。参考としたのは厚木市『東町二番』遺跡報告書（註１）、新宿区『内藤町遺跡』報告書（註２）、『鰍沢河岸跡』（註３）であり、特に陶器の名称や産地・特徴等については南足柄市教育委員会市川正史氏にご指導戴いた。

なお半陶半磁の類は炻器としてまとめ、土器類としては甕、かわらけ、焙烙、灯明皿、香炉、火鉢などの素焼きのものを分類した。

[大きさの基準]

磁器　碗　小　（口径５㎝～8.9㎝）　中（口径９㎝～11.9㎝）　大（口径12㎝以上）

　　皿　極小（口径7.4㎝以下）　小（7.5㎝～13.5㎝）　中（口径13.6㎝～25㎝）　大（25.1㎝以上）

陶器　碗　小　（口径５㎝～９㎝）　中（口径9.1㎝～12.5㎝）　大（口径12.6㎝以上）

　なお小碗のうち口径5.5㎝～６㎝の規格的な丸碗があり、大きさから酒坏とも考えられるものであるが、ここでは小型の丸碗に含めておいた。

　　皿　小　（口径7.5㎝～13.5㎝）　中（16.7㎝～25.8㎝）

　　甕　小　（口径12㎝前後）　中（口径15㎝～30㎝）　大（口径30.1㎝以上）

・その他に器形の分類として、碗には丸形、筒形、丸筒形、腰張形、端反形、広東形という名称を用いた。その上でそれぞれに小碗、中碗、大碗という大きさを加えて分類した。

註１　飯田孝、富永樹之『東町二番町遺跡』厚木市教育委員会　1995年

註２　井汲隆夫ほか『内藤町遺跡』新宿区内藤町遺跡調査会　1992年

註３　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第148集『鰍沢河岸跡』山梨県教育委員会ほか　1998年

第１節　１面の調査（付図１）

[概要]

この面は村が移転する直前からそれ以後にかけての時期の面である。移転後は畑や水田として耕されていたことから残存状況は良くない。建物とみられる根石部分や、暗渠施設が残っていた程度である。

（１）１号建物跡（第１図）

２面の３号建物の上層に位置する。移転後の建物敷地を地元では古屋敷と呼んでいる。この敷地はかつての水害から建物を守るため土盛されており、周囲より大分高い。このことから地形観察により、かつての屋敷地を容易に見い出すことができる。今回の調査でも、この部分の表土を取り去った時点で、礎石があったとみられる基礎部分の落ち込みが確認できた。耕作が激しいことから全体の状況や配列は不鮮明であるが、建物跡とみなした。村が移転したのが明治30年から40年代であることから、その頃の建物であろう。南北３間・東西２間ほどの範囲にしか痕跡は残っていないが、1.8ｍ間隔で礫を含む直径40～50㎝の落ち込みが並んでいる。２面３号建物の根石穴もこのような規模であることから、これも礎石を据える根石部分とみなした。

[出土遺物]（第29図１、２、７）（表P189）

根石が確認できた面から陶磁器が出土した。１、２ともには端反の中碗で手描きの染付磁器。１が明治初期、２が幕末頃のものであろう。７は陶器の土瓶。

(2) 溝、暗渠（第２図）

発掘区北側は寺域からははずれ、江戸時代にあっても水田ないし畑であったと思われ、居住にかかわる遺構は全くみられなかった。そのかわりにC～D－19～23区を中心に溝や土管を伴った暗渠施設が確認できた。

溝は幅40～70㎝、深さ12～18㎝のものが、南北に走る１条にそれぞれ東西から何本も交差している。この辺りは湿田であることから水田下にこのような暗渠を設けて排水を試みたものとみられる。

土管を伴った排水施設は、石組の暗渠により二方向から集まり、桶に溜められた水を流すものである。石組暗渠－竹筒－集水桶－土管、といった構成にある。土管は長さ61～62㎝、太さ15～16㎝の素焼きのもの（第78図）で、44本ほど確認できた。末端は撹乱や水田の作り替えなどのため不明。これらの時期を決定する遺物はないが、竹や桶を用いていること、土管は素焼きであることなどから昭和前半期までのものではなかろうか。

第２節　２面・３面の調査（付図１）

[概要]

時期差はあるものの２面・３面とも江戸後期の生活面であることからここでは通し番号のもと一括して扱う。礎石ないし根石により確認された建物跡６基、溝22本（溝および池は、溝として通し番号を付した）、井戸ないし溜め遺構７基、設置桶５個、土坑２個、墓７基、参道１本などの遺構がある。このうち建物は７号まで番号を付けたが、６号は欠番である。これらは全て２面で確認されているが、５号建物は根石が重複していることから３面からの建て替えも考えられる。溝（池）については、１号～３号・５号～９号・12号の９本が２面にて確認できたもの、４号・10号・11号・13号～22号の13本が３面に属すものである。井戸・桶・土坑・墓については、それぞれ地中に埋設されたり、埋め戻されたりしていることから、明確に所属する面を断定することができなかった。伴う建物等との関連から時期を考えてみたい。

なお、２号建物・３号建物およびそれに付随する施設と１号溝、４号溝、13号溝を除き、他の建物や溝等の遺構は寺にかかわる施設とみなされるものである。この寺は法浄寺といい、甲斐国社記・寺記によると天正12年創建の法華宗の寺院とのことである。旧宮沢集落移転後も大正年間までこの地に存続している。今は、現宮沢集落の南端、今回の発掘地の北側約ｍの地に移築され、法燈を保っている。現在の法浄土の建物や古老の話を参照すると、７号建物が本堂、５号建物が庫裏、４号建物が薬師堂に比定できる。特に７号建物の規模は６間×４間であり、現本堂と共通する。

（１）建物跡１号～７号（６号は欠番）

２号建物（第３図）（図２－２版）

Ｂ－７・８区にて礎石が発見されたことから確認できた建物である。本堂に至る参道の東側に位置し、民家の一部に属する建物とみられるものである。

この南に１号溝、北に２号溝、西に３号溝がある。特に１号溝をはさんだ南側には民家（３号建物）がある。

参道側（西側）に入り口のある２間（3.6ｍ）×３間（5.4ｍ）の規模で、礎石の配列は規則的である。ただし礎石が残っているものと、礎石下の根石しか残っていないものとがある。礎石の乗る面は周囲より高くなっており、同時に周囲を１号溝、２号溝、３号溝に囲まれている。３号建物と同様に水害に備え盛り土が行なわれたものとみられる。１号溝や２号溝を掘った土も、この盛り土に用いられたものであろう。

写真撮影や図面作成終了後礎石の乗る面を剥がしている段階で、３号溝との間にて埋設されている桶が発見された。これを２号桶としたが残存状況はよくなかった（第15図・26図）。建物にともなうものであろう。

[出土遺物]（第30図、82図）（表P189、P209）

礎石の配列する周辺から陶磁器類が出土した。磁器碗（1、2）、陶器碗（7）、せっ器碗（3）、紅猪口、鉢、灯明皿、さらには火鉢破片もある。

なお3号溝との境には杭が打たれていたが、このうちのいくつかを第82図に示した。1、2、4、5が木杭、6が竹杭。3は木製品。

3号建物（第4～7図、図版3～5）

発掘区の南端付近のA～C－3、4区に位置する。ここは発掘前から周囲より高くなっていた所で、現宮沢地区の井上栄一氏の古屋敷と呼ばれていた畑地である。この「古屋敷」はかつての井上家が存在していたところであり、明治30年代に現在の地に移転したという経緯を、井上氏からうかがった。井上家は江戸時代にも栄えていた民家であるが、この一帯の民家も含めて水害の度に建物敷地に土盛りによるかさあげがなされ、その結果現在みるような高台になったものとされる。それでも対処しきれず、やむなく全村移転という事態に至ったという。今回の発掘により発見された1号建物は、明治30年代に移転した井上家の跡とみなされる。さらに1号建物の下から発見された3号建物は、かさあげされた1号建物以前の井上家であったと考えられる。この年代や建物構造の比較については、第5章でふれることとする。

3号建物は、一部が東側発掘区外に延びていることから全体をつかむことができなかった。発掘では南北3間・東西4間といった礎石ないし根石の配列がとらえられたが、東西はさらに広がるものである。移転した井上家の解体記録を参照すると、桁行7間・梁行3間の建物であったとされることから、この3号建物も同様の規模であったことが推測できる。

南側には市川往環が走っていることから、この道に面した敷地であり、ここに南側に出入り口をもった母屋（3号建物）が建てられていたものであろう。

敷地の西側には寺に至る参道が走っており、参道と敷地との間は3号溝で画されている。さらに3号溝の井上家側には石垣が積まれている（第8図）。母屋の前庭からは井戸跡が発見されたがこれを1号井戸とした（第25図）。裏には1号溝があり、寺域と区画されている。母屋の裏手からこの1号溝の中にかけての区域からは多くの陶磁器や木製品などの遺物が出土した。1号溝の2号建物よりからはあまり出土していないことから、出土品の多くは井上家やその東に展開する民家などとかかわる生活用品であったと推測できる。また、1号溝の岸付近にも桶を用いた井戸様の遺構が発見された。2号井戸としたが、溜めである可能性もある。

3号建物の存在については、礎石の発見から確認できた。明確に礎石自体が残っているのは5個程度であり、他は根石のみである。礎石は50㎝×60㎝程度の平石である。この下に礎石を支える根石が固められている。これは盛り土中に直径40～60㎝、深さ40㎝の規模で突き固められたものである（図版5－2、3）。

配列からみて、南面に庇、北面に廊下状の張り出しがあったものとみられる。

調査終了後、敷地面を剥がしていったところ建物部分の南北両側はさらに低く落ち込み、以前は南北を溝ではさまれた狭い敷地であったことがわかった。これを埋め立てしながら土盛りを行ない、江戸末期の敷地を作り上げたものと考えられる。

[石垣] 建物敷地と参道とを区画する位置に溝が走っている（3号溝）が、この溝の敷地側側面には石垣が積まれている（第8図）。石垣は野面の谷落し積みであり、高さは80㎝程である。まず溝底に胴木を並べ、その上に石積みを行なっている。胴木には建物の廃材が用いられており、ほぞ穴や突起が残っている。廃材は4寸角のものが多い。この胴木きわには杭が打たれている（図版4－1）。なお胴木は5本あるが、材質はすべてマツ属と鑑定されている。

[出土遺物]（第31図～第39図、73図、119図）（表P189～192、P206、P212）

陶磁器類を始めとした遺物は、礎石に囲まれた建物内面からも、礎石検出時に出土した（第31図）が、多くは建物裏側からである。これについても3号建物周辺遺物として図示した（第32図～第39図）。碗、皿、鉢などの

陶磁器類に加えて素焼きの甕、焙烙（内耳土器）などがあり日常雑器が多い。また仏飯器や灯火具を含めた仏具も目立つ。建物周辺からの出土では、建物の北側（裏側）からの出土量が非常に多く、建替えあるいはかさあげの際に廃棄されたものも多いかと考えられる。この量からすると一軒分のみならず複数の家からの廃棄も考える必要があろう。

建物の中央北辺近くから寛永通宝がまとまって40枚程度出土したが、腐食して塊となったものである。さらにその東に隣接して鹿角製品も出土した（第119図１）。これは角の支幹を残し、切り落とした本幹の縦と横に穴を貫通させたものである。道具の柄ないし根付のようなものであろうか。他に彫金され渡銀されたかんざし（第73図８）も出土した。

４号建物（第９図、図版６－１）

Ｅ・Ｆ－９・10区という発掘区中央の西側部分にて礎石および根石とみられるものが発見され、これを４号建物とした。寺域内にあたるが、その南端に近い。参道の西側に位置しており、地元の古老によるとこのあたりに薬師堂があったという。

建物の規模は3.5間×2.5間とみられる（第12図１）が、礎石や根石の配列は乱れている。参道側（東側）が出入り口とみられ、この部分には礎石が良く残っておりさらに庇状の礎石もみられる。また南辺の礎石の一つには五輪等の水輪が利用されている（第９図）。

［出土遺物］（第40図１～３、78図）（表P192、P207）

建物の周辺から志野皿（１）、瀬戸・美濃系陶器の灯明具（２、３）などが出土したが、量は少ない。また礎石には五輪塔水輪（第78図４）が利用されていた。

５号建物（第10図、図版６－２）

発掘区のほぼ中央であるD・E－14・15区にて根石が確認されたことから５号建物として調査を進めた。本堂と平行に、その西側に位置する。付近には３号～４号井戸、７号・８号溝、３号・４号桶等がある。８号溝は流し場状の遺構、桶は便所施設と思われ、全体に日常生活的な遺構が多いことも加えて、本堂との位置関係から庫裏ではないかと考えられる建物である。根石としてのまとまりはやや乱れており、また配列も不規則であることから、複数の建物ないし建て替えが行なわれた可能性も高い。

４間×2.5間の規模とみられるが（第12図２）、本堂とは異なり長軸方向は南北である。根石の規模はは40～50㎝を測る。

［出土遺物］（第40図、41図、77図、78図）（表P192、P207）

建物礎石の間や周辺から陶磁器や土器が出土した。磁器碗（４）、陶器碗（５）、皿（６）、かわらけ（７～10）などである。また焙烙類（第41図１、２）、火鉢（３）などもあり、石臼（第77図１）も加え日常生活用品が目立つ。五輪塔水輪もある（第78図２）。また建物の西側から第109図５に図示した柱根が出土した。

７号建物（第11図、図版６－３、７－２）

発掘区ほぼ中央のB・C－14・15に位置する。法浄寺の本堂に該当する建物である。すでにふれたように法浄寺については旧宮沢集落が全村移転した明治40年代以降もこの地に残っており、完全に移転したのは大正年間とのことである。最後まで残っていたのが、本堂であるこの７号建物である。移転後はこの本堂の地にも盛土され、西側の一部を除き墓地として利用されてきた。そのため平成６年度の発掘では、建物礎石の西側１列しか調査できなかった。全体の発掘は墓地が完全に移転した後の、平成８年度に実施したものである。

本建物の西側には、庫裏とみなした５号建物がある。５号建物と本建物との間には、３号・４号といった二つの井戸があるが、時期差も考えなければならない。また本堂の北側は一部墓地ともなっていたらしく、埋葬人骨も発見された。本建物の前面（南側）は広場となっており、小砂利を含む硬い面が広がっていた。さらに境内に

は石敷きの参道があり、寺の南側を東西に走る市川道と本堂とを結ぶ導入路となっている。

本堂であるこの７号建物は、南向きの６間×４間の建物であることが礎石の配列からよく分かる（第12図３）。礎石は50～60㎝×30～50㎝の、丸味をもった偏平な自然石が用いられている。二つを除き、原位置を保っており、礎石の下はやはり根石で固められている。西辺の礎石の外側1.5ｍには、幅30～40㎝、深さ10㎝の溝が走っている。雨落施設のような本堂を取り巻く溝であるかもしれないが、建物のほぼ全体が調査された平成８年度調査では、狭い発掘面積であることから鋼矢板を打つことができず出水に備えた準備もできなかったことから、この溝の存在を明確にすることができなかった。

建物範囲からの遺物はさほど多くはないが、礎石を精査していく段階でいくつかの陶磁器類が出土した。

［出土遺物］（第42図）（表P192～193）

磁器碗・皿（第42図１～９）、陶器類（10～16）、土器類（17～19）がある。灯明皿もあり、15は尾呂系とみられる陶器、17・18はかわらけ転用の煤が付いたものである。

（２）溝

溝ないし池状の遺構をここでは溝として報告する。1号～22号がある。

１号溝（第13図、図版３）

２号建物と３号建物との間に位置している。ただし出土遺物は圧倒的に南側に多く、３号建物に付随したものと考えられる。また３号建物基盤の盛り土にも、この溝掘削土が用いられた可能性が高い。さらに、溝発掘中には水中ポンプによる排水を継続していたが、東に隣接する果樹園の葡萄１本が枯れる事態が生じたことがあった。この果樹園の地形を観察すると、１号溝から続いて細長い窪地の痕跡が確認されたことから、１号溝はさらに東側の屋敷地にも延びていたことが推測できる。

１号溝は、西側にて３号溝に繋がっている。この３号溝と接する部分や、３号建物側の岸には杭が打たれており、護岸の役目を果たしていたものとみられる。溝の規模は北岸～南岸までが8.5ｍ程を測るが、東西方向は不明。底は平らではなく、最深部で１ｍほどである。壁の立ち上がりもなだらかであるが、これは壁や岸上部の崩壊によるものであろう。覆土は粘土質の土壌であるが、絶えず出水しており泥状と言ったほうが適切である。このような覆土中から陶磁器類や木製品、それに植物種子類等が多く出土した。民家である３号建物方向からの投げ捨てや埋め立てによるものが多いとみられる（第14図）。

［出土遺物］（第43図～47図、70図、72図、73図、75図、79図、80図、83～86図）（表P193～195、P203～209）

磁器碗が最も多く、酒坏、皿、仏飯器、蕎麦猪口などもみられる。また水滴も３点（第45図16～18）や、瓶（第55図１）もある。陶器では碗や鉢があるが、仏飯器（第46図１～７）や灯明具（16～23）も目立つ。土器類では内耳の焙烙がある。

木製品では漆椀が６個程出土した（第80図１～６）。内外とも黒漆（１～３）、内面赤、外面黒（４、６）、内外赤で金鯉が描かれているものもある（５）。

他の木製品については第83図～86図に示した。下駄では歯の付け方から、一木造り（１、２）とはめ込み式（３、８）とがみられる。その他糸巻き、しゃもじ、曲物類、桶、箸、傘の部品などがある。

その他瓦破片（第70図２、３、６）、煙管雁頸（第72図29）、釘・銅線・金具（第73図10、14、29）、寛永通宝（第75図38）、砥石（第79図５）などが出土した。

２号溝（第15図）

２号建物の北側に位置する。発掘区外の東側から延びてきており、３号溝と合流し南下する。幅1.5～1.6ｍ、深さ50㎝程を測る。出土遺物は少ないが陶磁器類が出土した。

［出土遺物］（第48図・74図・77図）（表P195、P206、P207）

陶器の灯明皿（１）、煤が付着したかわらけ（２）、焙烙破片（３）などが出土した。その他に寛永通宝（第74

図12、18、19)、石臼（第77図３）がある。

３号溝（第16図、図版４－２、９）

発掘区の東側を区画するかのように南下する溝であるが、Ｂ－10区にて東に曲がり、発掘区外に延びている。主に参道に沿って走るとともに民家敷地と寺域を区画している溝であるが、石垣を伴って水溜め状になった部分も含めて３号溝とした。参道に沿ったところでは幅80㎝～１ｍ、深さ50㎝の部分が多い。北側の屈折する箇所は水溜め状になっており、参道側は石垣となっている。この部分は５ｍ×3.4ｍの長方形をなしている（第16図)。深さも1.2～1.3ｍと深い。

この水溜め部分の北東コーナーが切れており、さらに３号溝は東に延びているが発掘区外のため詳細は不明。なお、南東コーナーにても14号と名付けた溝が合流しているが、これは２面の調査終了後発見されたものであり、３面に属す古い時期のものである。

３号溝全体からの出土遺物は多い。陶磁器を中心としながらも植物質や種子類も目立つ。特に参道に沿った箇所では杉葉や松球果が多いが、これは参道に杉や松並木があったことにもよる。

［出土遺物］（第48図～第49図、72図～74図、76図、77図、80図、87図～91図）（表P195、P204～209）

磁器では碗が多く、皿や鉢もみられる。この溝は明治期にも機能していたようで、型紙摺り（第48図11、12、18）や銅版転写（第48図４、5、21、第49図２）などの印判手磁器も出土した。陶器では急須や土瓶の類も目立つ（第49図)。土器類では灯明皿に利用されたかわらけ（第49図15、16）や火鉢（同17）がある。

木製品では漆塗り椀が４点出土した（第80図７～10)。内面赤、外面黒（７)、内外黒（８、９)、内外赤（10)がある。さらに７～９では紋が赤で描かれている。他の木製品については第87図～第91図に示した。下駄は６個あり、では一木造り（第84図２、３）とはめ込み歯（第87図１、４、第88図１）とがある。他に箸、桶、曲物、糸巻き、盆、杭等がある。

その他土製の鈴（第72図４)、かんざし（第73図６)、掛け金具や金属製品（第73図30、32)、寛永通宝（第74図７）があり、石製品では鉢（第76図１）と五輪塔の風空輪（第77図６）が出土した。

４号溝（第17図）

民家である３号建物の南側に位置する。この溝の発見は、３号建物の調査が終了後、２面を剥がしていく段階で確認されたもので、３面以前に属すものである。したがって３号建物が使われていた段階ではすでに埋め戻され、民家の庭先となっていたとみられる。深さは60㎝ほどであるが、南側・東側ともに発掘区域外に延びるため規模は定かではない。但し西側は参道の下までは延びていない。出土遺物は少ない。

［出土遺物］（第50図）（表P196）

磁器碗（１)、陶器碗（２）および仏飯器（３）がある。

５号溝（第28図）

寺の境内にあって、参道の石敷き部分にほぼ平行して走る溝。南側にて12号溝に入っていく。３面に属す16号溝と重複するが、16号溝が埋められてからこの５号溝が掘られたものとみられる。

幅50～80㎝、深さ10～15㎝、長さ14.3ｍと、浅く細長い溝である。

［出土遺物］（第50図）（表P196）

磁器の紅猪口（４)、広東碗の破片（５）が出土した程度である。

６号溝（第18図、図版10）

七面堂とした４号建物の北側に位置する。２面に属す池状の遺構で、３面の17号溝が埋った後に、その一部を切って構築されている。本来は壁に石積みがなされていたものと見られ、東壁を中心に石がいくつか残っており、

加えて胴木が「コ」の字形に残っている。これらの胴木は角材でしかもほぞ穴等がのこっていることから建築用材を再利用したものとみられる。東側胴木の材質はモミ属と鑑定されている。

遺構の規模は、南北が3.2ｍであるが東西は近代の水路によって切られているため不明ながら、4.3ｍ以上はある。深さは60㎝を測る。覆土中から陶磁器類や木製品が出土した。

[出土遺物]（第50図、72図、73図、80図、91～94図、100図）（表P196、204、208～210）

磁器としては酒坏１個と広東碗とがある程度。陶器には碗、香炉、鉢、擂鉢、土瓶、灯明皿などがあり、器種は豊富である。土器の十能とみられる破片（18）も出土している。

木製品には漆塗り椀がある。蓋とみなしたもの２点である（第80図11、12）。

また第91図～第94図、第100図にも木製品を図示した。桶、曲物などの底、板類、傘の部品などがあるが、第92図２は建築用材であろうか。

その他黒碁石（第72図18）、毛抜き（第73図９）がある。

７号溝、９号溝（第19図、図版11－３）

２面で確認された池状の遺構で７号、９号は連なっており、最終的には一体となっていたものであろう。寺域内では最も北側に近い位置にあり、庫裏とした５号建物の裏手にあたる。９号溝を経て、10号や21号溝と連なっていることから、これらの溝を流れる水がここに集まるものであろう。庫裏側である南岸側に桶が埋設してあった（１号桶）。

７号溝はすでに試掘の際に確認できていたものである。南北6.85ｍ、東西８ｍ以上の方形をなし、最深部での深さは60㎝である。底は平坦ではなく中央が最も深い。陶磁器や土器類、木製品や木質など多くの遺物が出土したが、５号建物との関係からか日常生活品も多い。

９号溝は、７号溝の西につながっている長方形状の遺構。同じ２面にて確認できたことから、掘削時期の前後はあるものの最終的には７号、９号ともに一体として機能していたものとみられる。発掘区域の外にまで延びていることから詳細な規模は不明ながら、南北は４ｍ、深さ60㎝を測る。

[出土遺物]（第51図～第56図、72図～74図、77図、80図、81図、95～99図）（表P196～197、P204～210）

磁器、陶器、土器ともに出土量が多い。７号に属すものとして、まず磁器では碗類が最も多く、皿、鉢、仏飯器などもみられる（第51図）。また、青磁の灰吹き（第52図１）、香炉（同２）、花瓶（同３）も破片ながら出土している。陶器でも碗を始めとして、片口・行平を含めた鉢類、火入れ・灰吹き、香炉、灯明皿など種類が多い（第52図、53図）。土器類ではかわらけが多いが、香炉も３点出土している（第53図）。ほかに内耳を中心とした焙烙も多い（第54図）。木製品では漆塗り椀が出土した。椀本体は６点あり（第80図13～18）、２が内外面ともに赤漆であるほかは、全て内面赤・外面黒である。蓋とみられるものも６点出土した（第81図１～６）がこのうち４は９号溝である。内面赤漆・外面黒漆（１、２）、内外面とも赤漆（３、４）、内外面黒漆（５、６）などがある。１と２には竹笹文が描かれている。第95図～99図には他の木製品を図示した。95図１の下駄には花緒のかわりの紐がついている。また加工痕のある板類や材木も非常に多く、その一部を96図～98図に載せた。特に96図１は膳であろう。他には桶や曲物もあり、箸も多く出土した（第99図６～14）。

その他煙管吸口（第72図31）、針金・金具・鏡破片（第73図18・28・35）といった金属製品や寛永通宝（第74図６）、石臼（第77図5）などがある。

９号溝でも７号同様に出土遺物は多いが図示したのは次ぎのとおりである。磁器碗（第56図４）、青磁香炉（第52図２）、陶器碗類（第53図７、９、17、第56図５）、仏飯器（同16）、擂鉢（第56図６）、片口（同19）、灯明皿（第53図11）があり、土器類でも香炉（同10、20、21）、灯明皿に用いたかわらけ（第56図７）、焙烙（第56図８、９）などがみられる。

8号溝（第21図、図版12－1）

庫裏とした5号建物の西側に位置し、付近には5号井戸や7号井戸といった水にかかわる施設がある。8号溝中にも桶が設置されており、それに続いて板材を中心に木質が多く残っていたことから、流し場のような施設であった可能性がある。規模については下幅で1mから1.6mを測る浅い溝で、東から西に向かって傾斜する。この溝の東端に直径70cmほどの桶の底が残っていた。この桶から西方向に板材や石が散乱しているが、溝下端には長めの板材が並んで置かれていた。

［出土遺物］（第56図1～3）（表P197）

焼物では陶器擂鉢、焙烙、十能などの日常雑器がある。木製品では桶底や板材があるが保存が悪く図示はできなかった。

10号・11号・21号溝（第22図、図版13－1）

本堂や庫裏の北側に、10号・11号・21号の3本の溝が東西に走っているのが確認された。いずれも2面を剥がしていく段階で発見されたものである。最も北側を11号、中央を10号、南側を21号と名付けた。これらは建物と平行しており、しかも11号溝の北側は水田となることから、この3本は寺域の北限を示すものである可能性が高い。10号と21号とは9号溝に合流している。

規模について、10号は60～90cm、11号は50～60cm、21号は1～1.2mの幅であり、深さは3本とも20cm程度である。いずれも東側の範囲はとらえられていないが、11号が西側で収束するのに対して10号は直角に屈折して9号に入り、21号は直線のまま9号と合流している。いずれからも遺物の出土は少ない。

［出土遺物］（第54、56、57、76図）（表P197～198、207）

10号からの遺物は少ないが天目茶碗破片（第56図12）が出土した。21号からは内耳の焙烙が3点（第54図8～10）、磁器碗（第57図21）、陶器擂鉢（同24）、志土呂系灯明皿（同22）、鉢（同23）などが出土している。石製品ではヒデ鉢（第76図2）がある。

12号溝（第18図）

寺域内の建物で、七面堂とした4号建物の南側に位置する。この溝を境に南側は後世の撹乱が入っていることから、詳細は不明。地元の古老によるとこの撹乱部分は蓮田になっていたという。

12号溝の規模についても南壁部分から撹乱されていることから不明で、現存での幅は2.6mである。また東側は参道に突き当たるものの、西側は発掘区外に延びている。深さは50cm程である。北側の岸上に木の株が並んで残っていた。参道と同じく松ないし杉の並木があったものとみられる。そうした場合、この溝は寺域の境界であった可能性がある。

［出土遺物］（第81図、100図・101図）（表P208、210）

木製品が多量出土した。漆塗り椀（第81図7）は内外面とも赤漆のもの。他に第100図に図示したように下駄（2、4）、曲物底（3）、桶（5）、箸（6～8）、櫛（10）、栓（11）などがある。101図にも桶や円板がある。

13号溝（第17図）

3号建物の調査終了後、2面を剥がしていく段階で確認できた溝。3号建物の北から西にかけて落ち込みが見られたことからこれを13号溝と名付けた。この落ち込みは3号建物の南にある4号溝と連なることから、2面を造成する以前は、3号建物の位置を囲むかのように溝が取り巻いていたことが考えられる。13号溝についてもさらに東発掘区外に延びるとともに、北側では1号溝に繋がることから、規模は不明。深さは40cm程である。

［出土遺物］（第54図7、81図8、102図）（表P197、208、210）

出土遺物は少なく、内耳の焙烙破片（第54図7）と内外とも赤漆の塗られた椀（第81図8）が出土した程度。他に木製品としては下駄、曲物底、板類が出土した（第102図1～5）。

14号溝（第15図）

３号溝の石積みのある水溜め部分南東隅に、東から合流する溝。東端はさらに発掘区外に延びることから長さは不明。幅１ｍ～1.4ｍ、深さ30㎝の溝である。出土遺物は少ない。

［出土遺物］（第56図10、11）（表P197）

10は灰釉、型紙摺り鉄絵の皿。11は唐津系刷毛目碗である。

15号．16号溝（第23図、図版12－２、３）

本堂前庭の硬い面を剥がしている段階で確認できた遺構であることから、３面に属すものである。石敷きの参道が終わる部分に、東西に走っている。15号、16号とも一体となった溝と思われるが、東西にある二つの落ち込みとして別々に番号をつけ調査を進めたものである。

西側にある楕円状の落ち込みとそこから延びる溝を16号、東側の長方形状の落ち込みを15号溝としてある。15号はさらに東発掘区外に延びている。屈折しながら３号溝につながる可能性もある。

16号の楕円状落ち込み部分からは、手提げ桶が一個体分に近い量でばらばらになって出土した。参道との位置関係からも、この遺構は手洗い場に関わるのかもしれない。楕円部分は長径３ｍ、短径1.7ｍ、最深部40㎝であり、ここから幅60㎝～80㎝、深さ40㎝の溝が東に延びている。この東端が直径1.9ｍ、深さ50㎝ほどの円形の窪みとなっており、15号溝へと連なっている。

15号溝は短辺が3.1ｍ、深さ40㎝ほどの溝である。

［出土遺物］（第57図、75図、102～104図）（表P198、206、210、211）

15号から出土したものには磁器碗（第57図１、２）、陶器片口（３）、灯明皿（４～６）などがある。特に５と６の灯明具はセットで出土したもの。木製品では円盤状の製品がある（第102図６）。

16号からは磁器では碗（第57図７）と瓶（11）、陶器では碗（９）、鍋（10）、灯火具（12・13）がある。他に木製品として手提げ桶一括（第103、104図）および桜の皮を巻取ったものがある（第102図７）。また寛永通宝（第75図４）が出土した。

17号・18号溝（第24図、図版10、11）

発掘区のほぼ中央、本堂前庭の一隅に位置する。溝というよりもこれらは境内地の池であり、６号とともに３基が重複して発見された。６号が２面に属し、17号、18号が３面に属す。17号と18号に関しては、遺物の出土状況からみて18号が新しいと思われる。

17号は６号と同じく石垣を伴っていたものとみられ、廃材を利用した胴木や、それに乗る石が一部ながら発見されている。胴木の材質はカラマツおよびツガ属と鑑定されている。北辺と東辺が確認されただけであり全体の規模は不明。深さは40㎝。内部から木製品や陶磁器類が出土した。この17号の北東隅に重なって18号溝が発見された。18号は6.5×3.3ｍ、深さ64㎝の長方形状をなす池である。底の下端付近に杭が打たれているが、特に東側では並んでいる。覆土からは多くの木製品や木質が出土した。下駄や桶の部品もあり、内耳土器破片や陶器も出土した。

［出土遺物］（第57図、106～108図）（表P198、211）

17号溝の遺物としては灯明受皿（第57図14）がある。木製品では板（105図１、106図６、107図１）がある。

18号溝からも木製品を中心に多くの遺物が出土した。まず焼物類では、陶器碗（第57図16、20）鉢（17）がある。特に20は瀬戸の尾呂窯のものである。ほかにかわらけ（15、18、19）がある。18は煤が付着。木製品では下駄、杭、板の類、曲物底等がある（第106図、107図）がある。また第108図に示した桶も出土している。

19号溝（第21図）

発掘区中央西寄りの箇所にて、境内地を東西に走っている。２面を剥がしている段階で確認されたことから、３面の時期に機能していた溝と思われる。幅50～60㎝、深さ10㎝程度の浅い溝である。東側は最近の水路により切られているが、それよりも東には延びていないことからこの部分付近から始まるものとみられる。西側には石が散乱しているが、これから先は撹乱のため詳細不明。出土遺物はない。

20号溝・22号溝（第21図）

庫裏とみられる５号建物の北側に位置する。20号と22号とは繋がっており、さらに細い溝で西方向に走り７号溝に至るものとみられるが、途中が最近の水路によって切られている。本来一つの遺構であるが、調査中別の遺構として取り扱ったことからそのまま番号を付してある。20号溝とした部分は北側の不整長円形の箇所である。ここは長軸2.3ｍ、短軸1.1ｍ、深さ18～20㎝を測る。この20号部分から細い溝を経て、22号とした円形の落ち込みに繋がるが、この部分は直径1.2ｍ、深さ20㎝の円形をなしている。さらにここから幅50㎝の溝となって、西に走っている。この一連の遺構は、おそらく水溜まり状の施設であり、集まった水を７号溝（池）に流していたものとみられる。２面を剥がしている段階で確認できたことから３面の時期の遺構とみなされる。出土遺物は少ない。

［出土遺物］（第107図）（表P211）

20号からはモモ核12個（挿図６－９～20）と板が１点出土（第107図3）。

(3) 井戸及び溜状施設

１号井戸（第25図）

３号建物の南側に位置する。井上家敷地の前庭に設けられていた井戸とみなされる。直径1.3ｍ程の円形の落ち込みが確認されたことから、調査を進めたところ中央部に垂直に立った状態で竹筒が発見されたことから、埋設祭祀の行なわれた井戸とみなし掘り下げていった。底に近い箇所から桶の断片と竹のタガが出土したことから、本来は桶が設置されていたことが確認され、円形の落ち込みは井戸の掘り方であることが分かった。この掘り方周辺にはやや大きめの石が散乱しており、井戸のまわりに石が敷かれていた可能性が窺われる。確認面からの深さは80㎝程である。調査中も底付近の礫層からの出水は多かった。

［出土遺物］（第58図１、73図７）（表P198、205）

覆土中から１の磁器碗が出土した。また、４面調査中に井戸底を精査した際に桶のタガ破片とともにかんざし１点が出土した（第73図７）。

２号井戸（第25図、図版14）

３号建物の裏側に位置する。１号溝の岸付近でもある。１号井戸と同様、井上家敷地内の施設である。井戸と名付けたが、１号井戸のような竹筒の埋設もなく、しかも１号溝に近いことから溜状施設の可能性もある。

口径60㎝、高さ70㎝程の桶が逆さに設置されているもので、その周囲には長円形の石が放射状に敷かれている。内部からの出水は激しく、桃や梅などの種子類や木の枝葉などの植物質も多く残っていた。また覆土最上面からは内耳の焙烙と磁器碗が出土した。

［出土遺物］（第58図、109図）（表P198、211）

第58図２は磁器碗、４は内耳の焙烙である。第109図４は桶の側板。

３号井戸（第25図、図版15）

本堂である７号建物の西に接するかのような位置にある。２面を剥がしていく段階で発見されたもので、隣接する４号井戸とともに７号建物や５号建物よりも古い時期の遺構とみなされる。

直径1.2m、深さ40cmの掘り方の中に桶が2個重なって設置されている。桶は逆位。下側の桶は口径40cm、残存高35cm。上側の桶は口径40cm、残存高25cmを測る。掘り方の上部には大きめの礫が散乱しており、井戸の周囲に石敷きがなされていたものとみられる。埋設祭祀の竹等は見られなかった。

[出土遺物]（第109～114図）（表P211～212）

井戸枠として用いられていたのが桶2個体である。タガが腐り取り上げ時にバラバラとなったが、第110～112図（内側の桶）と第113・114図（外側の桶）に示しておいた。他に第109図1に載せてある中央に穴のあいた板と、2・3の桜皮を巻いたものが出土した。

4号井戸（第26図）

3号井戸の西に隣接している。庫裏とした5号建物に接しており、3号井戸とともに3面以前の遺構とみられる。3号と異なり桶は設置されていないが、類似した形態であることから、井戸とみなしたものである。掘り方は1.3m×1.2mの楕円形で深さは30cm。

[出土遺物]（第58図）（表P198）

第58図3は覆土中から出土した陶器皿の破片。志野焼きである。

5号井戸（第25図、図版15－3）

庫裏とした5号建物の西4.5mに位置する。直径1.5m、深さ50cmの掘り方が確認されただけで、桶等の施設はみられなかった。しかし壁下部から底部にかけての礫層の状況が他の井戸遺構と類似していることから井戸とみなした。さらに南側1.5mには桶を伴った流し場とみられる8号溝があることから、これと一体となった水場施設とも考えられる。図示できるほどの出土遺物はない。

6号井戸（第26図、図版16）

本堂前庭の西隅寄りに位置する。掘り方は直径2.6mと非常に大きい。壁の立ち上がりは明瞭ではなく、傾斜もゆるい。覆土中に竹筒が残存していたことから、埋設された井戸とみなしたものである。また底付近には桶のタガとみられる竹の破片が出土したことから、元来は桶が埋設されていたものとみられる。深さは1m近い。

[出土遺物]（第75図）（表P207）

出土遺物は少なく、寛永通宝1枚（第75図27）が出土した程度。

（4）設置桶・土坑

1号桶（第19図、図版17－1）

7号溝の南岸辺に埋設されていた桶。わずかに底と側面下部が残っていた程度である（第117図）。底の径は56.5cm。7号溝とした池と一体となった水場利用の施設と思われる。この一体には井戸や洗い場もあり、全体として5号建物とした庫裏に伴う水利施設としてとらえられよう。

2号桶（第26図、図版17－2）

2号建物調査後、礎石やその周囲の下部を調査中に発見されたもの。2号建物と3号溝との間に位置する。底と側面の一部とを残すのみで、保存状態は良くない。底径は31.5cm程の桶（第115図2）で、2号建物に伴うものと思われる。

3号桶・4号桶・1号土坑（第26図、図版17－3）

5号建物の南に隣接して発見された。本堂前庭の西側にあたる位置である。1号土坑を挟み、東に3号桶、西に4号桶（第115図1）がある。両者の距離は1.4mである。いずれも上部は朽ちて残っていない、底径25cm程の

小型の桶である。塩分状の付着物が著しく、小便所とされた埋設桶であろう。

1号土坑は98×87㎝、深さ20㎝程の楕円状土坑。覆土中から鏡破片が出土しており、埋め戻しの際に入れられたものとすると便所にかかわる坑の可能性がある。2個の桶の中間にあり、新旧関係からすると1号土坑→3号桶・4号桶となるり、これらが一体となった便所施設かどうかは不明。

1号土坑からは他に煙管吸口（第72図38)、針金（第73図16）が出土し、3号桶からは第73図36の金属製品が出土した。

2号土坑（第26図）

6号井戸の西1mのところに位置する。本堂前庭西側の一画にあたるところである。1.54×1.34m、深さ25㎝の略円形の土坑。出土遺物はない。

（5）墓

今回の調査により墓域は2ヵ所確認できた。1ヵ所は発掘区中央の東端（B－10区）であり、さらに発掘区域外に延びているものとみられる。この一角に1号～6号棺が埋葬されていた。2ヵ所目は本堂とした7号建物の北側（C－17区）であり、これも東側発掘区域外にまで広がるものとみられる。本堂が移転された大正年間以降現在まで、本堂跡地を含みその東側および北側が墓地となっている。今回建設の道路用地にこの一部もかかったため、墓地移転がなされた後、この区画の発掘がなされたものである。ここには7号棺が埋設されていた。

なお、人骨の自然科学的所見については第4章にて茂原先生により詳しく検討されている。

1号棺（第27図、図版18－1）

棺群の中央にあるもので、棺の残りが最も良い。歪んでいるため正確さを欠くが約75㎝×45㎝の長方形の棺桶。大分落ち込んではいるものの蓋を伴っていた。内部には頭蓋骨や四肢骨が残されており（1号人骨)、棺蓋上に3枚、棺内に4枚の寛永通宝が納められていた（第75図31～37)。木製の数珠も副葬されていた。また棺下には折敷の破片とみられる板（第116図1）が置かれていた。

2号棺（第27図、図版18－2）

1号棺により北側を切られているが、それと同じ形態の棺桶であろう。やはり内部には頭蓋骨を中心に四肢骨が納められている。これを2号人骨とした。副葬品はない。

3号棺

1号棺を取り除いたら下に頭蓋骨を納めた棺の残存が発見された。これを3号棺（3号人骨）とした。2号棺の埋葬時に相当破壊されたものとみられるが、頭蓋骨の残存状況はよい。付近から箸が2本出土した（第99図15、16)。

4号棺（第27図、図版18－2）

2号棺の南東80㎝のところに位置する。底径約28.5㎝の桶棺であるが上部は朽ちている（第118図)。内部には骨片しか残っていなかったがこれを4号人骨とした。副葬品はみられなかった。

5号棺（第27図、図版18－4）

1号棺の北70㎝のところに位置する。棺底の一部しか残っていなかったが、頭蓋骨を伴っておりこれを5号人骨とした。棺底から寛永通宝5枚が出土した（第74図21～25)。また木製の数珠も出土した。

6号棺（第27図、図版18－3、4）

1号棺の北東隅に接するかのように位置する。80㎝×35㎝ほどの棺であるが、東側の側板を欠する。頭蓋骨および四肢骨はよく残っている。これを6号人骨とした。人骨上から寛永通宝1枚が出土した（第74図1）。

7号棺（第27図、図版18－5）

1号～6号のある墓域とは大分離れて、本堂北側も墓域となっていたようで、ここから発見されたのが7号棺である。現在の墓地移転後の平成8年度の調査時に発見されたもの。丸桶を横にして埋葬してあった。桶は直径60㎝、高さ60㎝のもので、納められていた人骨の保存は良好である。棺のすぐ北西脇に柄は欠するものの柄杓が1個（第116図2）置かれていた。ほかに副葬品はない。

（6）参道

集落の南側を東西に市川道が走っているが、この市川道から法浄寺に入っていく参道も確認できた。この参道は、3号建物を含む井上家の敷地と溝（3号溝）を隔てて南北に走っており、境内へと続くものである。幅は2m程であることから本来は1間の道であったとみられ、両側に杉を中心に桧および松も加える木の根が等間隔に並んで検出された。ところどころに桧や松をまじえた杉並木のある参道であったことが分かる（図版3－2）。平行して走る3号溝中からも杉の葉や松ぼっくりが多く出土している。参道の地表面は堅く踏みしめられている。境内に入ると、この参道の延長上に、側石で区画された幅80～100㎝、長さ12mの砂利敷きの参道施設が設けられている（第28図）。いわゆる幅3尺の参道である。側石は長さ10㎝から50㎝の河原石が用いられているが、石臼破片（第77図2）も利用されていた。この側石の高さまで土が盛られ踏み固められていた。この参道施設が終わる両側に15号溝と16号溝とがあるが、特に左側（西側）の16号溝からは手提げ桶なども出土していることから、ここに手洗い場ないし水汲場があったものとみられる。ここから先が広場となっており、さらに延長上に本堂が位置することになる。

（7）包含層出土遺物（第58図～69図）（表P198～202）

焼物の容器類については第59図から69図までに図示した。第58図は磁器碗、皿、鉢の類、第59図は磁器碗である。時期としては18世紀代から明治前期までが含まれ、碗では丸形、筒形、端反形、広東形などがある。第60図ではやはり磁器を中心に猪口類、仏飯器、皿、鉢類、瓶類を示したが、22のような陶器植木鉢も載せた。時期的には21・22が明治である以外、殆ど江戸期のものとみられる。第61図は磁器蓋類の他は陶器である。碗、皿、仏飯期、鉢類がある。4は第二次世界大戦時の容器蓋（国民食器）とみられるもの。それ以外は江戸期を中心としたものである。8はいわゆる腰サビ碗、10はげんこつ茶碗といわれるもの。19には型紙摺りによる菊模様鉄絵が施されている。第62図には陶器鉢類を図示した。唐津系（2）、肥前系（1）、瀬戸・美濃系（3ほか）などがある。3は行平、4～7は擂鉢。第63図も陶器を中心とした鉢類、壷類、土瓶、甕等である。第64図は2面の陶器灯明具および土器類かわらけ・香炉類と3面出土の磁器碗と仏飯器。36が型紙摺り、40がコンニャク判である他は手描き。第65図は3面出土の磁器の仏飯器、皿、灰吹き、陶器の碗、皿、鉢類その他、および土器類かわらけや灯火具である。特に25の土器灯火具は本遺跡ではめずらしい。第66図には2面、3面から出土した磁器、陶器、土器の残りを示した。燗徳利（1、2）や碗の蓋・散蓮華（6）などの磁器類、碗・鉢・灯火具などの陶器類、かわらけ・香炉などの土器類がある。第67図、68図には土器製品として焙烙、火鉢、甕等をまとめた。焙烙には浅いもの（第67図2、3、68図1～3）と深めのもの（第67図5～7、68図4～6）があり、さらにに内耳がつくものと、鍔が巡るもの（第67図4～6）とで分類できる。第69図は7号建物の北側にゴミ穴状のものがあり、そこからまとまって出土したもの。陶磁器や土器類があるが時期的には江戸から明治まで混在しており、明治以降の撹乱穴としておいた。

（8）その他の遺物

1　瓦（第70図）（表P203）

1号溝および3号建物付近を中心に黒瓦が少量出土した。民家である井上家の移転にかかわって廃棄された可能性もあるが量的には少ない。なお刻印の山二マークは鰍沢河岸跡からも出土している。

2　玩具類・他（第71図、第72図）（表P203～205）（巻頭図版15－1）

遺跡全体から玩具類や土製品が出土したが、特に民家裏手から寺境内にかけてと、庫裏付近からその裏手にかけての箇所に多い傾向があった。泥面子、人形が多いが、土馬（22）は祭祀用かもしれない。磁器製のボタン（51、52）、ガラス製品（53、54）などは明治以降のものであろう。

第72図1～8は素焼きの土鈴。土製面子としての碁石（第71図32～48）のみならず石製碁石もみられる（第72図17～24）。石製品では他に石筆（第72図9～11）、火打石（同12～14）がある。

3　金属製品（第72～75図）（表P204～207）（巻頭図版14－2）

第72図26～45には煙管を示した。28、33、34にはラオが残っていた。なお彫金がなされている37は4面出土である。

第73図1～8はかんざしである。7が鉄であるほかは銅地金であり、特に4と8には渡銀がなされている。出土した場所は、3号建物（民家）裏手が多い。9は6号溝底から出土した毛抜きである。他には釘、針金などもある。23は小柄（こづか）の柄の部分、24は刀の鍔の金具。35は鏡破片。38は水滴、39は襖等の開き部分と思われる。41・42は鉄砲の鉛玉。その他さまざまな金具が出土した。

なお第73図36の金具は4面出土である。

第74図、75図は銭貨である。5面から出土した開元通宝（75図1）、3面から出土した□元通宝（75図2）といった渡来銭もあるが、主体は寛永通宝であり文久永宝も加わる。寛永通宝では1文銭と4文銭がある。2面、3面合わせて140枚程が出土したがこのうち鮮明なもののみ図示した。

4　石製品（第73図、第76図～79図）（表P205、207、208）

第73図には磨石状のものを示した。第76図は鉢類、磨石、凹石等である。特に2は煤が付いておりヒデ鉢として使われたものであろう。4は井戸掘りなどに用いるカグラサンの軸受石と推定したもの。6、12～14の凹石は小型の石皿のような形態であり、戦国期に出土するものと類似している。擦り潰す道具であろう。第77図、78図には石臼、五輪塔、その他を図示した。第79図は硯、砥石、軽石。

5　ガラス製品（第71図、79図）（表P204、208）

明治以降の遺物とみられるもので、すでにふれた第71図53（ビーズ）、54（瓶蓋）ガラス製以外にも、第79図11、12に図示したものがある。11は容器の破片のようであるが、魚とりにつかうビンブセにも似る。12はラムネ壜。

6　馬の歯（第119図1、2）（表P212）

寺域内の北端にあたるF－18区から3点出土した。

［1面～3面の遺構一覧］

1面	1号建物	民家	江戸末～明治
	溝、暗渠	水田	大正～昭和

2面	2号建物	民家（？）	江戸後期～幕末
	3号建物	民家	江戸後期～幕末
	4号建物	寺（堂）	〃
	5号建物	寺（庫裏）	〃
	7号建物	寺（本堂）	〃
	1号溝	民家	〃
	2、3、5～9、12号溝	寺域	〃
	1、2号井戸		
	1、3、4号桶		
3面	4、13号溝	民家	江戸中期～後期
	10、11、14～22号溝	寺域	〃
	3、4号井戸		〃
2面～3面	5、6号井戸	寺域	江戸中期～幕末
	2号桶、		〃
	1、2号土坑		〃
	1～7号人骨		〃

第3節　4面の調査（付図2）

［概要］ 3面の調査が終了後、重機により下部層を剥がしていったところ、ほぼ全面に厚く砂利が堆積していたにもかかわらず、発掘区の南東隅と中央東端の一部に土の面が確認できた。この部分を精査したところ柱や溝が残っていたことからこれを4面として調査を進めた。

4面遺構の主体は発掘区東南隅であり、ここは2面で確認できた3号建物（旧井上家）敷地の真下にあたっており、2面からの深さは約80㎝を測る。ここには柱根を残す穴が群在しており、複数の建物があったものとみられる。小さな柱穴に囲まれた土坑中から鉄釉天目茶碗や灰釉皿破片が出土しており、これらから判断すると16世紀末から17世紀初め頃のものである。

（1）建物群（第120図、図版19）

多くの柱穴が発見できたことから、複数の建物があったと思われる。配列から少なくとも3棟は確認できる。4面の建物という意味から、4－1号～4－3号と表記した。

・4－1号　最も西側に位置する5.4m×3.8mの建物である。規格では3間×2間の規模であるが、北辺では1m間隔で4個の穴が並ぶものの、他の辺では不規則であるとともに、西辺は傾斜があることから穴が確認できなかった。東辺の中央には直径五寸を測る六角に面取りされた柱根が残る穴2個がある。この2個は芯芯の間隔が1.3mである。別の建物との組合せも考えられるが、近くにはこのような柱は見られなかった。

・4－2号　4－1号と一部重なるが、その北側に位置する。東側発掘区外に延びる可能性も高いが、発掘区域内で収束すると考えると南北5.5m、東西4.8mの規模となり、3間×2.5間の建物となる。北辺の穴および東辺の穴では六角を基本とした面取りある柱根が残っていた。

・4－3号　4－1号と一部重なるがその南側に位置する。中央やや東寄りの1号土坑を囲むかのように13個の小穴が巡っているものである。長軸（東西）4m、短軸（南北）3.2mの規模で、柱穴は直径40㎝前後のものが多い。4個ほどの穴に柱根が残っていたが、これらは直径10㎝程の丸柱であり、4－1号や4－2号とは性格の異なる建物とみられる。土坑と一体となった施設と考えられるもので、土坑の上層からは瓢箪の一部や鉄釉天目茶碗および灰釉皿破片が出土した。

なお、建物群の柱根については第123図・124図・巻頭図版15－2に示した。材質はカラマツ・クリ・モミ・ツガなどである。

［出土遺物］（第72図、81図、122図）（表P204、208、212）

陶器類では土坑の上層から出土した鉄釉天目茶碗（第122図３）および灰釉皿破片（同４）がある。その他煙管吸口（第72図37）や漆塗り椀（第81図９）も出土した。これは口縁部を欠損するが内面赤、外面黒に塗られたものである。

（２）溝（第120図）

・１号溝　４－２号建物の北側に位置する。建物群を区画するかのように東西に走るが、西側および北側は全て砂利層となっており生活面である黒色土層は全く残っていないことから、洪水で撹乱されてしまったものとみられる。幅60～100㎝、深さ20㎝程である。

［出土遺物］（第116図３～４）（表P212）

１号溝からの出土品は木製品である。３は中心に孔が貫通する円盤形製品。４は箸であろうか。５は曲物の底と思われる。

・２号溝（第121図）本堂である７号建物の南側に一部黒色土の面が残っており、ここから溝が発見された。この溝の面は４面建物群と同じ生活面とみられるものである。溝は幅50～80㎝、深さ20㎝前後であり、東西および南北方向のものが連なった状況にある。付近には小穴もみられることから、建物を区画する溝の可能性もある。出土遺物はない。

［４面の出土遺物］（第119図Ｂ・122図１～16）（表P212、213）

１号土坑からのものを除いても、陶器類や土器類が出土した。鉄釉碗（122図２、８）、志野丸皿（同５、９）、瀬戸系灯明皿（10）など、16世紀末から江戸前期までのものが中心である。かわらけ（11～14）、焙烙とみられる内耳土器破片（15、16）もある。中には３面との混入の可能性あるものも含まれる（同１、６、７等）。さらに第119図に示した猪の牙付き下顎が出土した。

第４節　５面の調査（付図２）

［概要］

第２面から約２ｍ下の砂利層中に、薄いながらも粘土面が部分的に残っておりこの面を中心に、南北に走る杭が２列発見された。西側を１号杭列、東側を２号杭列として調査を進めた。

この面の時期については土器等の遺物がないため詳細不明ながら、層位や杭の形態、網代の状況などから、隣接する大師東丹保遺跡と同様鎌倉期の可能性が高い。

（１）１号杭列（第125図、図版21）

発掘区内を南北方向よりやや東に偏って走る杭列。延長はさらに発掘区外にも及んでいる。杭は殆どが１列に限らず幅2.5ｍの範囲に複数が打ち込んである箇所もみられ、年数を越えて何度も打ち直されたものと思われる。これらの杭が打ち込まれているのは砂利層を中心としており、最下部では粘土層に至っているものもある。ただこの杭の打たれている範囲の幅が水路であったのか、あるいは１号杭列全体が護岸の杭列であったのかは、付近の層序全体が砂利層であることからよく分からない。

杭は丸杭も数本含まれるものの、殆どが角であり、いわゆる「みかん割り」後さらに細分していく割り方のものである。１号杭列には長さ１ｍを越えるものも多く、最長は1.84ｍにも達する。これらの杭は殆どが南西側に傾いていることから北東方向からの水流を受けたものとみられ、さらに杭の頭がけば立っているものもあることから、何度となく洪水を被り、砂利により埋没していったものと考えられる。

杭列の一部にはの小枝を用いて杭列間を縫って「しがらみ」が組まれている箇所も確認できた（第125図、図版21－１）。

南北に走る杭列ではあるがＥ－７区にあっては東西方向に並んで打たれている杭群があった（第126図）。堰状

をなしており、取水にかかわった施設の可能性もある。

杭は殆どが角杭である。材質については全てを鑑定してはいないが、ピックアップした鑑定成果では、ヒノキが50パーセントに及んでいる。他にモミ、ツガなどがあり、わずかながらケヤキも含まれている（表参照）。またしがらみにはクリやハンノキの小枝が用いられている。杭の製作や材質については隣接する大師東丹保遺跡の鎌倉時代の杭と共通する。

（２）２号杭列（第127図、図版22）

１号杭列と平行して、その東約５ｍの所に走っている。その方向はＮ－７°－Ｅである。１号と異なり杭が打たれる幅は狭いが、杭と同時にヒノキのヘギによる網代が用いられていることが特徴である。網代は長さ80～100㎝、幅10～14㎝、厚さ0.3～0.5㎝のヒノキ板が編まれたもので、２本越え・２本潜り・１本送りである。設置した時の高さは約70㎝で、この面を押さえるかのように両面（東西）に杭が打たれている。ただし杭の数は網代の西側の方が多いことから、西側に本流があったのかもしれない。なお２号杭列全体に本来は網代が設置されていた可能性があり、網代の長さは定かではない。おそらくこの現地にて、持ち込んだ材料にて編みながら設置したものと考えられる。ヒノキ板の代わりに桧皮も利用されている。この網代については一部ではあるが、取り上げてPEG処理により保存してある。

２号杭列の東側には一部ではあるが良好な粘土面が残っていた。この面は平坦であることから、水田面であった可能性が高い。したがって２号杭列は東側に広がる水田を守る護岸として構築されたと考えられる。２号杭列の西側は、１号杭列を越えてもなお砂利層となっていることから、ここが川であったとみなされる。先にふれたように、２号杭列網代の西面に押さえの杭が多かったことも西側が川に面していたことを意味しよう。このことは杭列と網代の断面図（第128図２）からも推測出来る。しかし最終的には東面も水流を受けたものとみられ、網代の東面がへこんだり（第128図３）、ヘギが剥がれてしまった部分も多いことからも分かる（第128図１）。

いずれにしても２号杭列は水流から水田を守った護岸施設であったと考えたい。この場合１号杭列との関係はどうなのか。１号と２号との間は約５ｍであり、この５ｍが川幅という見方もできる。そうした場合、２本の杭列は一筋の流路の両岸に打たれた、護岸のための杭列ということになる。６面にて発掘されたさらに古い河道の幅もおよそ５ｍであることも参考になる。

しかし１号の西側も同じ様な砂利層となっていることから、発掘区内における２号以西が全て流路であった可能性もある。この場合１号杭列は、２号杭列以前の護岸であったものが、洪水により役立たなくなり新たに２号を構築したという考えもできる。１号の西側のさらに詳細な調査の必要があろう。

［出土遺物］（第81図、119図、122図、129図）（表P208、212、213）

Ｅ－７区から漆塗り椀が出土した（第81図10）。これは内外面ともに黒漆である。同じ区画から斎串２点も出土した（第119図12、13）。

土器類では第122図に示したように、弥生壷破片（17）、須恵器破片１（8～21）が出土した。いずれも磨滅しており流れてきたものと思われる。

なお、第129図に杭と網代の一部を図示しておいた。

第５節　６面の調査（付図２）

［概要］

第５面下80㎝～１ｍのところに良好な黒色粘土層がみられた（挿図４層序図）。これを６面として調査を行なったところ、水田跡と旧河道が発見された。３面以下６面直上までは厚い砂利層で覆われており、何度も洪水が押し寄せてきたことが分かるが、６面の粘土層は厚いことから、この形成時は安定した気象条件下にあったことが推測できる。この粘土層の厚さは約30㎝であり、さらに下層は砂利層となっていることが部分的な深掘りで確

認できたが、以下は不明である。

なおこの面は、発掘区の北側である14区～22区までの長さ35ｍの部分の調査を行なった。

(1) 水田跡（第130図、図版23－２）

４つの水田面が確認できたが、いずれも発掘区域外に延びていることから、それぞれの詳細な水田規模をつかむことができなかった。また洪水を受けていることから、水流により畔や床がえぐられている箇所もみられた。しかし安定した粘土面につくられていることから、畔や床の検出はたやすかった。これらの面上には細かい青色をした砂が堆積していた。

南側から北に１～５と番号を付したが、このうち２が南北10ｍと最も大きい（大きさは畔の中央から中央までの長さ）。ちなみに３が7.3ｍ、４が5.5ｍである。１は南側畔まで調査しておらず、また５は一部しか検出できなかったことから、それぞれの規模は不明。なお４については北側の流路に規制されたためか、畔がゆるくカーブしている。

それぞれの畔の高さは10～20㎝程度である。床からは小さな窪みが多く検出できたが、水流によるえぐり込みに加え、足跡状のものも残されているものとみられる。

水田の並ぶ方向はＮ－８°－Ｅであり、隣接する大師東丹保遺跡の鎌倉時代水田方向がＮ－８°－Ｅ～Ｎ－11°－Ｅ、現在の地割がＮ－6°－Ｅ～Ｎ－18°－Ｅである。このように本遺跡や大師東丹保遺跡と現在の水田の並ぶ方向がほぼ一致していることは重要である。ちなみに大師東丹保遺跡の弥生後期水田は真北からＮ－12°－Ｗというように、鎌倉期のものとはほぼ逆方向に振れている。現在の地割りについては、この一帯が『田島条里』と呼ばれているが、この形成が少なくとも鎌倉期にまで遡ることが考えられるからである。さらに平安以前まで遡る可能性を秘めているものである。

出土遺物は、水田を覆う砂層中から磨滅した弥生土器破片（122図25、26）や古墳時代～平安時代の土師器（同22、23）が出土した程度である。

水田を中心としたこの６面の時期については、５面の杭列が鎌倉期と考えられること、水田の規模や方向性が大師東丹保遺跡の鎌倉期のものに類似していること、出土遺物が磨滅した弥生および平安の土器であること、などから平安～鎌倉期ではないか考えている。

（２）流路（旧河川）

水田の北側に走る自然流路。北東方向から南西方向へと流れており、６面水田や５面杭列の並ぶ方向とは40度程西に振れている。確認面である粘土上面からの深さは最深部で30～40㎝程である。川床面は流方向と平行して溝状の凹凸が多く、時に激しい水流によりえぐられたものとみられる。出土遺物は磨滅した弥生小破片や須恵器破片が少量出土した程度（第122図24、27）。

第４章　自然遺物についての調査・検討

第１節　山梨県宮沢中村遺跡から産出した昆虫化石群集と古環境

愛知県立明和高等学校　森　　勇　一

１．はじめに

昆虫の外骨格はキチン質で構成されていて、土中に埋もれてからも長い間保存される。昆虫の生息環境が多岐にわたり、かつ食性がきわめて多様であることから、遺跡中より発見された昆虫化石の種レベルの同定が進めば、そこから得られる情報はすこぶる多い。筆者は、これまで先史～歴史時代の地層中に含有される昆虫化石を抽出・分析することにより、植生や水域環境・農耕・人為による土地改変の様子・気候変動など、人々を取りまく古環境についての情報を多数蓄積してきた（森、1994a,1994b,1996a,1997,1999）。

本論では、山梨県中巨摩郡甲西町宮沢に所在する宮沢中村遺跡の江戸時代後期の遺物包含層中より得られた昆虫化石群集と、それらから導かれた古環境について述べる。

２．試料および分析方法

宮沢中村遺跡は、富士川右岸の標高244mの扇状地性の沖積地に位置し、周囲には弥生～古墳時代、および古代から中近世に至る多くの遺跡が知られている。本遺跡からは、江戸時代後期の生活面（２面および３面）と、この下位より16～17世紀初頭の建物跡を含む包含層（４面）、鎌倉時代とされる杭列を伴う護岸施設跡（５面）などが検出されており、これらは洪水による砂礫層に被覆されている。

分析試料は計７試料よりなり、いずれもすべて２面ないし３面とされる江戸時代後期の遺物包含層より検出されたものである。試料１は調査区の南半部に位置する１号溝より、試料２および試料３は１号溝北側の２号溝と３号溝から得られたものである。試料４は、調査区のほぼ中央部に位置する６号溝より、また試料５は同北半部の７号溝より得られた。また、試料６および試料７は、いずれも調査区南端部に位置する１号井戸と２号井戸から採取されたものである。

昆虫分析試料は、山梨県埋蔵文化財センターのスタッフにより、遺跡調査の過程で抽出されたものである。昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で１点ずつ比較のうえ実施した。なお、昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

３．昆虫化石群集

昆虫分析試料より抽出された昆虫化石は、計492点であった（表１）。試料別では、江戸時代後期の溝から得られた試料１～５より計100点、同じく江戸時代後期の井戸内堆積物である試料６（１号井戸）から６点、試料７（２号井戸）からは総点数の78.5%を占める386点が発見された。なお、産出昆虫の主なものについては、巻頭図版16に実体顕微鏡写真を掲げた。

昆虫化石群集は、陸生の食植性昆虫を主体に、これに主に乾燥した地表面上に多い地表性歩行虫が伴われた。水生昆虫の出現率は全試料を通じ10.4%（51点）と低率であった。

試料ごとに出現傾向に差異が認められたが、これは試料１～６の産出点数が少ないためのばらつきと、遺跡調査中における人為によるセレクションの影響を反映したものである可能性が考えられる。このため、本論では産出点数の多かった試料７を中心に、これに試料１～６のデータを加味して述べる。

試料７からは、水生昆虫が18点（4.7%）、地表性歩行虫が164点（36.2%）発見された。うち食糞ないし食屍性の地表性歩行虫は72点であった。陸生の食植性昆虫は168点（43.5%）見いだされた。昆虫群集に汚物食と考え

てよい双翅目の囲蛹が、試料７より39点（10.2%）、分析試料全体では計54点検出されたことが特筆される。

種組成では、食植性昆虫のヒメコガネ *Anomala rufocuprea* が試料７から計51点と多産し、試料３からも計７点検出された。食植性昆虫では、これにドウガネブイブイ *Anomala cuprea*（試料２より10点、試料３より６点、試料７より21点）、マメコガネ *Popillia japonica*（試料７より５点）、サクラコガネ属 *Anomala* sp.（試料３より３点、試料７より25点）、およびハムシ科 Chrysomelidae，ゾウムシ科 Curculionidae などが伴われた。

地表性歩行虫では、試料７を中心に、人為度の高い裸地的環境下の人糞や獣糞に集まるコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*（計42点）が多数検出され、これ以外におそらく同種かこの近縁種に同定されるエンマコガネ属 *Onthophagus* sp.が計16点確認された。その他の食糞性昆虫では、獣糞や人糞に多いマグソコガネ *Aphodius rectus* が６点、同じく獣糞や人糞に集まるコマグソコガネ *Aphodius pusillus*（１点）やクロマルエンマコガネ *Onthophagus ater*（２点）に加え、食屍性の地表性歩行虫であるエンマムシ科 Staphylinidaeが10点発見された。

食糞性昆虫以外の地表性歩行虫では、属および種名が未同定のオサムシ科 Carabidae が計42点産出した。とくに、試料７では本分類群が計39点検出され、頭部（８点）をはじめ上翅（14点）・腹部腹板（６点）など、多数の部位が認められた。オサムシ科では、体節片のみによる種の同定は困難であり、これらから食性や生息環境などの詳細な情報を得ることは困難である。このほか、攪乱地表面の指標種（石谷，1996）とされる食肉性のセアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* が試料２より１点、試料３より２点、試料５より３点、試料７より４点の計10点検出された。また、攪乱から時間の経過した比較的安定した環境に多い（石谷，1996）アオゴミムシ属 *Chlaenius* sp.（計13点）、アトボシアオゴミムシ *Chlaenius naeviger*（計３点）、スジアオゴミムシ *Haplochlaenius costiger*（計２点）なども発見された。

水生昆虫は、全体を通じ産出点数が少なかった。止水性の食植性水生甲虫であるガムシ *Hydrophilus acuminatus* が試料１より１点、試料２より３点、試料４より10点、試料５より18点、試料７より３点の計35点検出され、これにコガムシ *Hydrochara affinis*（２点）、セマルガムシ *Coelostoma stultum*（１点）などが伴われた。食肉性の水生甲虫では、ゲンゴロウ科 Dytiscidae（８点）、ゲンゴロウ *Cybister japonicus*（２点）、ヒメゲンゴロウ *Rhantus pulverosus*（１点）、ミズスマシ *Gyrinus japonicus*（２点）などが見いだされた。

４．昆虫相から推定される古環境

A. 古環境復元の方法

筆者は、日本各地の先史～歴史時代の昆虫化石の分析を通じ、地層中に含有される昆虫化石が大部分昆虫が生息していた場所からほとんど移動することなく検出された現地性化石の可能性が高いことを多くの実例より明らかにした（森、1994a、1999）。このため、昆虫化石は、遺跡周辺の狭い範囲の環境復元に有効である。だが、昆虫化石は定量分析には必ずしも適しておらず、広域の生物相を復元するには多くの試料を調査・分析しなければならない難点がある。このように、より詳細な古環境復元には、個々の生物化石の持つ特性をよく理解し、相互に補完しながら研究を進めなければならない。

昆虫はあらゆる生物のなかでも最も多くの種を有し、環境による棲み分けと種分化が顕著にみられる生物の一群である。なかでも鞘翅目はすべての目を通じて最多の種数を誇り、生息環境も多岐にわたっている。遺跡から発見される昆虫化石に鞘翅目の出現頻度が高いのは、こうした鞘翅目の種数や個体数の多さ、その生活史上の特性に加え、鞘翅目特有の硬化した外骨格が土中に埋もれたのち残りやすく、かつまた発見されやすい理由の一つになっている。その結果、本論で扱った昆虫化石もその大部分が鞘翅目で占められた。

鞘翅目を生息環境によって分類すると、森林や草原内の樹葉・草本類・朽ち木などの植生に依存するもの（好植性昆虫）、畑や砂地・腐植土中・動物の糞やその屍体などの地表面上に認められるもの（地表性歩行虫）、地沼や河川・水溜り・水田・湿地などの水中ないし水面上に生活するもの（水生昆虫・湿地性昆虫）などがあり、その生息地はきわめて変化に富んでいる。また、食性についても食植性から食肉性・雑食性・食糞性・腐食性・食

菌性など多様な食物に依存して生活している。本論では、昆虫化石のこれらの特性をふまえ、江戸時代後期の古環境について略記する。

B. 江戸時代後期のころの古環境

宮沢中村遺跡では、溝や井戸などより多様な食植性昆虫が検出されている、これらは同遺跡の江戸時代後期ころの植生空間を考えるうえで有効である。最も多く産出したヒメコガネは、ダイズやアズキをはじめとしたマメ科植物や、クリ・ブドウなどの果樹を食害する畑作害虫として知られ（湯浅・河田、1952；日本応用動物昆虫学会編、1987)、成虫が葉を幼虫が主に根を食する。台地や扇状地上などに多く発生し、沖積低地では比較的少なく、また山間地でも生息密度が低いとされる（桑山、1953)。これに各種畑作物を加害するドウガネブイブイやサクラコガネ属・マメコガネなどが伴われた。

分析試料中より産出したヒメコガネ・ドウガネブイブイ・サクラコガネ属などの存在からは、遺跡周辺に人間が植栽した畑作物や果樹等が生育していたことを推定させる。マツやスギ・ヒノキなどの針葉樹の葉を食するスジコガネ *Mimela testaceipes* の出現からは遺跡周辺にこれらの針葉樹が繁茂していたことを、またクヌギ・コナラなどの樹液に集まるカナブン *Rhomborrhina japonica* やシロテンハナムグリ *Protaetia orientalis* の産出は、近現代の里山林を構成する落葉広葉樹が宮沢中村遺跡一帯に生育していたことを示している。2点のみであるが、タマムシ *Chrysochroa fulgidissima* の発見は、エノキかヤマザクラが遺跡付近に生えていたことを推定させる。

一方、地表性歩行虫では、コブマルエンマコガネ・エンマコガネ属・マグソコガネなどの食糞性昆虫や、アオゴミムシ属・セアカヒラタゴミムシ・アトボシアオゴミムシ・ナガゴミムシ属 *Pterostichus* sp. エンマムシ科など、今日の農村地帯に普通に見られる食肉ないし雑食性の地表性歩行虫が多数確認された。食糞性昆虫や食肉ないし雑食性の歩行虫は、弥生時代では人口集中度の高い大集落の環濠内や溝堆積物（森、1994b、1996b）より、また古代から中世にかけての時代ではやはり人口密度が高かったと推定される官衙的な遺跡の井戸内堆積物(森、1994c、1996c）より多産している。このため、宮沢中村遺跡から得られた多種の地表性の甲虫類の存在は、人間の集中居住に伴う人為的攪乱の影響を反映したものと考えられ、同遺跡一帯に人が多数居住し溝や井戸の周囲が汚染されていたことが推定される。そして、この結果は、汚物食と考えてよい未同定の双翅目の囲蛹が多数検出されたことによっても支持される。

また、水生昆虫にガムシやコガムシ・セマルガムシなどの食植性甲虫の産出点数が多かったことから、遺跡内に存在した溝の水深は浅く、かつ水流が停滞し溝中に水草や藻などが繁茂していたと考えられる。食植性甲虫のほかに、ゲンゴロウ・ヒメゲンゴロウ・ミズスマシなどの食肉性の水生甲虫が認められた。これらの昆虫がいずれも水田指標昆虫であることを考慮すると、宮沢中村遺跡近傍に水田が展開していた可能性も指摘される。

5．まとめ

山梨県宮沢中村遺跡の江戸時代後期ころの昆虫化石を同定・分析し、群集組成から当時の古環境を復元した。同遺跡からは計492点の昆虫化石が検出され、それらは陸生の食植性昆虫と地表性歩行虫で大半が占められた。

食植性昆虫では、ヒメコガネ・ドウガネブイブイ・サクラコガネ属などの畑作指標昆虫を多産し、これにコブマルエンマコガネやマグソコガネ・エンマムシ科などの食糞ないし食屍性昆虫を随伴した。この結果、宮沢中村遺跡一帯に人為度の高い畑作空間が展開し、人間生活に伴って周辺環境の汚染が進行していたことが伺われる。

謝辞

昆虫分析試料の採取にあたり、山梨県埋蔵文化財センターの田口明子、山梨県立考古博物館の新津健両氏をはじめ、山梨県埋蔵文化財センターの皆さんに大変お世話になった。記してお礼申しあげる。

文献

石谷正宇（1996）環境指標としてのゴミムシ類（甲虫目：オサムシ科、ホソクビゴミムシ科）に関する生態学的研究．比和科学博物館研究報告、34、1－110.

桑山　覚（1953）日本における大豆害虫の分布と害相．養賢堂、129p.

森　勇一（1994a）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元．第四紀研究、33（5）、331－349.

森　勇一（1994b）都市型昆虫の起源―愛知県朝日遺跡における昆虫群集について．―特集・考古遺跡の昆虫遺体、昆虫と自然，29（8），ニューサイエンス社、4－12.

森　勇一（1994c）石川県金沢市戸水C遺跡の井戸中から産した昆虫群集について．石川県立埋蔵文化財センター年報、14、石川県立埋蔵文化財センター、106－111.

森　勇一（1996a）稲作農耕と昆虫．季刊考古学第56号、特集・稲作の伝播と長江文明、雄山閣、59－63.

森　勇一（1996b）名古屋市西志賀遺跡より得られた昆虫群集について．西志賀遺跡―発掘調査の概要―、名古屋市見晴台考古資料館、22－27.

森　勇一（1996c）静岡県川合遺跡（八反田地区）より得られた昆虫群集について．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書（第63集）川合遺跡（八反田地区Ⅱ）、静岡県埋蔵文化財調査研究所、327－329.

森　勇一（1997）虫が語る日本史―昆虫考古学の現場から．インセクタリウム、34（1）・34（2）、18－23、10－17.

森　勇一（1999）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史．国立歴史民俗博物館研究報告第81集「歴博国際シンポジウム論文特集号」、311－342.

日本応用動物昆虫学会編（1987）農林有害動物・昆虫名鑑．日本植物防疫協会、379p.

湯浅啓温・河田　黨（1952）予察防除・農作害虫新説．朝倉書店、491p.

表１．宮沢中村遺跡から産出した昆虫化石

生態		和名	学名	試料1	試料2	試料3	試料4	試料5	試料6	試料7	計
水生	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae							E2. A6	8
		ゲンゴロウ	*Cybister japonicus* Sharp							E1. A1	2
		ヒメゲンゴロウ	*Rhanus pulverosus*（Stephens）					E1			1
		ミズスマシ	*Gyrinus japonicus* Sharp							E1. P1	2
	食植性	セマルガムシ	*Coelostoma stultum*（Walker）							P1	1
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky	E1	E3		E9. P1	E13. P3. A2		P1. E2	35
		コガムシ	*Hydrochara affinis*（Sharp）							P2	2
地表性	食糞・食屍性	センチコガネ	*Geotrupes laevistriatus* Motschulsky							E1	1
		エンマコガネ属	*Onthophagus* sp.							P1. L9. E6	16
		コブマルエンマコガネ	*Onthophagus atrippennis* Waterhouse	E4	E2					E18. P13. H5	42
		クロマルエンマコガネ	*Onthophagus ater* Waterhouse							P2	2
		マグソコガネ属	*Aphodius* sp.	P1						P1	2
		コマグソコガネ	*Aphodius pusillus*（Herbst）							E1	1
		マグソコガネ	*Aphodius rectus*（Motschulsky）							H2. P3. E1	6
		エンマムシ科	Histeridae		E2					E5. P3	10
		シデムシ科	Silphidae	E1						E1	2
	食肉・雑食性	オサムシ科	Carabidae		E2		A1			H8. P7. E14. T3. A6. M1	42
		アオゴミムシ属	*Chlaenius* sp.			P1				E4. P8	13
		アトボシアオゴミムシ	*Chlaenius naeviger* Morawitz							E3	3
		スジアオゴミムシ	*Haplochlaenius costiger*（Chaudoir）							E2	2
		セアカヒラタゴミムシ	*Dolichus halensis*（Schaller）		E1	E2		E3		E4	10
		ナガゴミムシ属	*Pterostichus* sp.						P1		1
		ゴモクムシ亜科	Harpalinae							H1	1
		ハネカクシ科	Staphylinidae					E1. P2		P3. E1. A.	10
陸生	食植性	コガネムシ科	Scarabaeidae							H1. E1. L2	4
		スジコガネ	*Mimela testaceipes* Motschulsky							E2. T1	3
		コガネムシ	*Mimela splendens* Gyllenhal			E2				E2. A1	5
		サクラコガネ属	*Anomala* sp.			E3				S1. P5. E6. T2. A1. L10	28
		ドウガネブイブイ	*Anomala cuprea* Hope		E4. P1. A5	E6				E7. T3. A6. L5	37
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky			E7				H3. S2. P11. E19. T1. A5. L10	58
		マメコガネ	*Popillia japonica* Newmann							H1. P1. L3	5
		カナブン	*Rhomborrhina japonica* Hope							E3	3
		コアオハナムグリ	*Oxycetonia jucunda*（Faldermann）							E7. P3.	10
		シロテンハナムグリ	*Protaetia orientalis*（Gory et Perchelon）					L1		P3. E2	6
		コメツキムシ科	Elateridae							P8. E4	12
		タマムシ	*Chrysochroa fulgidissima* Schonherr			E2					2
		サビキコリ	*Agrypnus binodulus* Motschulsky							P5	5
		ハムシ科	Chrysomelidae		E1					E9. T1. L1	12
		ゾウムシ科	Curculionodae							E8. P2	10
その他	その他	不明甲虫	Coleptera		P2					P1. E1. T1. A2. L1. O9	17
		カメムシ目	Hemiptera							P1	1
		アリ科	Formicidae							H5	5
		双翅目	Diptera			C5	C2	C3	C5	C39	54
		総計		7	23	28	13	29	6	386	492

検出部位凡例　H（Head）：頭部　An（Antenna）：触角　M（Mandible）：大腮　S（Scutellum）：小楯板　P（Pronotum）：前胸背板　C（Chrysalis）：囲蛹　E（Elytron）：鞘翅
T（Thorax）：胸部　A（Abdomen）：腹部　L（Leg）腿脛節　O（Others）：その他

第２節　植物遺存体

遺跡から出土した植物遺存体について㈱パレオ・ラボの吉川氏に鑑定と考察を依頼した。その成果報告をいただいたが、紙面の都合上、一部割愛して、ここに掲載した。

宮沢中村遺跡より出土した大型植物化石

吉　川　純　子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

宮沢中村遺跡は甲西バイパス建設に伴う遺跡で、大師東丹保遺跡に隣接する。大型植物化石の出土した時代は６面が中世の平安時代末期から鎌倉時代初期、５面が中世の鎌倉時代から室町時代、３面が江戸時代中期から末期、２面が江戸時代末期と推定されている。試料は現地にて取り上げられたものと、土壌試料を水洗し、種子果実と思われるものを選別した試料であった。同定した結果は分類群別、出土部位別に個数を数え、表１から表３に示されている。

２．大型植物化石の同定結果及び若干の考察

ａ．中世

中世の試料を同定した結果を表１に示した。５面からはモモのみ，６面からオニグルミ、モモ、ウメ、アンズを出土した。出土した種類はすべて食用とされるものである。こうしたことから周辺で栽培されていたか、あるいはそれらが水流などで運搬堆積したと考えられる。

表１．宮沢中村遺跡の中世の大型植物化石一覧表

分類群	面	5 E10	6 E14	6 E17	6 E18	6 E19	6 28
オニグルミ	内果皮半分						1
モモ	核完形	1				1	1
	完形風化			1	1		
	半分		1				
ウメ	核完形風化						1
アンズ	核破片			1			

ｂ．江戸時代中期から末期

江戸中期から末期の同定結果を表2に示した。特に表示のない番号は溝、井は井戸である。

溝からは食用とされるモモ、アンズ、イネ、ソバ、カボチャ仲間のほか、針葉樹のスギ、クロマツ、アカマツも出土している。これらは食用としたものや、周囲に植栽あるいは生育していたものが堆積したと考えられる。草本では溝の中や周囲に生育していたと推定されるツユクサ、ヤナギタデ近似種、ミゾソバ、ハナタデ近似種、イヌコウジュ属を出土した。

井戸は、溝よりも木本、草本ともに種類が多く、個数も比較的多い。特にスギの種子、クワ属、ゴボウ、ソバ、ヒョウタンは多く、スギ、クワ属は井戸付近に生育していたことが推測される。また、ヒョウタンは井戸に沈められることが多いようであるが、ここで出土したものは種子であり、しかも種子の下端が欠落しているものが多い。ヒョウタンの種子は果実の中では下端が果実の中央を向いて円心状に並んでおり、口の部分から棒を差し込んで中心を削ると多数の種子がこのような状態になる。ほかにも栽培種としてイネ、キビ、カボチャ仲間、メロン仲間、トウガラシ近似種を出土している。これらはおそらく井戸放棄後にゴミ穴として利用していたのではないかと考えられる。一方、ホタルイ属、ミゾソバ、キツネノボタン、ノミノツヅリ近似種といった水田雑草が少しずつ出土する。これらは井戸の周囲に生育していたとも考えられるが、井戸を掘ったとき、または放棄後に井

戸壁の堆積層の崩壊により二次的に供給された可能性も否定できない。なお、ここでは２号井戸、３号井戸からの出土は種類、個数ともに多く、６号、７号井戸は少ない。但し、これがすべて水洗した試料なのか、現地取り上げのみであったかは不明であるため、その違いから考察を加えることができなかった。

桶からは木本のオニグルミを、土坑からはサクラ属サクラ節を出土した。そのほかの試料からは木本のアカマツ、スギ、オニグルミ、クヌギまたはアベマキ、フジ属、草本のキビ、ヒユ属、ナデシコ科、ナス属を出土した。

ｃ．江戸時代末期

江戸時代末期の同定結果を表3に示した。番号のみは溝、井は井戸、棺は人骨木棺下である。

江戸時代末期の溝からはイチョウ、モモ、ウメ、アンズ、カキノキ、クリ、ヒョウタン、カボチャ仲間、メロン仲間といった食用にされるものやカヤ、アカマツ、スギ、オニグルミ、クヌギまたはアベマキなど周囲に植栽あるいは生育していたと推定される種類が多い。

井戸からはスギ、クワ属のほか、エノキグサ、ヒユ、スベリヒユといった乾燥地に生育する雑草が出土しており、個数も少ないため井戸の開口部からの堆積と推定される。

棺下から出土した、アカマツ、スギ、モモは特に棺に由来するとは思われず、水流などによる堆積か、棺の下の堆積層に含まれていたものと考えられる。

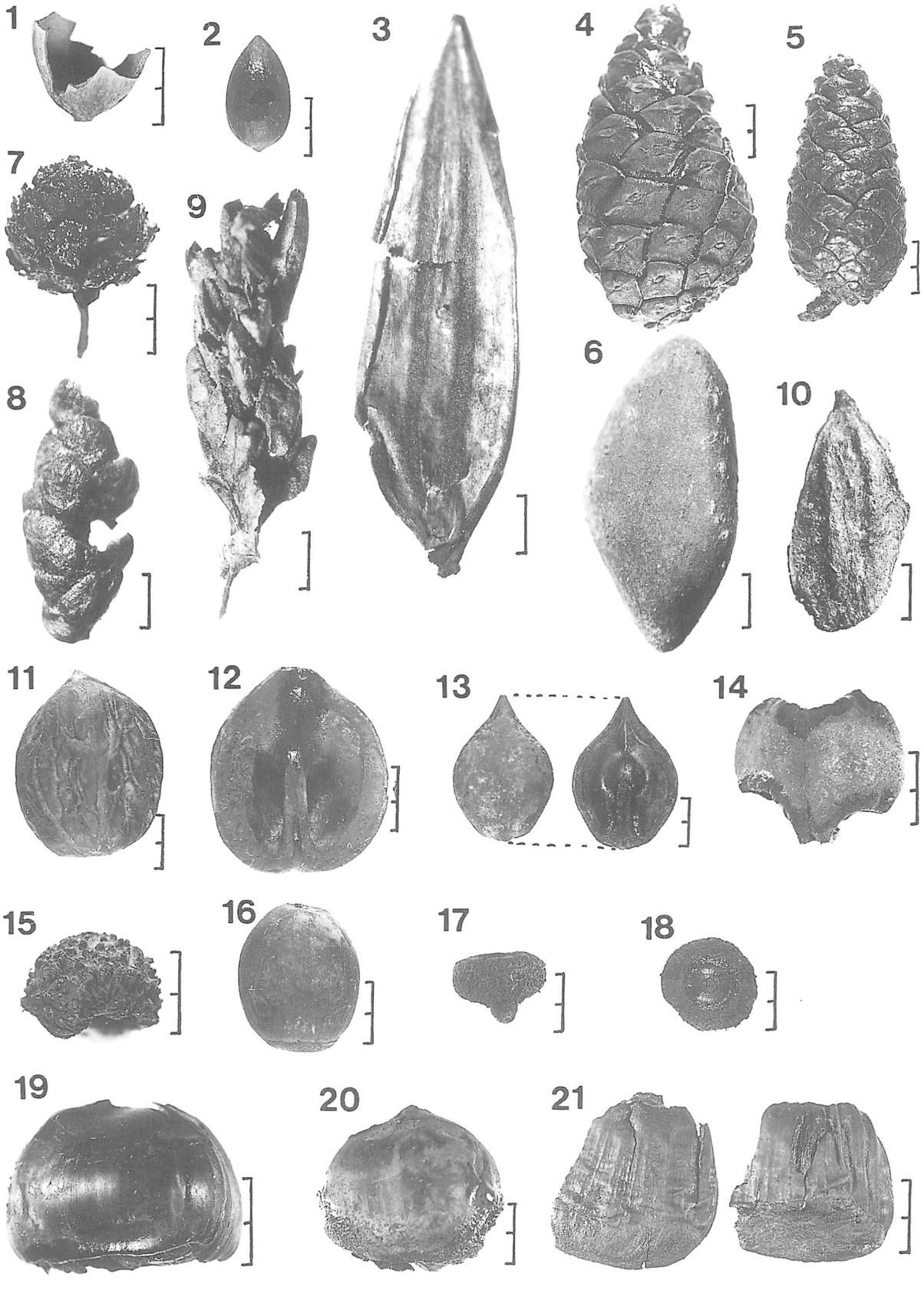
そのほかの試料からは木本のスギ、オニグルミ、クリ、エノキ、クワ属、モモ、ウメ、アンズ、サンショウ、草本のウキヤガラ、ヒユ属、ハナタデ近似種、ヒョウタン、カボチャ仲間、メロン仲間、ナス属、ゴボウを出土した。

表２．宮沢中村遺跡の江戸中期から末期の大型植物化石一覧表（Ｂは食痕のあるものを示す）

分類群	３面	2	2底	4	14	15	16	18	20	2井	3井	6井	7井	4桶	1坑	C8	ナシ
木　本																	
カヤ	種子完形							1			6						
	葉				2					2							
クロマツ	球果					2											
アカマツ	球果				5												
	種鱗																2
マツ属	種子				20					23							
モミ属	葉									1							
スギ	果実序									6							
	風化果実序		2		4				3								
	種子				50					223	12					60	
	雄花序									23						1	
	葉									19						8	
	小枝		4							5						1	
オニグルミ	内果皮完形			1													
	半分							B2						1			
	半分割跡																2
	破片			2										2			1
ヒメグルミ	内果皮完形					B1											
クヌギまたはアベマキ	殻斗風化																1
	果皮片	1															
コナラ亜属	果皮片		3														
クリ	果実完形									3							
	果皮片									1							
エノキ	内果皮									4							
クワ属	種子		2							121							
モモ	核完形	1								3	2						
	完形風化												2				
	半分									3		2					
アンズ	核完形						1				1						
サクラ属サクラ節	核									3					1		
キイチゴ属	核										1						
フジ属	芽				8											2	
サンショウ	内果皮										8						
トチノキ	幼果									1							
	果皮片									1							
ブドウ属	種子				1						2						
ツタ	種子									1							
ノブドウ	種子									2							
ウルシ属	種子				5						1						
ナツツバキ	果実									2							
クマヤナギ属	内果皮				1												
クマノミズキ	内果皮									1	2						
草　本																	
ツユクサ	種子		1							6							
イネ	穎		1							32	1						
キビ	穎									3						1	
ホタルイ属	果実										1						
エノキグサ	種子										10						
スベリヒユ	種子										1						
ヒユ属	種子									1	19					2	
ヤマゴボウ	種子									4	2						
ソバA	果実				1					121							
ソバB	果実									5							
ヤナギタデ近似種	果実		1														
オオイヌタデまたはサナエタデ	果実		2		1												
ミゾソバ	果実				1					5							
ハナタデ近似種	果実				1												
キツネノボタン	果実										1						
アカネ科	種子									4							
カタバミ属	種子										3						
ノミノツヅリ近似種	種子									1	1						
ツメクサ近似種	種子										2						
ナデシコ科A	種子										2					3	
スミレ属	種子										1						
ヒョウタン	種子完形									5							
	完形欠									113							
カボチャ仲間	種子		28							52	14	1					
メロン仲間	種子									31							
スズメウリ	種子									14							
トウガラシ近似種	種子									1	6						
ナス属A	種子		1							7						2	
ナス属B	種子		1							20	10						
イヌコウジュ属	果実		1							2	1						
シソ属	果実									10	1						
キランソウ属	果実										1						
ゴボウ	果実									155							
不明C					10					1							
不明D										6							
不明E										1							

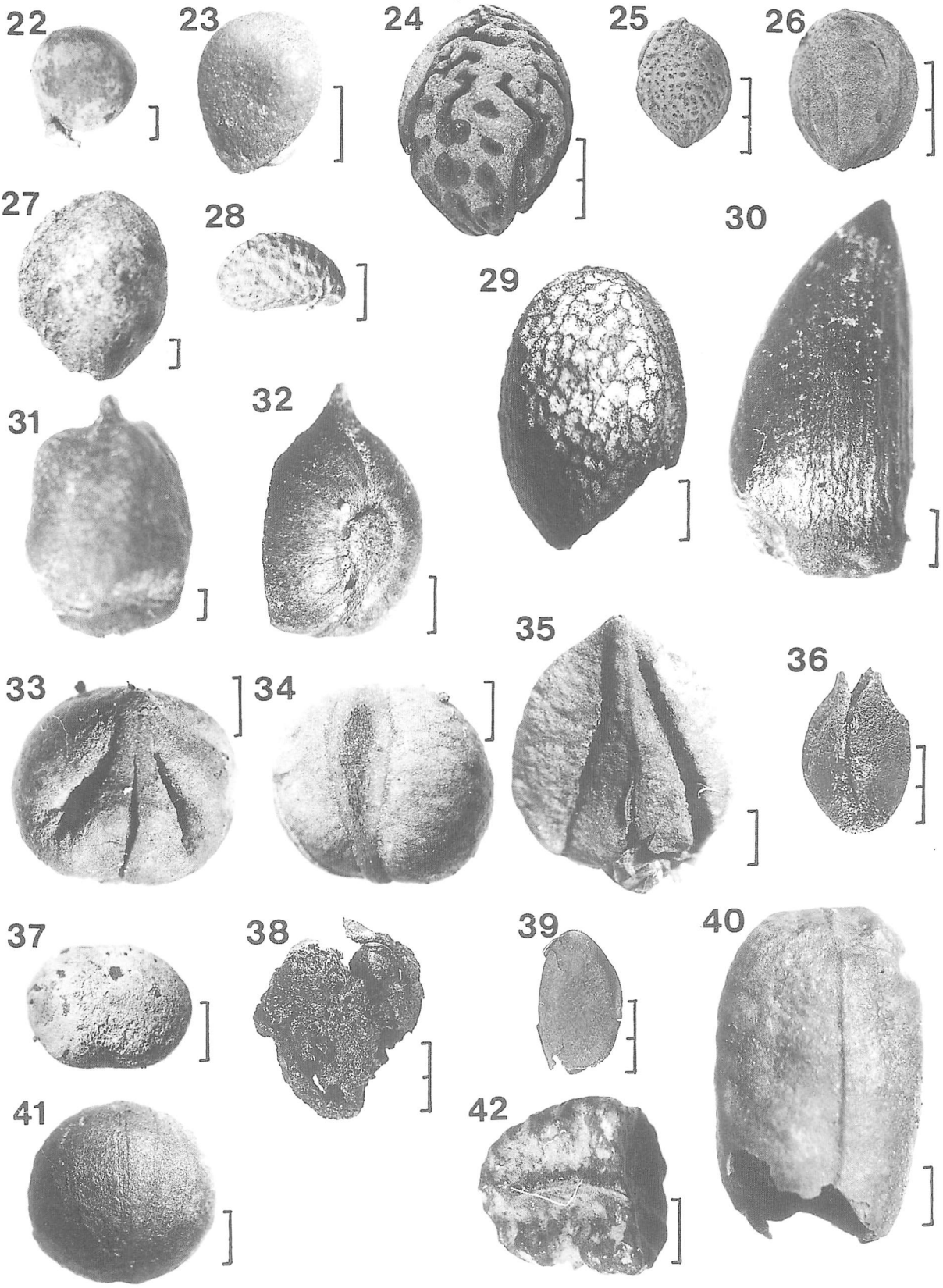
表３．宮沢中村遺跡の江戸末期の大型植物化石一覧表

分　類　群	２面	1	3	6	7	1井	２棺	D14	D３	ナシ
木　本										
イチョウ	種子片		1							
カヤ	種子完形		4	1	3					
アカマツ	球果		12				2			
スギ	果実序	1					1			3
	風化果実序		8	1						
	種子					26		38		
	葉					1				
	小枝							3		
オニグルミ	内果皮完形		1							1
	完形風化			1						
	半分		1		1					1
	半分風化			2	2					2
	半分炭化				1					
	半分割跡	2	1							1
	破片									5
ヒメグルミ	半分			2						
クヌギまたはアベマキ	果実完形		1		1					
	果皮片	1			13					
	幼果				1					
コナラ亜属	果皮片	4			14					
クリ	果実完形	1								
	果皮片	3								2
エノキ	内果皮							4		
クワ属	種子					1		1		
モモ	核完形	1					2			
	半分	2					1			1
ウメ	核完形	4	1	2						2
	完形食痕	3								
	破片	11								
アンズ	核完形			6						2
サンショウ	内果皮							2		
カキノキ	種子完形	2								
	半分	5	4							
草　本										
キビ	穎					1				
ウキヤガラ	果実							1		
エノキグサ	種子					1				
スベリヒユ	種子					2				
ヒユ属	種子					5		13		
ヤマゴボウ	種子					1				
シロザ近似種	種子					1				
ハナタデ近似種	果実							1		
キンポウゲ属	果実					1				
アカネ科	種子					2				
ミドリハコベ近似種	種子					1				
ナデシコ科A	種子					2				
ヒョウタン	種子完形							1		
	完形欠			1						
カボチャ仲間	種子	1							13	
メロン仲間	種子	7						1		
ナス属A	種子					1		2		
ナス属B	種子							1		
ゴボウ	果実							1		
不明	茎	1			2					



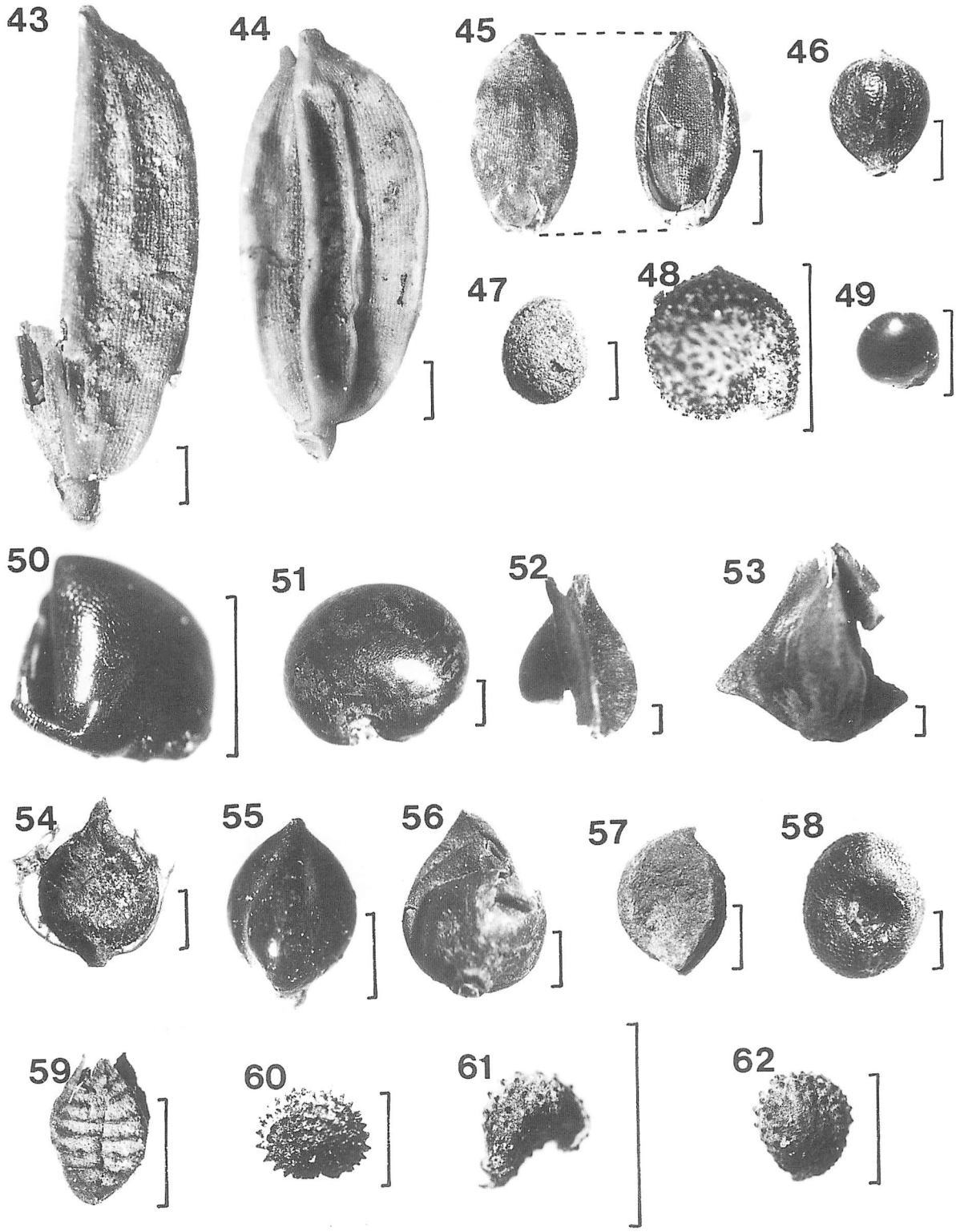
図版１．宮沢中村遺跡の大型植物化石（スケールは１㎝、３、６、８、９、10は１㎜）

１．イチョウ、種子破片(10, 2 面 3 溝) ２．カヤ、種子(14, 2 面 6 溝) ３．カヤ、葉(19, 3 面14溝) ４．クロマツ、球果(21,15溝) ５．アカマツ、球果(60, 3 面 2 号井戸) ６．マツ属、種子(19, 3 面14溝) ７．スギ、果実序(35, 3 面 2 号井戸) ８．スギ、雄花序(19, 3 面14溝) ９．スギ、小枝(９, 2 号溝底) 10. スギ、種子(37, 3 面 2 号井戸) 11. オニグルミ、内果皮(60, 3 面 2 号井戸) 12. オニグルミ、内果皮半分割跡(48, 2 面) 13. ヒメグルミ、内果皮半分(14, 2 面 6 溝) 14. ヒメグルミ、完形食痕(23, 3 面15溝) 15. クヌギまたはアベマキ、殻斗磨滅(52, 3 面) 16. クヌギまたはアベマキ、果実(18, 7 号溝) 17.18. クヌギまたはアベマキ、幼果(18, 7 号溝) 19.20.21. クリ、果実(20, 3 面14溝, ７, 2 面 1 溝, 32, 3 面 2 号井戸)



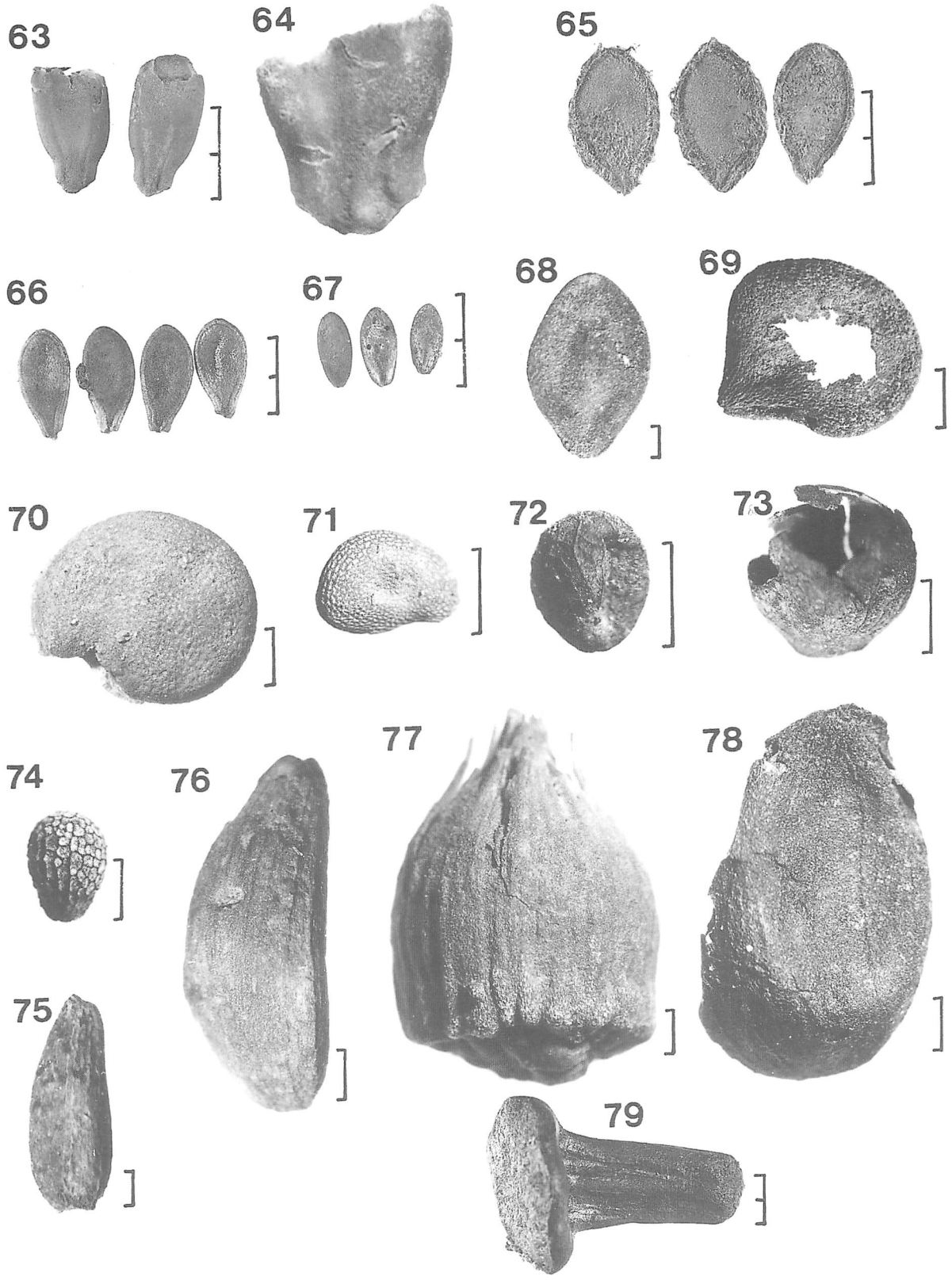
図版２．宮沢中村遺跡の大型植物化石（スケールは１㎜、24、25、26、36、38、39は１㎝）

22．エノキ、内果皮(28，3面２号井戸)　23．クワ属、種子(27，2面１号井戸)　24．モモ、核(56，6面E－19)　25．ウメ、核(60，3面２号井戸)　26．アンズ、核(47，2面)　27．サクラ属サクラ節、核(28，3面２号井戸)　28．キイチゴ属、核(37，3面３号井戸)　29．サンショウ、内果皮(37，3面３号井戸)　30．フジ属、芽(19，3面14溝)　31．トチノキ、幼果(28，3面２号井戸)　32．ブドウ属、種子(19，3面14溝)　33．34．ノブドウ、種子(28，3面２号井戸)　35．ツタ、種子(28，3面２号井戸)　36．ナツツバキ、果実(34，3面２号井戸)　37．ウルシ属、種子(37，3面３号井戸)　38．カキノキ、果実(60，3面２号井戸)　39．カキノキ、種子(５，2面１溝)　40．クマヤナギ属、内果皮(19，3面14溝)　41．クマノミズキ、内果皮(37，3面３号井戸)　42．ツユクサ、種子(９，2号溝底)



図版３．宮沢中村遺跡の大型植物化石（スケールは１㎜）

43. 44.イネ、穎（９，２号溝底,28, 3 面 2 号井戸）　45.キビ、穎（27, 2 面 1 号井戸）　46.ホタルイ属、果実（37, 3 面 3 号井戸）　47.エノキグサ、種子（37, 3 面 3 号井戸）　48.スベリヒユ、種子（37, 3 面 3 号井戸）　49.50.ヒユ属、種子（37, 3 面 3 号井戸）　51.ヤマゴボウ、種子（27, 2 面 1 号井戸）　52.ソバA、果実（28, 3 面 2 号井戸）　53.ソバB、果実（28, 3 面 2 号井戸）　54. オオイヌタデまたはサナエタデ、果実（９, 2 号溝底）　55.ハナタデ近似種、果実（19, 3 面14溝）　56.ミゾソバ、果実（19, 3 面14溝）　57.キツネノボタン、果実（37, 3 面 3 号井戸）　58.アカネ科、種子（27, 2 面 1 号井戸）　59.カタバミ属、種子（37, 3 面 3 号井戸）　60.ミドリハコベ近似種、種子（27, 2 面 1 号井戸）　61.ツメクサ近似種、種子（37, 3 面 3 号井戸）　62.ナデシコ科A、種子（37, 3 面 3 号井戸）



図版４．宮沢中村遺跡の大型植物化石（スケールは１㎜、63、65、66、67、79は１㎝）

63.64.ヒョウタン、種子（36, 3 面 2 号井戸,28, 3 面 2 号井戸）65.66.カボチャ、種子（31, 3 面 2 号井戸,49, 2 面D－3）67.メロン仲間、種子（６, 2 面 1 溝）68.スズメウリ、種子（28, 3 面 2 号井戸）69.トウガラシ近似種、種子（37, 3 面 3 号井戸）70.ナス属A、種子（９, 2 号溝底）71.ナス属B、種子（37, 3 面 3 号井戸）72.イヌコウジュ属、果実（37, 3 面 3 号井戸）73.シソ属、果実（37, 3 面 3 号井戸）74.キランソウ属、果実（37, 3 面 3 号井戸）75.76.ゴボウ、果実（28, 3 面 2 号井戸）77.不明C（19, 3 面14溝）78.不明D（28, 3 面 2 号井戸）79.不明茎（60, 3 面 2 号井戸）

第３節　モモ核（挿図５・６、計測表）

宮沢中村遺跡からは多くのモモ核が出土したが、完形あるいはそれに近い計測可能なものは101個である。このうち86個が江戸時代（２面、３面）、15個が鎌倉を中心とした時代（５面）である。まず江戸時代の遺構から出土した個数についてみると、表のとおり、３溝22個、７溝21個、20溝12個、６溝11個、18溝５個等となっており、やはり溝からの出土が多く、建物では２号から１点が出土した程度である。この他に遺構には伴わず各グリッドからの出土もみられる。３溝は水溜め部分から始まり参道にそって長く延びていることから出土量も多いことになるが、７号溝と20号溝とは庫裏の裏手にあることから、日常生活における残滓ということが考えられる。

モモ核については、弥生時代以降近世にいたるまで遺跡から出土するが、特に近年では低地の調査が進んでいることから、事例が増加しつつある。山梨県内での実態については1999年１月時点では35遺跡例が確認できている（註１）。モモは弥生時代に米とともに大陸から伝来したものとされており、その用途としては食用以外に桃の霊力にかかわって祭祀に用いられた可能性も高い。実際に古代から中世の遺跡では、集落内を流れる溝や川から斎串や馬の歯などとともに出土する例も多い。県内35遺跡のうち、溝・川・水田など水とかかわる地点から出土した例は18例と半数を数える。他には住居例は14遺跡があるが、特にカマド内からの事例も多く、カマドの浄めといった祭りに用いられたことも考えられる。

このようなモモ核について、大きさの比較も行なっているが（註２）これに宮沢中村出土の101個の平均を加えると次のようになる。

	（長さ）	（幅）	（厚さ） 単位cm
弥生中期（大師東丹保遺跡３面）	2.58	2.05	1.51
弥生後期（大師東丹保遺跡２面）	2.65	2.33	1.71
弥生後期（身洗沢遺跡）	2.46	2.07	1.65
奈良・平安時代（地耕免遺跡）	2.36	1.88	1.50
平安時代（中川田遺跡）	2.66	1.98	1.39
戦国時代（二本柳遺跡）	2.30	1.75	1.36
戦国時代（大輪寺東遺跡）	2.55	1.89	1.44
鎌倉時代（宮沢中村遺跡）	2.64	1.97	1.47
江戸時代後期（宮沢中村遺跡）	2.74	2.09	1.57
現　　在	3.71	2.99	2.10

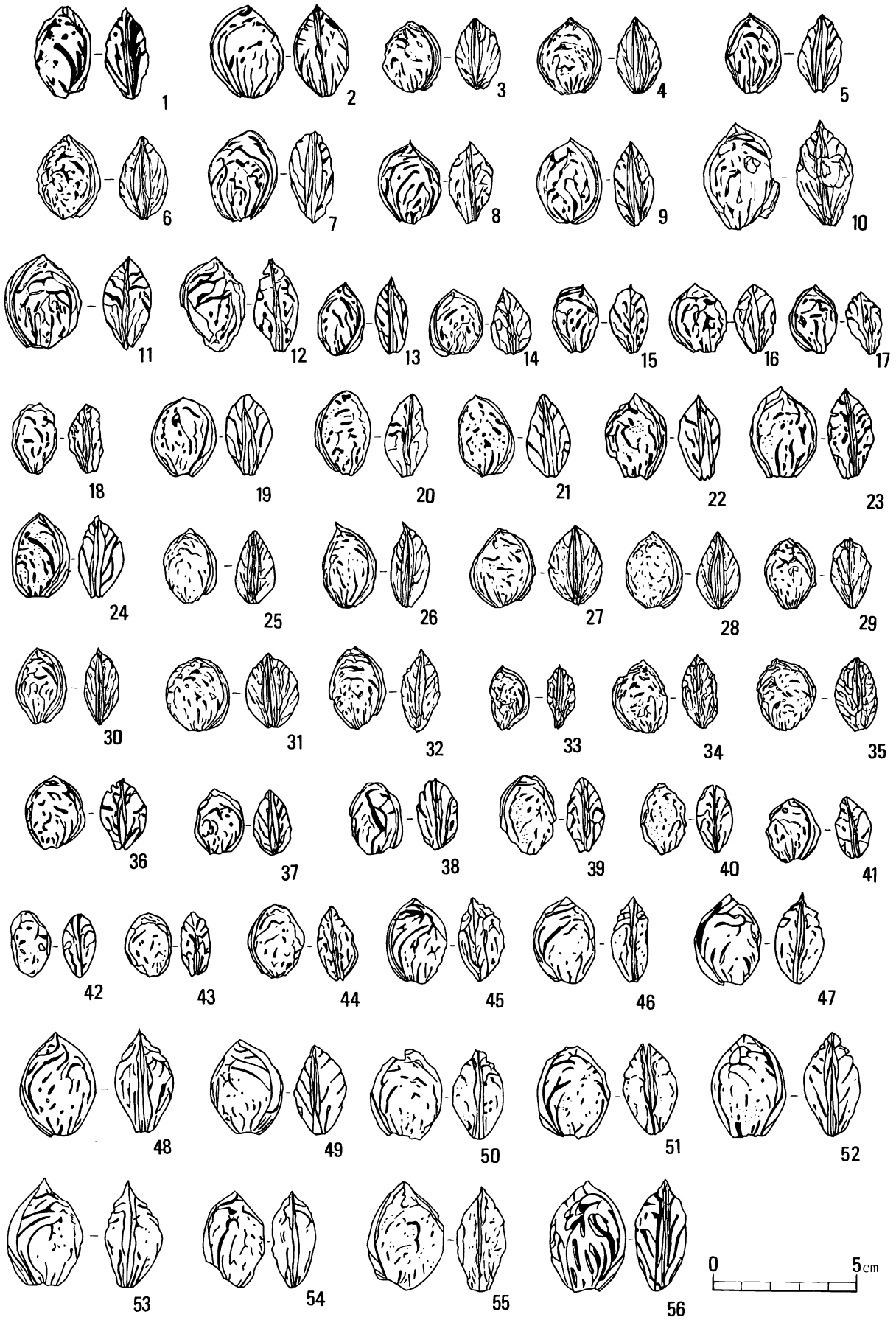
この一覧によると、江戸時代のものは長さ、幅ともに過去最大の大きさとなっていることがわかる。これは平均の数値であるが、個体別の最大のものでは長さ４㎝、幅2.7㎝というのがもいくつかみられるように、江戸時代になると中世以前にくらべ大形化している。これは食用としての商品化が進められたことに起因するものではなかろうか。江戸時代にあってもモモを用いた祭祀が行なわれていたことはあろうが、中世以前と比較して食用としての比率が相当高まり品種改良も行なわれた結果と考えたい。

なお、鎌倉時代とした５面出土の15個については、平均値からみても大きい部類に入っており、戦国時代の例よりも高い数値を示している。特に長さからみると弥生後期（大師東丹保遺跡）とほぼ同じであるが、幅・厚さともに弥生よりもスマートである。

なお、弥生後期のモモ核の厚さは、宮沢中村の江戸期のものより高い数値を示していることは興味深い。丸味があり球形に近い形状が、この弥生後期のモモから窺えるが、平安以降は縦長になっていくという傾向がみられるからである。伝来時の品種や後世への変遷を考える上での検討課題でもあろう。

最後に、江戸期におけるモモ栽培の在り方も今後の課題としておきたい。この宮沢一帯は低地であることから本来は果樹栽培には適していないはずである。周辺に適地を求めるとすれば、甲西西部や櫛形町域の扇状地方面であろう。弥生以降中世まで、この付近の遺跡からモモ核が出土することを考えると、近くにモモ栽培地があったとみられるが、これは祭祀用とすると小規模なもので十分であったろう。しかし江戸後期の大形化については、食用商品としてのより完成された栽培地が必要となろう。当時の町方、村方を含め栽培と流通の問題も残されている。

註１　新津健「遺跡から出土するモモ核について－山梨県内での事例から－」『山梨県考古学論集、』山梨県考古学協会 1999
註２　註１文献に同じ


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0
5cm

挿図５　モモ核①（1 / 2）

挿図６　モモ核②・クルミ（1/2）

モモ核計測表

図	番号	出土位置	面	長	幅	厚
挿図5	1	2建	2	3.3	2.0	1.6
	2	1溝	〃	3.3	2.0	2.0
	3	3溝	〃	2.5	2.1	1.6
	4	〃		2.8	2.3	1.6
	5	〃		2.8	2.0	1.5
	6	〃		3.0	2.3	1.7
	7	〃		3.3	2.4	1.6
	8	〃		3.0	2.2	1.5
	9	〃		3.1	2.3	1.4
	10	〃		3.8	2.7	2.0
	11	〃		3.4	2.7	1.7
	12	〃		3.4	2.3	1.6
	13	〃		2.6	1.7	1.2
	14	〃		2.4	2.0	1.4
	15	〃		2.5	1.7	1.4
	16	〃		2.5	2.0	1.5
	17	〃		2.5	1.7	1.3
	18	〃		2.5	1.6	(1.9)
	19	〃		2.9	2.3	1.7
	20	〃		3.0	2.0	1.6
	21	〃		2.9	2.0	1.6
	22	〃		3.1	2.2	1.5
	23	〃		3.2	2.4	1.7
	24	〃		3.0	2.1	1.6
	25	6溝	2	2.7	1.9	1.4
	26	〃		3.1	1.9	1.4
	27	〃		2.8	2.4	1.9
	28	〃		2.8	2.0	1.5
挿図5	29	6溝		2.5	1.8	1.5
	30	〃		2.7	1.8	1.2
	31	〃		2.6	2.3	1.9
	32	〃		3.0	2.1	1.4
	33	〃		2.3	1.5	1.0
	34	〃		2.6	2.0	1.3
	35	〃		2.5	2.1	1.5
	36	7溝	2	2.6	2.1	1.7
	37	〃		2.3	1.7	1.4
	38	〃		2.5	1.9	1.4
	39	〃		2.8	2.0	1.4
	40	〃		2.6	1.6	1.3
	41	〃		2.3	2.0	1.3
	42	〃		2.3	1.4	1.2
	43	〃		2.3	1.6	1.1
	44	〃		2.7	2.0	1.5
	45	〃	2	3.1	2.1	1.6
	46	〃		3.1	2.2	1.3
	47	〃		3.3	2.4	1.7
	48	〃		3.8	2.7	2.1
	49	〃		3.4	2.6	1.9
	50	〃		(3.4)	2.6	1.8
	51	〃		3.3	2.6	1.9
	52	〃		3.6	2.7	2.0
	53	〃		3.9	2.7	2.1
	54	〃		3.5	2.2	1.6
	55	〃		4.0	2.7	1.8
	56	〃		4.0	2.7	1.8

モモ核・クルミ計測表

図	番号	出土位置	面	長	幅	厚
挿図6	1	8溝	2	2.6	1.9	1.5
	2	〃		2.5	1.7	(1.2)
	3	12溝	2	2.6	2.1	1.5
	4	18溝	3	2.5	1.9	1.5
	5	〃		2.9	2.6	1.7
	6	〃		2.8	2.3	1.8
	7	〃		3.2	2.7	1.9
	8	〃		3.1	2.7	2.1
	9	20溝	3	2.0	1.7	1.4
	10	〃		2.3	1.7	1.3
	11	〃		2.1	1.8	1.8
	12	〃		2.5	2.0	(1.3)
	13	〃		2.6	1.9	1.7
	14	〃		2.8	2.2	1.7
	15	〃		2.8	2.1	1.6
	16	〃		2.6	2.1	1.3
	17	〃		2.5	1.9	1.6
	18	〃		3.0	2.2	1.8
	19	〃		2.0	(2.0)	1.6
	20	〃		2.2	1.9	1.4
	21		5	2.2	1.6	1.2
	22		〃	2.2	1.9	1.5
	23		〃	2.6	2.0	1.6
	24		〃	2.2	1.9	(1.5)
	25		〃	2.7	2.2	1.7
	26		〃	2.6	1.9	1.4
	27		〃	2.5	2.0	1.4
	28		〃	2.4	1.9	1.4
挿図6	29		〃	2.4	2.0	(1.8)
	30		〃	(2.5)	(2.2)	1.6
	31		〃	2.4	2.1	1.8
	32		〃	2.5	2.0	1.5
	33		〃	2.4	1.6	1.3
	34		〃	2.6	(2.1)	1.5
	35		〃	2.7	2.0	1.4
	36		〃	2.8	2.1	1.5
	37		〃	3.0	2.2	1.7
	38		〃	2.4	(1.6)	1.2
	39		〃	2.5	1.7	1.3
	40		〃	2.7	(2.0)	1.4
	41		〃	2.5	1.8	1.4
	42		〃	3.0	2.3	1.7
	43		〃	2.8	2.2	1.5
	44		〃	2.6	1.9	1.4
	45		6	3.1	2.4	1.9

クルミ

図	番号	出土位置	面	長	幅	厚
挿図6	46	2建		2.6	2.3	(2.2)
	47		4	3.1	2.8	(2.6)
	48		〃	3.7	2.8	(2.8)
	49		5	2.8	2.6	(1.8)

第４節　宮沢中村遺跡出土の江戸時代人骨

京都大学霊長類研究所　茂　原　信　生

Ⅰ）はじめに

宮沢中村遺跡は山梨県中巨摩郡甲西町宮沢字東宮沢にある遺跡で、平成６年にバイパス工事にともなって山梨県埋蔵文化財センターによって発掘された。江戸時代の寺に関係した遺跡であると考えられており、時代的には江戸時代後期とされている。本報告はその際出土した人骨と獣骨に関するものである（表１）

人骨の計測はマルチン（馬場；1991）にしたがい、歯の計測方法は藤田（1949）にしたがった。

Ⅱ）出土状況

江戸時代（後期）の墓地と考えられる場所からの出土である。とくに攪乱は受けておらず、埋葬された状態で出土している。湿地から出土しており、桶が残っており、なかには脳の一部が残っていた個体もある。骨の保存状態は湿地から出土する骨に一般的にみられるように、乾燥の過程で表面が剥離したりして、さほどよくない。

Ⅲ）出土人骨の特徴（表２，３，４）

（１）１号人骨

頭蓋骨

外後頭隆起はほとんど目立たない。乳様突起は小さく内外的にも薄く女性的である。耳道上稜はほとんど発達していない。側頭骨の下顎窩に病変は見られない。下顎骨は非常にきゃしゃである。角前切痕が認められる。下顎大臼歯は生前にすべて失われており、歯槽部は退縮し、下顎体も細い。前歯部から小臼歯にかけては歯槽が確認されるので歯が植立していただろうが、いずれの歯槽も浅く、歯の植立状態は悪かったと推測される。オトガイ隆起は発達していない。

歯

上顎犬歯はかなり咬耗している。モルナー（1971）の５程度である。上顎大臼歯が残っているが歯冠には歯石が沈着し、咬合に参加していなかったことを示している。第２大臼歯，第３大臼歯の咬耗はごく少ない。したがって、これらの歯と咬合する下顎の大臼歯はかなり若い時期に脱落したものと推測され、そのために咬耗もせず、歯冠に歯石が沈着したものであろう。

下顎の犬歯の遠心部と左小臼歯の歯頸にう蝕が認められる。

四肢骨

上腕骨は非常に細くきゃしゃである。三角筋粗面はさほど目立たない。大腿骨は細くきゃしゃである。骨体上部は扁平で、いわるゆ超扁平大腿骨である。後面の粗線はやや張り出しているが発達しているとはいえない。脛骨は細く、後面の鉛直線は目立たない。栄養孔位前後径は24.6㎜、横径は16.3㎜で扁平示数は66.3で中脛脛である。中央付近の断面はヘリチカのⅣ型である。

この個体は女性であることはまちがいなく、比較的高齢の熟年程度と推測される。

（２）２号人骨

保存状態はやはり悪いが、本遺跡の中ではもっとも保存状態がよいものである。頭蓋骨、距骨を含む四肢骨片が残っている。

頭蓋骨

頭蓋骨、左・右側頭骨、後頭骨が残っている。外後頭隆起は全体として膨隆しているがイニオン部がとくに突出するようなことはない。側頭骨の乳様突起はさほど発達していない。耳道上稜の発達も悪い。頭蓋の縫合は人

字縫合のみが確認できるが全長にわたって鋸歯状が明瞭であり、さほど高齢ではないことを示している。

四肢骨

左右の上腕骨、前腕骨、大腿骨、脛骨、腓骨が残っているが、完形のものはない。上腕骨は太くはないが、三角筋粗面が非常に発達している。橈骨は骨間縁が非常に発達している。

寛骨の一部が残っているが大坐骨切痕は直角に近く女性的である。大腿骨は殿筋隆起が外側にやや張り出しており、上部が扁平である。後面の粗線はさほど発達していない。脛骨は細く、後面の鉛直線は中央付近に達している。中央付近の断面はヘリチカのV型で四角形である。腓骨は非常に細い。左距骨は内側蹲踞面が伸展している森本（1981）のC型である。他に、中足骨片などが残っている。

この人骨は女性であろう。年齢はさほど高齢ではなく、高くても壮年程度であろう。

（3）3号人骨

頭蓋骨

下顎骨がよく保存されている。左・右とも第1および第3大臼歯が生前に脱落し、第2小臼歯と第2大臼歯の間が狭くなっている。脱落してからかなり時間が経過していることを示している。オトガイ隆起はよく発達し、外側のオトガイ結節も発達しているのでオトガイ三角が明瞭である。角前切痕が認められる。下顎体はやや痩せている。

歯

下顎歯は生前に失われた左・右の第1大臼歯と第3大臼歯、ならびに左・右の中切歯以外の歯が残っている。咬耗は第1大臼歯がモルナー（1971）の4度、それ以外は象牙質の露出がさほどでもない3度、右第2小臼歯は象牙質の露出が見られない2度である。この右第2小臼歯は捻転しており舌側が近心方向を向いている。左の第2小臼歯もやや捻転している。第1大臼歯が脱落後の変化と思われる。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は右の第1大臼歯が＋5型と思われ、他は不明である。

体幹骨

椎骨が10点あまり残っている。胸椎であるが加齢変化は認められない。

この個体は女性の可能性が高く、年齢は壮年から熟年程度であろう。

（4）4号人骨

丸桶に入っていた骨片が1点出土している。右の側頭骨錐体部である。さほど頑丈ではなく内耳孔も小さい。若い個体のものである可能性が高い。

（5）5号人骨

側頭骨の乳様突起に近い部分がわずかに残っているが、保存状態は悪く、詳細は不明である。

（6）6号人骨

頭蓋骨の一部と歯ならびに四肢骨の一部が出土している。

頭蓋骨

左・右の側頭骨錐体、頭蓋冠の一部、歯が出土している。内後頭隆起に近い部分が残っており、骨はやや厚目である。

歯

上顎歯が右第1・第2・第3大臼歯と左犬歯、第2小臼歯、第3大臼歯の6本、下顎歯が右の中切歯から犬歯までと第2小臼歯、左が犬歯から第1大臼歯までの8本、計14本が残っている。上顎第1大臼歯は歯頚部から歯根に達するような咬耗でモルナー（1971）の7度であるが、第2・第3大臼歯にはごく小さな象牙質の露出が見

られるだけの３度である。下顎の左第１大臼歯はさほど咬耗していないことから判断すると、右側の第１大臼歯は、原因は不明だが、なんらかの習慣的な咬耗を受けた特殊なものであろう。歯冠にう蝕はないし、エナメル質減形成もみられない。

歯の大きさは、江戸時代女性（Brace 他；1982）と同大かやや大きいが、男性のものよりは小さめである。

四肢骨

太く頑丈な左大腿骨が出土している。殿筋隆起も明瞭で、上部は非常に扁平である。上横径は36.0㎜、上矢状径は推定で20㎜程度であるから扁平示数は56で扁平大腿骨に属している。後面の粗線は下方でよく発達している。男性の大腿骨であろう。それ以外に所属不明の四肢骨が数点出土している。

本人骨は男性のものであろうが、年齢は成人という以外は不明である。

（７）７号人骨

ほぼ全身が残っているが、頭蓋骨は下顎骨をのぞいて細片化しており、顔面はほぼ完全に失われている。それに対して四肢骨は骨端をのぞいて比較的残りはよい。

頭蓋骨

外後頭隆起は普通である。左・右の側頭骨が残っている。乳様突起はさほど大きくないが耳道上稜はよく発達しており、側頭線へと連続している。外耳道に骨腫のようなものはみられない。一部の縫合には明瞭に縫合が残っている。下顎骨の筋突起はさほど大きくないが内側筋稜はよく発達している。オトガイ隆起やオトガイ結節はさほど大きくない。ただし、筋突起から続く外側結節はよく発達しており膨隆している。全体としてはどちらかといえば頑丈な下顎骨である。

歯

下顎歯は左の中切歯から犬歯まで以外の13本が残っている。第１大臼歯の近心の咬頭にごく小さな象牙質の露出が認められるが、それ以外にはなく、かなり若い個体であろう。しかし、第３大臼歯まで萌出しており、第２大臼歯との隣接面磨耗もみられるので20歳前後であろう。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は第１大臼歯が右はY５型、左は＋５型、第２大臼歯は左・右とも＋４型である。第３大臼歯はともにX４型である。前歯部の内側（舌側）に歯石の沈着がみられる。

また、左・右の第２小臼歯の歯冠中央付近に線状のエナメル質減形成がみられる。エナメル質減形成は乳歯の歯冠が形成される胎児期から永久歯の第３大臼歯が形成される15歳くらいまでの成長期に、何らかのストレス、たとえば病気や栄養不良などによって石灰化が阻害されて起るものである。この個体の線状のエナメル質減形成は、５～６歳頃に形成されたものであろう。

四肢骨

鎖骨は頑丈で腱の起始付着部はよく発達している。上腕骨は近位端が左右ともに失われている。骨の太さは普通であるが三角筋粗面はよく発達している。尺骨は頑丈であり、橈骨は普通程度である。

骨盤の残りは悪いが、大坐骨切痕部が残っており、鋭角的で男性的といえる。耳状面は高くなく、周囲に妊娠痕はみられない。大腿骨は左・右ともに近位・遠位とも失われている。後面の粗線はさほど発達しておらず、稜状にはなっていない。幅が１センチほどの鈍な高まりを見せているにすぎない。殿筋隆起はさほど目立たない。脛骨は中央付近の断面はヘリチカのⅠ型の三角形である。後面の鉛直線は森本（1981）のC型である。足根骨には、蹲踞面がみられる。内果面が前方に延長する森本（1981）のB型である。

この個体の右上腕骨は比較的保存がよいので、一部欠けている遠位部を現世の日本人の標本などを参考にして補うと最大長は推定で282ミリとなる。この値を用いて藤井（1960）の式から推定身長を求めると151.9センチとなる。この値は平本（1977）が報告している江戸時代後期の男性の平均身長156.5センチよりやや小さめである。

この個体は、さほど骨が頑丈ではないが、寛骨の形状や全体の印象では男性と考えられる。年齢は、歯の咬耗が少ないことや頭蓋に鋸歯状の縫合がみられることなどから、比較的若く、20歳前後と思われる。

（8）第2面3溝

右上腕骨遠位骨幹、左大腿骨骨幹、左脛骨遠位骨幹（？）が出土している。上腕骨は普通である。左大腿骨はやや細めである。上横径は29.4㎜、上矢状径は21.1㎜で扁平示数は71.8であり扁平ではない。中央付近の横径は25.5㎜、矢状径は23.5㎜で断面示数は92.2である。粗線の発達はあまりよくない。殿筋隆起はやや外側に膨隆している。脛骨かと思われるものは脛骨とすればやや細めである。

大腿骨の後面の上部に5ケ所の人為的切痕が認められる。いずれも上方から下方に向っている傷で、大きなもので幅20㎜、長さ10㎜程度のものである。埋葬後につけられたものではない。

Ⅳ）人骨についてのまとめ

この遺跡から出土した人骨は8体で、男性が3体、女性が3体、不明が2体である。保存状態は比較的良好であるが、湿地から出土した人骨の常として表面が剥離したり、骨端が腐食して失われたりしている。頭蓋骨が完形で出土していないので時代的な特徴は抽出できなかった。個体別では、大腿骨が扁平な個体が多くあったり、エナメル質減形成がみられたり、また大臼歯がかなり若い時期に脱落している個体もみられた。口腔環境はさほどよいとは言えなかったと考えられる。全体にさほど頑丈な集団であるとは言えない。

Ⅴ）出土哺乳動物骨の特徴

第2面の6溝から、完形のニホンジカの中足骨が出土している。近遠位端は両方とも食肉類によるものと思われる咬痕がみられる。これ以外の獣骨は見つかっていない。

これらの貴重な江戸時代人骨を観察する機会を与えてくださった山梨県埋蔵文化財センターの方々に心から感謝いたします。

参考文献

馬場悠男（1991）：人骨計測法。人類学講座別巻1、「人体計測法」、雄山閣、江藤盛治編集；159－358。

Brace,C.L.&M.Nagai（1982）：Japanese Tooth Size：Past and Present. Amer. J. Phys. Anthrop.,59；339－411.

蛯名忠次郎（1951）：日本人前腕骨の人類学的研究　其一　橈骨。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績5；1－28

福田佐（1961）：関東地方人腓骨の人類学的研究（計測編）。東京慈恵会医科大学雑誌76；1－21

權田和良（1959）：歯の大きさの性差について。人類学雑誌、43（1）；151－163

藤井明（1960）：四肢長骨の長さと身長との関係に就て。順天堂体育学部紀要、3；49－61

藤田恒太郎（1949）：歯の計測基準について。人類学雑誌、61；1－6。

平本嘉助（1977）：日本人身長の時代的変化。自然科学と博物館、44（4）；169－172。

Molnar,S.（1971）：Human Tooth Wear…Tooth Function and Cultural Variability. Amer.J.Phys.Anthrop.,34；175～190

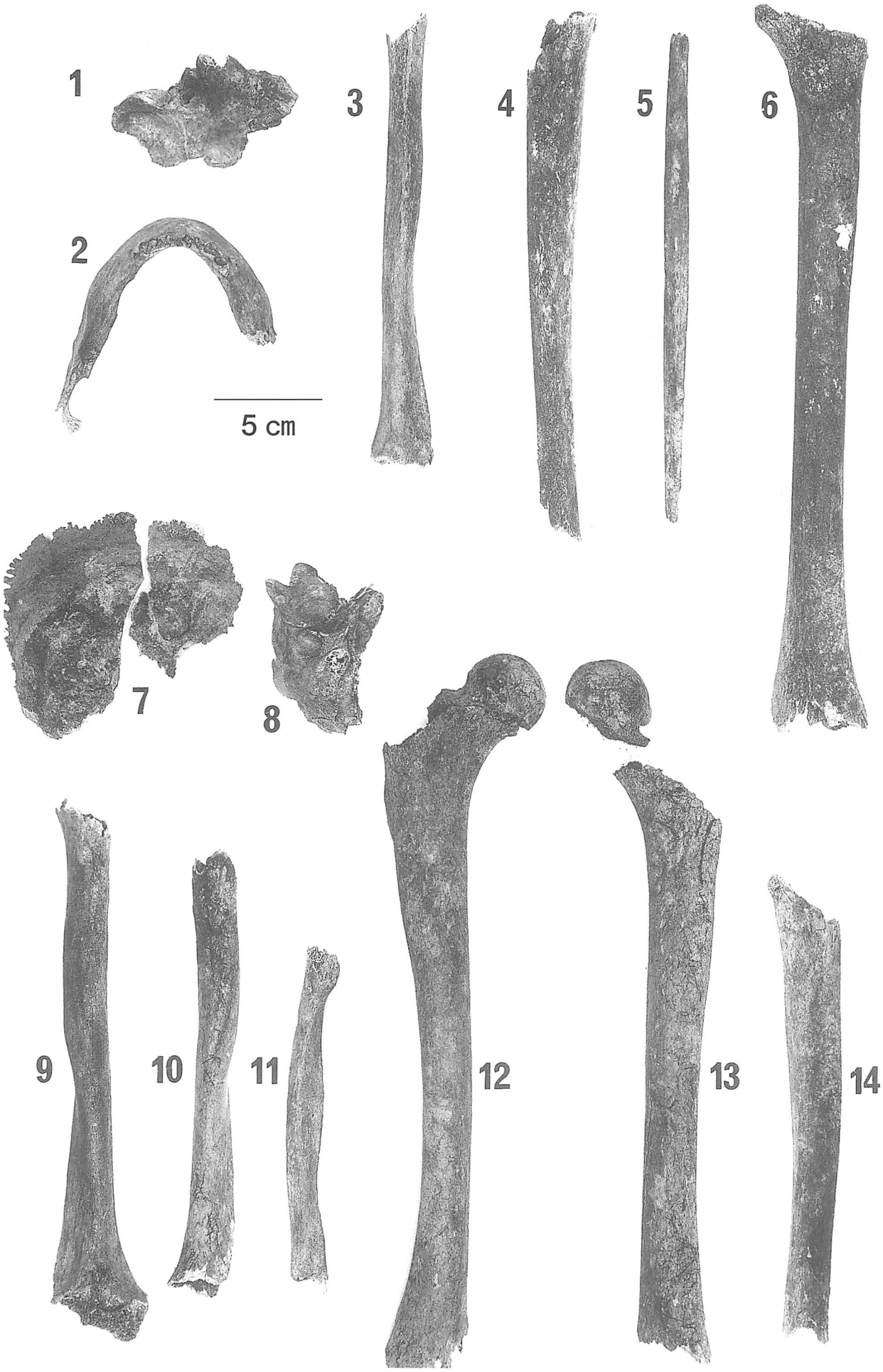
森本岩太郎（1981）：日本古人骨の形態学的変異　―扁平脛骨と蹲踞面―。人類学講座5「日本人Ⅰ」、雄山閣；157－188

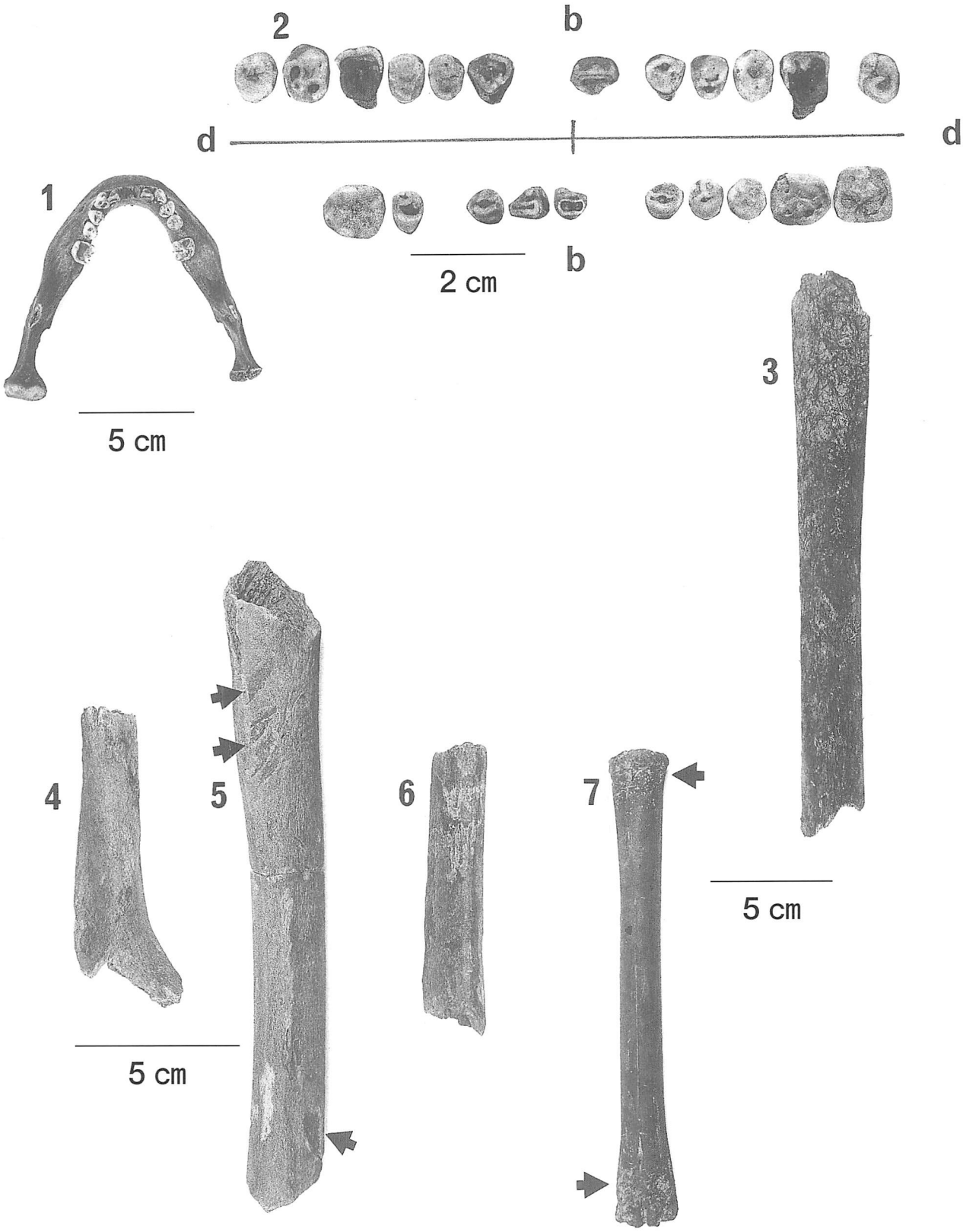
西原四良（1953）：関東地方人上腕骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集9；1－63

大場信次（1950）：関東地方人大腿骨の人類学的研究（計測編）。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集3；1－44

鈴木尚（1967）：頭骨。「増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体」鈴木尚他編、東京大学出版会；121－274

鈴木信夫（1961）：関東地方人脛骨の人類学的研究（計測編）。東京慈恵会医科大学雑誌75；2638－2678


1
2
3
4
5
6
5 cm
7
8
9
10
11
12
13
14


2
b
d
d
1
b
2 cm
5 cm
3
4
5
6
7
5 cm
5 cm

写真説明

写真１：宮沢中村遺跡出土の人骨。１～６は１号人骨、７～14は２号人骨。

１；右側頭骨、２；下顎骨上面、３；左上腕骨、４；右脛骨、５；腓骨、６；左大腿骨、７；後頭骨、８；右側頭骨下面、９；右上腕骨、10；左上腕骨、11；右橈骨、12；右大腿骨、13；左大腿骨、14；左脛骨

写真２：宮沢中村遺跡出土の人骨および獣骨。１は３号人骨、２～３は６号人骨、４～６は３溝出土人骨、７は６溝出土獣骨

１；下顎骨上面、２；永久歯咬合面、b：頬側、d：遠心、３；右大腿骨、４；上腕骨遠位部、５；大腿骨後面、矢印は切痕である。６；脛骨、７；ニホンジカ中手骨、両端に咬痕がみられる。

表1：宮沢中村遺跡出土の江戸時代後期人骨の概要

	性別	年　齢	特　　徴
１号	女性	熟年	下顎大臼歯脱落、上顎に歯石、虫歯あり、超扁平大腿骨
２号	女性	壮年以下	総合明瞭、蹲踞面あり
３号	女性？	壮年～熟年	下顎骨と椎骨のみ、下顎小臼歯が捻転
４号	不明	若い個体	側頭骨錐体部のみ
５号	不明	不明	頭蓋冠＋乳様突起部のみ
６号	男性	成人	上顎第1大臼歯が特殊な磨耗、頑丈な扁平大腿骨
７号	男性	20歳前後	エナメル質減形成、蹲踞面、推定身長約152センチ
第２面３溝	男性	不明	四肢骨のみの出土、大腿骨後面に切痕がある

表2：宮沢中村遺跡発掘の人骨の歯の計測値（単位㎜）

上顎歯	性別	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3		備考
		m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	
宮沢中村遺跡	６号		7.3					6.7	8.5	6.8	9.2			8.8	11.3	8.3	9.9	
		8.6	7.6			7.5	7.9	6.6	8.4	6.7	8.4					8.1	9.5	
江戸時代人	男性	8.2	7.4	6.8	6.5	7.7	8.5	7.2	9.6	6.9	9.5	10.5	11.6	10.0	11.7	9.5	11.3	
(Brace他、1982)	女性	8.3	7.0	6.7	6.3	7.9	8.6	7.4	9.5	6.8	9.2	10.4	11.4	9.9	11.5	9.7	11.6	
現代日本人		8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.94	8.52	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79	
(權田,1959)	女性	8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.71	8.13	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50	

下顎歯		性別	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3		備考
			m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	
宮沢中村遺跡	3号					5.9		7.3	6.2	8.2	6.9	8.1		10.6					
						6.0		7.4	6.7	8.0	6.9	8.3		10.8					
	6号			5.4		6.5	6.9	7.6				7.6	11.6	10.4					
							7.0	7.5	6.7	7.7	7.5	8.1	11.8	10.5		10.8			
	7号		4.9	5.1	5.7	5.8	6.8	7.2	6.8	7.8	6.9	8.6	11.0	10.3	11.1	10.6	10.3	9.3	
									6.5	7.8	6.7	8.7	11.3	10.7	10.8	10.1	9.4	9.3	
江戸時代人	江戸	男性	4.9	5.7	5.8	6.4	6.7	7.7	7.2	8.0	7.3	8.4	11.5	11.0	11.3	10.6	10.7	10.1	
(Brace他、1982)		女性	5.0	5.1	5.6	5.8	6.4	7.2	6.8	7.4	6.9	8.1	11.1	10.7	10.9	10.4	10.5	9.9	
現代日本人			5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28	
(權田,1959)		女性	5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02	

表３：宮沢中村遺跡出土人骨の上肢骨の計測値と比較資料

単位は㎜、**：推定値、*：中央位置の推定による

		江戸時代 宮沢中村遺跡					江戸時代 (鈴木：1967)		現代関東地方人	
		1号	2号		7号		男性	女性	男性	女性
		左	右	左	右	左				
上腕骨									(西原；1953)	
1	最大長				282**		296.8	269.7	295.93	272.38
5	中央最大径	17.1*	20.4*	21.1*	22.1*	20.9*	22.7	19.6	22.41	19.71
6	中央最小径	13.3*	14.7*	14.7*	16.6*	17*	17.7	14.9	17.74	14.70
7	骨幹最小周	49	58	56	65	61	63.5	54.1	62.27	54.11
7a	中央周径	50*	60*	60*	66*	65*				
7/1	長厚示数				23.0		21.4	20.1	21.14	19.89
7a/1	長厚示数				23.4*					
6/5	中央横断示数	77.8*	72.1	69.7*	75.1*	81.3*	78.3	76.6	79.55	75.10
橈骨									(蝦名：1951)	
1	最大長					212**	224.2	199.8	225.09	202.11
3	最小周		38		38	38	41.6	34.5	40.45	34.69
4	骨体横径		16.5		14.3	13.9				
4a	骨体中央横径				13.9	13.4	15.6	13.5	16.45	14.56
5	骨体矢状径		9.2		11.7	10.8				
5.4	体断面示数		55.8							
5 (4)	頚周径		38		47	47				
5 (5)	中央周		38*		45	43	44.2	38.2	43.34	37.56
5a	骨体中央矢状径				11.5	11.2	12.0	10.0	11.81	9.84
5a/4a	骨幹横断示数				82.7	83.6	77.5	74.6	71.75	67.44
尺骨									(蝦名：1951)	
3	骨幹最小周				44	46	36.4	31.5	36.55	32.16
6	肘頭幅					22.5				
11	骨幹背掌径				12.6	13.7	12.8	10.5	13.20	10.71
12	骨幹横径				16.2	16.7	16.2	14.1	16.29	13.91
11/12	骨幹横断示数				77.8	82.0	79.0	75.1	80.94	76.94
13	上横径				19.3	20.4	21.2	18.5	20.52	17.16
14	上前後径				26.0	26.6	26.2	22.5	25.17	21.91
13/14	扁平示数				74.2	76.7	81.1	82.2	82.16	78.37
11'	中央最小径					11.9			12.39	10.39
12'	中央最大径					16.5			16.63	14.26
11'/12'	中央横断示数					72.1			74.53	74.16

表４：宮沢中村遺跡出土人骨の下肢骨計測値と比較資料

単位は㎜、**：推定値、*：中央位置の推定による

		江戸時代 宮沢中村遺跡							江戸時代 江戸町民 (鈴木：1967)		現　代 関東地方人	
		1号		2号		6号	7号					
Martin	計測項目	右	左	右	左	左	右	左	男性	女性	男性	女性
大腿骨											(大場：1967)	
6	中央矢状径	20.2*		24.1*	22.6*	28.8*	24.4*	25.6*	28.3	24.8	27.61	24.66
7	中央横径	22.2*		23.6*	23.8*	24.4*	25*	25.5*	27.4	24.1	26.23	23.06
6/7	中央横断示数	91.0*		102.1	95.0*	118.0*	97.6*	100.4*	103.9	103.1	105.72	107.56
8	骨幹中央周	68*		74*	72*	85*	80*	81*	87.2	76.9	83.60	74.40
9	骨体上横径	27.8		31.5	29.3	35.5	32.4	32.9	30.7	26.5	30.86	27.86
10	骨体上矢状径	18.3		18.1	19.3	20.0	24.1	24.3	27.8	25.5	25.35	22.45
10/9	上骨体横断示数	65.8		57.5	65.9	56.3	74.4	73.9	91.2	97.3	82.18	81.24
膝蓋骨											(加藤・原田；1960)	
1	最大高						34.7				41.39	37.14
2	最大幅						39.5				45.14	40.12
3	最大厚						16.5				19.88	18.16
脛骨											(鈴木；1961)	
8	中央矢状径	21.0*	21.0*				28.7*	29.8*	28.9	25.3	28.73	25.71
9	中央横径	15.4*	15.0*				21.1*	19.9*	21.6	18.9	22.79	20.31
9/8	中央横断示数	73.3	71.4				73.5*	66.8*	74.9	72.4	78.66	78.68
8a	栄養孔位矢状径	25.3	24.8				34.4	33.5*	32.9	28.8	31.77	28.95
9a	栄養孔位横径	16.5	15.7				23.1	21.9	23.7	21.2	25.10	22.51
9a/8a	栄養孔位断面示数	65.2	63.3				67.2	65.4	72.2	73.6	78.25	77.28
10b	最小周	53	53				75	69	70.8	63.7	72.25	65.28
腓骨											(福田；1961)	
2	中央最大径	11.0*							15.3	12.8	14.81	13.61
3	中央最小径	7.0*							11	9.4	10.94	9.54
3/2	中央横断示数	63.6*							72.1	73.9	73.35	70.1
4	中央周	32*							43.4	37.3	43.38	38.95

第５章　遺構・遺物の検討

第１節　宮沢集落の沿革と発見された遺構

（１）宮沢集落の変遷と水害

現在の宮沢集落は清水地区内に位置するが、これは明治33年から明治42年にかけて全村42戸が移転したことによるものであり、この経緯については甲西町誌に詳しく述べられている（註１）。全村移転の主な理由は水害である。甲西町宮沢一帯は標高240ｍと甲府盆地内にあっても低地であるのに加え、巨摩山地から流れ出す滝沢川や市之瀬川を始めとした複数の河川が落ち合う付近であり、しかも盆地内の水が全て集まる釜無川と笛吹川の合流点にきわめて近い場所に位置している。特に、釜無川（富士川）の川床の高さとこのような立地にあることからの集水と排水との関係が、宮沢一帯の水害に大きく関わっている。上流域での堤防決壊による洪水、富士川本流の急激な増水にともなった逆流による満水、これらがあいまって大きな災害をもたらしていたのである。明治以降の水害の記録も甲西町誌にまとめられているが、これによるとほぼ２年に１回の割合で被災していることが分かる。江戸時代においても相当の災害があったことは、今回の発掘調査でも確認されている。特に３号建物の礎石や地盤にも逆流による洪水砂の堆積が確認されているとおりである。また、民家の敷地が周囲より高くかさあげされていることも、水害にそなえ少しでも冠水を避けるための工夫である。さらに江戸以前の面においても、隣接する大師東丹保遺跡の例をも加えると、弥生中期以降、戦国時代に至るまで各生活面が厚い砂利層で覆われており、大規模な洪水が幾度も襲ったことが分かる。この一帯の水害にかかわる歴史や伝承については古屋兼雄氏の著書に詳しい（註２）。

このような環境にあって、幕末の頃から宮沢村住民からの移転願いが何度となく代官所や県に対して提出されたという経緯がある。ことに明治20年代後半から30年代始めにかけては連年被災しており、就中31年の水害を契機に33年移転に着手し、42年までに完了したと記録されている（註３）。宮沢村とともに隣接する戸田村にあっても、同様な理由から同じ頃移転が行なわれている。

今回の発掘調査は、このような経緯で移転してしまった旧宮沢村の一角が対象となったものである。かつての宮沢村については『甲斐国志』（以下国志と記す）に詳しい。まず村里部によると宮沢村は石高309石４斗、戸数48戸、人口187人（男92、女95）、牛馬無し、ということであり、国志が編纂された江戸時代後期、文化年間頃の宮沢村の規模がわかる。隣接する戸田村、清水村、大師村とともに小村ではあるが、西800ｍには戸数141戸、人口669人をかかえる駿信往環（の一部である西郡道の）荊沢宿がある。この宿から東に延びる道沿いに展開するのが宮沢集落である。この東に延びる道を地元では市川道と呼んでいるが、その名のとおり宮沢村から東進し、東南湖を経て釜無川を渡ればそこは市川大門である（註４）。宮沢村から市川代官所までは約３㎞である。

宮沢村の名の起こりについて『国志』神社部では、古市場にある若宮明神より続く75座を合併して天白社となしたことに起因するとし、古蹟部では若宮神社そのものによる地名としている。また神社部に類似するが、若宮神社から天白社に続く沢沿いに石祠が並んでいたことから宮沢とした説もある（註５）。さらに旧宮沢村は四つの集落から構成されており、市川道に沿って東から西に東村・中村・西村・西宮沢と並んでいたとされる（註６）。今回の発掘対象地は、このうちの中村付近に該等している。

この市川道沿いに形成されていた移転前の宮沢村の位置については、明治21年大日本帝国陸地測量部による地図により確認することができる（挿図３）。この地図によると宮沢の家並みから南には集落はなく、幾筋もの川の合流点までは水田や荒れ地が広がっている様子も観察することができる。集落移転後もこのような土地利用の形態に変わりなく、昭和30年代にあっても大雨の後には必ずといってよいほど冠水する湿田地帯であり、土地をかさあげするために土取りされた所は淵となり、付近を流れる川とともに釣人の格好の場所ともなっていた。これらの水辺にはヨシが繁り、ポプラ並木が天を突く景観が広がっていたものである。かつての宮沢集落の跡地も畑や水田として耕されているが、特に屋敷地であったところは、水害に備えたかさあげのために、周囲より一段

高い耕作地として区別がつく。

このような、集落を形成する上では障害のあった土地ではあったが、昭和40年代以降、河川合流地点における水門や排水施設、さらには上流域の堤防強化などの治水整備が進み、次第に宅地化が進められてきた。かつて宮沢前と呼ばれた湿田地帯には工業団地が造成され、かつての面影は一変した。さらに最近では村跡地に再び住宅が建設され始め、宮沢集落の復活を告げるかのように、新しい村ができつつある。

弥生時代以降繰り返して来た、水田域と居住域との織り成す歴史が今なお継続しているのである。

（2）発見された遺構の性格　―江戸時代の宮沢―

2面、3面は江戸後期の生活面であり、ここからは民家と寺にかかわる施設が発掘されている。まず民家についてであるが、これは3号建物とその周囲の遺構が中心となる。この敷地は南を走る市川道に面しており、西は参道に沿って設けられた3号溝により区画され、さらに北は池状の施設である1号溝及び2号建物を境として寺域と区別されている。東側は発掘区域外に延びるため不明であるが、隣地は別の民家となっており、その境界はやはり溝となっている可能性がある。

さらにこの敷地は参道を始めとした寺域や水田面よりも台地状に高くなっており、水害に備え盛り土されたものである。この土については他所から運んできたこともあろうが、敷地周囲の溝や池の土が用いられたことも考えられる。特に北側の1号溝は、土を採取したがための窪地であった可能性がある。なお、参道際に走る3号溝の民家側は石垣となっている。

さて、この敷地内からは母屋とみられる3号建物と、井戸2ヵ所が発見された。民家については発掘区域外にも延びていることから全体をつかむことはできなかった。この土地を所有していた井上栄一氏によると、この敷地は井上家伝来の土地であり、畑となった現在でも「古屋敷」と称し移転前の屋敷地であったことを伝承している。この「古屋敷」という呼び方は、他の家でも用いる言葉であり、それぞれの家が移転前の敷地を指す名称として今も用いられているものである。

この井上栄一家については、移転後の家を昭和40年代に解体したところ文久元年の棟札が発見されたという。このことから、「古屋敷」にあった建物が明治30年代に移転した際に、そのまま復元され居住に用いられていたものと見られる。この建物については宮大工でもあった井上栄一氏により詳細な間取り図面が作成され、甲西町誌に載せられている。この図面を参照すると、東西4.5～5間、南北2.5間の建物であり（第4図）、発掘された3号建物が、かさ上げ後の移転時に縮小された可能性がある。しかし礎石あるいは根石の配列には共通した間取りも窺われる。このような関連があるとすると、この3号建物とした建物は文久元年に建てられた井上家の母屋ということになる。礎石の多くが残っていなかったことからすると、建築材とともに礎石も移されたことになろうか。ただし3号建物が直接現在の井上家の場所に移転したのではなく、同じ場所でのかさあげという行為があったものとみられる。というのもこの敷地や礎石の上には細かい砂の層が堆積しており、逆流による水害を受けたことがわかる。この時期は出土陶磁器からみてまだ江戸時代のものである。その際の水害を契機に土盛りがなされ、1面の1号建物へと移行し、その後明治30年代になって他所への移転になったものと考えられる。

井戸は母屋の前庭（1号井戸）と裏庭（2号井戸）とから発見された。1号は埋め立てられており、中心には竹が刺さっており井戸埋設に伴う祭祀が行なわれたことがわかる。本来は桶が設置されていたらしく、桶の一部とみられる材やタガの断片が井戸底付近から出土した。底は砂利層に至っており、発掘中もここからは出水が多かった。遺構検出面からの深さは80cmと余り深くない。この井戸が埋設された時期については、母屋がかさあげされた時期なのか、その後なのかは不明である。2号井戸には桶粋や、それを囲む石敷きもよく残っていた。内部に竹は見られなかったが、最上面に内耳焙烙と磁器碗が井戸を塞ぐかのよな状態で出土したことから、やはり埋設に伴う祭りが行なわれた可能性がある。これらの土器や磁器は江戸後期のものであることから、井戸が廃棄されたのは、母屋が3号建物から1号建物へとかさあげされた時期の可能性がある。なお、2号井戸内から多くの植物遺存体が検出されていることは前章でふれられているとおりであるが、これら種子類が多いことは井戸に

限らず溜め状遺構としての機能も考える必要がある。

寺にかかわる遺構としては、本堂（７号建物）・庫裏（５号）・堂（４号建物）・井戸や池、溝などの水利施設・参道・墓地などがある。堂のうち境内の西側にある4号建物は、移転後の境内に残る施設を参考にすると七面堂であったとみられる。これらの施設から構成される寺は法浄寺と呼ばれ、旧宮沢村全体が移転してしまった後も、寺だけが旧地に残っており、大正末年になって現在地に移転したと伝えられている。

これらの諸施設の配置についてふれてみよう。まず村を東西に走る市川道から北に参道が延びている。この参道の幅は１間（1.8ｍ）を基本としており、両側には並木がある。木の種類は杉が多く、わずかに松も含まれている（図版３）。参道に沿った東側には細い水路が走っており、民家である井上家敷地との境界をなしている。西側にも溝があった思われるが、大きな撹乱を受けており不明。古老の談によると、かつては蓮田があったということであり、沼状の窪地になっていた可能性がある。しかし西側発掘区外には一段高い畑があることから、この蓮田も幅十数ｍ程度の幅であり、その西側には民家が連なっていたものとみられる。

寺の参道を北に進むと、井上家の裏手は池（１号溝）となっており、この池の北側には２号建物がある。これもまた民家の一部とみられ、この裏にある２号溝が、境内地との境かと思われる。この２号溝を過ぎたあたりから広い境内となっており、参道の延長部分は幅80～100㎝、長さ12ｍの小砂利敷きの通路となっている。この左手方向には七面堂があり（４号建物）、その北側には池が掘られている（６号、17号、18号溝）。参道の小砂利敷き通路が終わる辺りの左側に手洗い場が設けられていて（16号溝）、水汲桶も用意されていたらしい。この先10ｍ四方ほどの広場を置いて、本堂となっている（７号建物）。本堂は参道の正面に当たっており、南面する６間×４間の建物である。この規模は移転を経た現在の本堂と全く同じである。本堂の西には庫裏が隣接する（５号建物）。また付近には井戸や流し場、それに便所といった施設も集中しており、日常生活に密着した場としてのかおりがただよっている。この辺りには礎石の根石とみられる遺構が重複しながら複数みられたり、井戸や溝の切り合いもあることから、各種の施設が何度か建替えられたり、作り替えられたりしたものと考えられる。庫裏の裏側には池や溝があるが、特に７号溝とした施設には桶も埋設されており、ここで洗いものを始めとした水場の利用が行なわれたものとみられる。この辺りが寺域の北限に近いものとみられ、数本の溝（10号、11号、21号溝）を境として、北側は水田となっていたとみなされる。

なお、墓域については、本堂前庭の南東側と本堂裏から東側一帯が該当するものとみられる。現在の墓地は、移転後の本堂跡地を含めその東側を中心に展開している（図版１参照）ことから、当時も本堂の東側を基本としていたものと考えたい。

以上のように今回の調査では寺と民家が発掘され、江戸時代後半期の農村の一部が確認できたことになる。出土遺物からみた時期については、２面からは端反碗や広東碗などの19世紀半ばの磁器も多く出土していることから、幕末を含む時期の面とすることができる。３面については特に18号溝からは瀬戸・美濃系の尾呂茶碗などの18世紀代の遺物もみられ、２面より遡った江戸後半の時期とすることができる。

第２節　生活用具の組合せ

（１）全体

出土した遺物から、江戸後期の農村における生活用具の組合せを考えてみる。これらには焼物、木製品、金属製品、石製品等がある。

まず焼物には容器類があり、これらの出土量が最も多い。種類としては磁器・陶器・土器があるが、器種によってそれぞれの量に大きな差がある。特に碗では磁器が圧倒的に多く、灯明皿は陶器が非常にすぐれ、火鉢や焙烙は全て土器、といった具合である。これについては次ぎの項でふれる。

木製品は特に溝や池から出土したものが殆どであり、水漬けの状態のため保存状態の良いものも多い。実測図として掲載できたものについてみると、種類と数量については表４にまとめておいたとおりである。まず容器としては椀・桶・曲物・箱物等がある。量的には桶と曲物が最も多い。但し底のみの出土の場合、桶か曲物かにつ

いての区別にはむずかしいものがある。実際には柄杓などの曲物は直径12.8㎝程度以下であり、また直径15㎝代の小型桶もみられることから今回は直径15㎝以上を桶、14.9㎝以下を曲物とした。このようにしてみると桶26点、曲物16点である。桶は水汲み用の小さなものから、井戸に利用された大型のものまである。また便所や墓にまでも用いられており、使用範囲には実に広いものがある。中世世界にて曲物が各方面に用いられていたのに対して、近世では桶の技術が発達し、幅広く用いられていることは興味深い。曲物については柄杓やメンパなど比較的保存が良いものもあるが、より大きい容器については保存状態は良くない。

食器には椀、箸、シャモジ、膳などがある。椀は漆塗りのもので、本体と蓋とがあるが区別しにくいものもある。量的には28点あり、生活用具の中でも重要なものであったとみられる。箸についてはセット関係は不明ながら個数としては28本が確認できた。さらに飯箆とみられるシャモジも破片ながら２点、盆ないし折敷が３片出土した。

日常品として大きなウエイトをしめるものとして、下駄がある。16点が出土しており、大小がみられる。多くは磨滅激しいものや破損品である。これは廃棄されたものであることから当然でもある。当時の履物としては藁草履の類が多く用いられていたと思われるが、残りにくいこともあり全く確認できなかった。他に傘の部品が３点出土したことは興味深い。

杭や胴木、それに用途不明の木製品も多い。用途不明のものの大部分は製品や道具の一部であったり、建築用材の残り部分であったものとみられる。

金属製品では、煙管が20点（雁首５点、吸口15点）、かんざしが８点、毛抜１点というように身の回り品が目立つ。さらに銭貨として寛永通宝、文久永宝がある。他に家具等につける金具類や装飾品が出土している。しかし農具や工具はみられないことは、貴重な鉄については破損品や消耗激しいものも修理や造り替により使用し続け、廃棄することはなかったことによるものであろう。

石製品のうちと道具しては、石臼・搗臼・磨石・石鉢・ヒデ鉢・砥石などがある。さらに用途不明の小型石皿様の製品がある（第76図６、10、12～14）。これらは長さ10㎝～15㎝程度の楕円形の石で、中央に皿状の凹みを持つものである。凹みの部分はよく擦られていることから片手に持って擦り潰す道具と考えている。さらに５点の内３点が民家である３号建物付近であり、他に寺に関する２号建物と庫裏付近から１点ずつが出土していることから、日常の生活の加工用具と考えておきたい。戦国時代の遺跡からもよく出土するものである（註７）。

なお、砥石については８点の内５点が民家付近出土であるのに対して、石臼の多くは寺域からの出土であり、礎石や側石として再利用されているものもある。石製品として他には五輪塔や墓石の台座などの石造物がある。五輪塔については組み合わさって一体となったものは無く、すべて部品ごとの出土である。これらの中には４号建物の礎石になった水輪も含まれる。

その他、土製の玩具類や娯楽品・飾り物などもみられる。特に土製メンコは子供の玩具として各地から出土するものであるが、このような農村でも使われていたことがわかる。また土鈴や土馬もみらることから、祈りや祭りにかかわった願いがなされたことが考えられる。８点の土鈴は民家敷地で２点、他は寺域内からである。土馬は庫裏西側からの出土であり、この一帯は井戸や流し場が占める所である。さらに寺域の北端に位置する10号溝、11号溝付近から馬の歯が３点出土している。中世では水辺の祭りにともなって馬の歯や骨が出土するが、このような祭りが江戸時代後期にも行なわれたのであろうか。なお、『甲斐国志』村里部では宮沢村には牛馬無しと記載されている。

以上のような出土遺物から、江戸時代農村の生活用品をみることができるが、今後各地の事例を蓄積する中で、在方と町方との比較をとおして当時の様子を詳細に検討することができるものと思われる。

なお農村の実情を知る上で、馬牛の在り方も重要である。『甲斐国志』によると宮沢村には牛馬無しと記載されている。隣接する荊沢村では馬６、牛２であることはここが駿信往環の宿であったことと関わるかもしれないが、おなじ西郡筋にある、宮沢と同規模戸数の村である塚原村が馬４、上野村が馬６、牛５、さらに山中の平林

村が牛のみ38ということは何を意味するのであろうか。

特に塚原や上野は山裾の傾斜地に立地しており、水田とともに畑地帯であるこれらの村に複数の馬匹が数えられている。加えて上野村では牛が多くなっており、さらに山間地である平林村では牛38頭という数値となっている。沖積地の水田地帯である宮沢村や戸田村では牛馬が無く、宿や畑地帯あるいは扇状地帯では馬が増加し、さらに山地では牛が飼われるという傾向が窺われるのである。今後全県的な傾向をつかみ、その意味を考えていく必要があろう。

（2）容器類の比率ー磁器・陶器・炻器・土器

2面と3面とから出土した陶磁器および土器の種類と数量について表1～表3にまとめてみた。まず表1は、完形から小破片まで含め口縁部と底部について全て数えてみたものである。表のうち全形というのは、完形および推定復元可能な個体のことであり、おおむね実測図に掲載されているものである。

この表1をベースにして、口縁部の数から個体数を出そうとしたのが表2であり、底部数から個体数を求めたものが表3である。それぞれには完形数も加えてある。ただし口縁部にしても底部にしても小破片をもカウントしてあることから、実際の個体数より相当増えていることは十分に考えられるものである。特に碗や焙烙などは粉々に割れている可能性が高いからである。この辺りの事情を考慮する必要があるが、器種のおよその組合せ傾向はつかめるものと思われる。

表2からみると、碗が圧倒的に多く全体の40%を占めている。なお、酒盃の可能性ある陶器の小碗もこの中に含んでおいたが、これを差し引いても38%近い。次いで焙烙の19%、皿の12%となる。以下は一桁台となり、灯明皿、鉢類と続く。逆に1%未満と少ないのは、徳利、紅猪口、水滴、段重などである。やはり碗と焙烙とが日常生活必需品であることがわかる。

なお生活用途の大分類でみると、碗・皿・急須、土瓶・鉢の一部といった食器類の合計がおよそ60%弱、擂鉢・こね鉢・焙烙といった加工具類が約30%弱、これに甕や瓶といった貯蔵具が約2%といった数値になる。これが日常生活の大半を占めることになり、残りの10%近くが仏具ということになろうか。

なお、煮炊きの鍋や釜は鉄製品が主流であるとみられ、これらが全く出土していないことは、廃棄されることなく修繕されながら大切に使われたことを意味するものであろう。

次ぎに焼物の種類を観察してみると、磁器37%、陶器34%、土器27%となる。磁器が最も多い数値を示すが、青磁に限ると1%にも満たない。これは青磁が仏花器や香炉などの高級品であることによるものと思われる。磁器の産地についてはⅠ①期（18世紀代）については肥前系が主流であるが、Ⅰ②期（18世紀末～19世紀代）では瀬戸・美濃系が相当高い比率を占めてくる。陶器では瀬戸・美濃系が多いと思われるが、これに信楽・京都系、京焼風肥前、唐津、志野などが少量加わっている。灯明皿でも瀬戸・美濃系が主流であるが志土呂焼も少しではあるが認められた。急須・土瓶については詳細はよくわからない。これら陶磁器類の産地については、宮沢集落のような農村における物品の流通を考える上で重要である。特にこの地域にあっては富士川舟運や往環との関わり、さらには甲府城下との比較検討も加え、今後の課題となる。

土器類については地元で製作されているものが多いとみられるが、具体的な産地は不明である。焙烙については刻印の残るものもあり、今後周辺焼物産地の調査を行なう中で検討していきたい。

なお、陶磁器類集計表のうち表3に示した底部の合計からは、土器類の焙烙破片が最も多く、全体の40%という高い比率を示しており、口縁部での合計でトップであった碗類を逆転している。これは焙烙の底部が広くしかも破損しやすいという性格に基づいた結果と思われ、実際の個体数よりも相当多くの破片が生じたことを意味するものであろう。この点からも口縁部数から個体数を算出した方が実際に近い数字になるのではなかろうか。今後の県内各地での比較検討も望まれる。

表１　宮沢中村遺跡跡焼物類集計表

		磁器			陶器			炻器			土器			青磁		
		2面	3面	合計	2面	3面	合計	2面	3面	合計	2面	3面	合計	2面	3面	合計
碗	口縁部	884	190	**1074**	276	122	**398**	64	2	**66**						
	底部	418	58	**476**	117	53	**170**	21	1	**22**						
	全形	185	18	**203**	71	9	**80**	4	0	**4**						
皿	口縁部	71	7	**78**	76	14	**91**	14	5	**19**	140	136	**276**			
	底部	74	19	**93**	12	13	**25**	4	0	**4**	31	70	**101**			
	全形	37	5	**42**	14	4	**18**	0	0	**0**	24	10	**34**			
鉢	口縁部	12	1	**13**	127	19	**146**									
	底部	10	1	**11**	77	13	**90**									
	全形	5	0	**5**	10	7	**17**									
段重	口縁部	6	1	**7**												
	底部	3	1	**4**												
	全形	4	1	**5**												
瓶	口縁部	14	4	**18**	22	13	**35**							1	1	**2**
	底部	24	1	**25**	32	5	**37**							4	1	**5**
	全形	0	1	**1**	0	1	**1**							0	0	**0**
急須・土瓶	口縁部	2	0	**2**	25	1	**26**									
	底部	1	0	**1**	59	1	**60**									
	全形	0	0	**0**	11	0	**11**									
盃	口縁部	39	5	**44**												
	底部	18	7	**25**												
	全形	25	2	**27**												
徳利	口縁部	2	0	**2**	1	0	**1**									
	底部	3	1	**4**	7	1	**8**									
	全形	1	0	**1**	1	1	**2**									
紅猪口	口縁部	14	1	**15**												
	底部	0	0	**0**												
	全形	1	1	**2**												
水滴	口縁部	0	0	**0**	0	1	**0**									
	底部	0	0	**0**	0	0	**0**									
	全形	5	7	**12**	1	0	**1**									
蓋	口縁部	0	0	**0**	0	0	**0**									
	底部	0	0	**0**	0	0	**0**									
	全形	23	3	**26**	73	11	**84**									
仏飯器	口縁部	34	11	**45**	53	3	**56**									
	底部	3	3	**6**	5	4	**9**									
	全形	6	2	**8**	22	2	**24**									
香炉	口縁部	8	0	**8**	42	23	**65**							8	3	**11**
	底部	1	0	**1**	17	8	**25**				1		**1**	2	1	**3**
	全形	1	0	**1**	6	8	**14**				3		**3**	3	1	**4**
擂鉢	口縁部				77	11	**88**									
	底部				14	1	**15**									
	全形				4	1	**5**									
火鉢	口縁部										35	11	**46**			
	底部										52	11	**63**			
	全形										5	2	**7**			
焙烙	口縁部										508	70	**578**			
	底部										1039	180	**1219**			
	全形										190	31	**221**			
灯明皿	口縁部				169	59	**228**									
	底部				50	19	**69**									
	全形				86	16	**102**				10	2	**12**			
甕	口縁部				33	5	**38**				15	0	**15**			
	底部				8	0	**8**				4	0	**4**			
	全形				0	0	**0**				0	1	**1**			
その他	口縁部	1	0	**1**	1	0	**1**				3	1	**4**	0	0	**0**
	底部	2	0	**2**	2	1	**3**				3	0	**2**	0	1	**1**
	全形	3	1	**4**	0	0	**0**				5	2	**4**	0	0	**0**

表２　宮沢中村遺跡陶磁器類集計表（２面・３面の口縁部と全形の合計）

	磁器	陶器	炻　器	土器	青磁	合計
碗	1277	478	70			1825
皿	120	109	19	310		558
鉢	18	163				181
段　重	12					12
瓶	19	36			2	57
急須・土瓶	3	37				40
盃	71					71
徳　利	3	3				6
紅　猪　口	17					17
水　滴	12	2				14
蓋	26	84				110
仏　飯　器	53	80				133
香　炉	10	79		3	15	107
擂　鉢		93				93
火　鉢				53		53
焙　烙				799		799
灯　明　皿		330		12		342
甕		38		16		54
そ　の　他	5	1		8	1	15
合　計	1646	1533	89	1201	18	4487

表３　宮沢中村遺跡陶磁器類集計表（２面・３面の底部と全形の合計）

	磁器	陶器	炻　器	土器	青磁	合計
碗	679	250	26			955
皿	135	43	4	135		317
鉢	16	107				123
段重	9					9
瓶	26	38			5	69
急須・土瓶	1	71				72
盃	52					52
徳利	5	10				15
紅猪口	2					2
水滴	12	2				14
蓋	26	84				110
仏飯器	14	33				47
香炉	2	39		4	7	52
擂鉢		20				20
火鉢				70		70
焙烙				1440		1440
灯明皿		171		12		183
甕		8		5		13
その他	6	3		6	1	16
合計	985	879	30	1672	13	3579

表４　木製品一覧表

	実測図	実測なし	合　計
桶合計	26	87	113
側板	11	62	
底	15	25	
曲物合計	16	9	25
側板	3	6	
底	13	3	
椀	28	2	30
箸	28	12	40
膳	3	1	4
しゃもじ	2	0	2
下駄	16	3	19
傘	3	0	3
糸巻き	3	2	5
箱部品	0	3	3
板	0	134	134
建築材他	0	24	24

第３節　宮沢集落変遷の歴史的意義

今回の調査で確認することのできた宮沢集落の始まりは16世紀後半から17世紀にかけての時代である。４面とした生活面がこれにあたる。ここからは柱根の残る柱穴が多数発見され、複数の建物があったことが確認できた。この建物には直径が５寸という六角形の柱が用いられているものもあり、通常の民家の類とは異なったものとみられるものである。本遺跡の北300ｍにある大師東丹保遺跡からは４寸角（12㎝）の面取りされた柱根から成る掘立柱建物が発掘されている。付近一帯からは、水辺のまつりにかかわる斎串を始めとした祭祀遺物や、青磁・硯・扇などを含む木製品が多数出土しており、祭りを主催することのできる当時の支配層にかかわる建物と考えているものである。これと同様の柱を持った掘立柱建物跡が、この宮沢中村遺跡４面からも発掘されているのである。時代こそ鎌倉期より新しい戦国末ではあるものの、一般民家とは異なった性格の建物群が、江戸時代後半期の農村の下に展開していたのである。

ところで戦国時代、この甲西町から櫛形町一帯を含む西郡地域は大井氏の支配した場所といわれており、古長禅寺や上野城といった古跡の残るところでもあり『甲斐国志』にも詳しい。さらに高白斉記には富田城（とだじょう）なる城館が形成されていたことが記されている。この富田城の位置について、古屋兼雄氏は、古い地名や地形観察を含めて現在の戸田集落の南側、すなわち宮沢中村遺跡の南東側に求めている（註８）。日本城郭体系や山梨県教育委員会がおこなった中世城館跡調査報告書でもほぼこの説をとっている（註９）。

今回の発掘で直接富田城にかかわる遺構・遺物を確認することはできなかったが、４面にて発見された建物について前述したような柱根を持つ掘立柱は、寺ないし館の建物にかかわる規模・形状であるとみることはできないであろうか。時期の上では16世紀末から17世紀初頭であり、若干新しいわけであるが、わずかな出土遺物ではあるが、天目茶碗破片や大窯灰釉陶器皿破片などは中世城館からよく出土する遺物の一つでもある。このような４面建物群を城館跡の一部に比定することは可能であり、さらに富田城との関連も考慮する必要があろう。この４面建物群はさらに発掘区域外である東側から南側に大きく展開することが予測され、今後の調査研究に期待されるものである。

いずれにしても江戸時代に発展していた宮沢集落の起源は、その下に埋没している戦国末から江戸初期の建物群にまで関連するものと考えたい。さらには、本遺跡の北西500ｍに位置する古刹深向院との繋がりも考えていく必要がある。この寺院は室町初期における大井荘の大井春信に関わるとされており（『国志』士庶部第十三）、さらに「宮沢村ノ深向院天正十一年卯月廿日御朱印ニ北条之内三十貫六百五十文」（『国志』古跡部第十二）とあり、宮沢集落の形成以来かかわってきた寺院とみられるからである。明治40年を境に、深向院から南～東方向においては村落は存在せず、一旦の降雨にて水没たやすい湿田地帯となっていた「宮沢前」と称される地にも、かつては集落が形成されていたのである。

それでは、中世以前の宮沢の地はどうであったのか。これについては５面、６面の調査成果からみることができる。５面からは護岸施設、６面には水田が広がっており、いずれからも居住の跡は発見されなかった。時期については鎌倉時代を中心とした頃のものと推測でき、北に隣接する大師東丹保遺跡から続いて展開する生産の場とみることができる。したがって中世前半期には、本遺跡の北から西にかけて居住区域が形成されており、本遺跡の辺りは水田を中心とした生産域であったと考えたい。この水田経営のためにさまざまな水利や治水が行なわれていたことであろうし、その一部が５面の杭列や網代を用いた護岸施設として今に残ったものと思われる。しかし、度重なる洪水によりこれらの水田は埋没し、中世末の４面の時期までは生活の痕跡も残らない程の厚い砂利の堆積となってしまったのである。しかしこれらの水害は上流からの氾濫によるもので、厚く堆積した砂礫も川上から運ばれたものである。宮沢中村の江戸期後半の集落を覆っていたのは、富士川満水のための逆流による砂泥の堆積であった。この時代にはもちろん上流堤防決壊による洪水も記録されているが、加えて下流からの逆流による水害も大きな被害をもたらしたのである。江戸中期享保年間に新しい川除仕法が進められたとされるが(註10)、釜無川の連続堤構築がこのような水害にかかわったという見方もできよう。

いずれにせよ、宮沢集落は沖積地への進出と開田といった中世前期における歴史的な趨勢（註11）に合致した水田域の形成に始まり、中世後期の集落ないし城館への展開、さらには江戸期の集落への移行、そして移転といった変遷の中に位置付けられるものである。治水の進んだ現在、宮沢の地は再び居住の地として蘇りつつある。この地における集落変遷のキーワードはまさに治水と利水なのである。

なお、発掘調査では現地表下４ｍにある６面までしか調査できなかった。この下層の状況は不明である。隣接する大師東丹保遺跡の例では、鎌倉時代の面の下には弥生後期の水田面があり、さらに弥生中期の自然流路と湿地面が確認されている。この宮沢中村遺跡の下層に弥生の面があることは確かと思われるが、水田が形成されていたかどうかは不明である。少なくとも弥生中期において湿地であったことは大師東丹保遺跡の下流に位置することから確かであろう。さらに下層の縄文期の面の存在も含め、今後の課題としておきたい。

註

1　内田安平「明治以降の風水害」『甲西町誌』　1973

2　古屋兼雄『富田城の発見』有泉堂　1977
　古屋兼雄『武田意外史』近代文芸社　1994

3　註１に同じ

4　市川道とは、市川大門に至る道の意であるが、特に江戸中期寛政７年市川代官所が確立されて以来、市川大門への道の重要性が一層増し、管下の各地域からの道が市川道あるいは市川往環とよばれたものとされる。
　山梨県歴史の道調査報告書第15集『市川道』山梨県教育委員会　1988

5　斎藤虎雄、中島栄逸「町村名の起こり」『甲西町誌』　1973

6　井上良光『四季くさぐさ』　1970

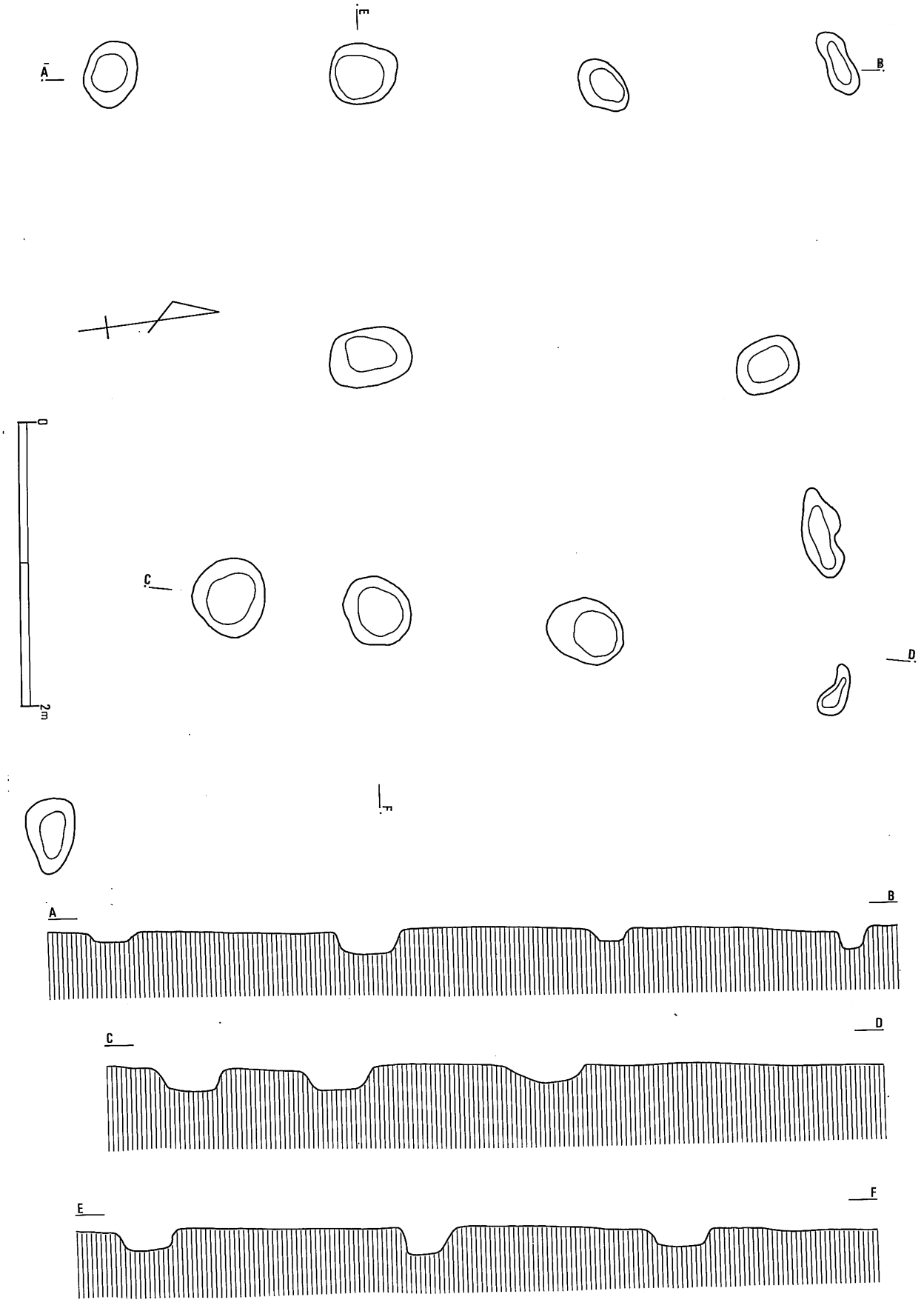
7　新津健「生活用具のセット」『二本柳遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第72集　山梨県教育委員会　1992

8　註２に同じ

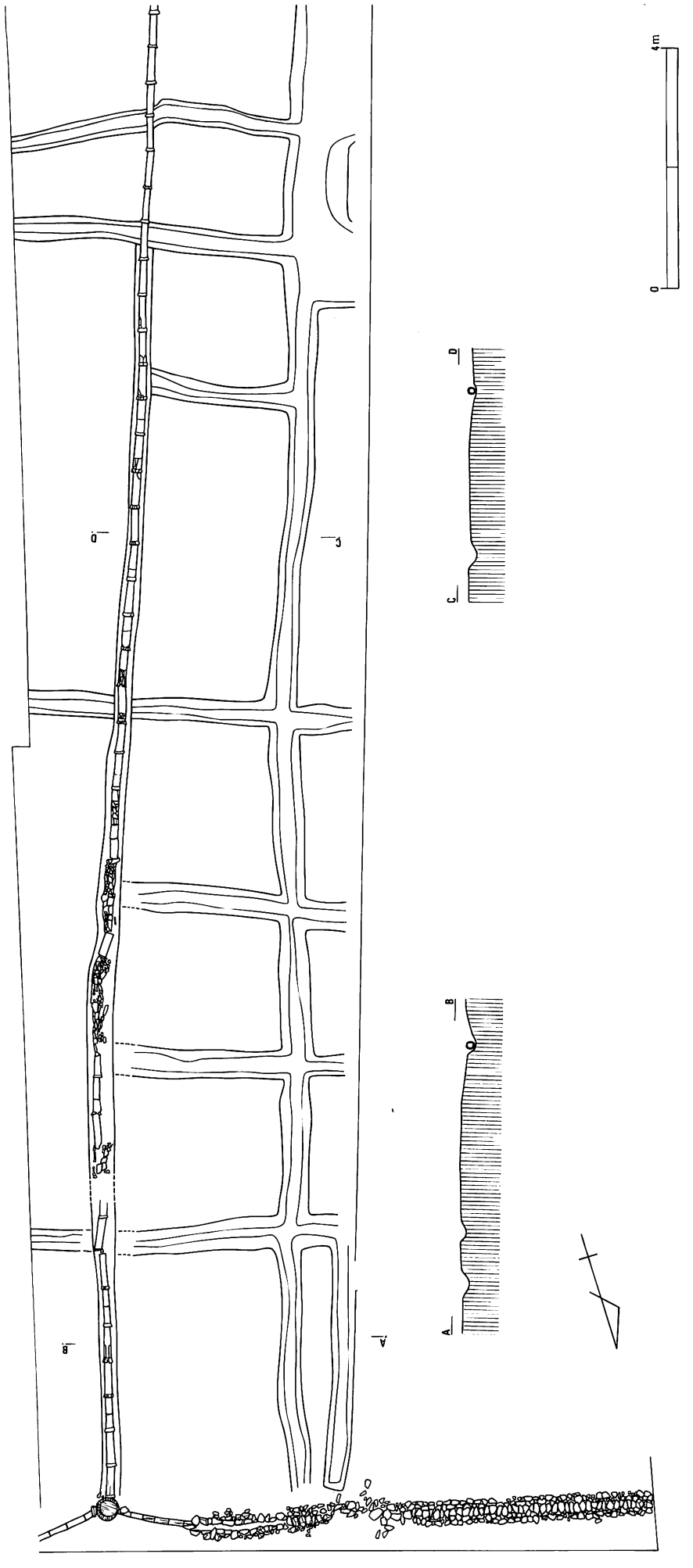
9　田代孝「富田城」『日本城郭大系』８長野・山梨新人物往来社　1980
　山梨県教育委員会『山梨県の中世城館跡』1986

10　安達満「甲斐における治水体制の一考察　― 武田時代から近世前期への推移 ―」『近世甲斐の治水と開発』山梨日日新聞社　1993所収

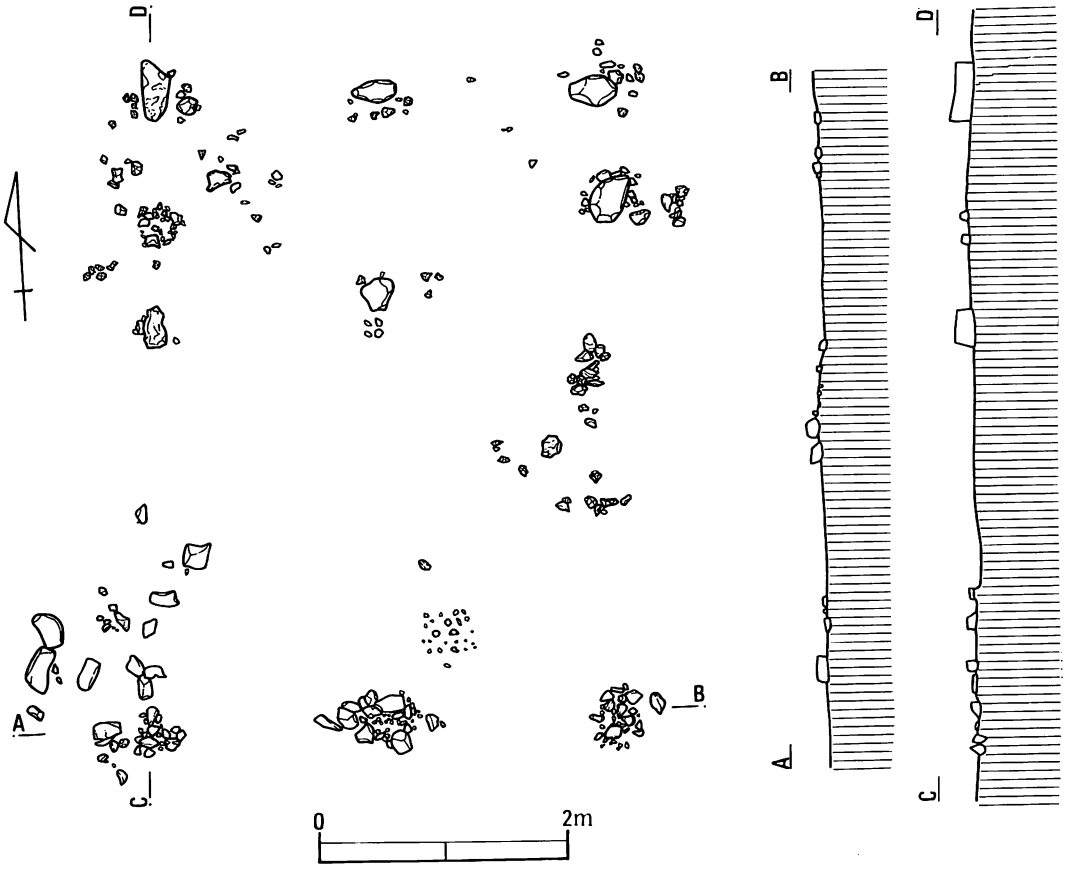
11　新津健「中近世集落研究の視点 ― 立地からみた画期と景観様相 ― 」『山梨県考古学協会誌』９山梨県考古学協会　1997

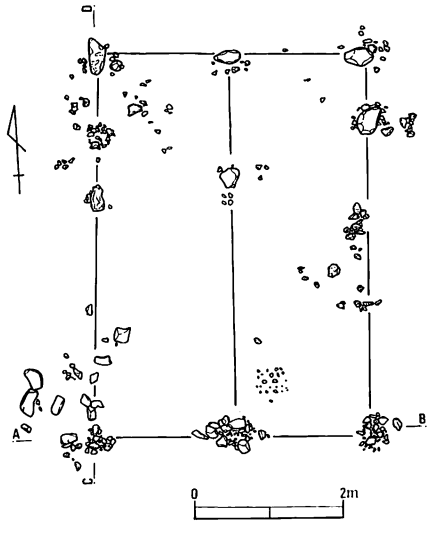


第１図　１号建物（１/40）

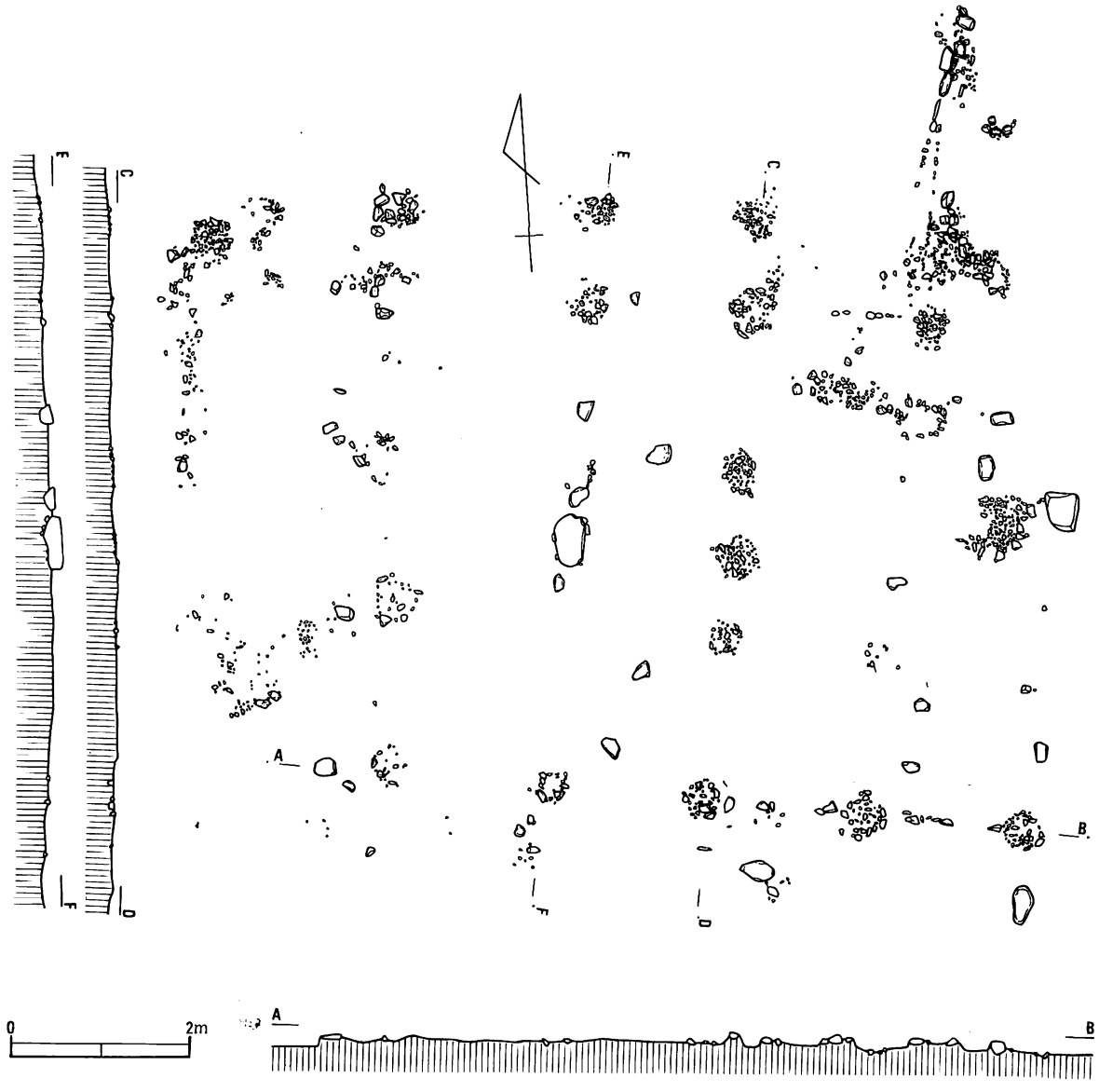


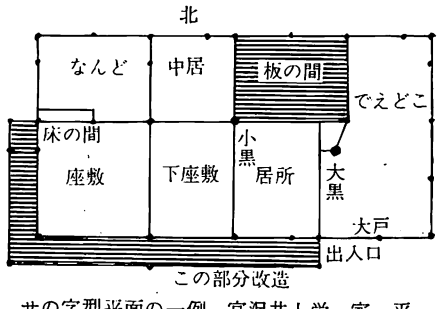
第２図　暗渠・土管（１/100）



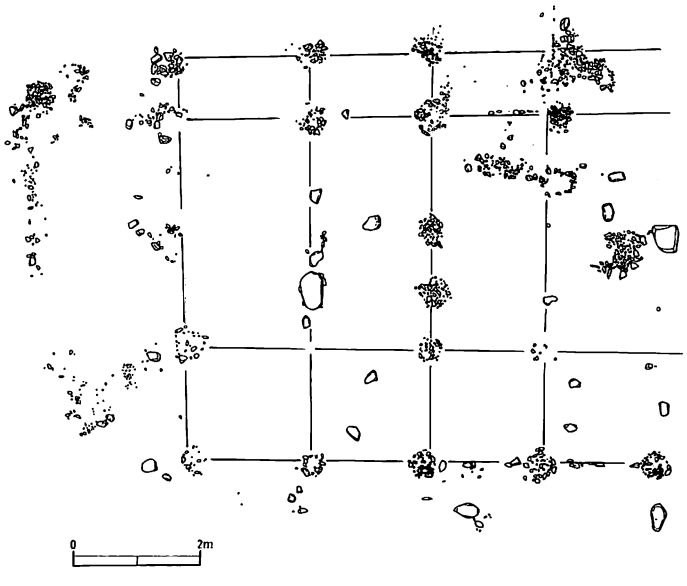


第３図　２号建物（１/60，１/100）

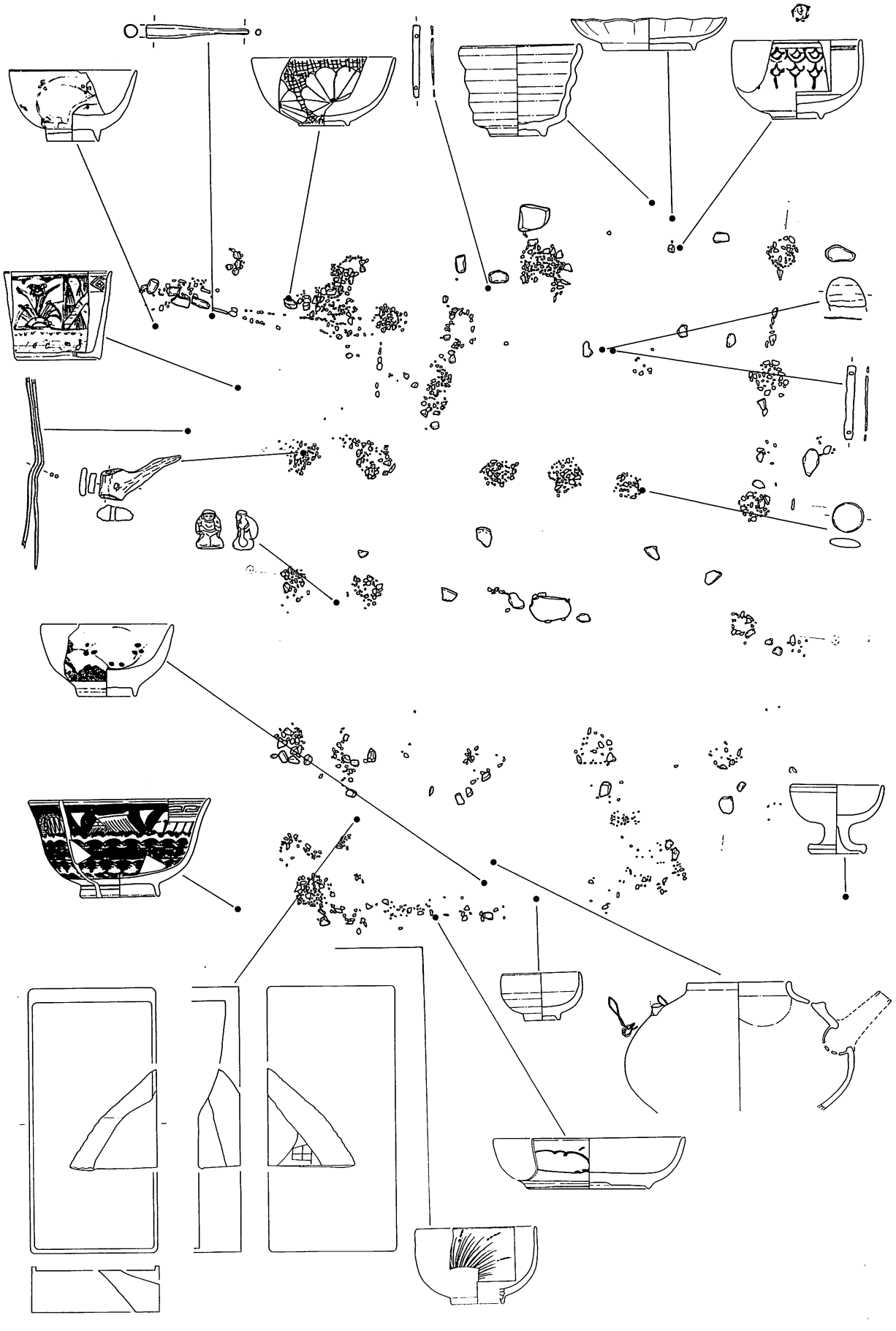




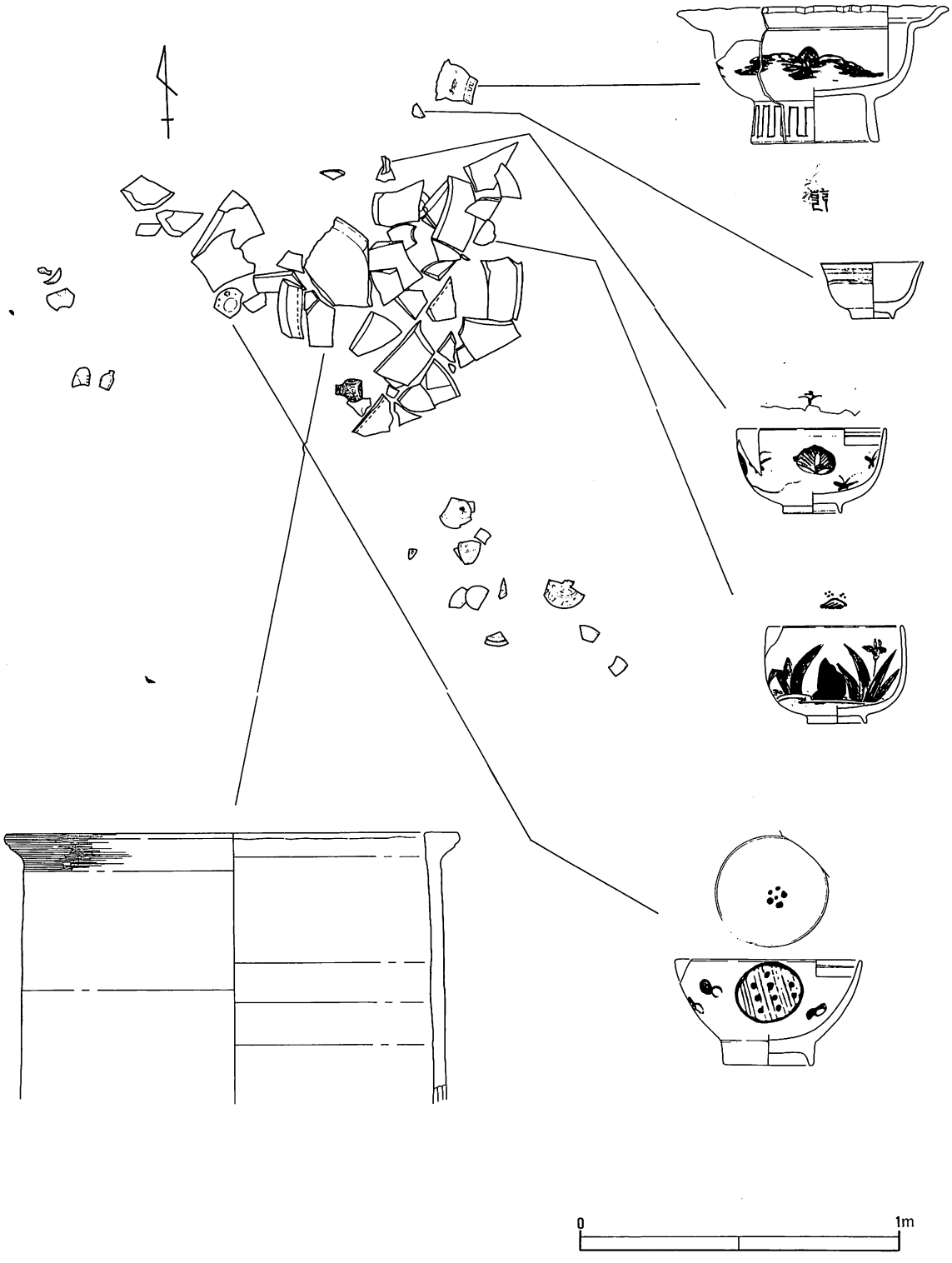
サの字型平面の一例、宮沢井上栄一家　平屋建草葺片入母屋造り　文久元年建築大黒柱一尺に八寸五分小黒七寸に五寸五分けやき材鉋仕上　其の他柱桁四寸角鉋仕上　江戸末期の踏襲型サの字型住宅
(井上栄一「民家」『甲西町誌』1973年より)



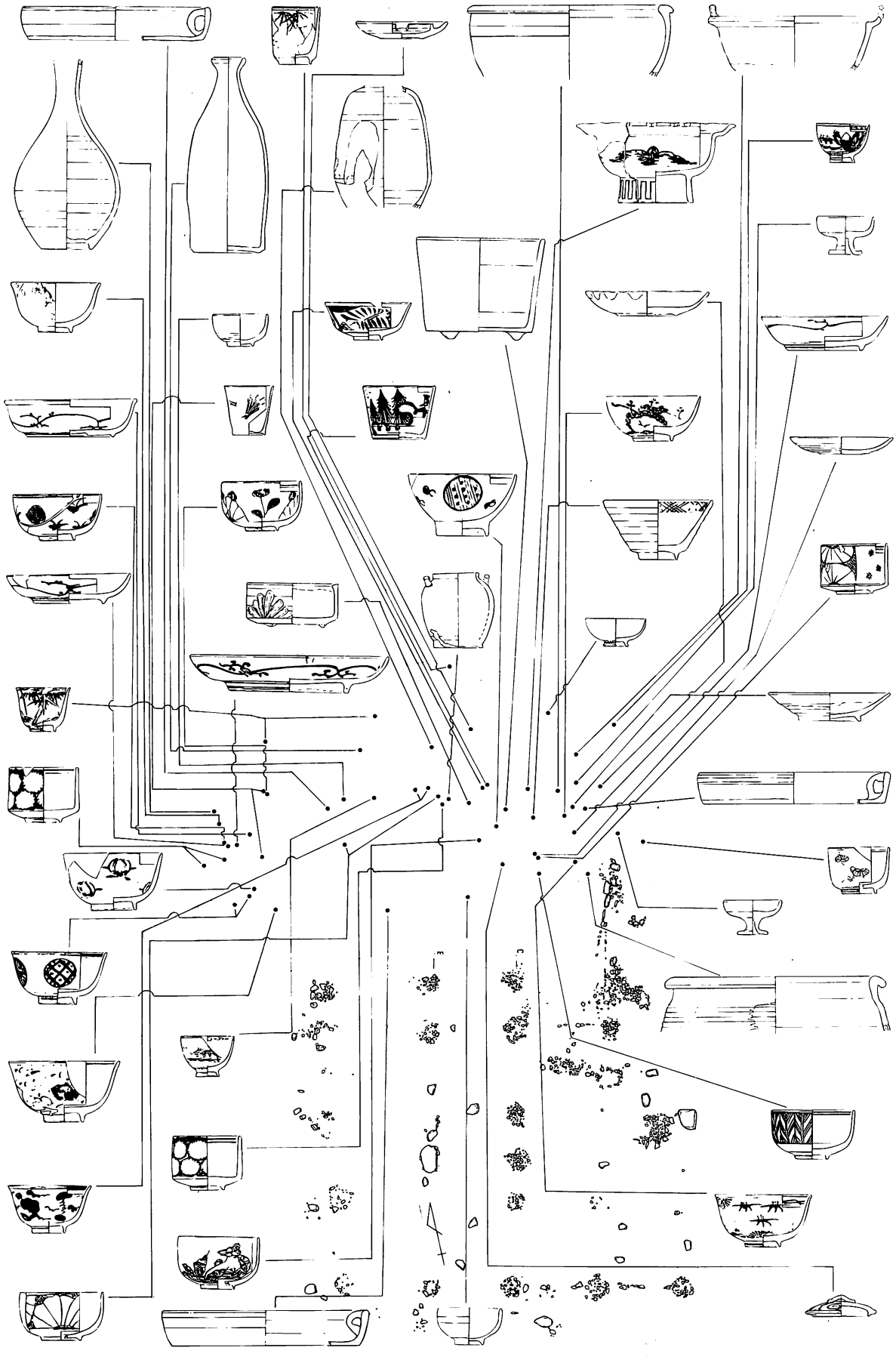
第４図　３号建物（１/80）（礎石の配置図は１/120）



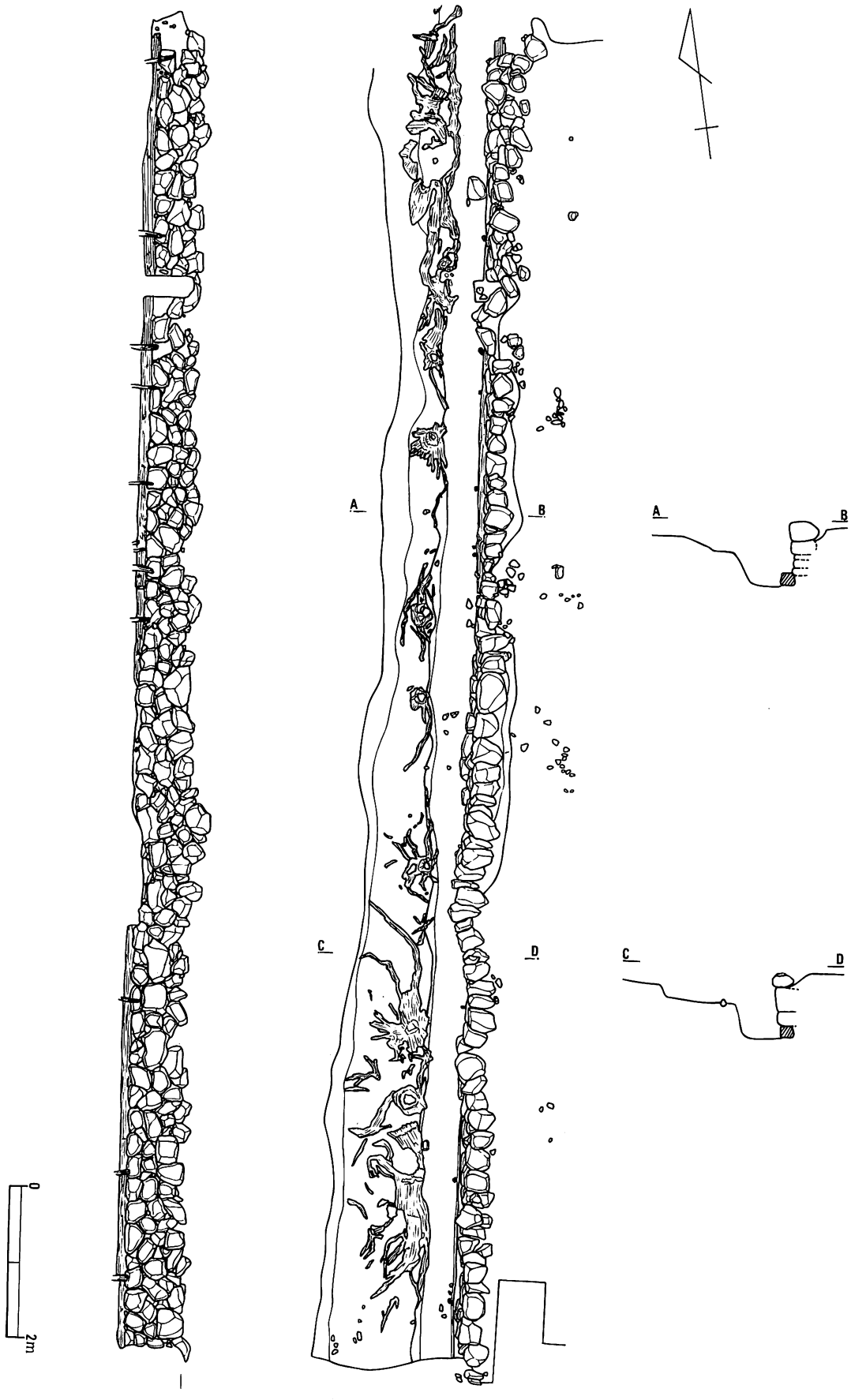
第５図　３号建物遺物出土位置（１/80）



第６図　３号建物周辺（土器溜）（１/20）

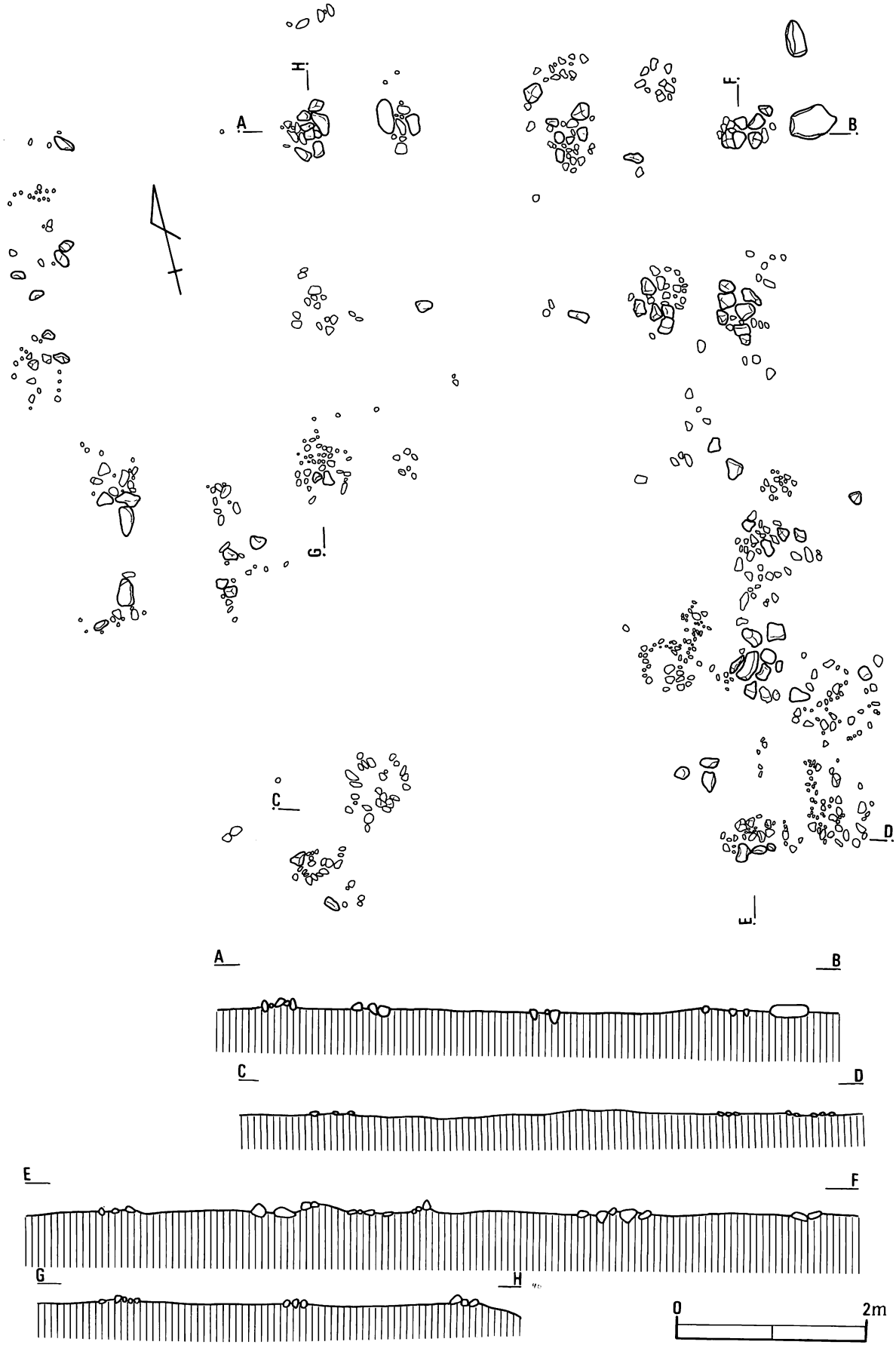


第７図　３号建物周辺遺物出土位置（北側）（１/80）

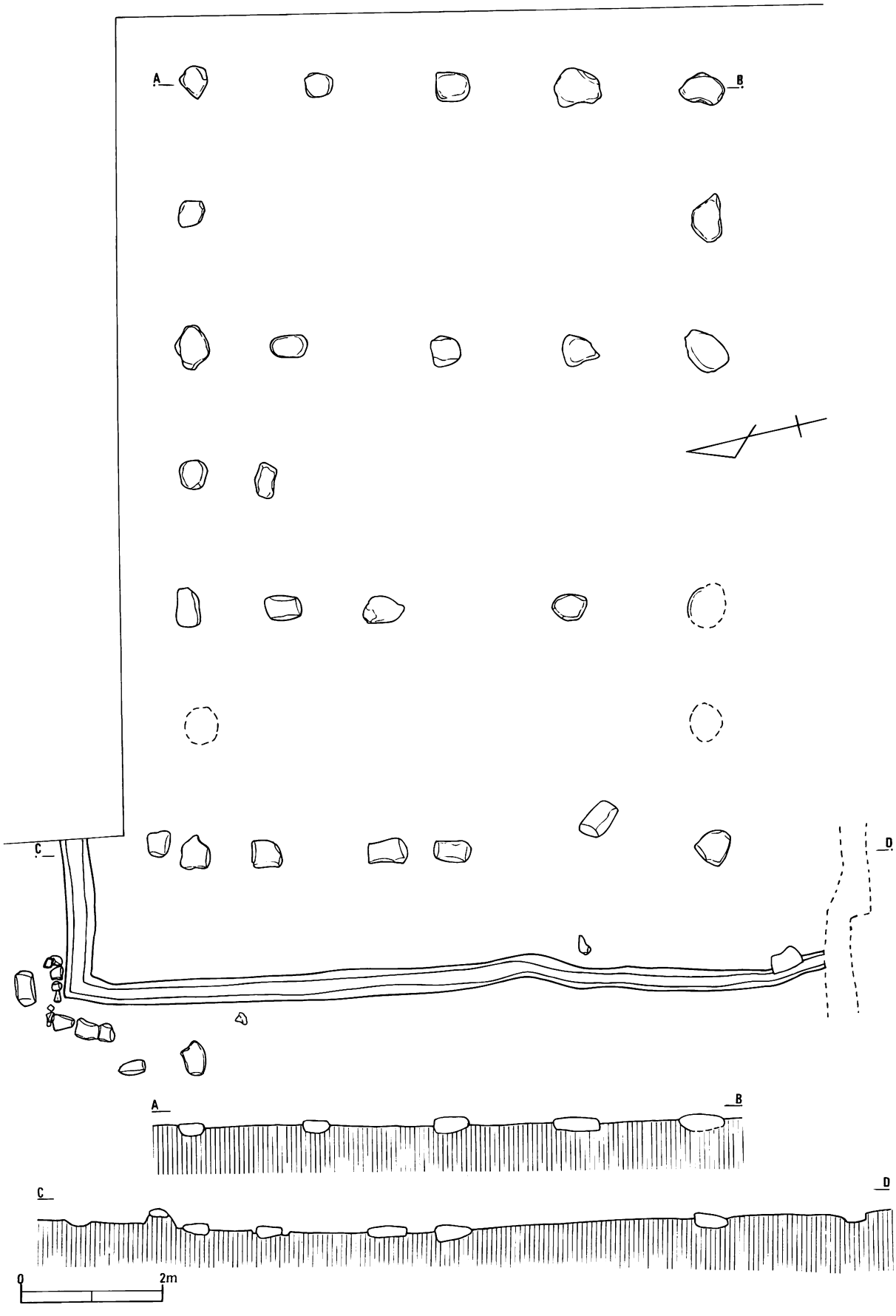


第８図　３号建物石垣と３号溝（１/80）

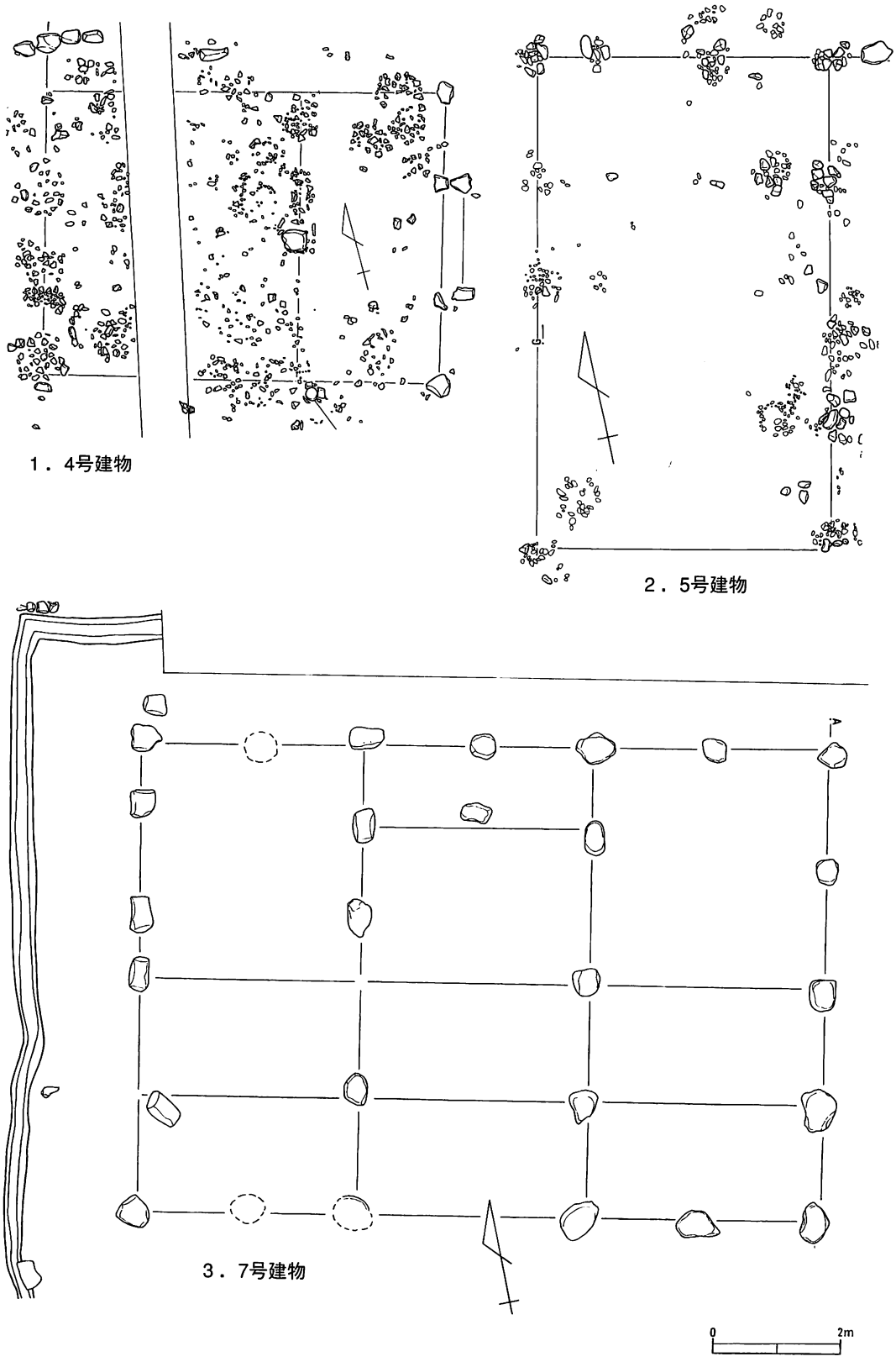
第９図　４号建物（１/60）



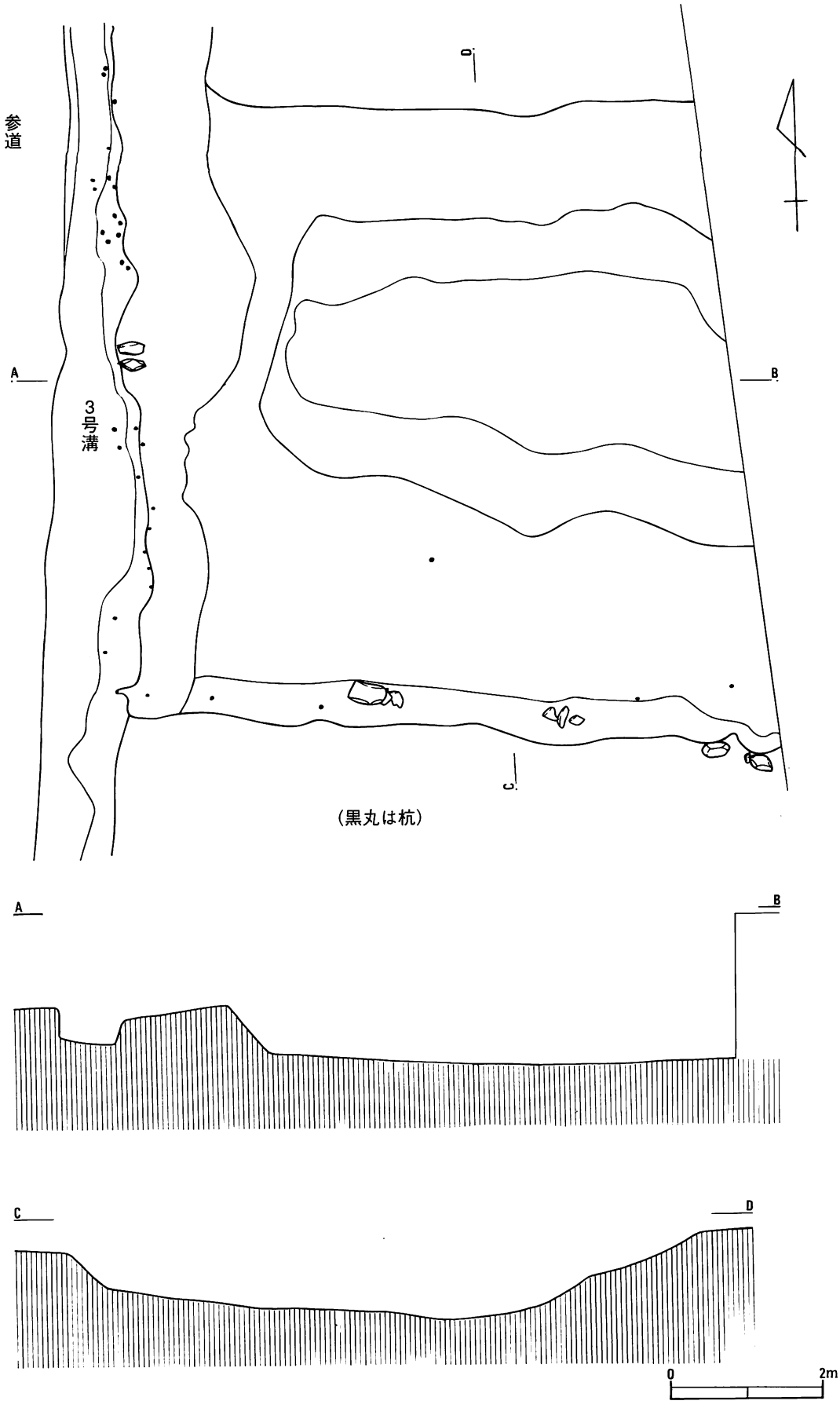
第10図　5号建物（1/60）



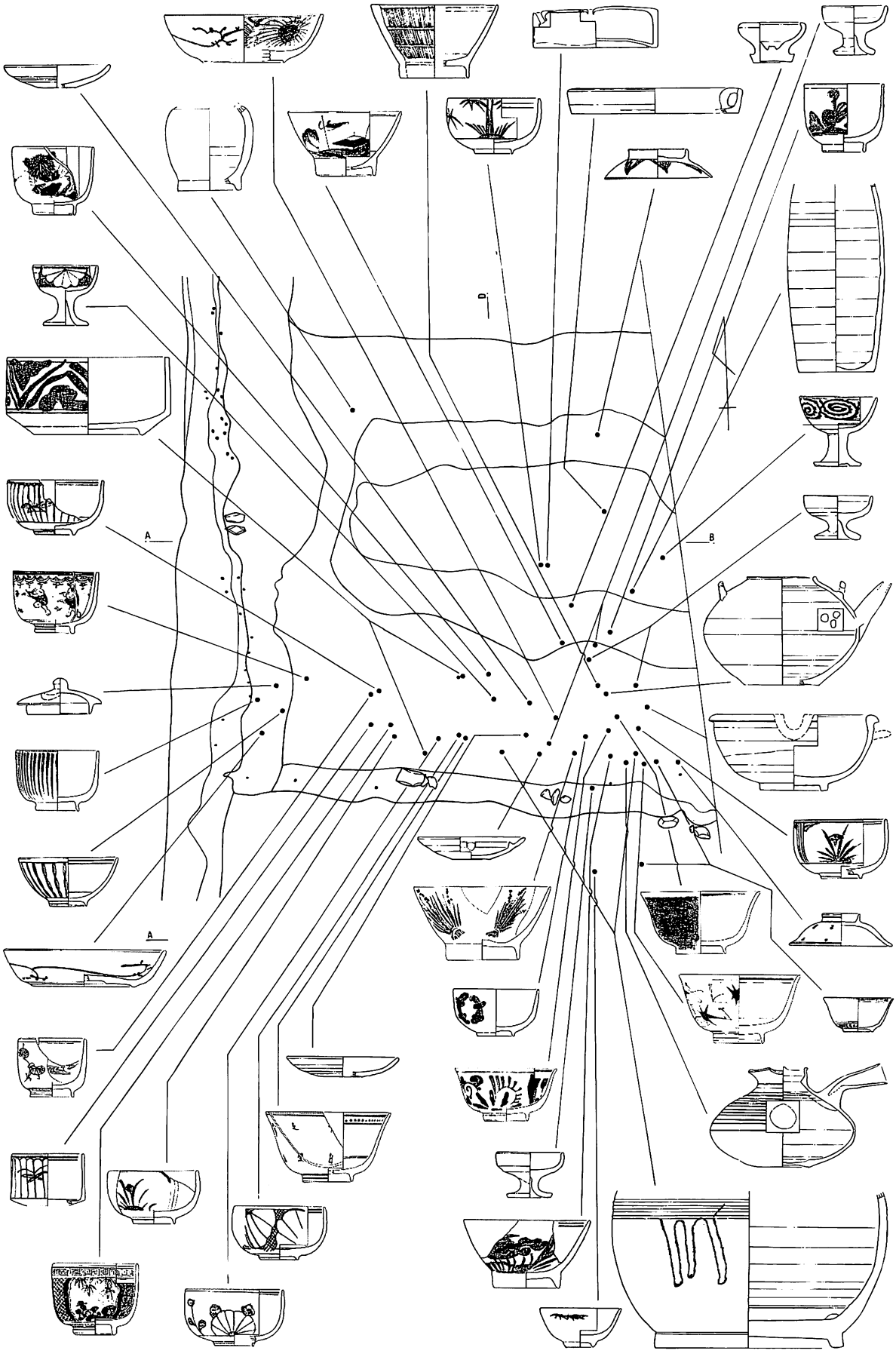
第11図　7号建物（1/80）



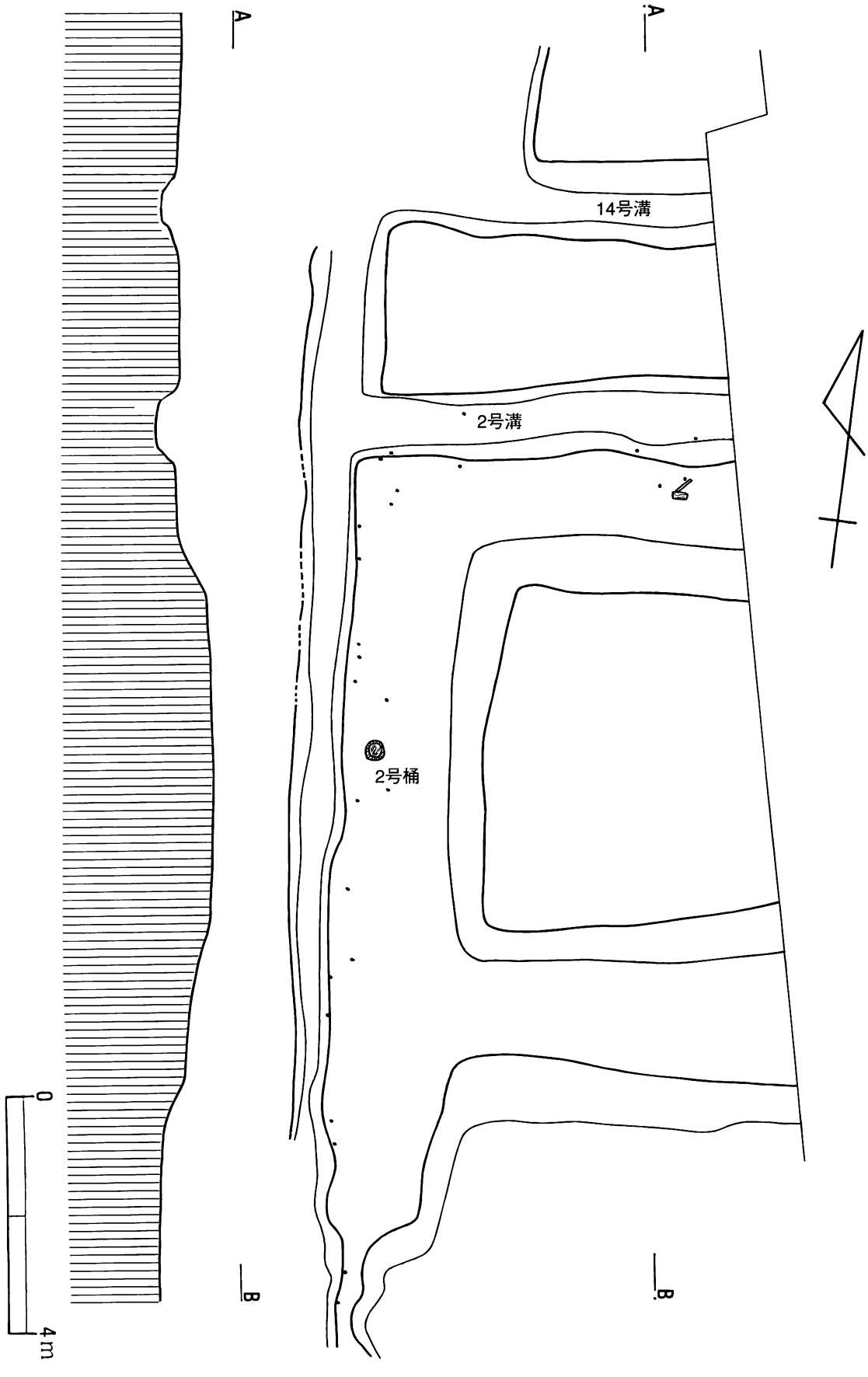
第12図　各建物の礎石配列（1/100）



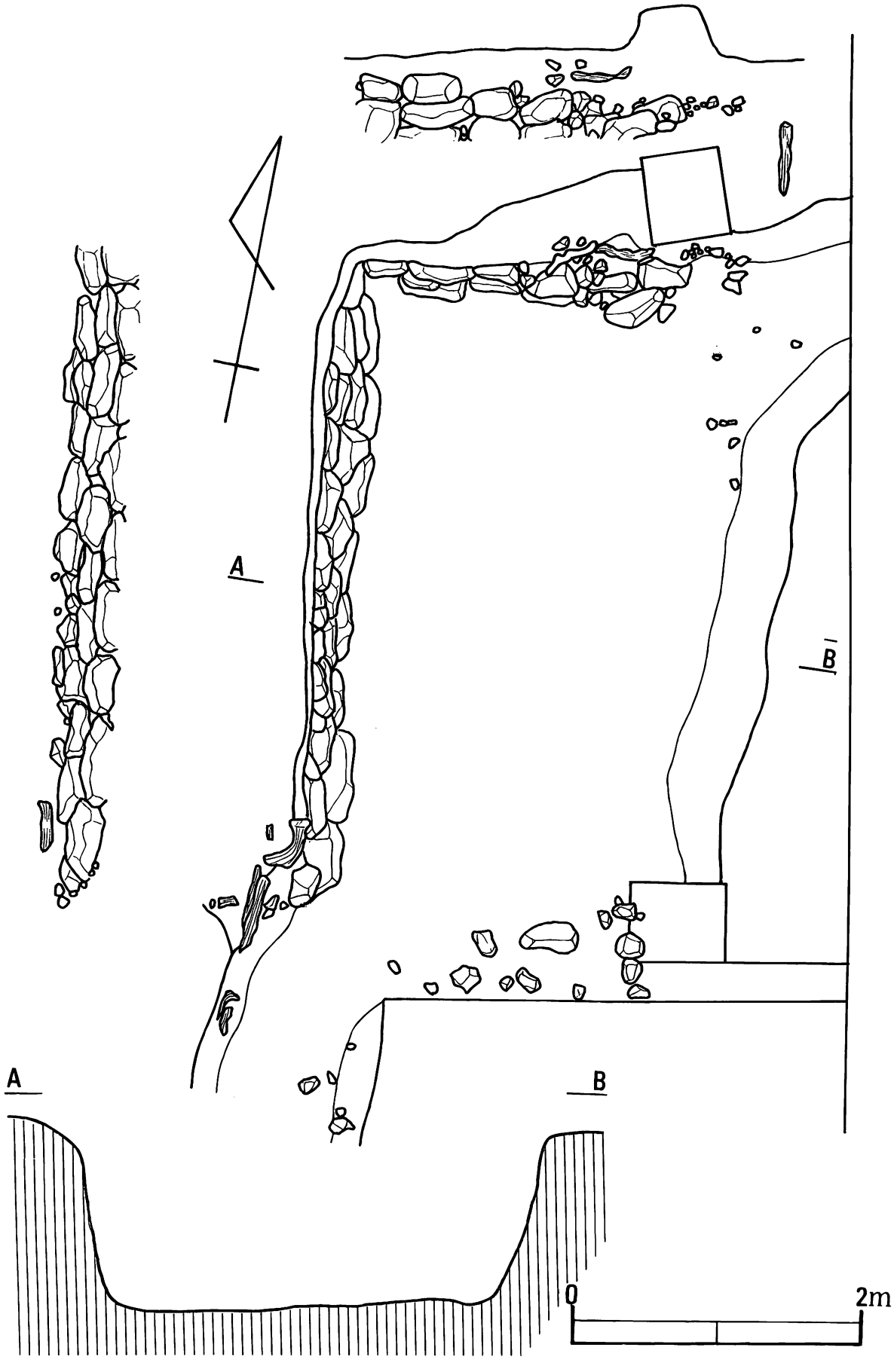
第13図　1号溝（1/80）



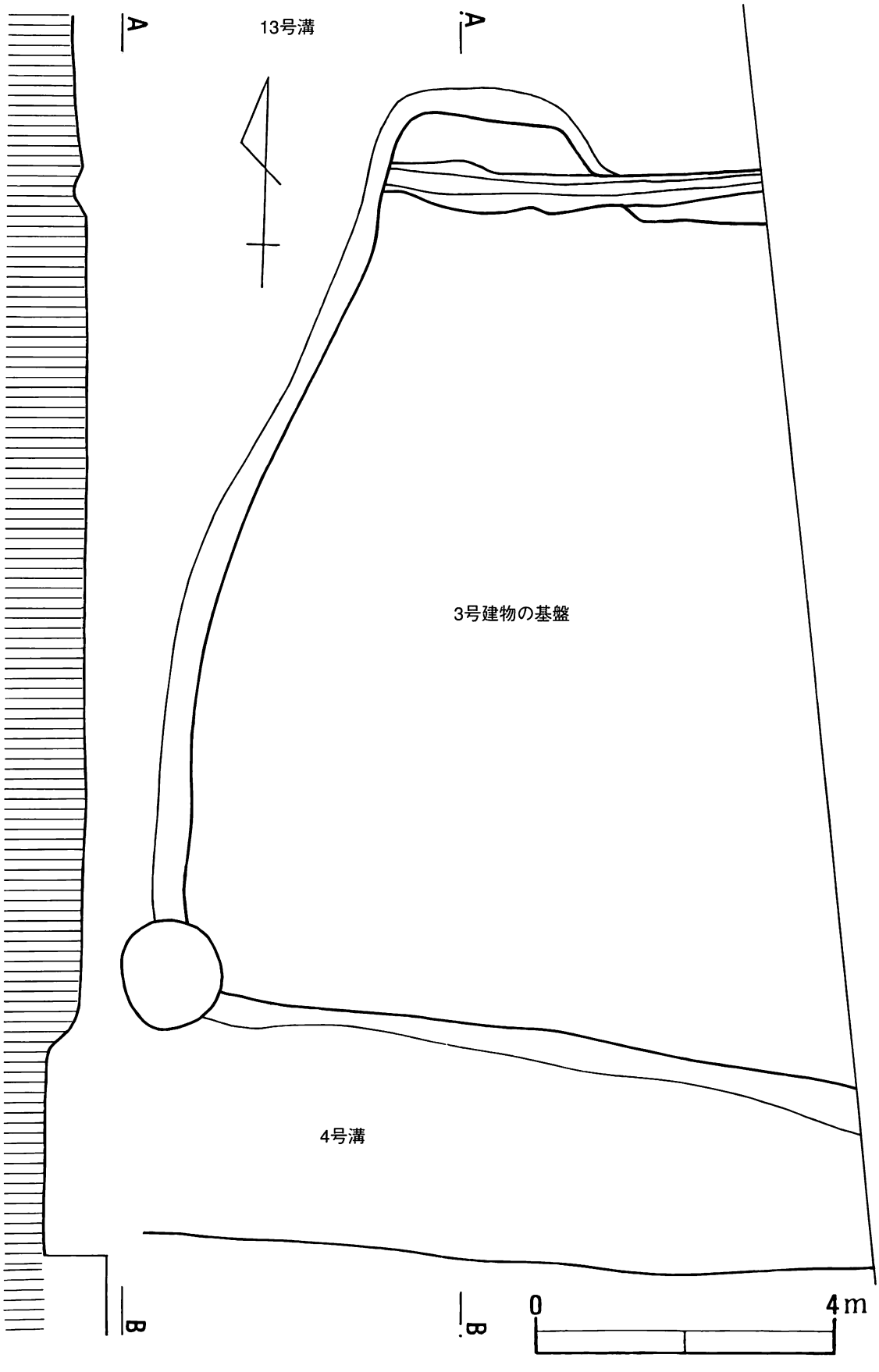
第14図　1号溝遺物出土位置（遺構1/100）



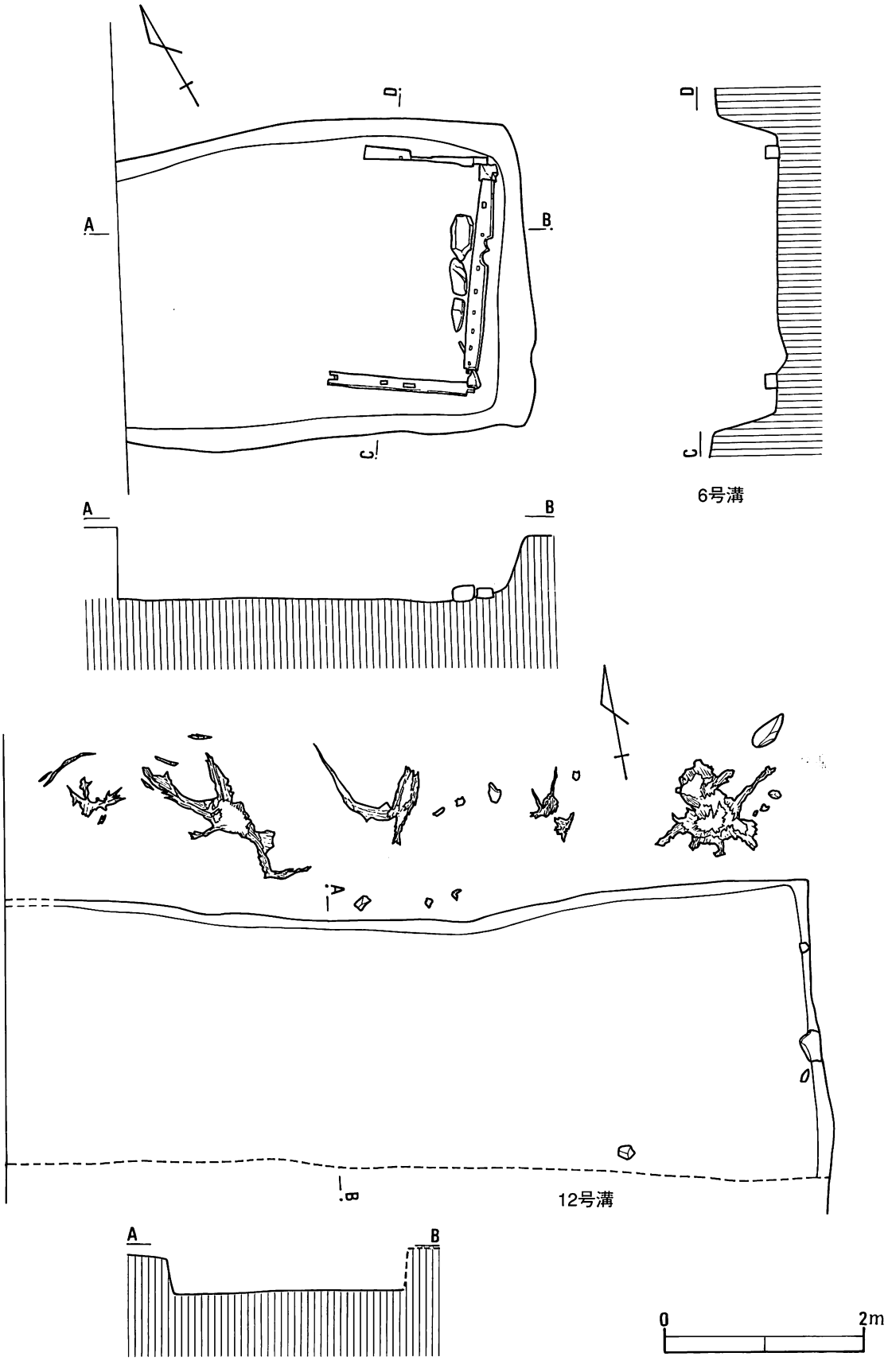
第15図　2号建物下部・2号溝・14号溝（1/100）



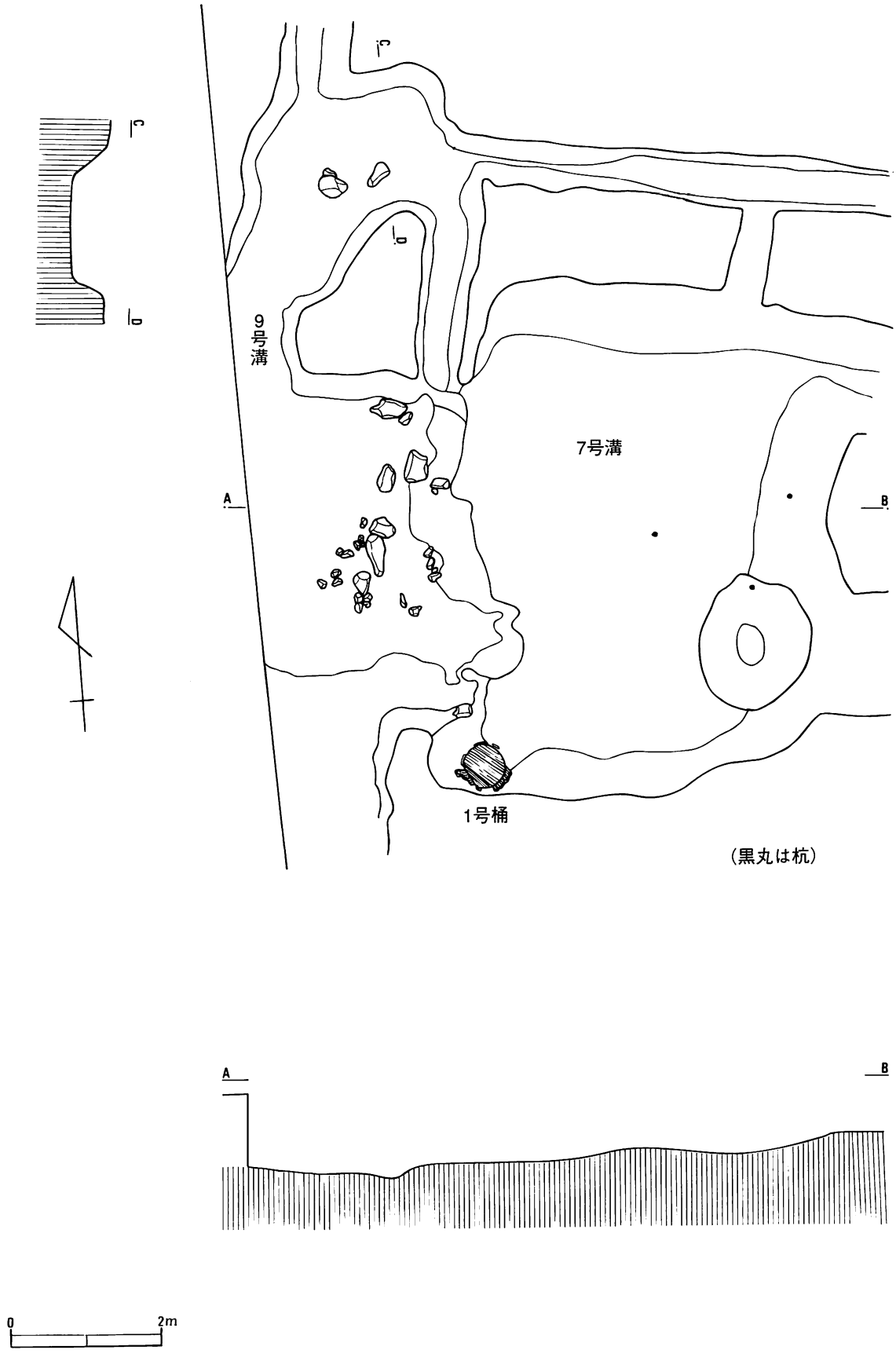
第16図　3号溝部分（1/40）



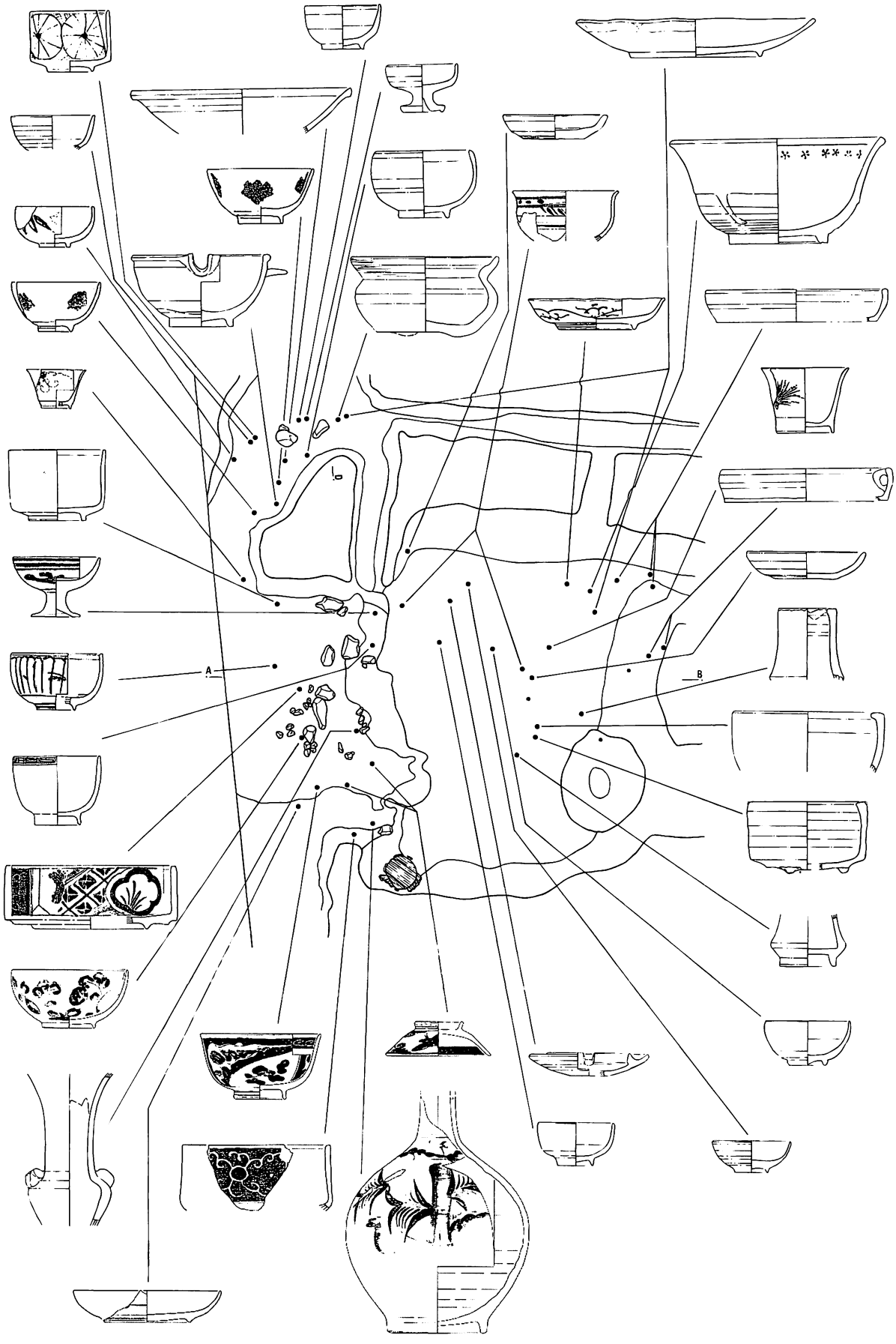
第17図　4号溝・13号溝（1/80）



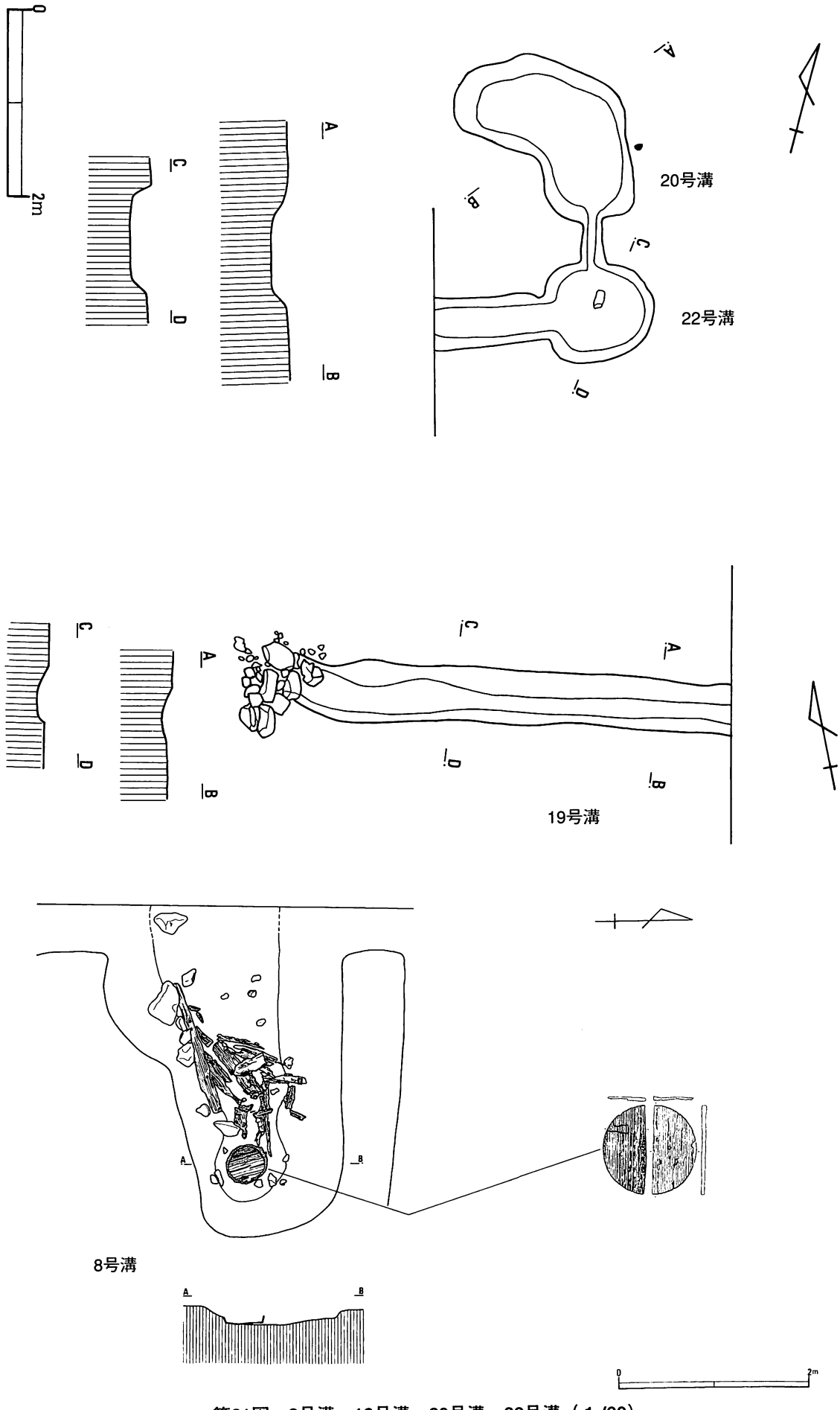
第18図　6号溝・12号溝（1/60）



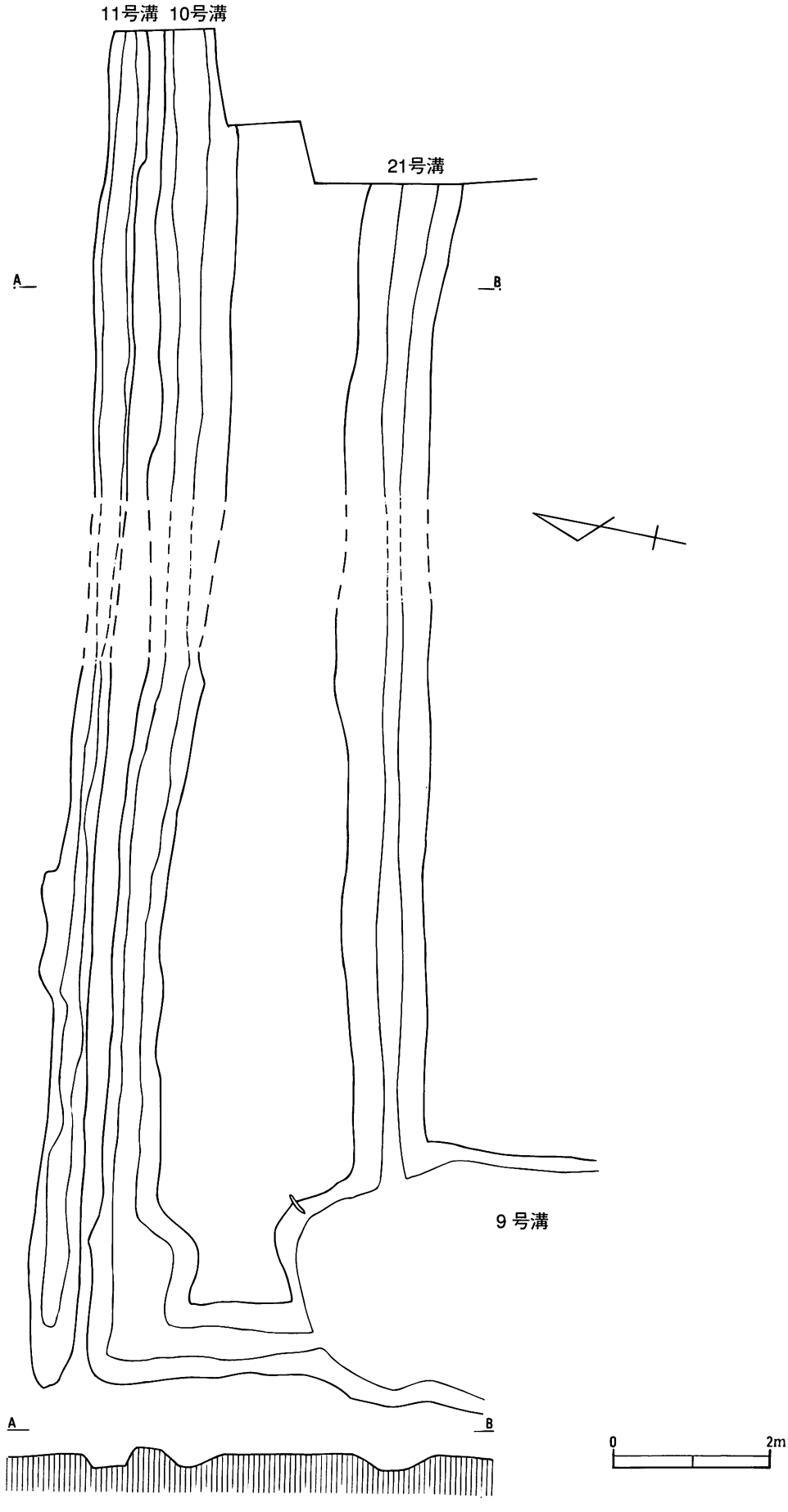
第19図　1号桶・7号溝・9号溝（1/80）



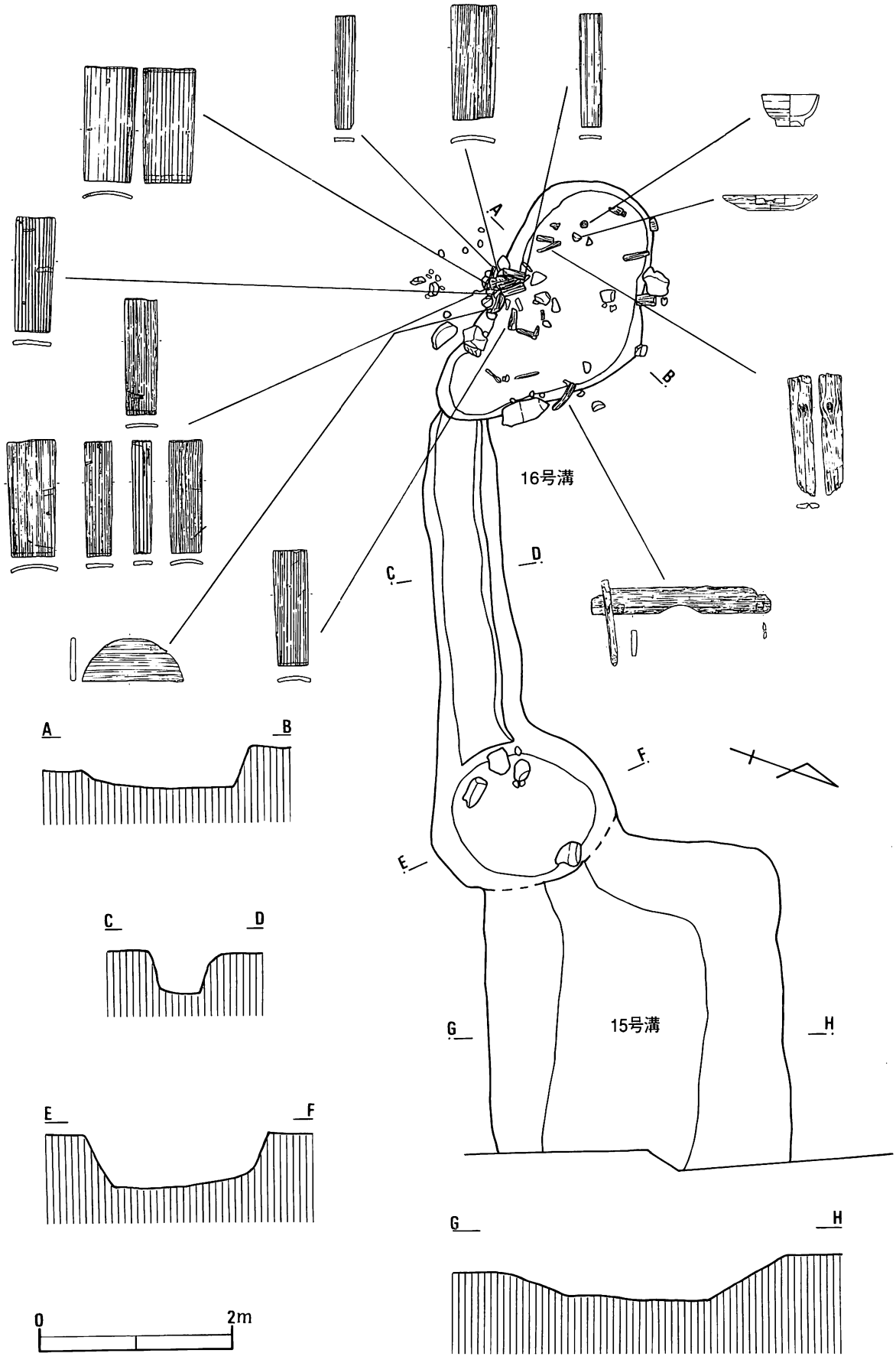
第20図　7号・9号溝遺物出土位置（遺構1/100）



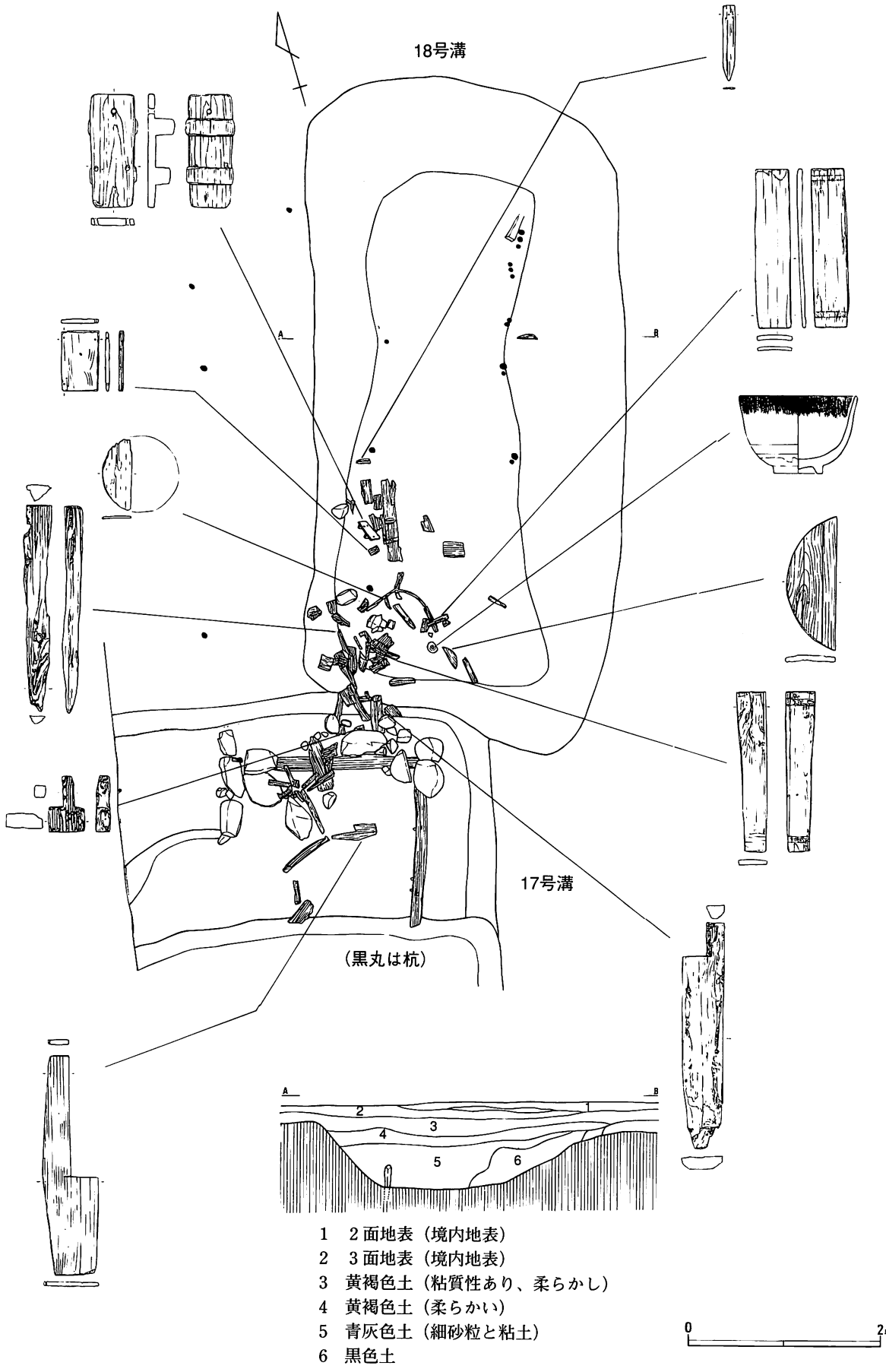
第21図　8号溝・19号溝・20号溝・22号溝（1/60）



第22図　10号溝・11号溝・21号溝（1/80）

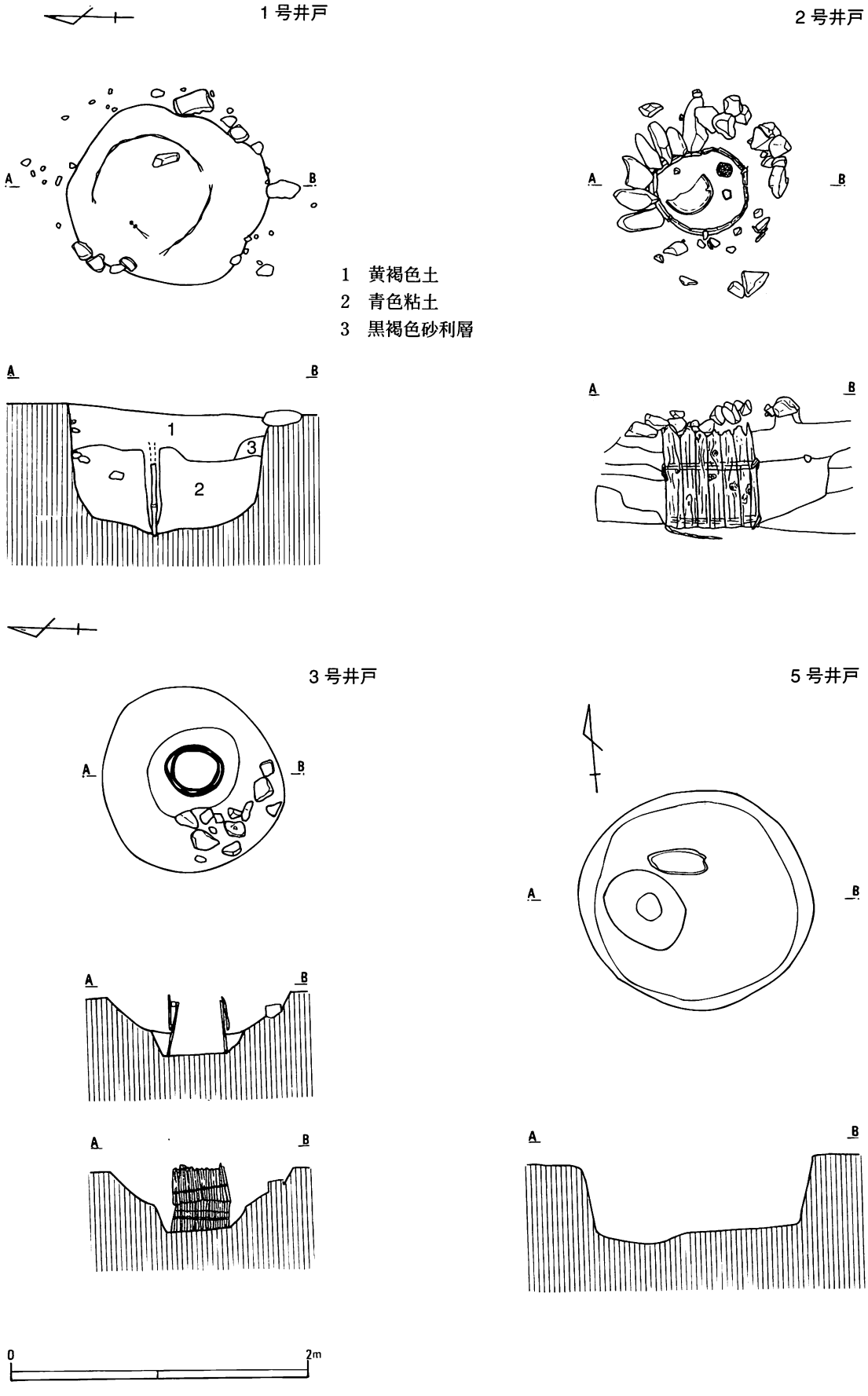


第23図　15号溝・16号溝（1/60）

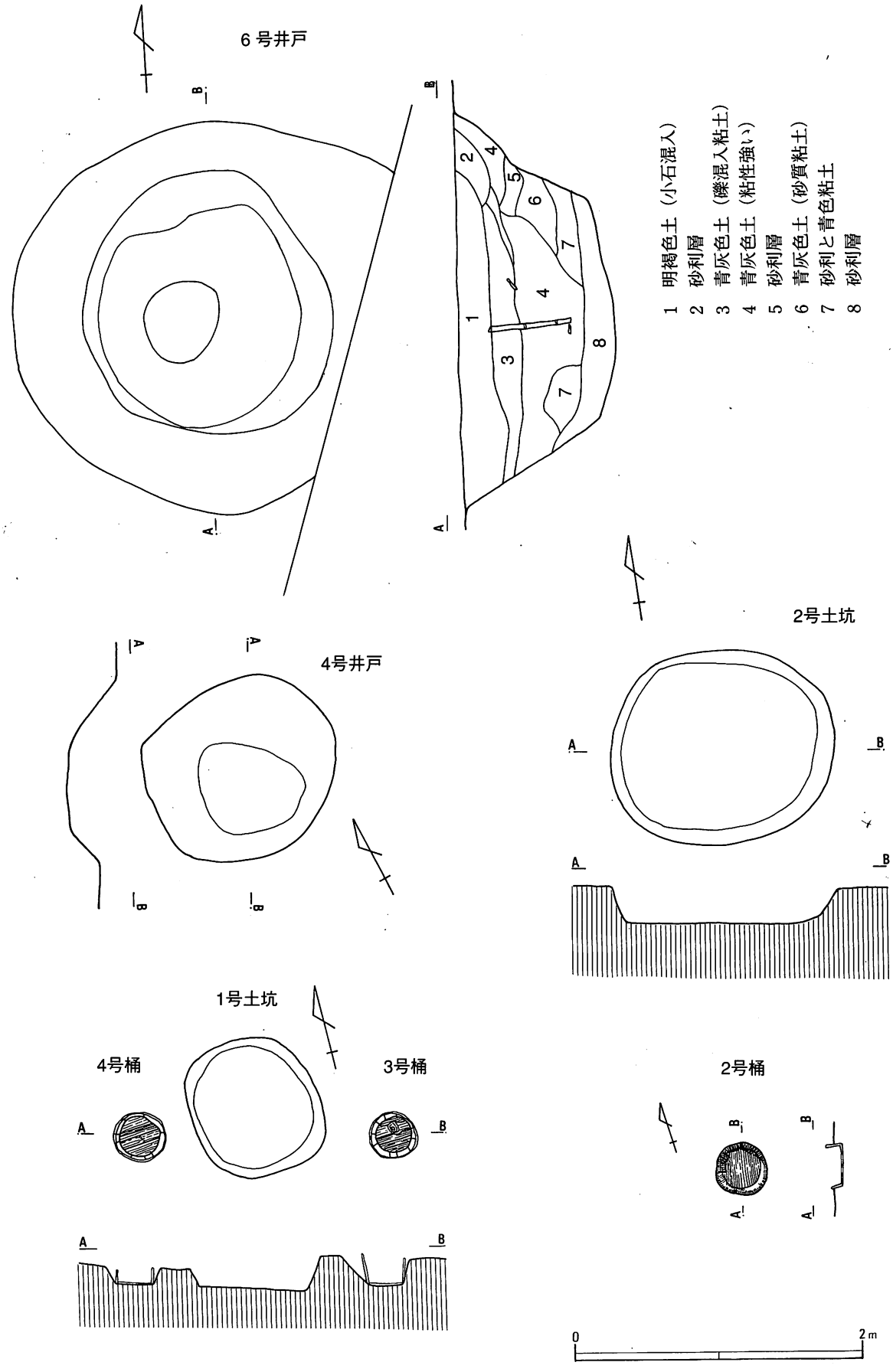


1　2面地表（境内地表）
2　3面地表（境内地表）
3　黄褐色土（粘質性あり、柔らかし）
4　黄褐色土（柔らかい）
5　青灰色土（細砂粒と粘土）
6　黒色土

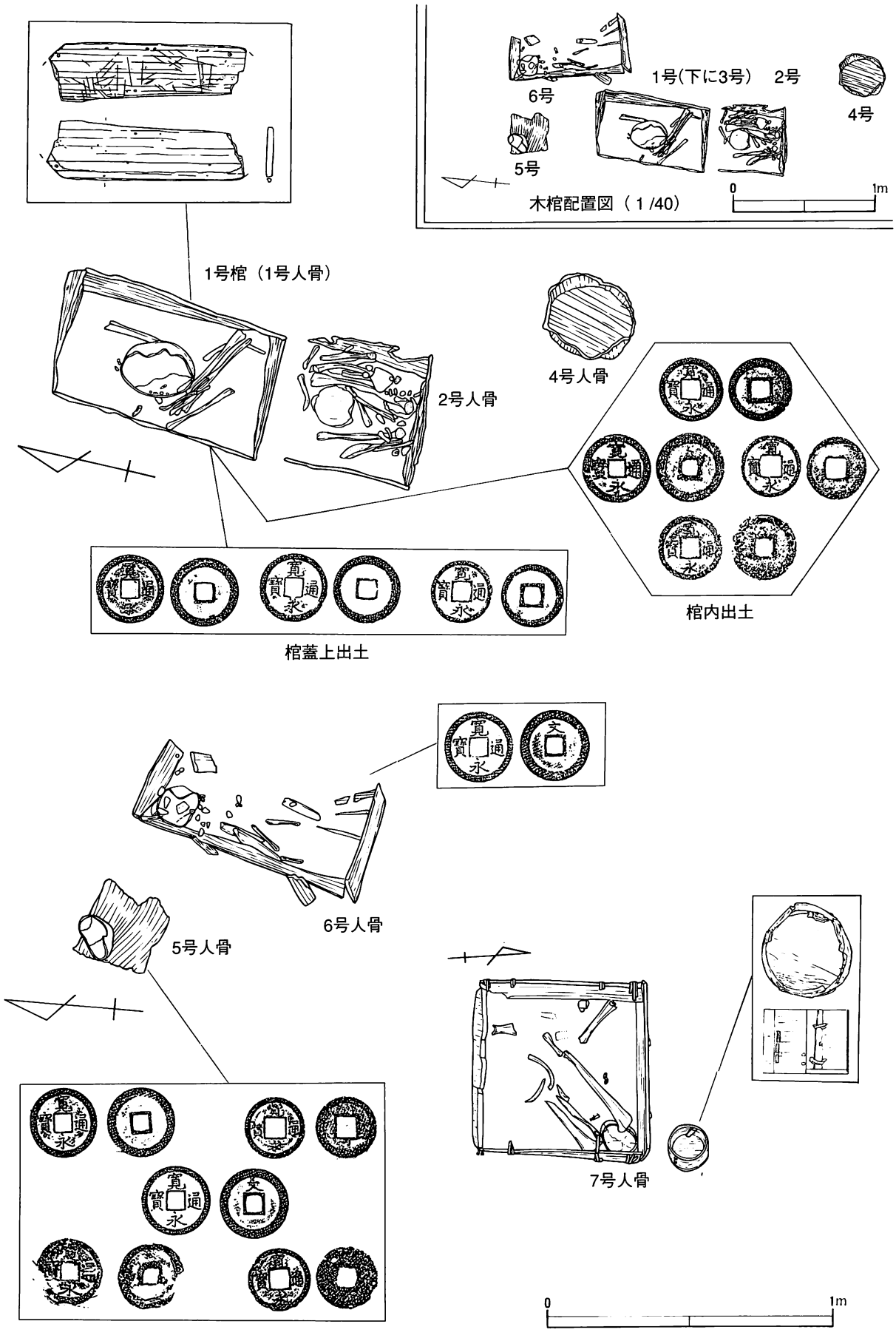
第24図　17号溝・18号溝（1/60）



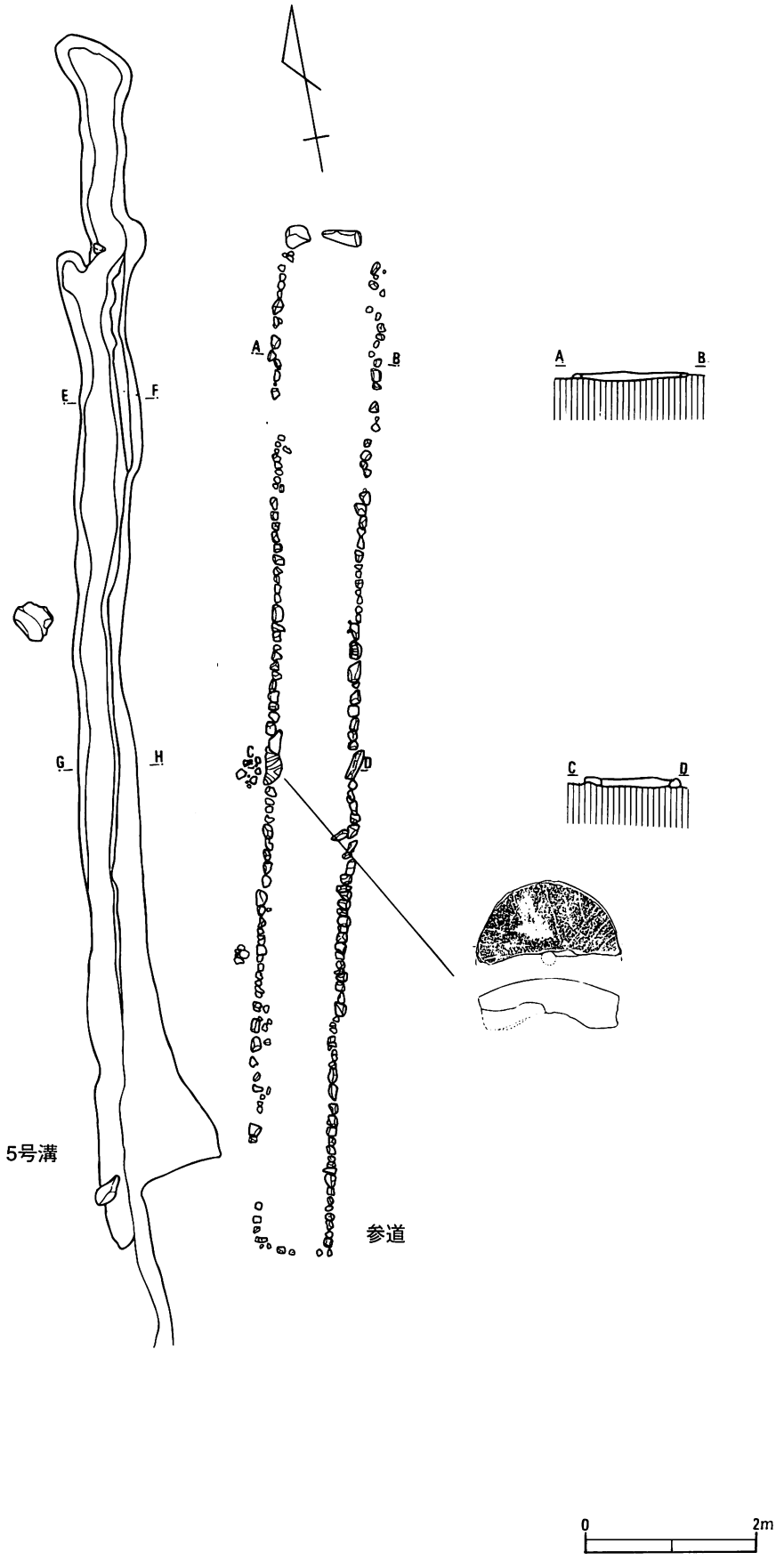
第25図　1号・2号・3号・5号井戸（1/40）



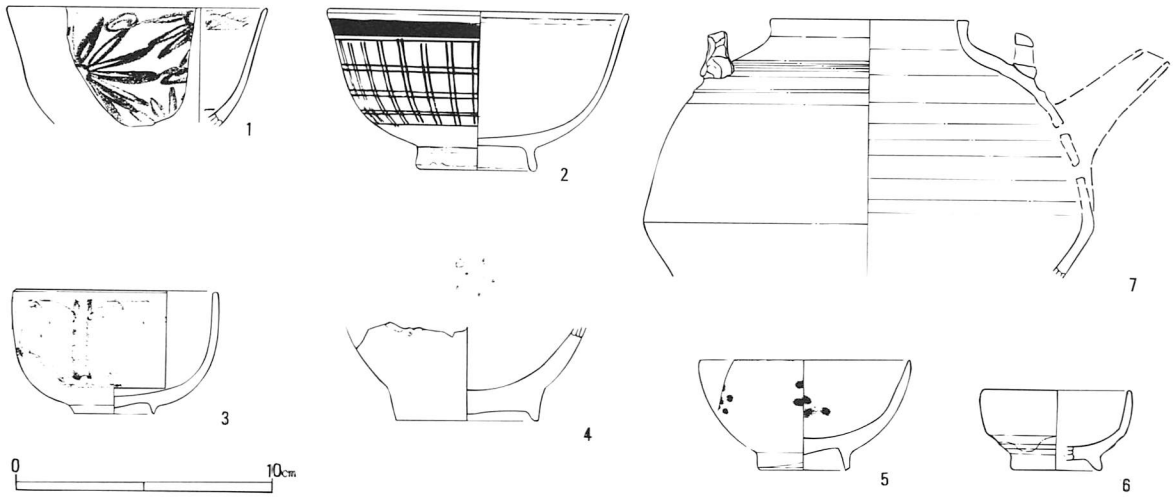
第26図　1号土坑・2号土坑・4号井戸・6号井戸・2号桶・3号桶・4号桶（1/40）



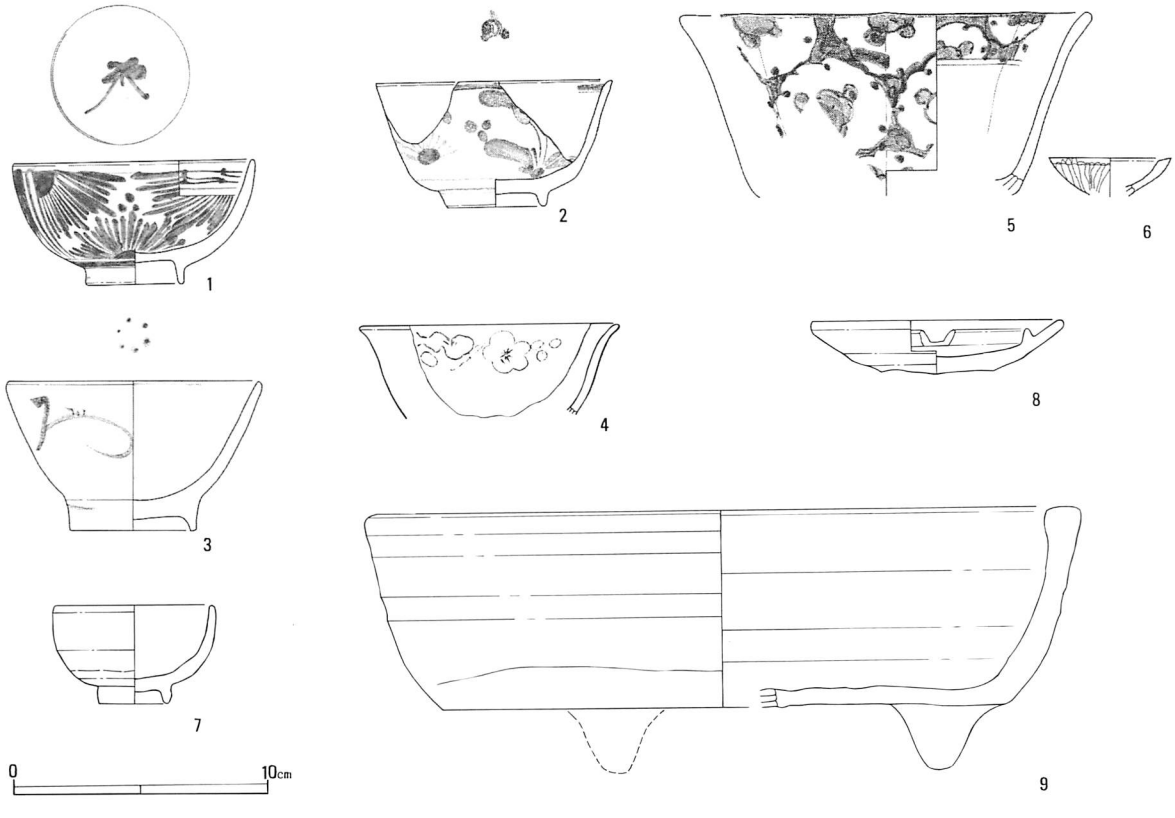
第27図　埋葬人骨（1/20）



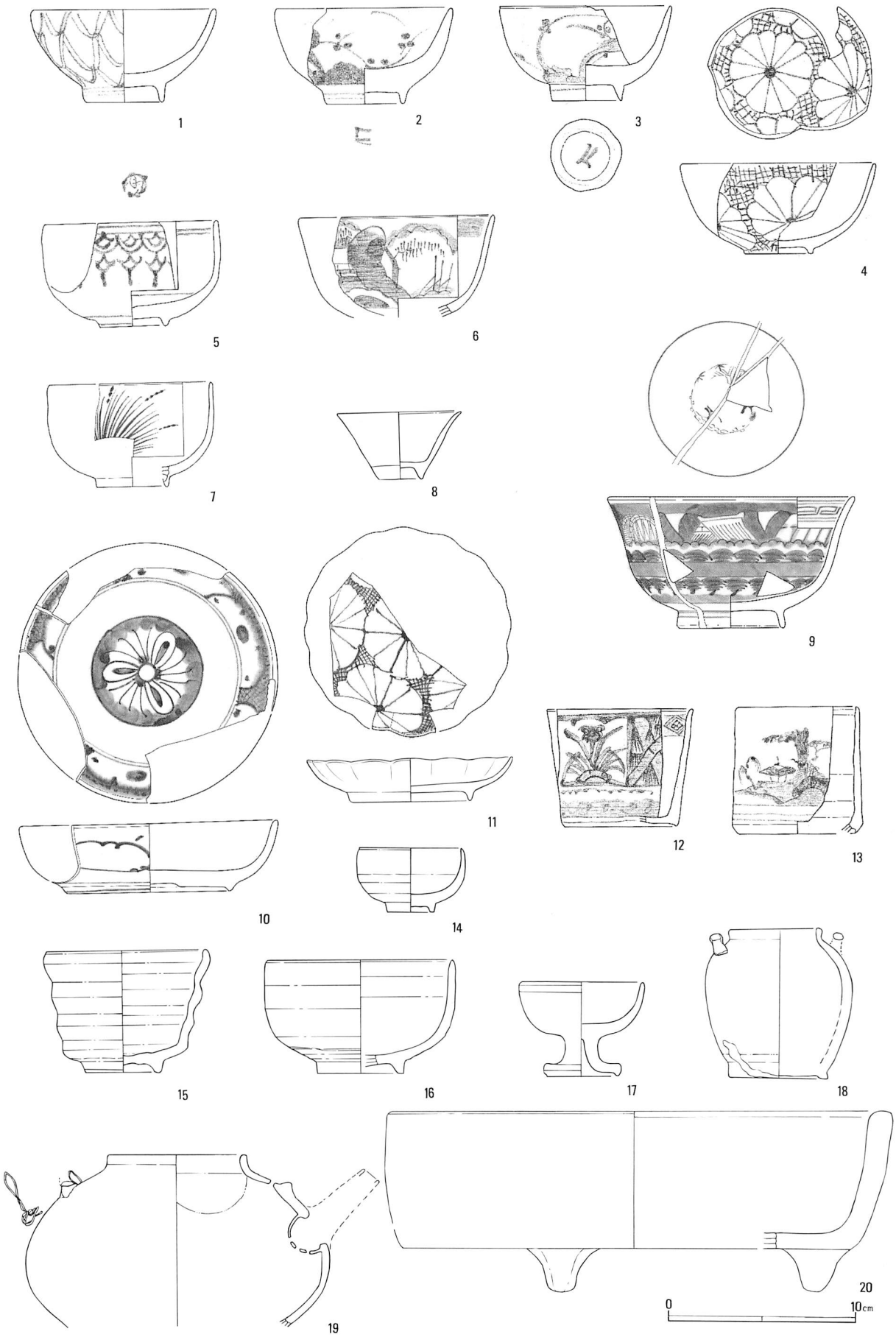
第28図　5号溝・参道（1/80）



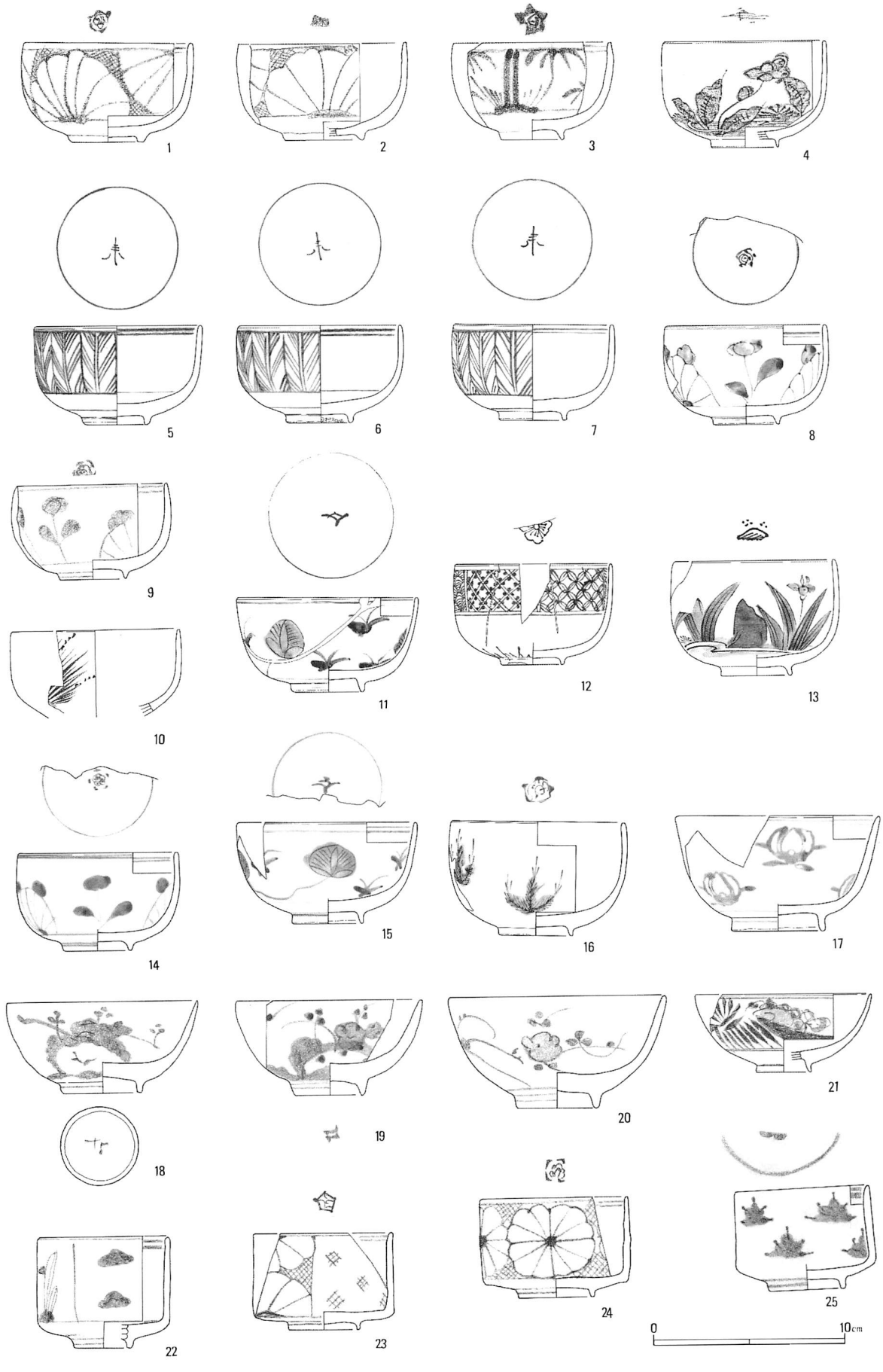
第29図　1号建物（1～2・7）・1面（3～6）出土磁器・炻器・陶器（1/3）



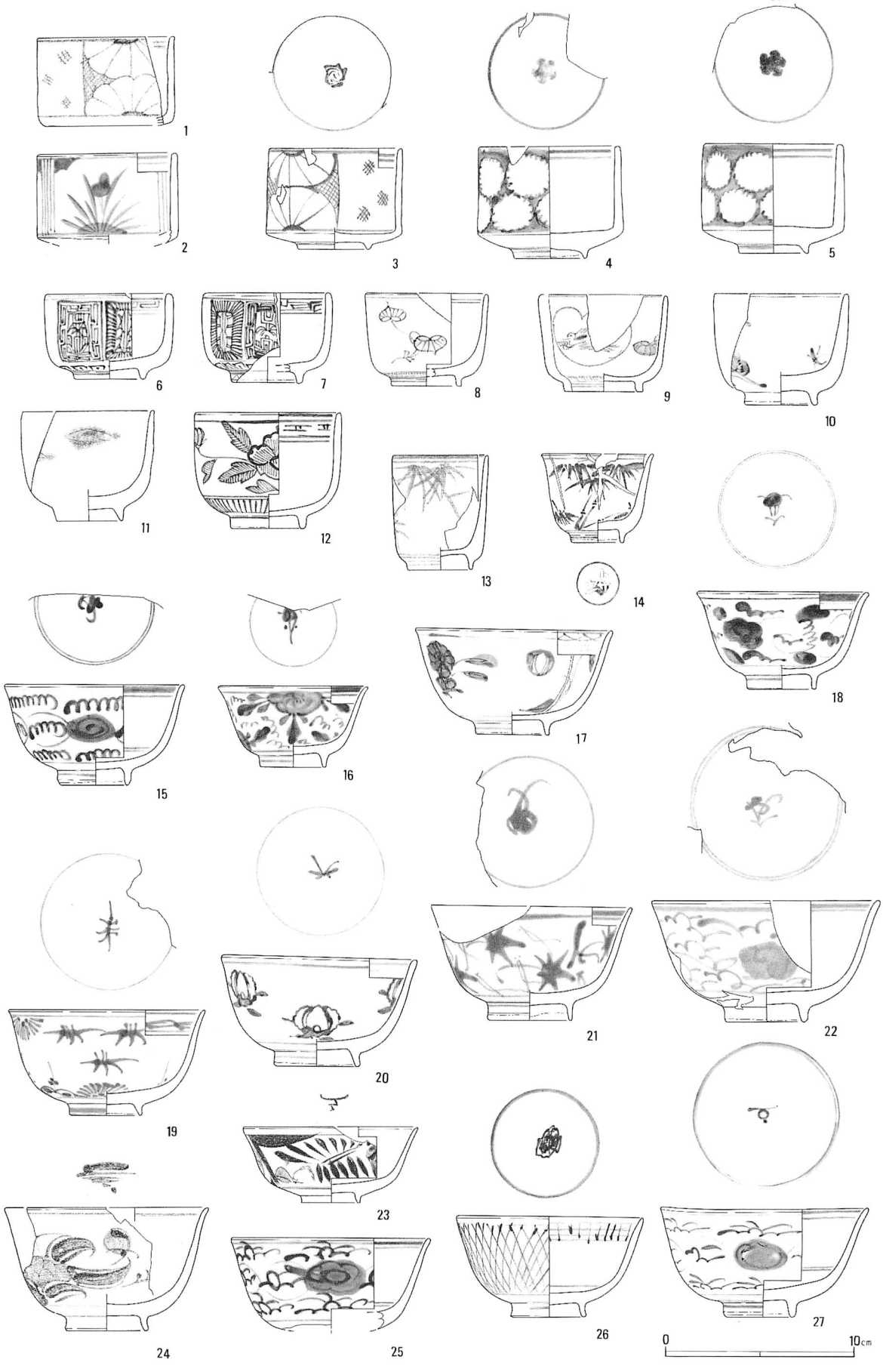
第30図　2号建物出土磁器・陶器・炻器・土器（1/3）



第31図　3号建物出土磁器・陶器・土器（1/3）



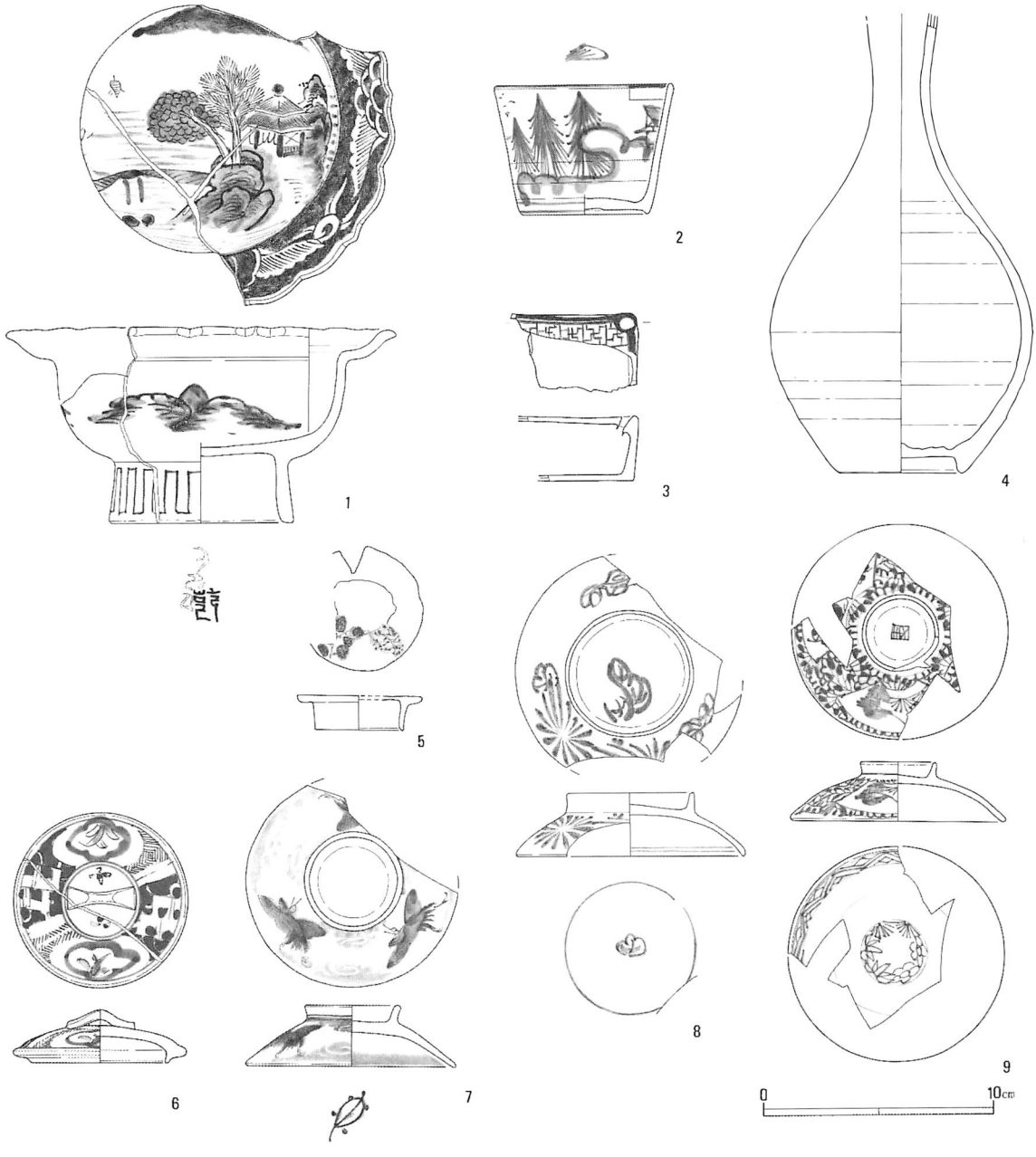
第32図　3号建物周辺出土磁器（1/3）



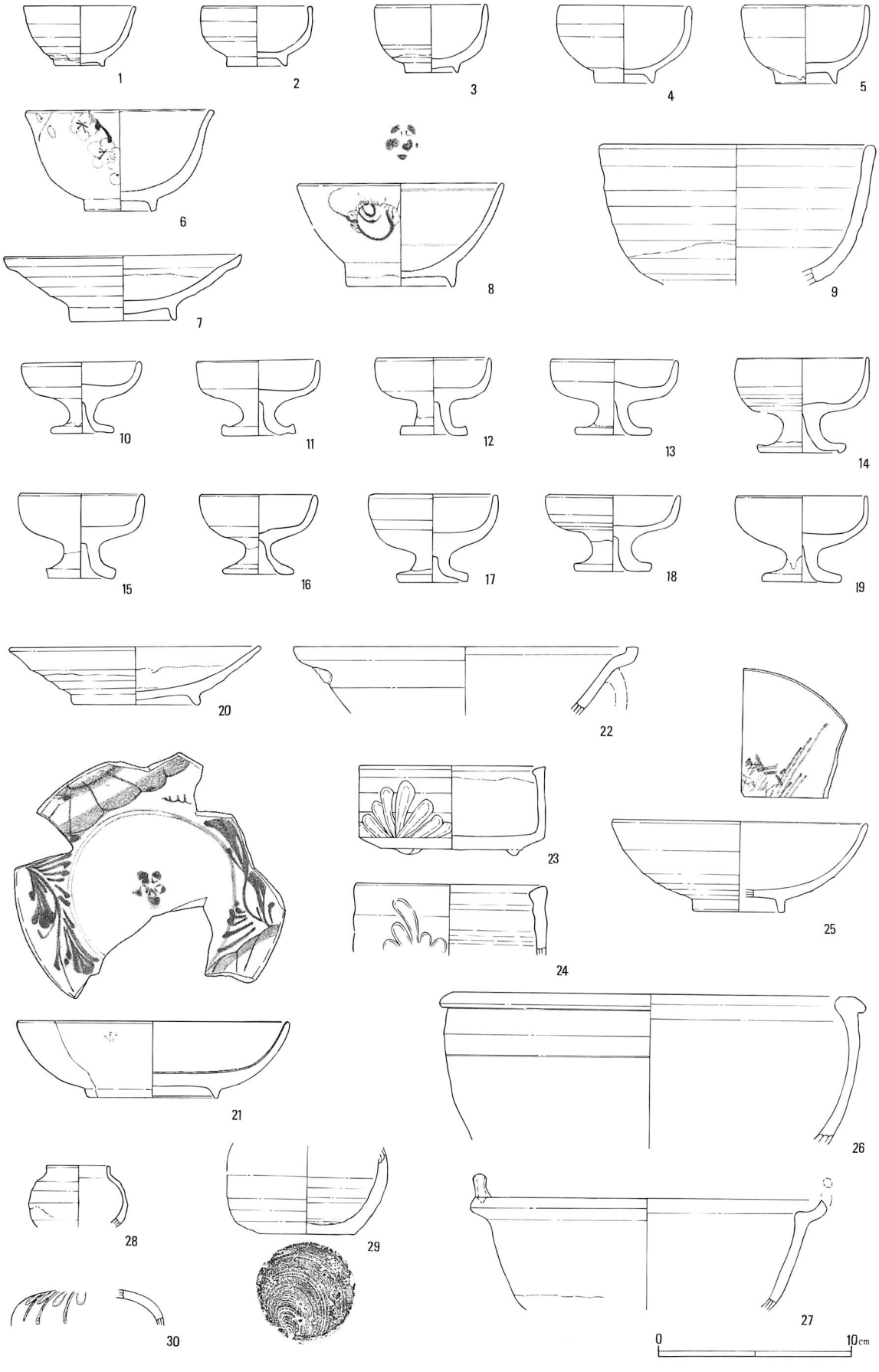
第33図　3号建物周辺出土磁器・炻器（1/3）

第34図　3号建物周辺出土磁器・炻器（1/3）

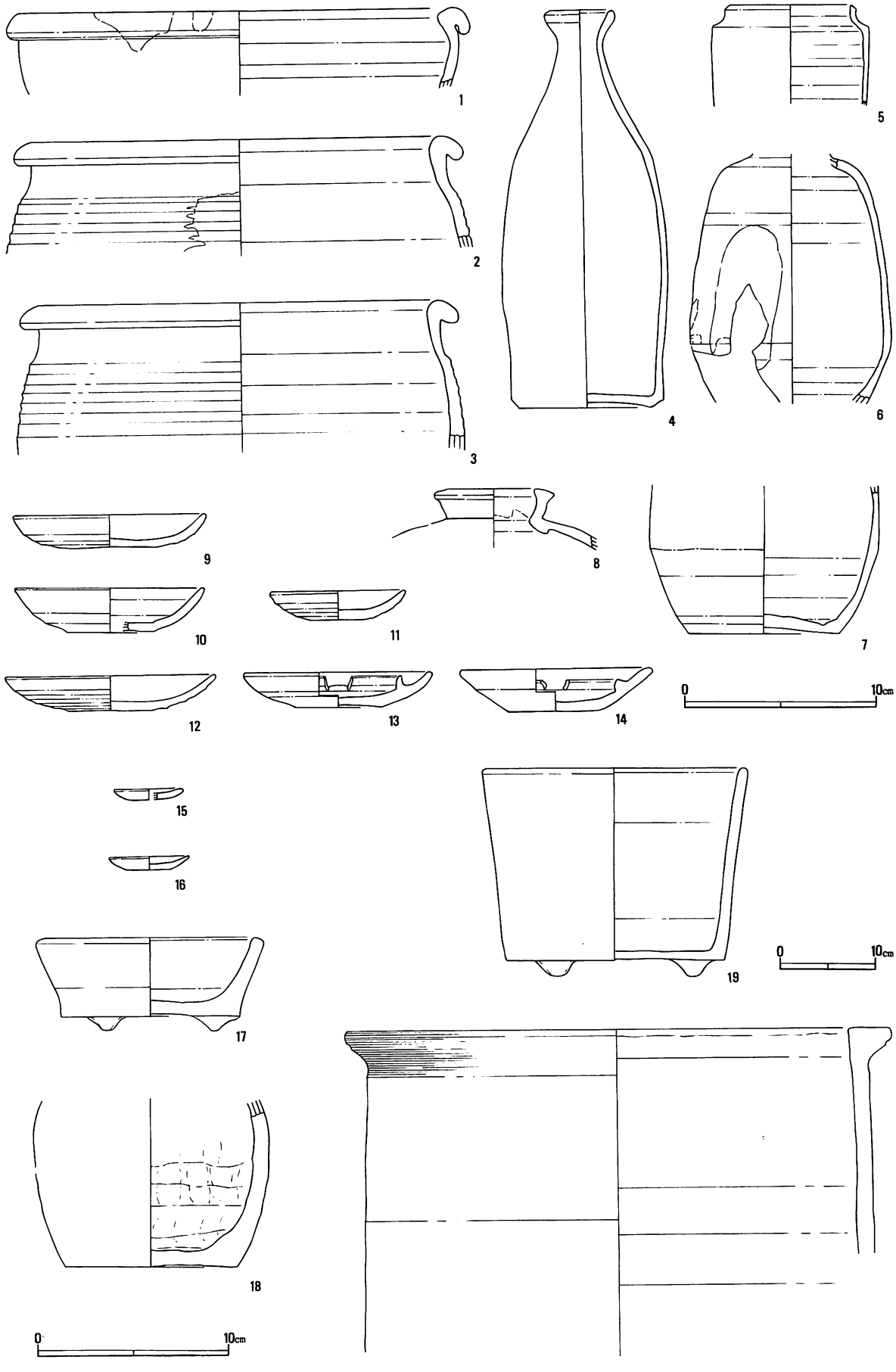
第35図　3号建物周辺出土磁器（1/3）



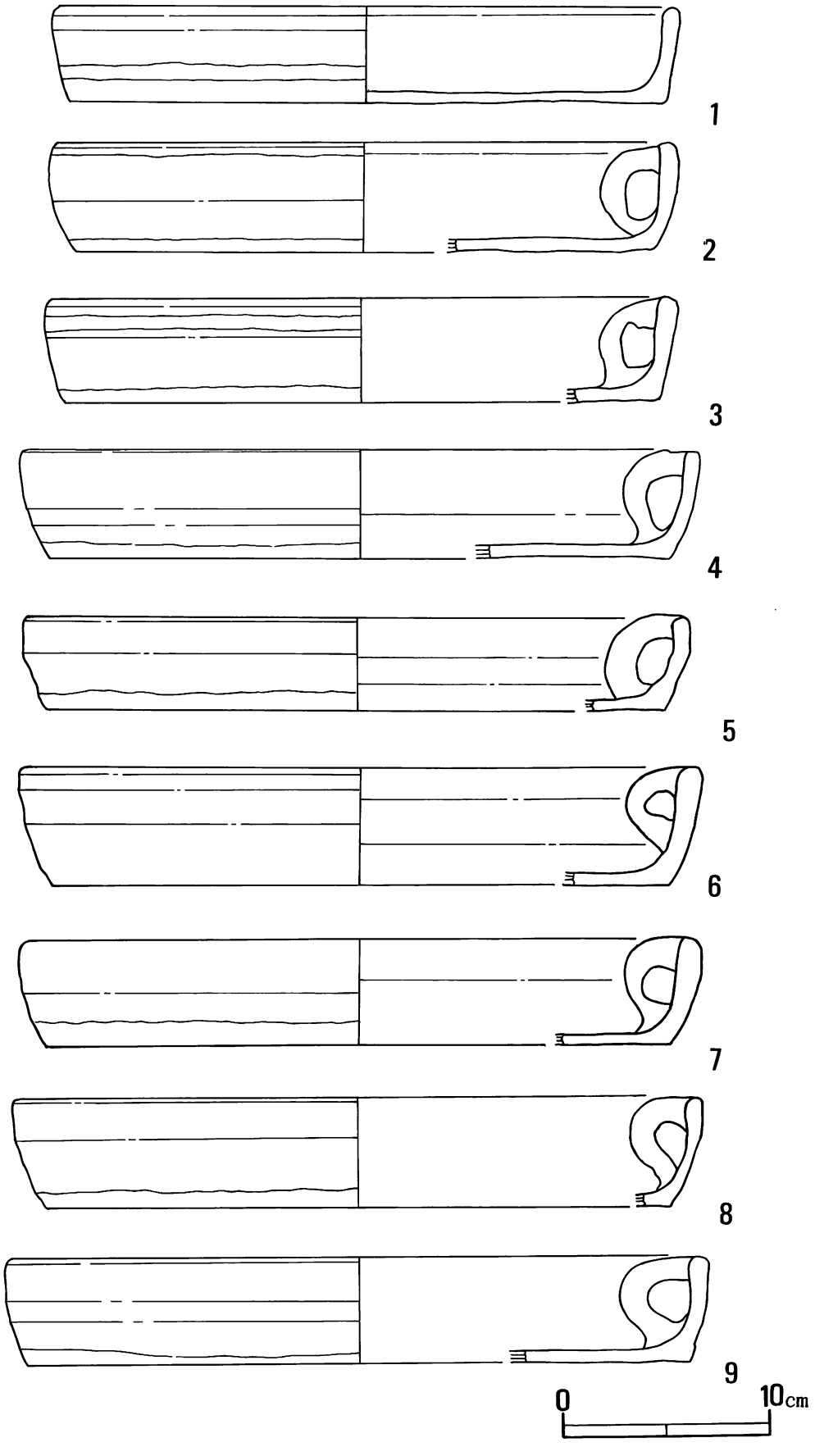
第36図　3号建物周辺出土磁器（1/3）



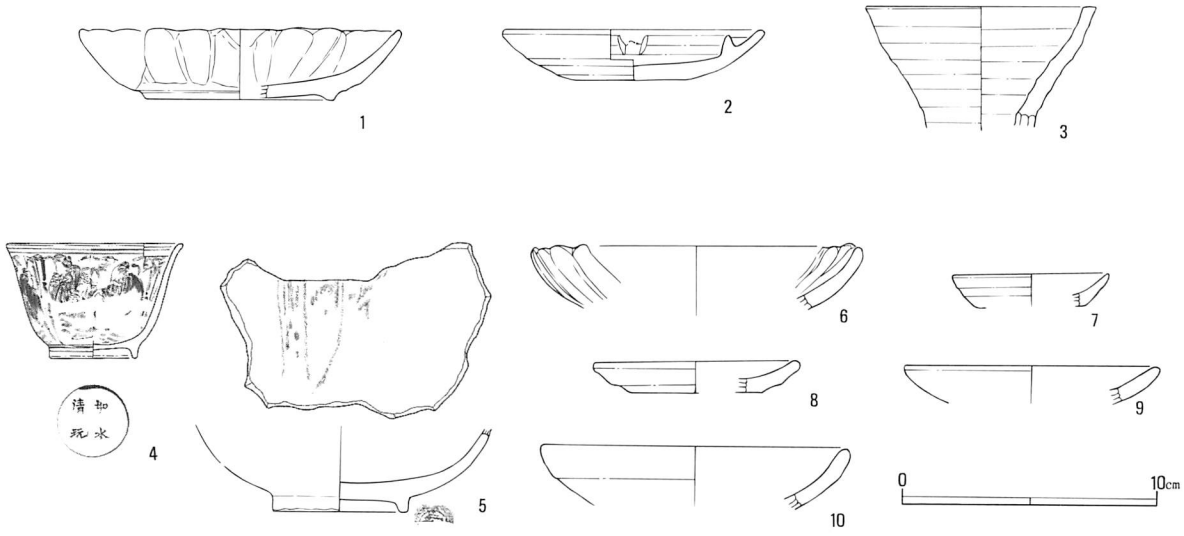
第37図　3号建物周辺出土陶器・炻器（1/3）



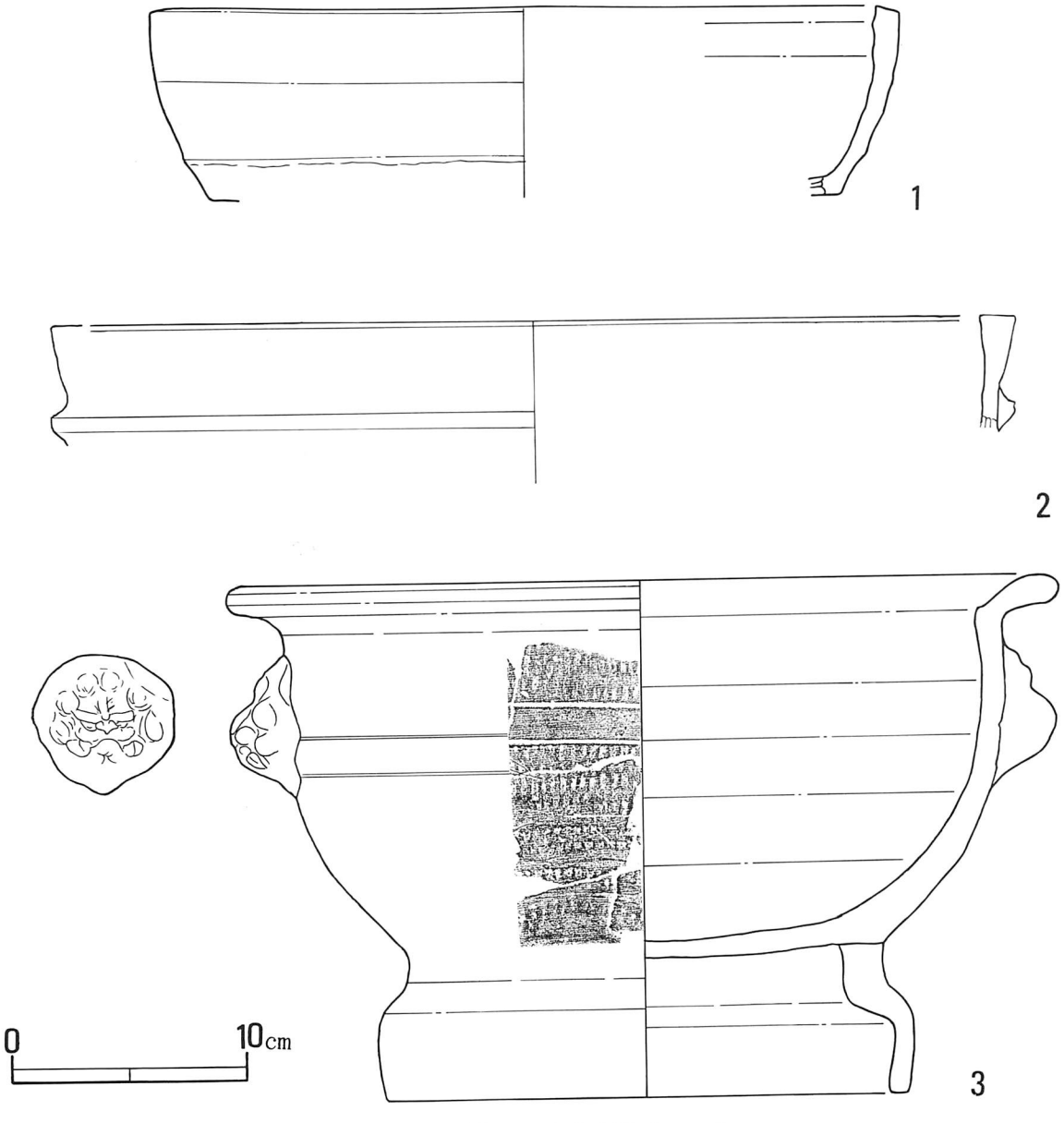
第38図　3号建物周辺出土陶器・土器（1/3・1/6）



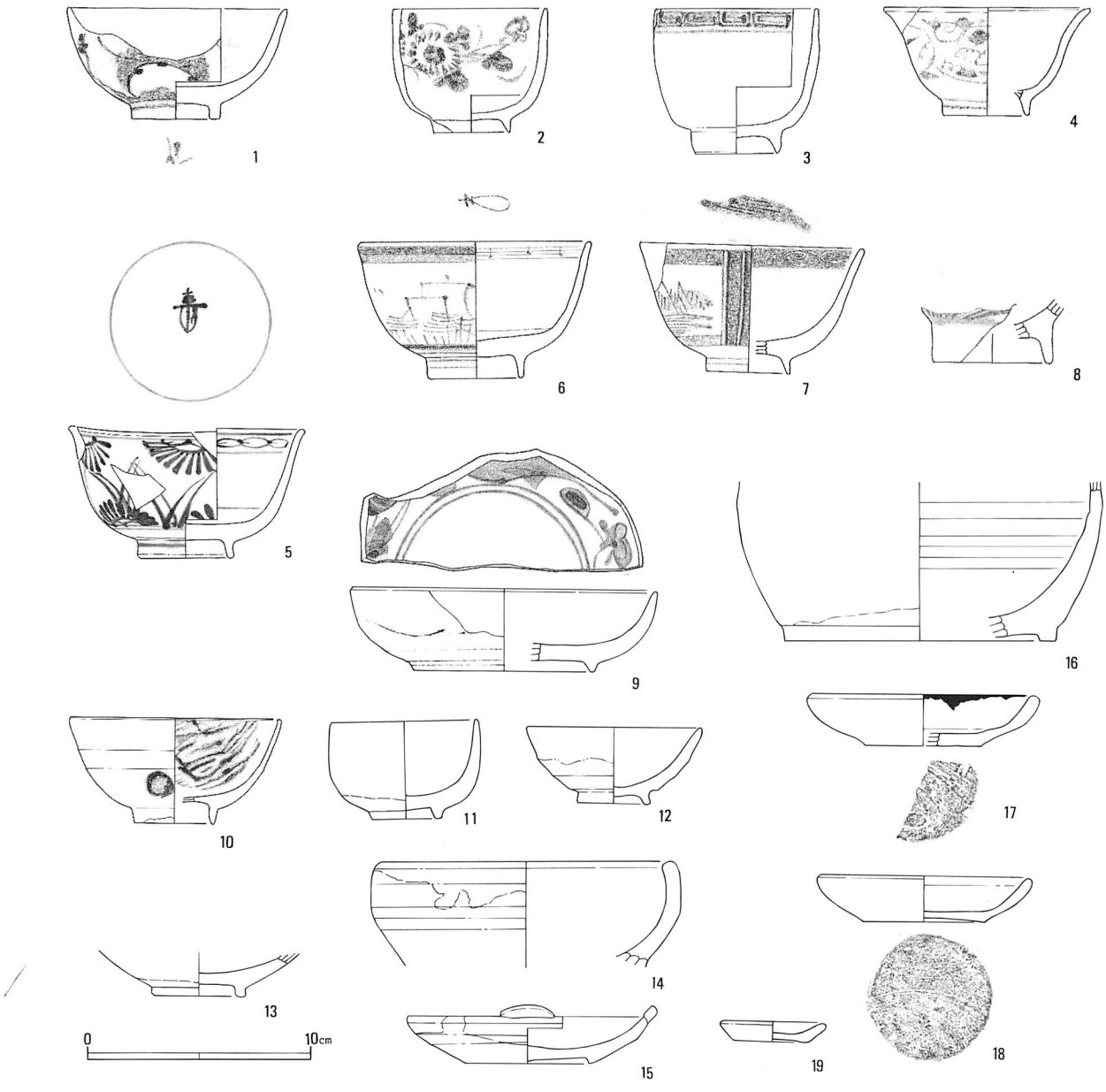
第39図　3号建物周辺出土土器（1/3）



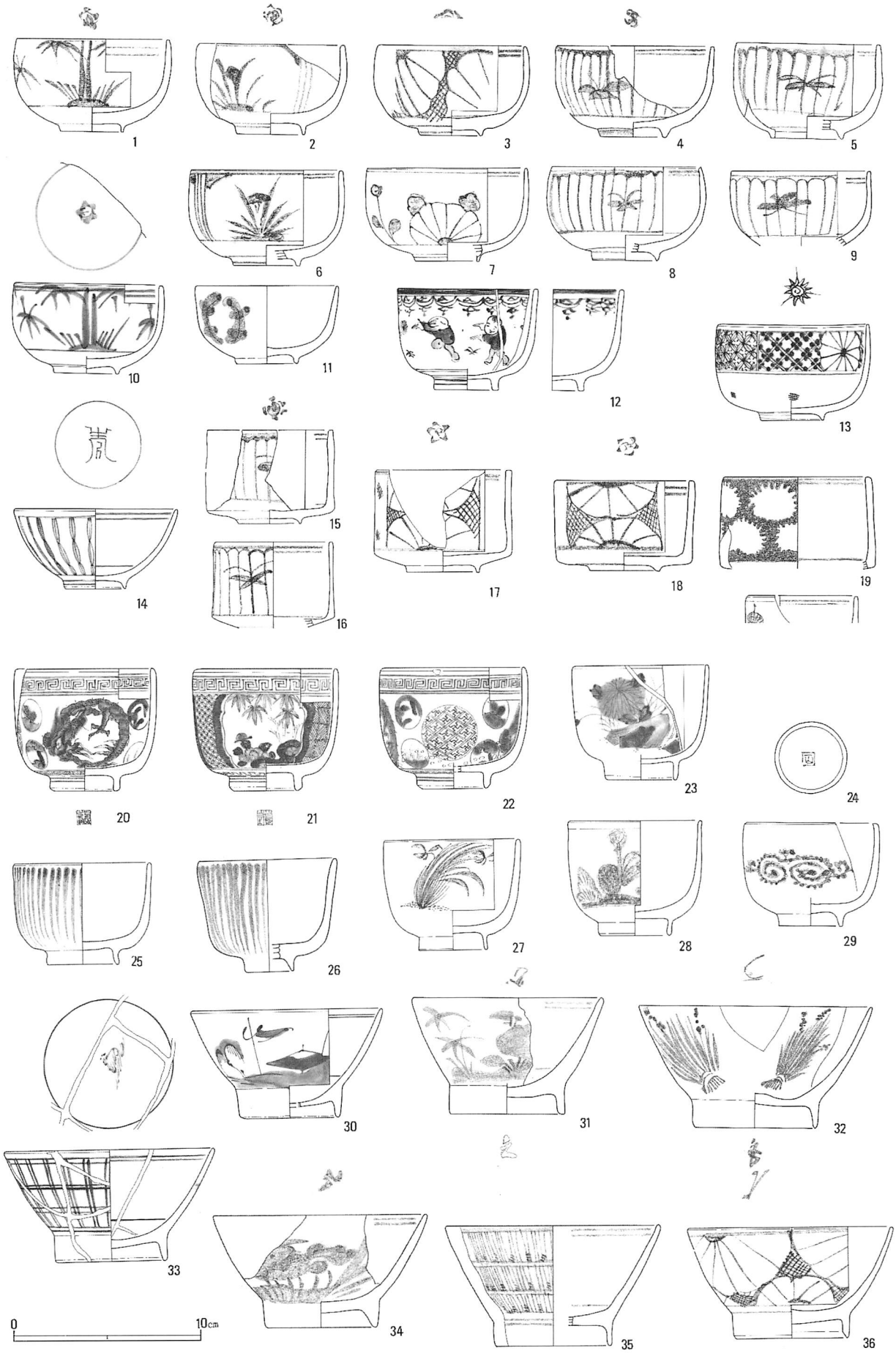
第40図　4号建物周辺（1～3）・5号建物周辺（4～10）出土磁器・陶器・土器（1/3）



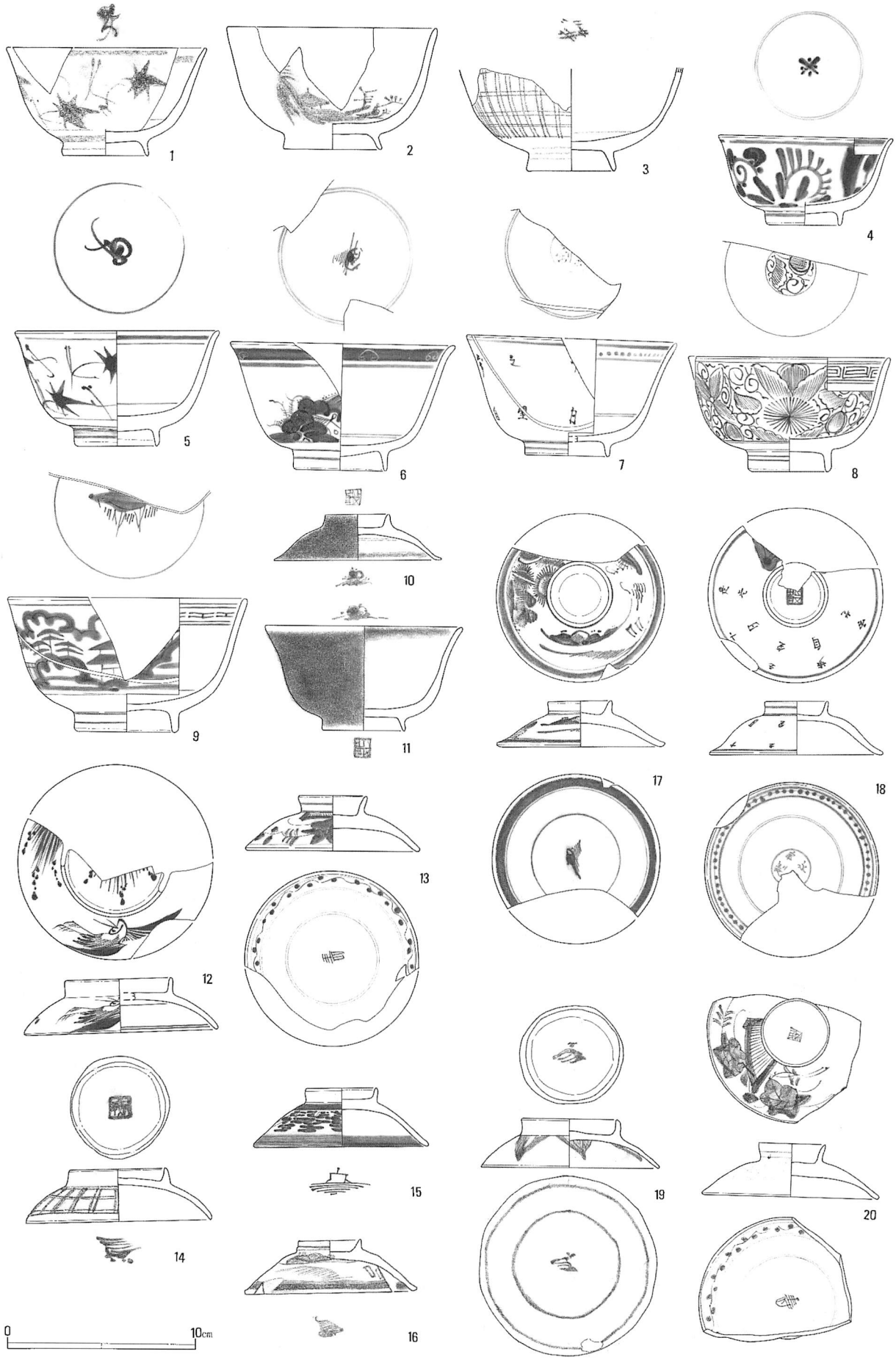
第41図　5号建物周辺出土土器（1/3）



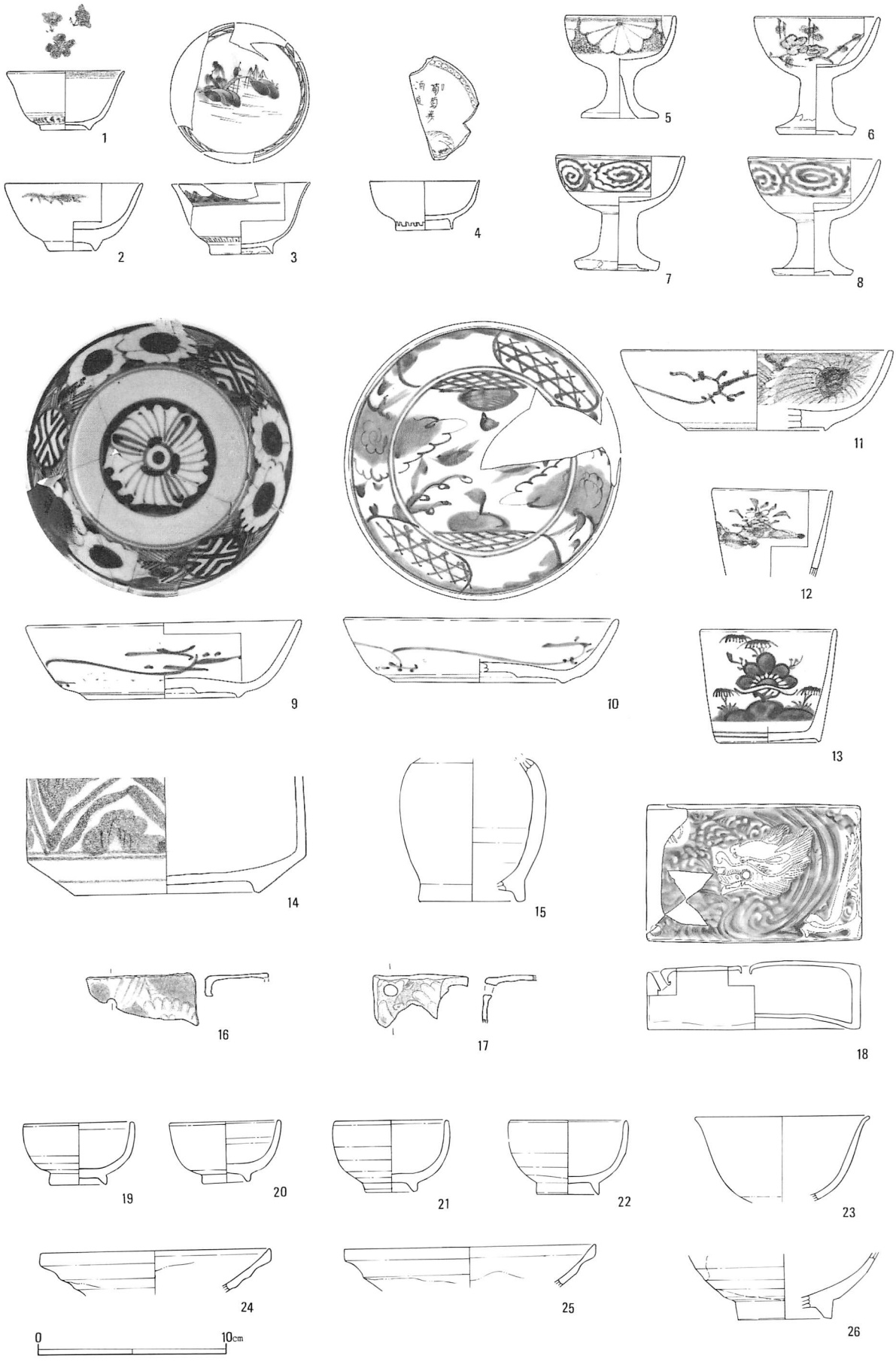
第42図　7号建物出土磁器・陶器・土器（1/3）



第43図　1号溝出土磁器（1/3）

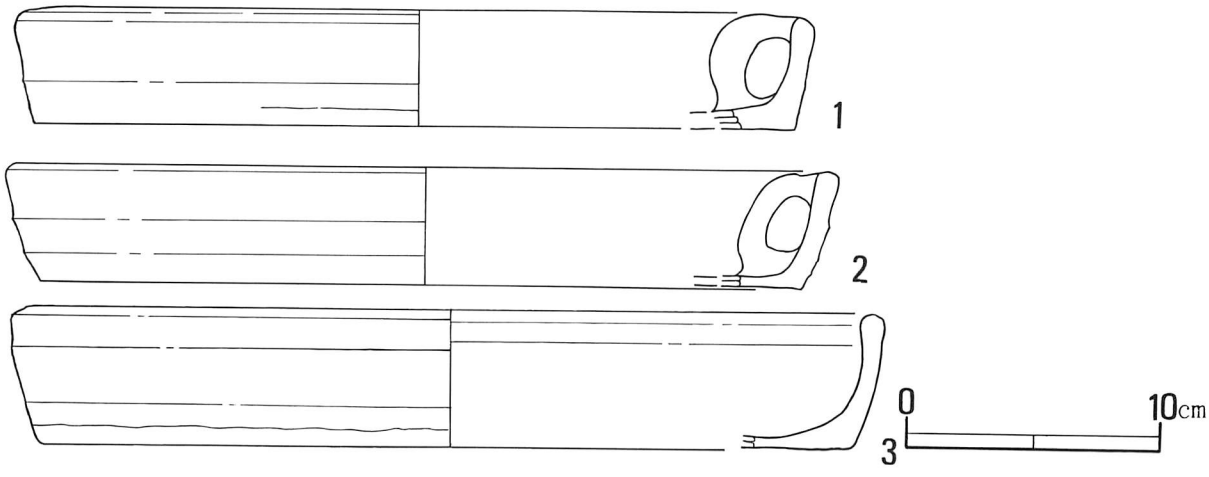


第44図　1号溝出土磁器（1/3）

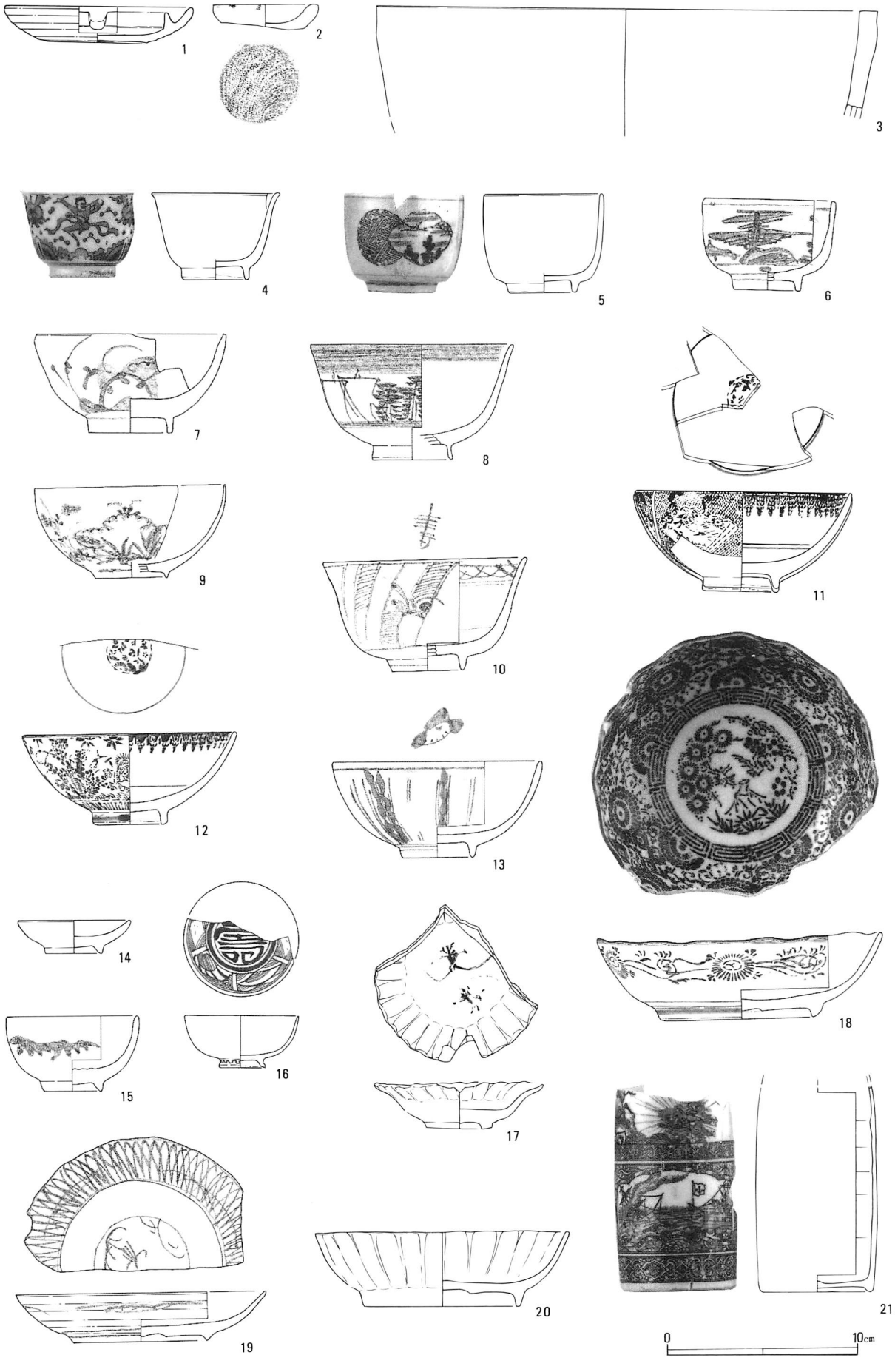


第45図　1号溝出土磁器・陶器（1/3）

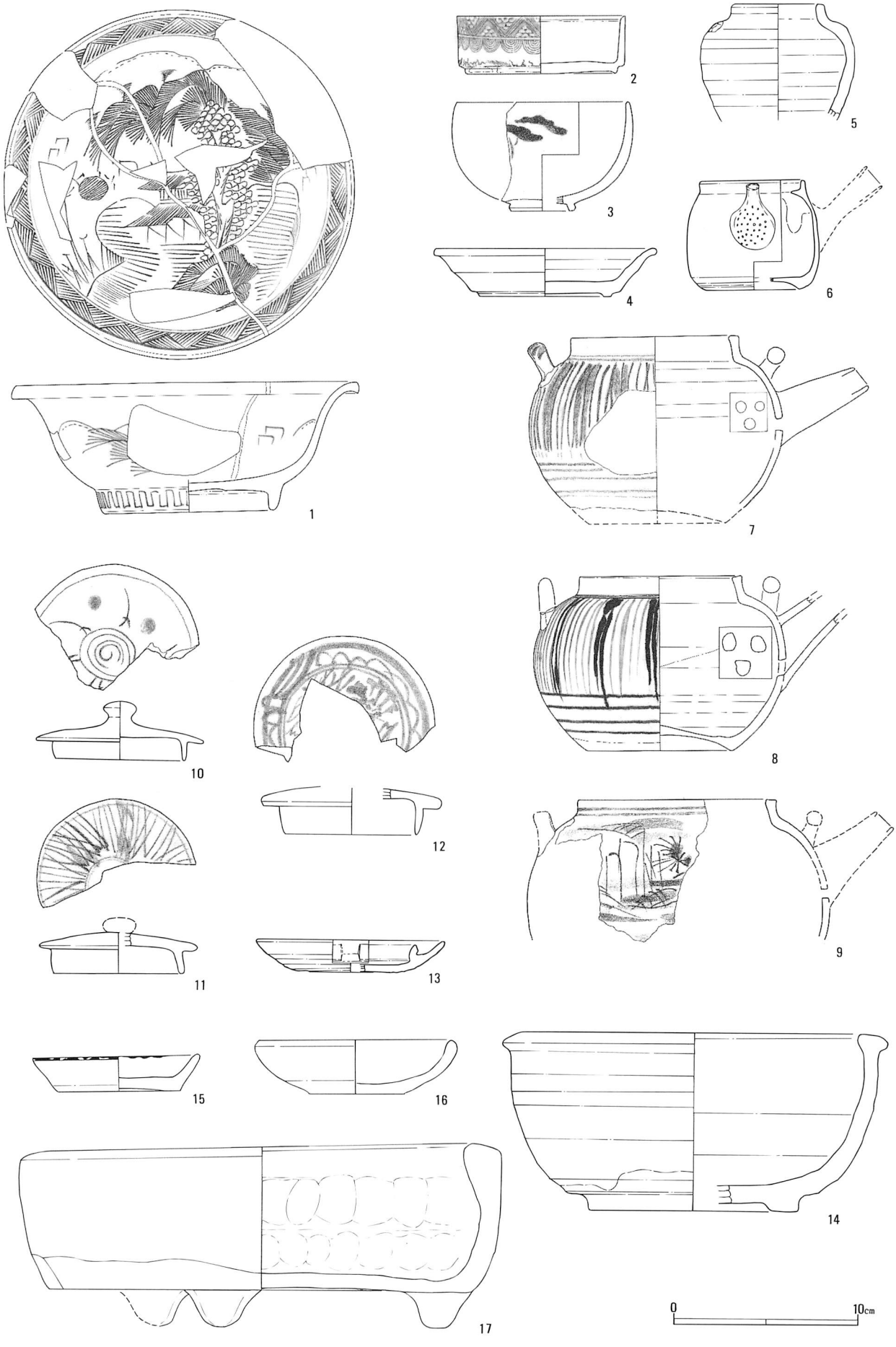
第46図　1号溝出土陶器（1/3）



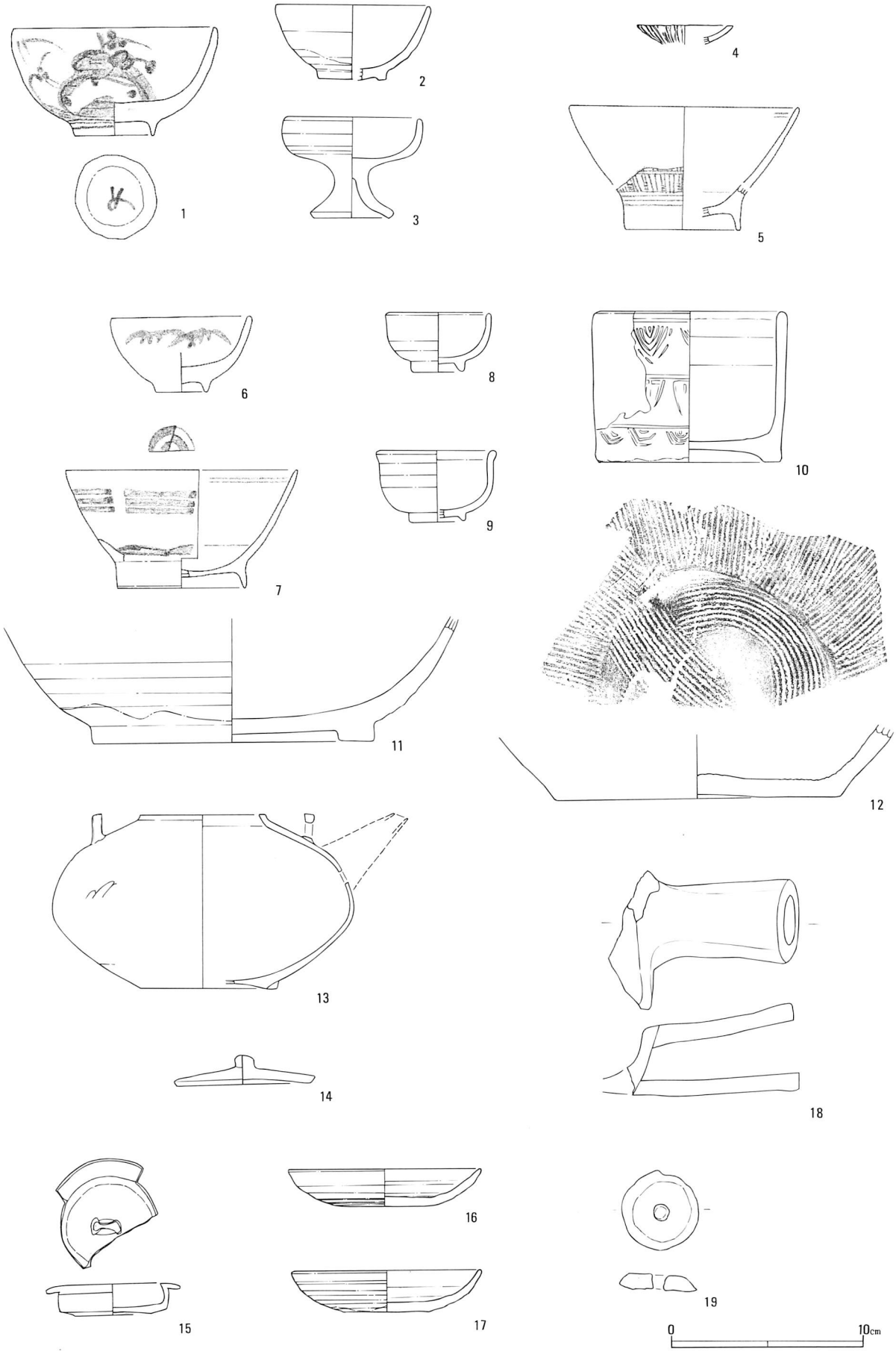
第47図　1号溝出土土器（1/3）



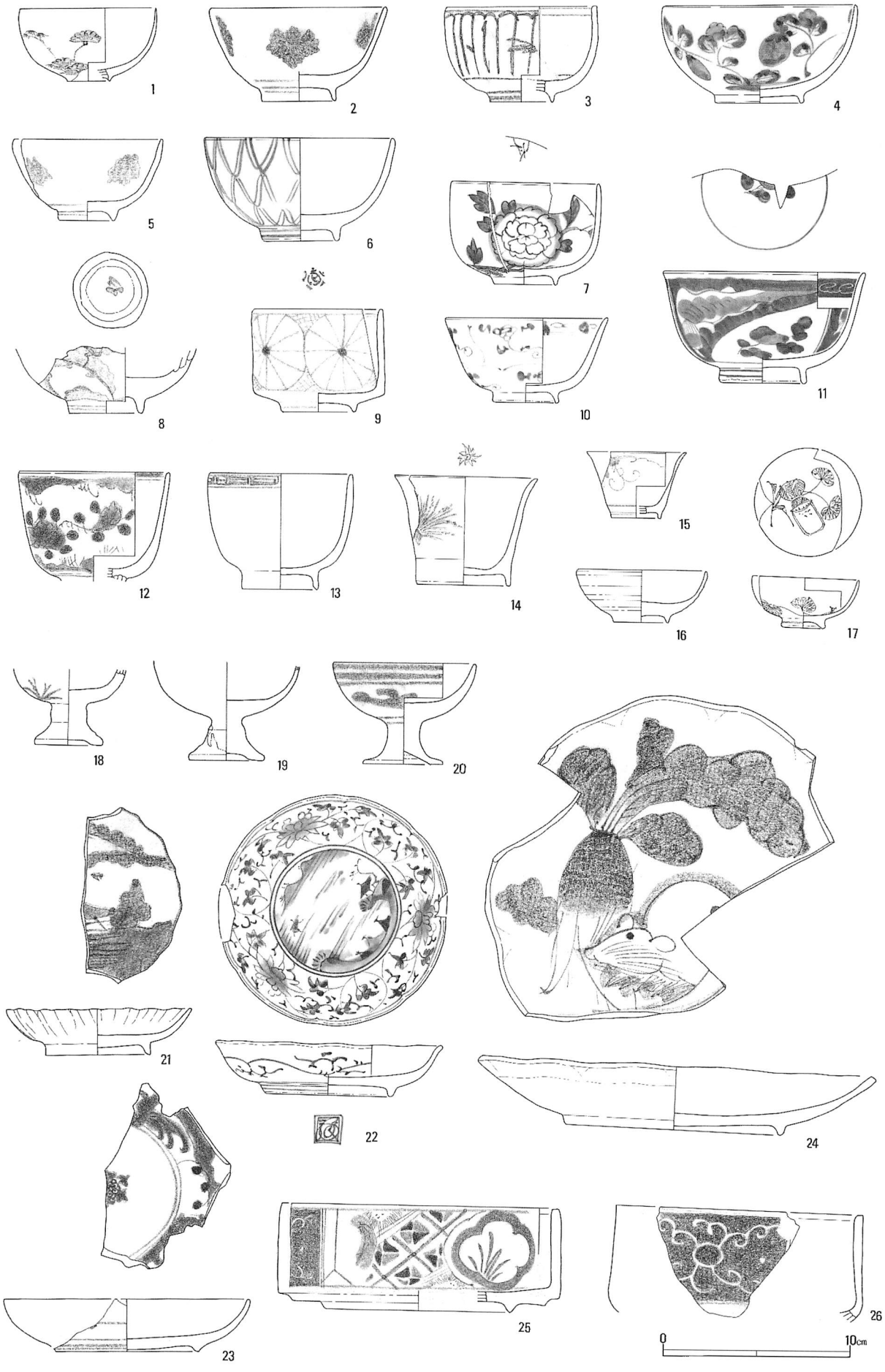
第48図　2号溝（1～3）・3号溝（4～21）出土磁器・陶器・土器（1/3）



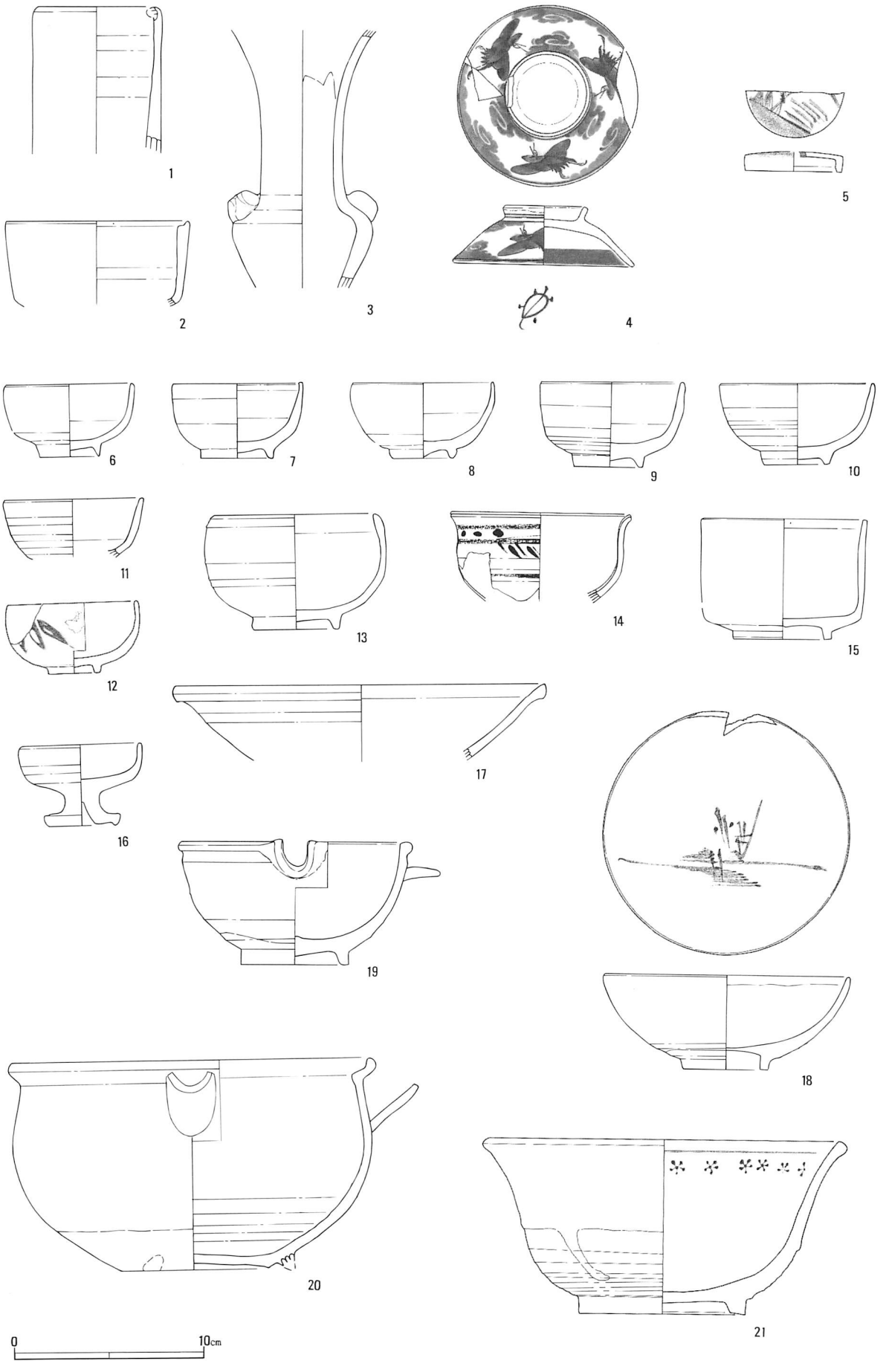
第49図　3号溝出土磁器・陶器・炻器・土器（1/3）



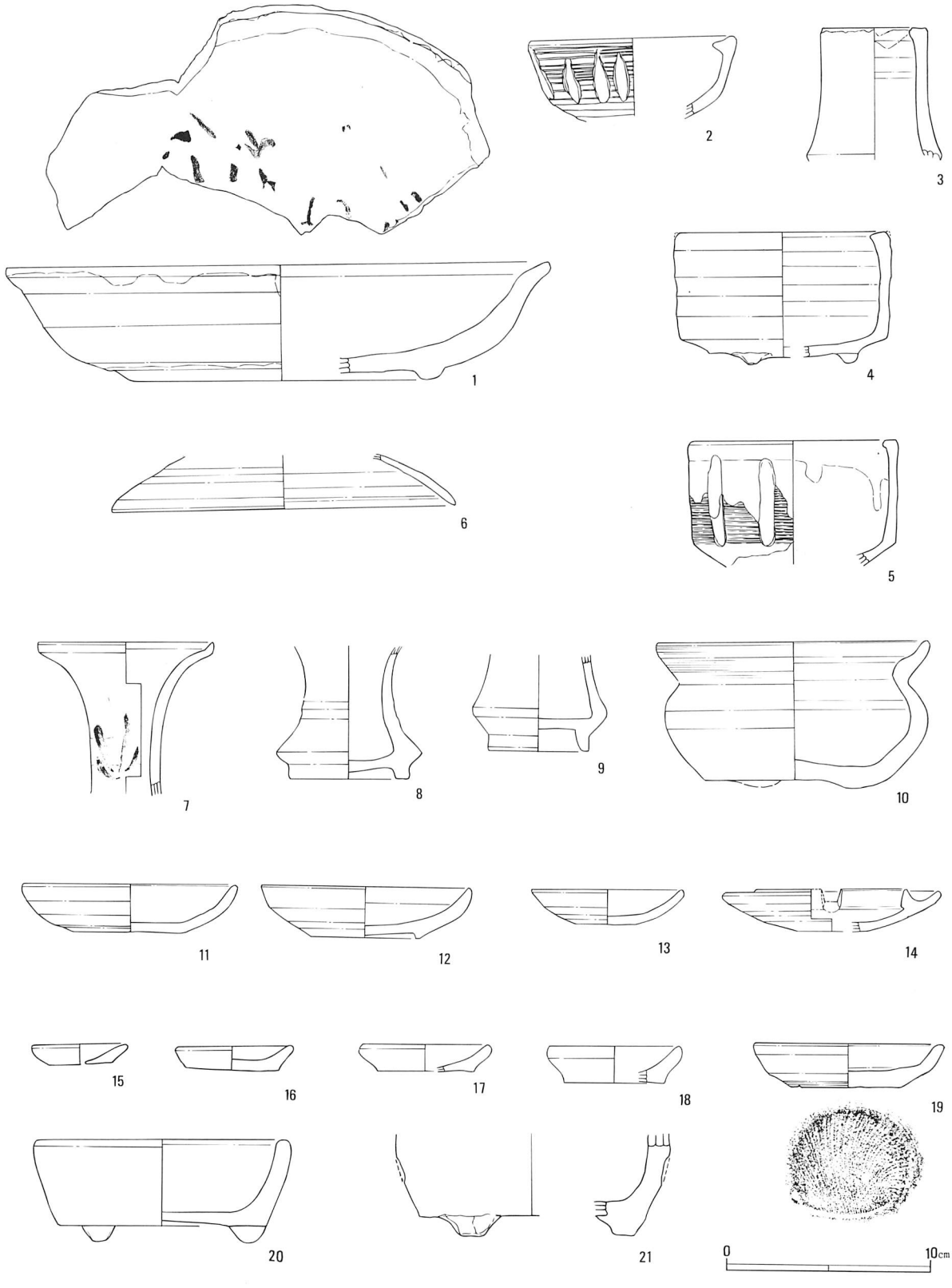
第50図　4号溝（1～3）・5号溝（4・5）・6号溝（6～19）出土磁器・陶器・土器（1/3）



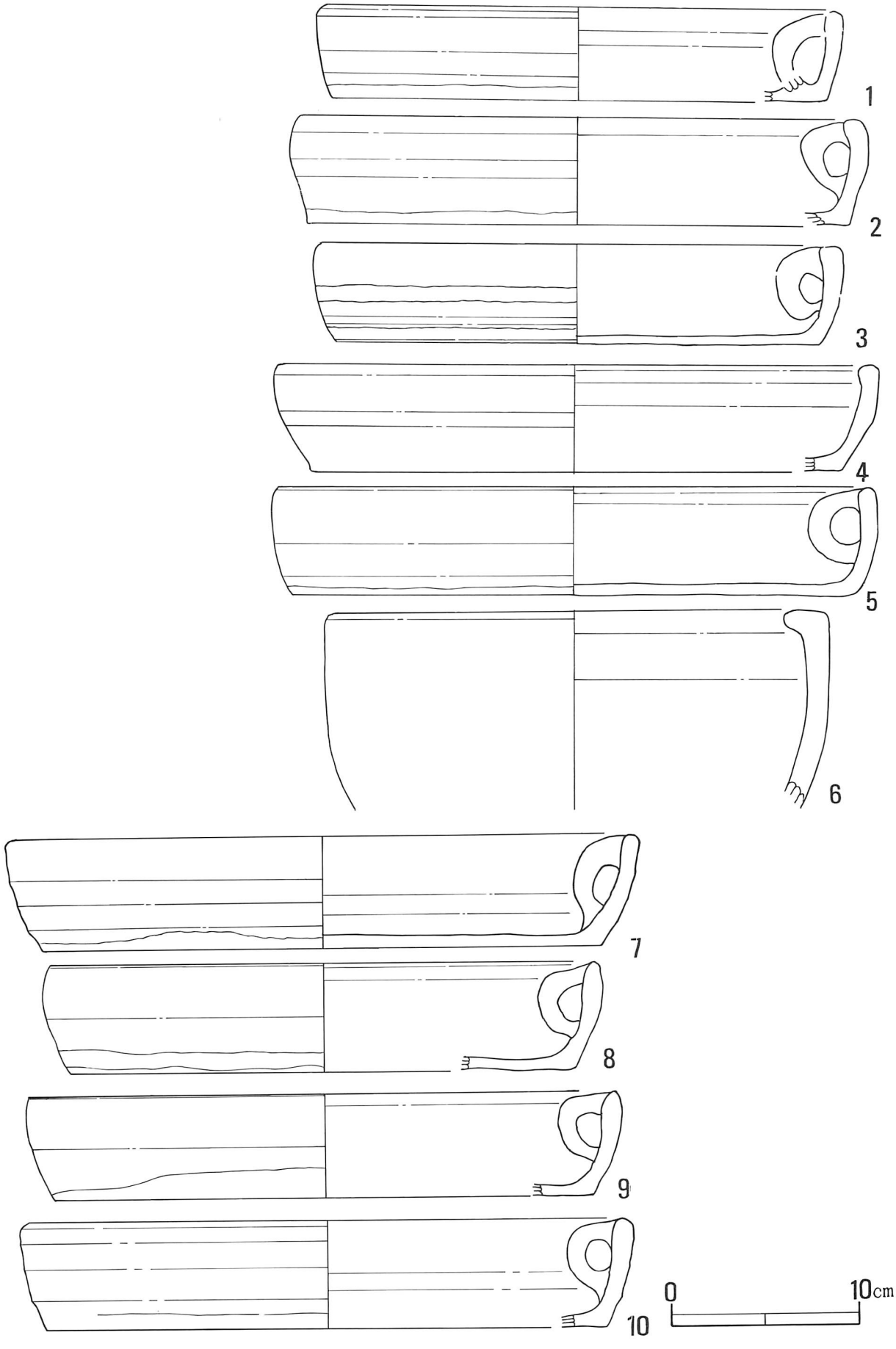
第51図　7号・9号溝出土磁器（1/3）



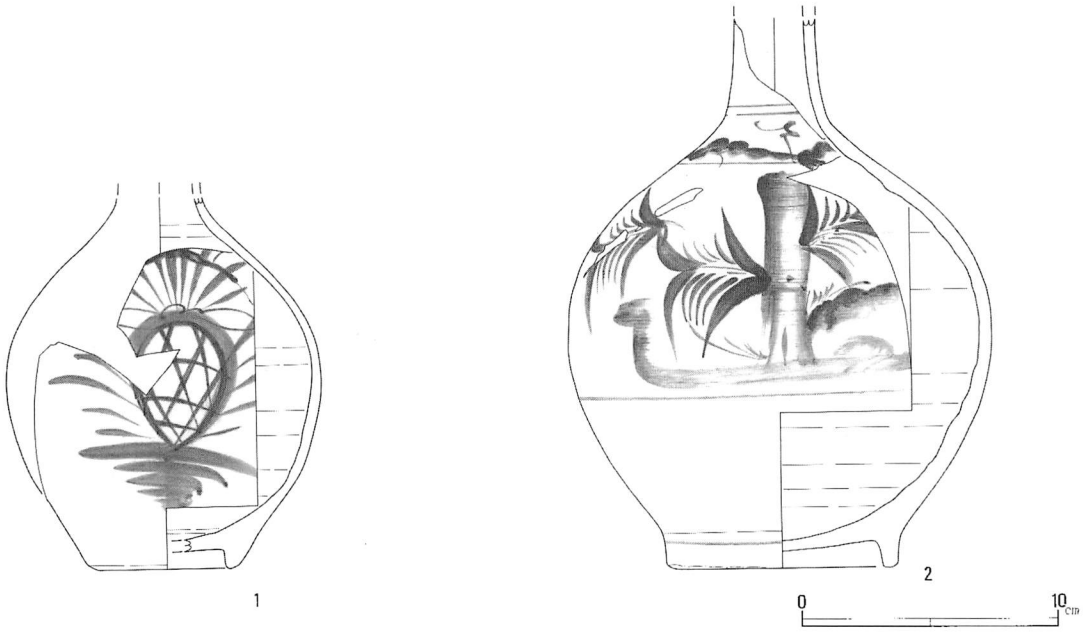
第52図　7号・9号溝出土磁器・陶器（1/3）



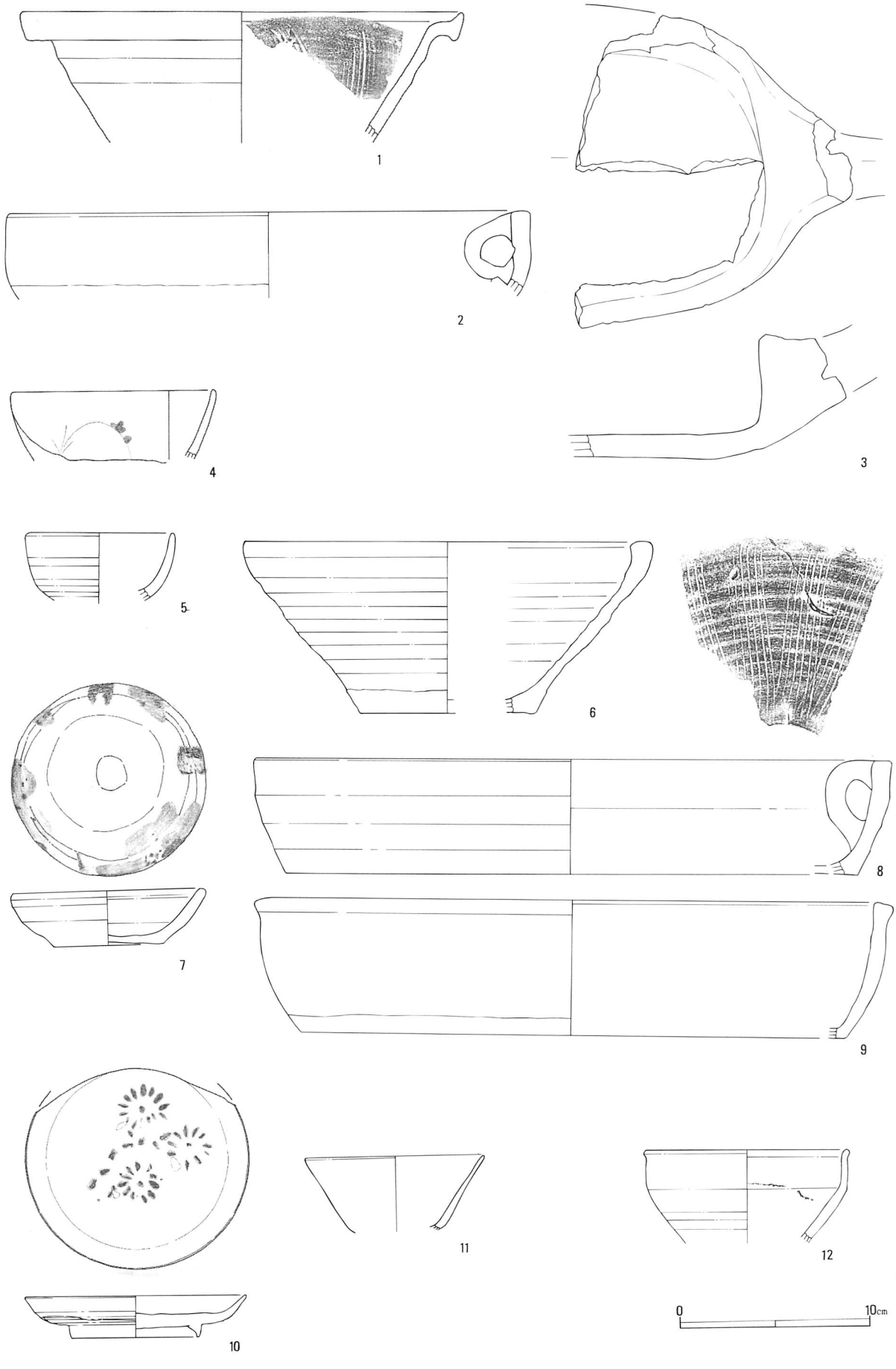
第53図　7号・9号溝出土陶器・土器（1/3）



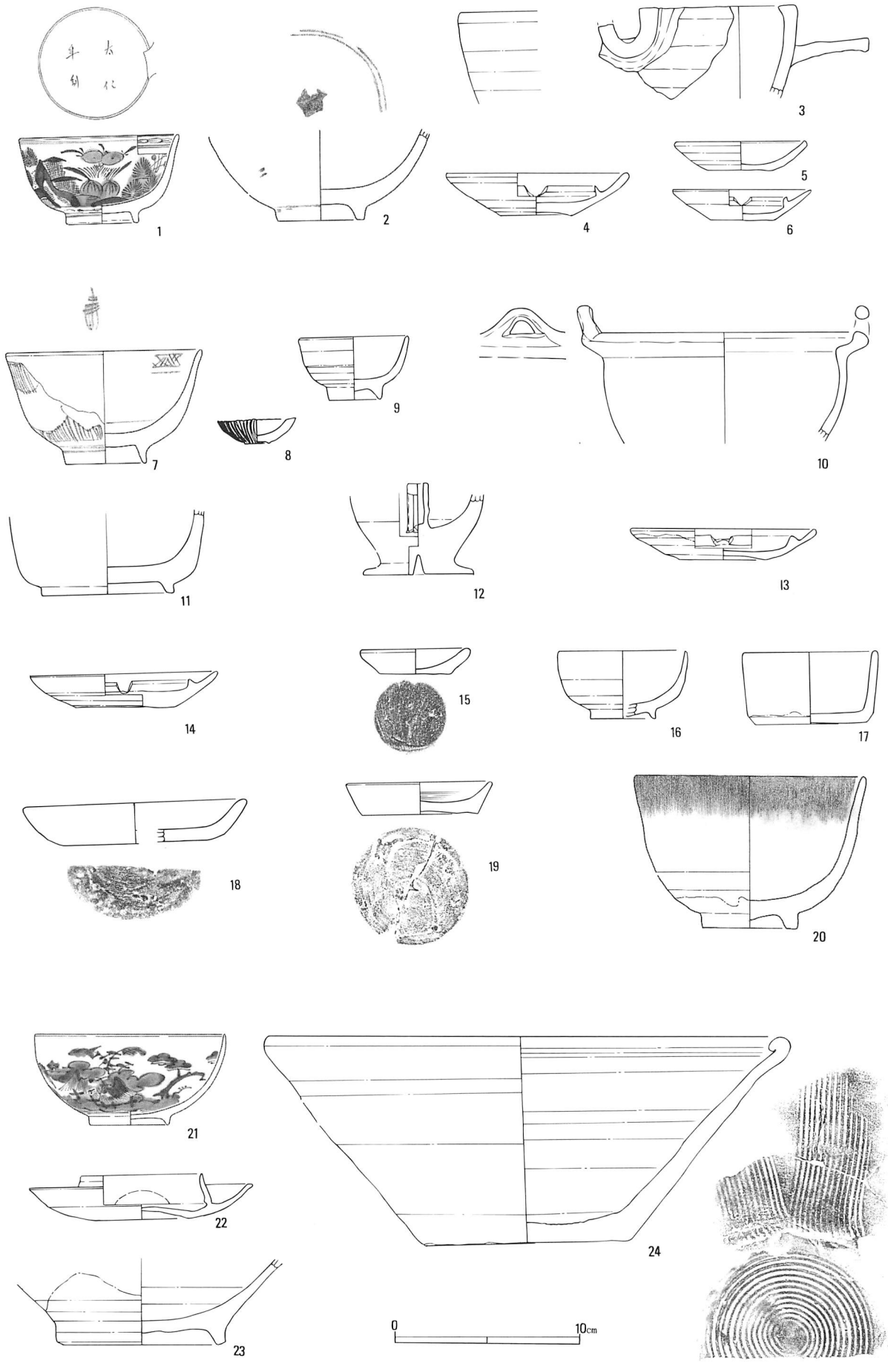
第54図　7号溝（1～6）・13号溝（7）・21号溝（8～10）出土土器（1/3）



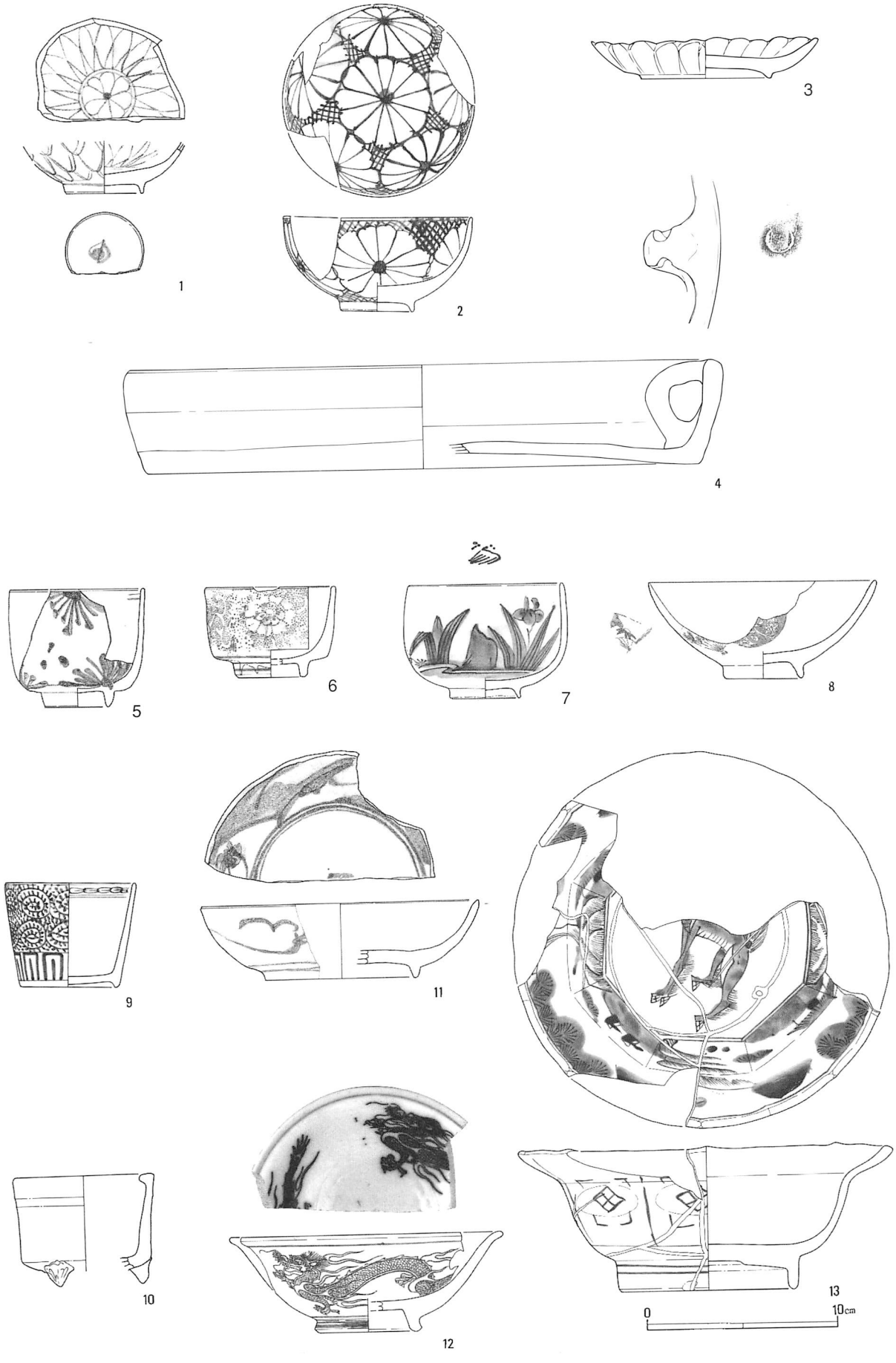
第55図　1号・7号溝出土磁器（1/3）



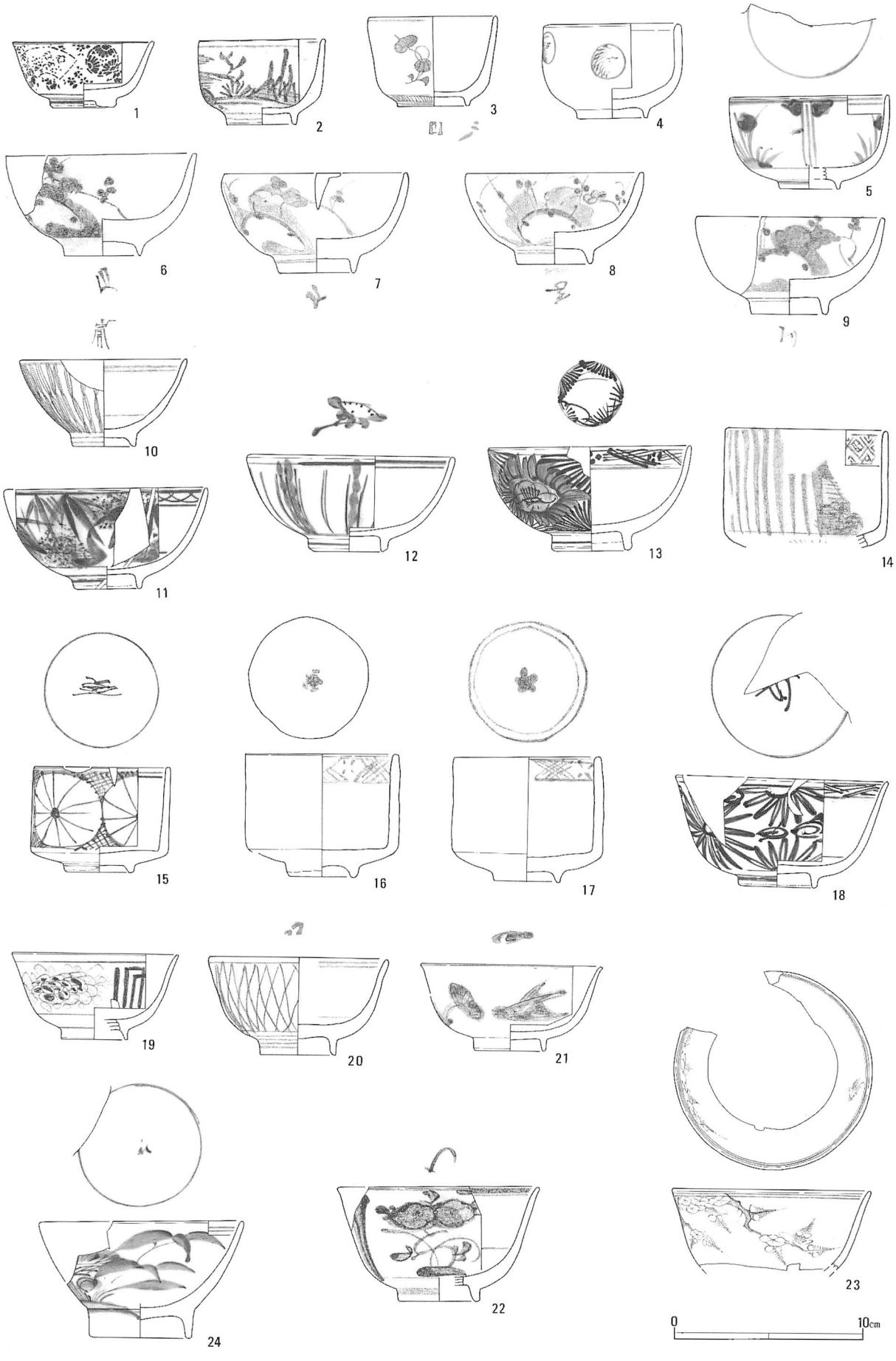
第56図　8号溝（1～3）・9号溝（4～9）・14号溝（10～11）・10号溝（12）出土磁器・陶器・土器（1/3）



第57図　15号溝（1～6）・16号溝（7～13）・17号溝（14）・18号溝（15～20）・21号溝（21～24）出土磁器・陶器・土器（1/3）



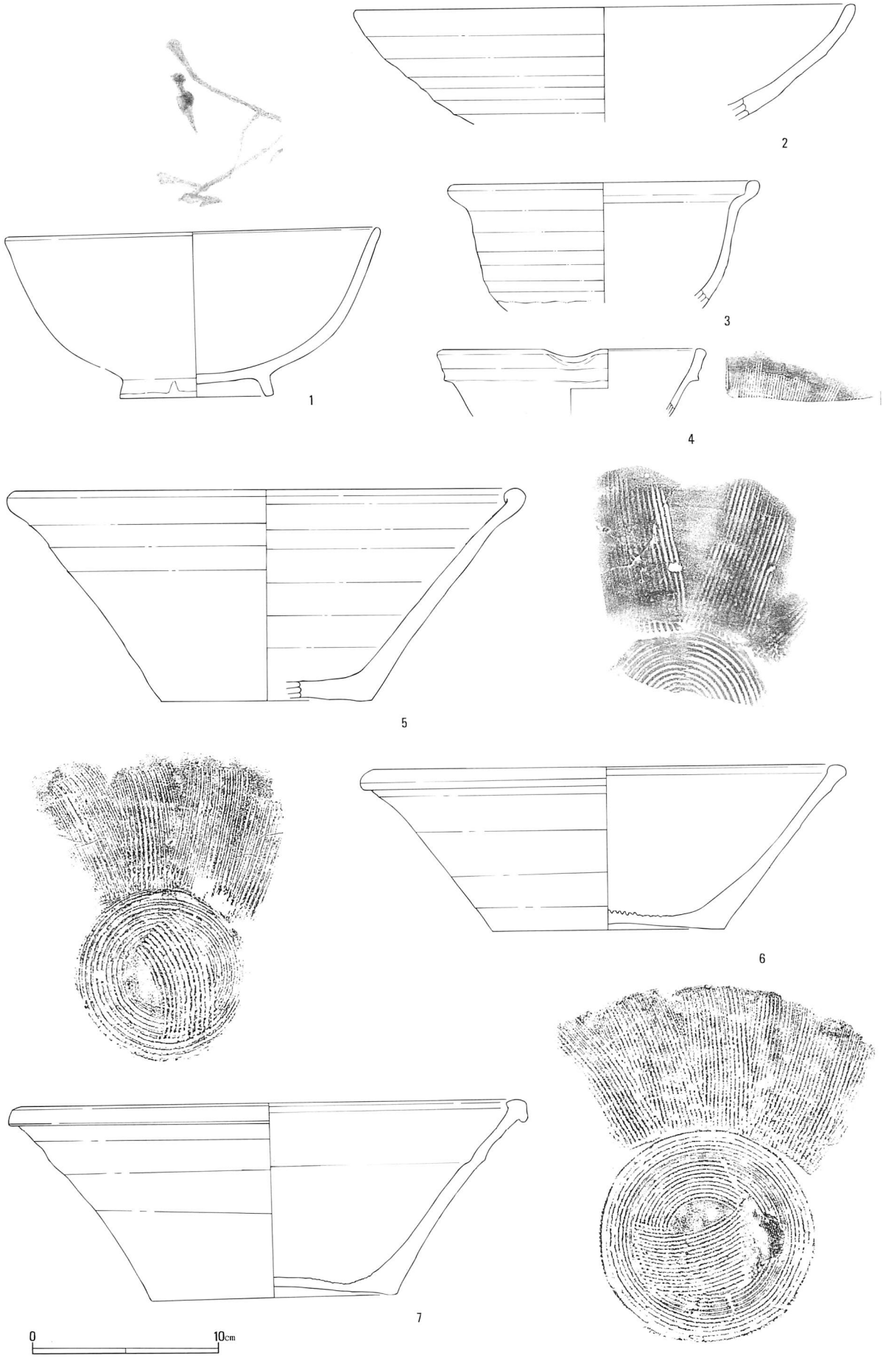
第58図　井戸（1～4）・2面（5～13）・出土磁器・陶器・土器（1/3）



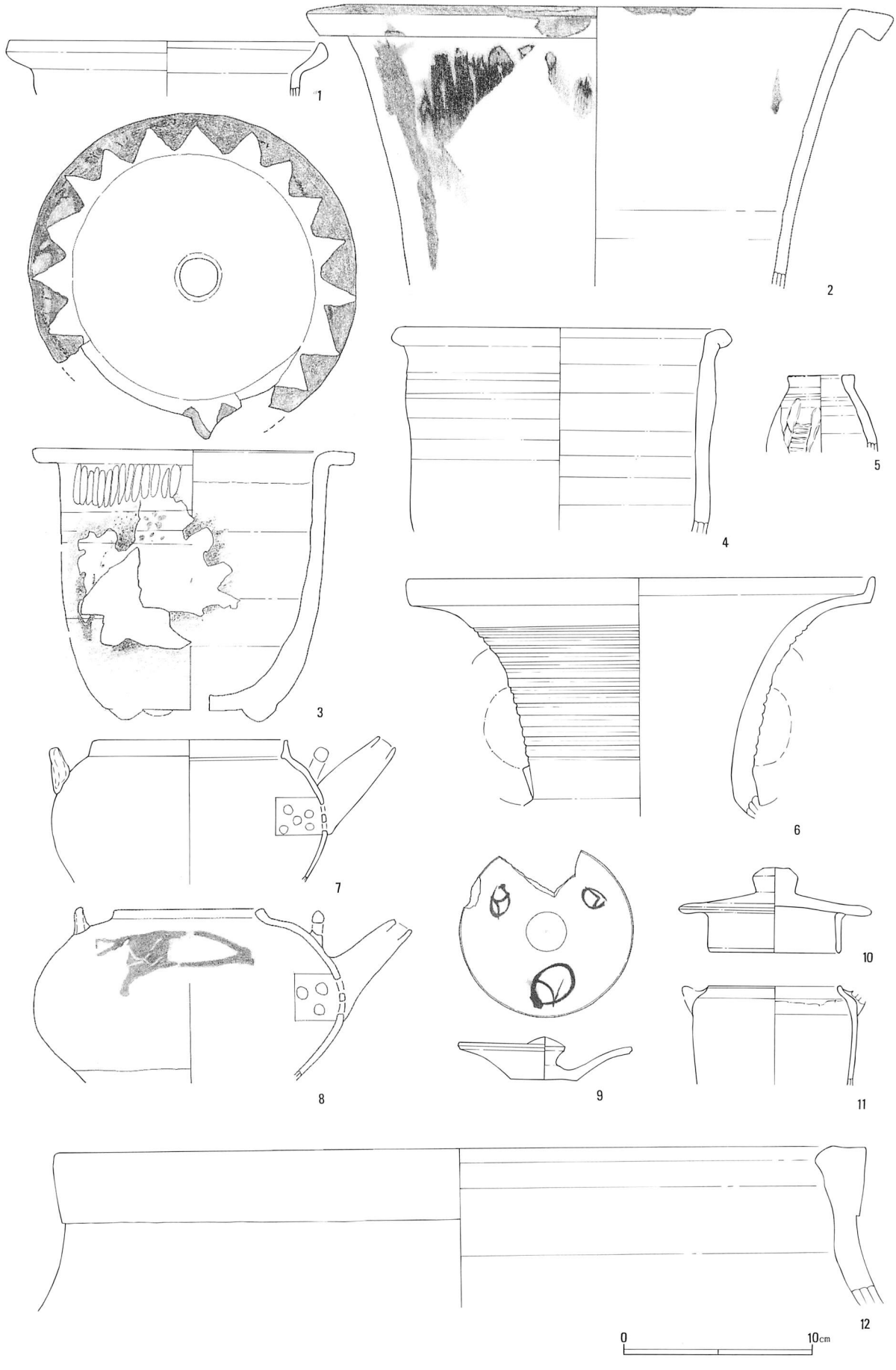
第59図　2面出土磁器（1/3）

第60図　2面出土磁器・陶器（1/3）

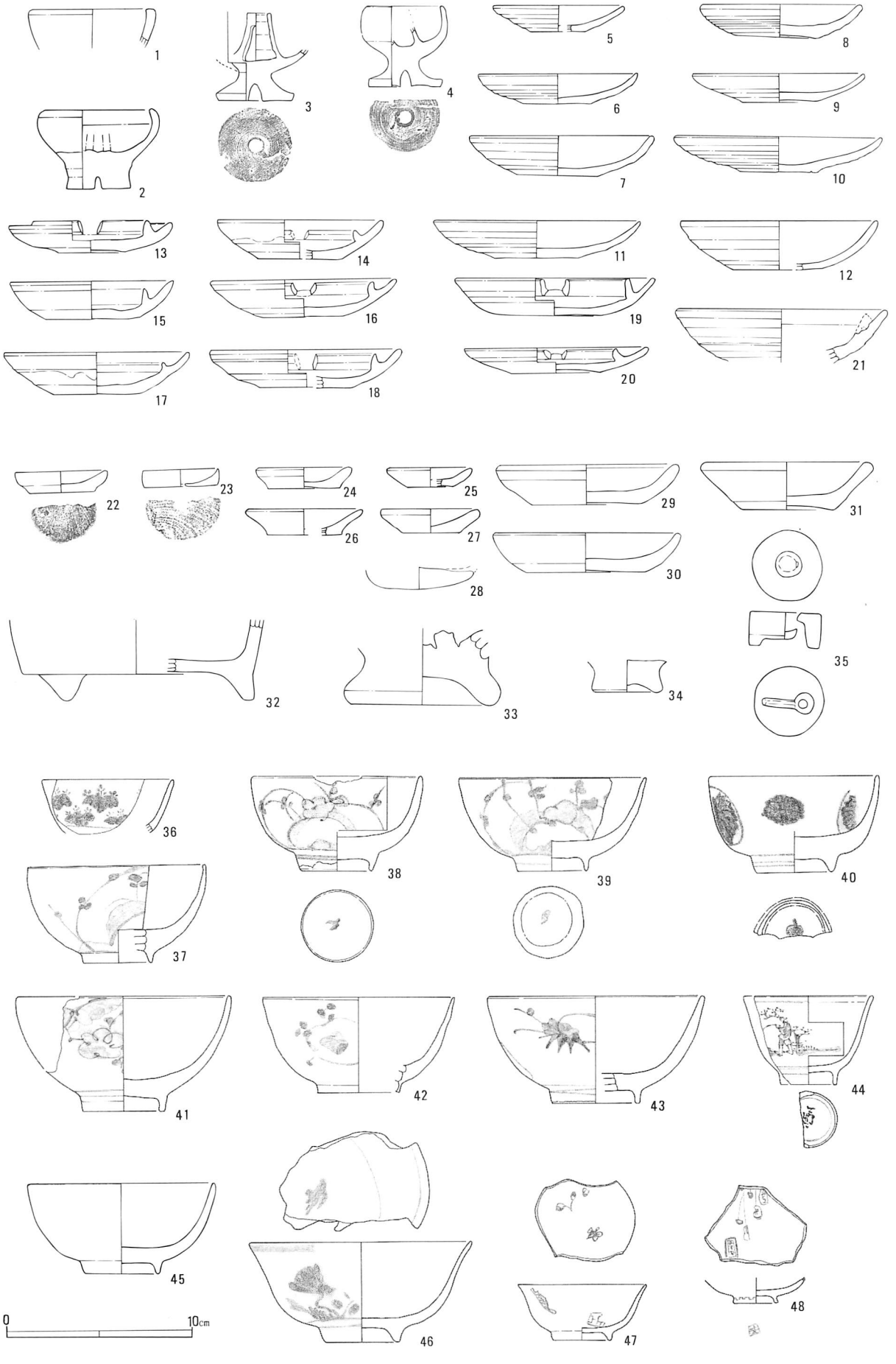
第61図　2面出土磁器・陶器（1/3）



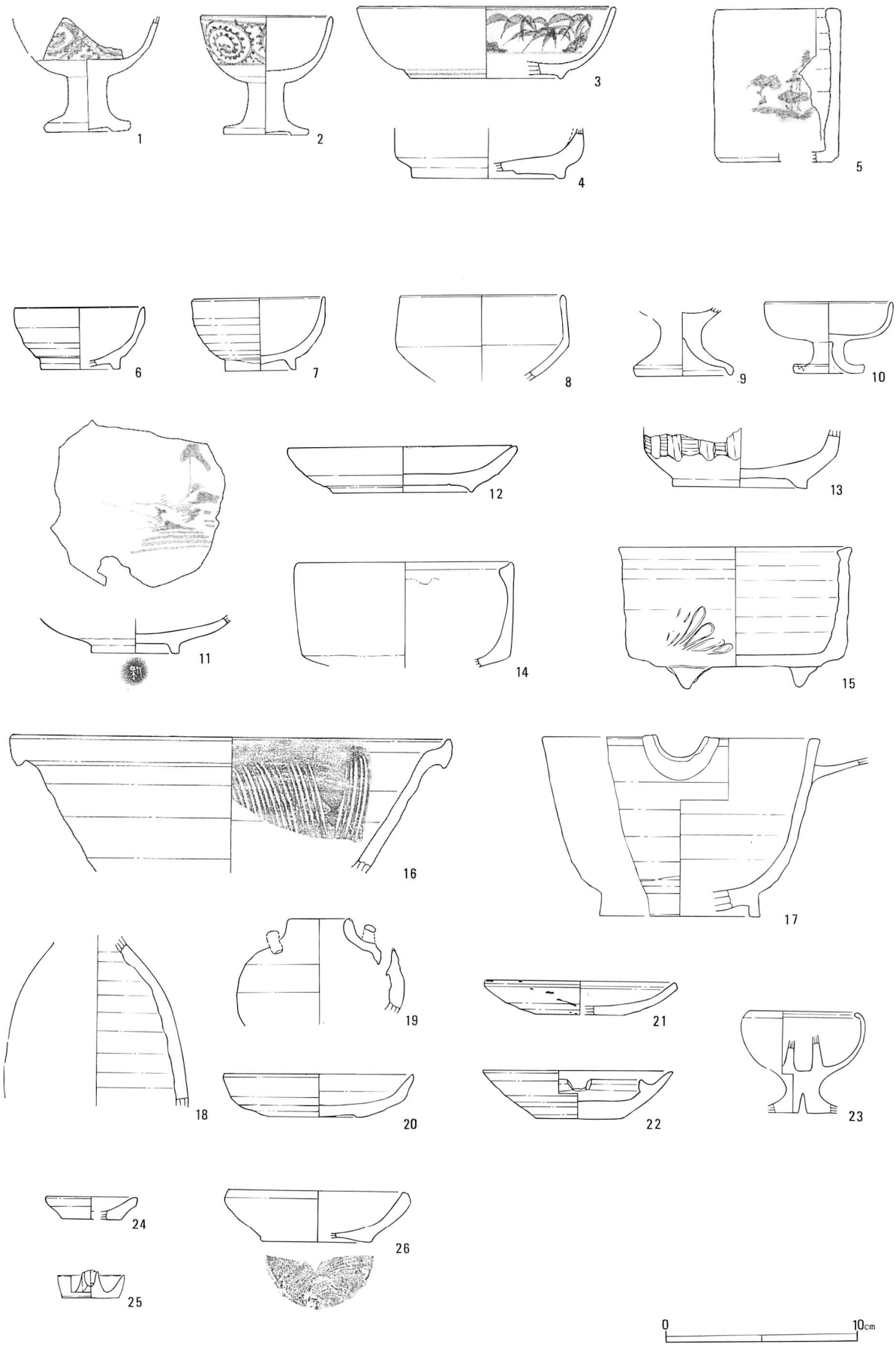
第62図　2面出土陶器（1/3）



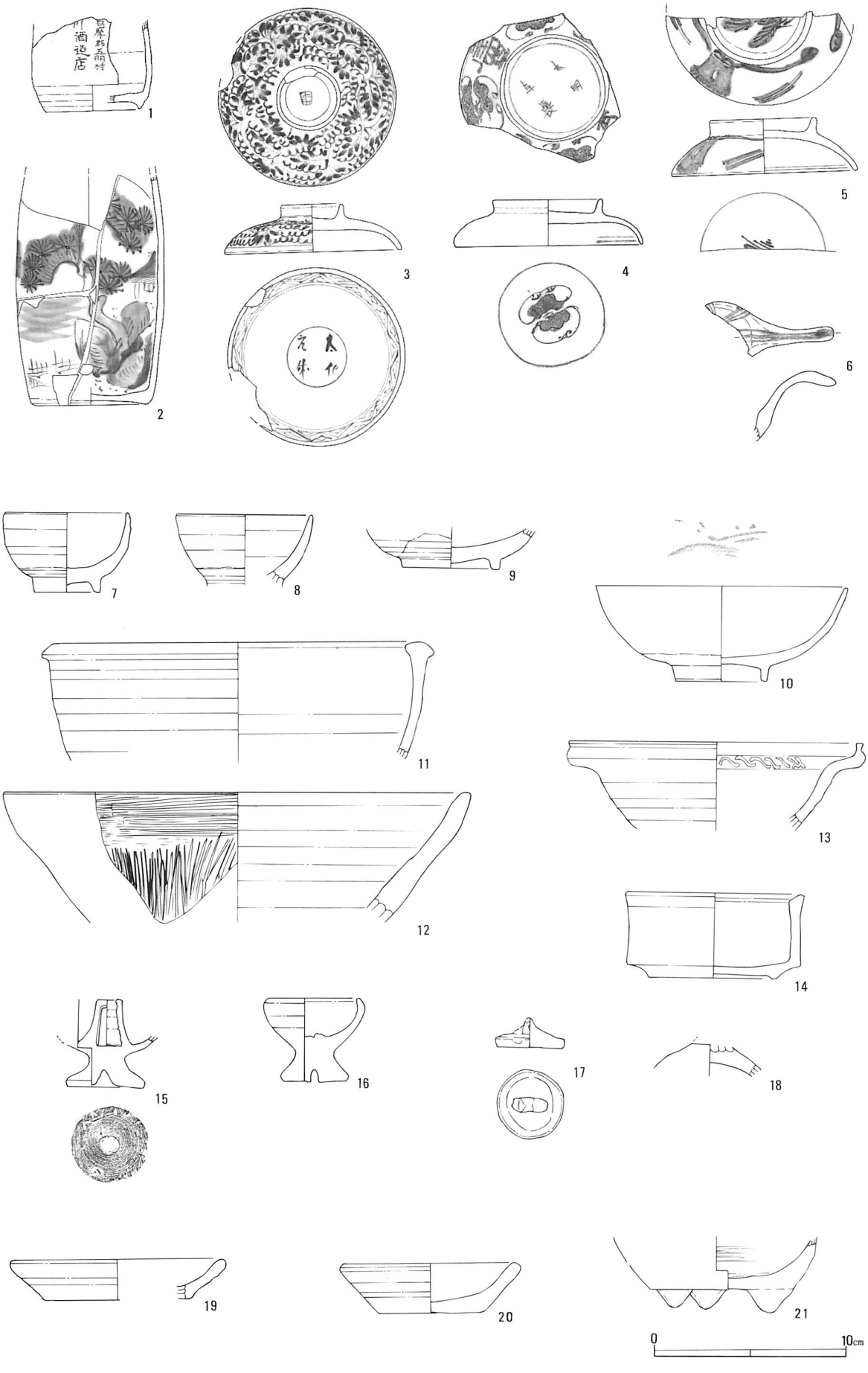
第63図　2面出土陶器（1/3）



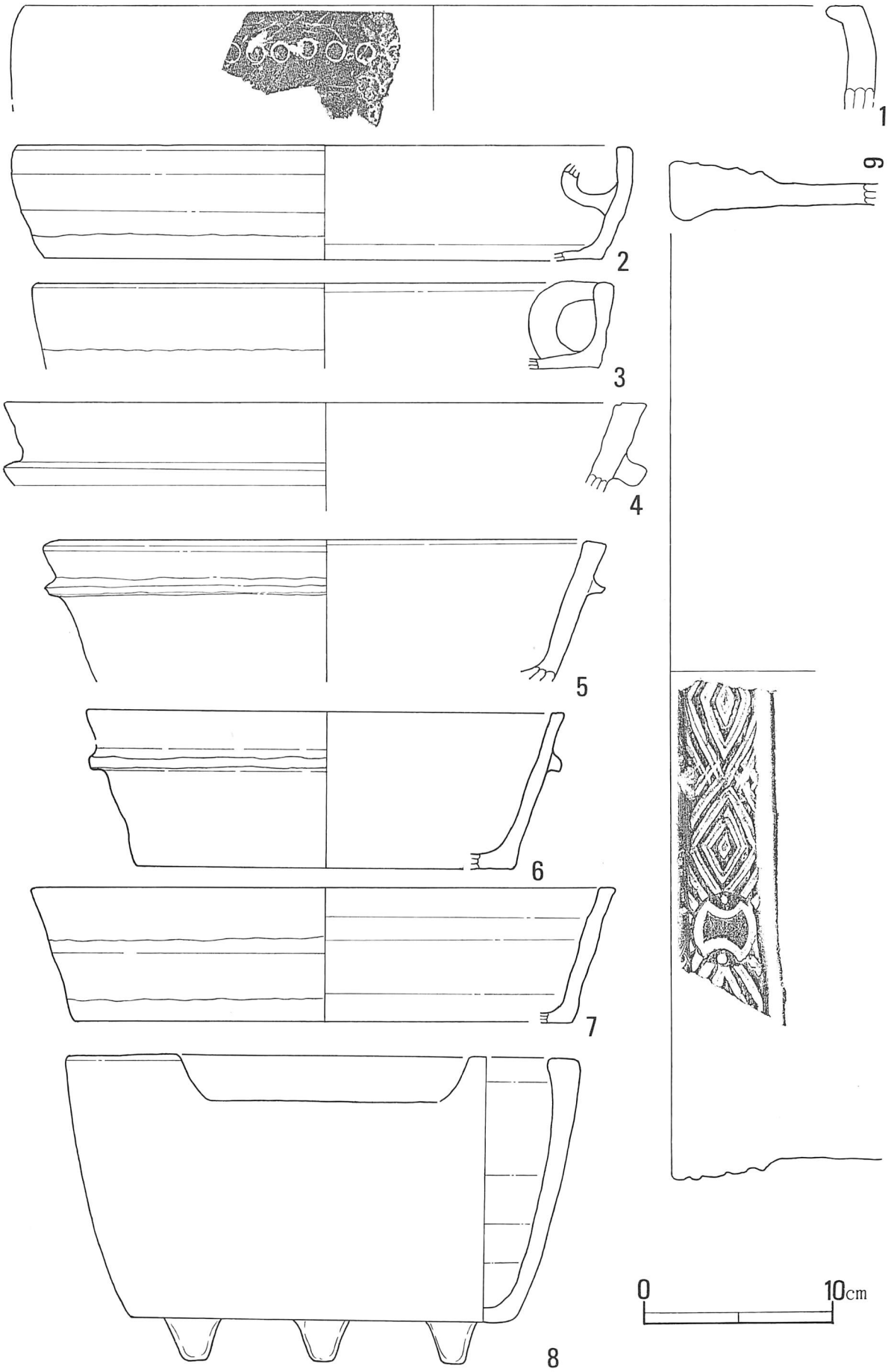
第64図　2面（1～35）・3面（36～48）出土磁器・陶器・土器（1/3）



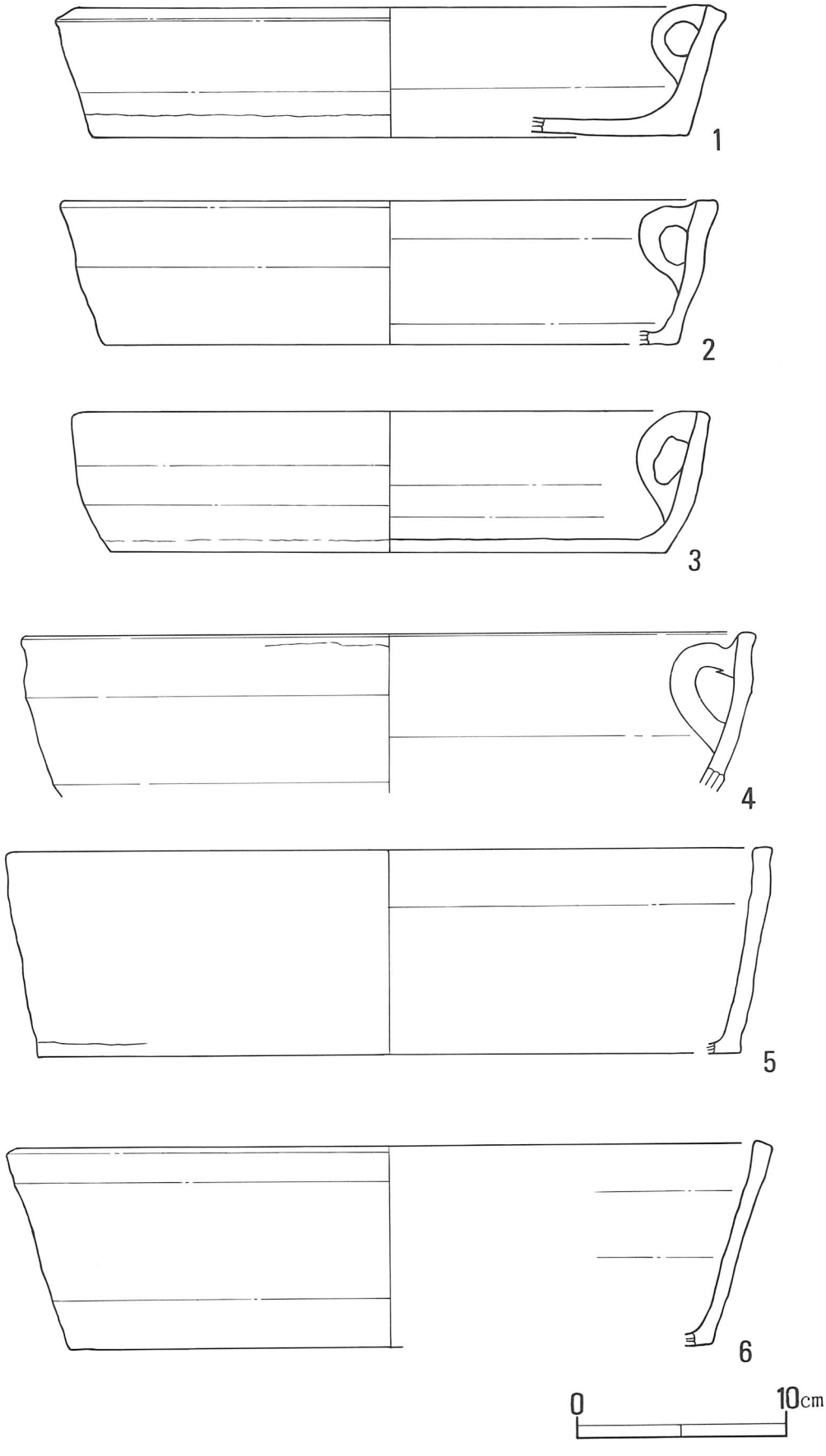
第65図　3面出土磁器・陶器・土器（1/3）



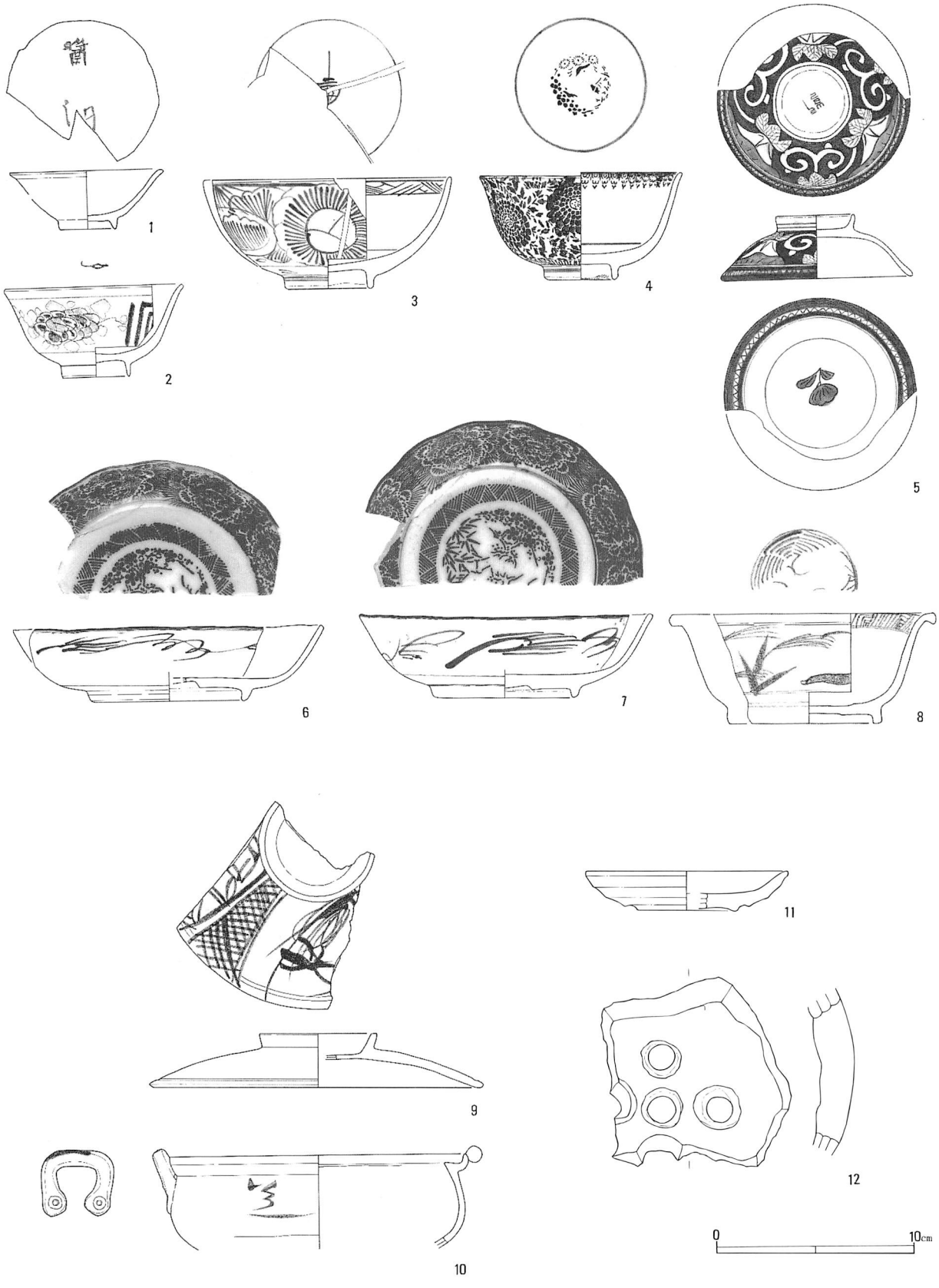
第66図　2面（1～17）・3面（18～21）出土磁器・陶器・土器（1/3）



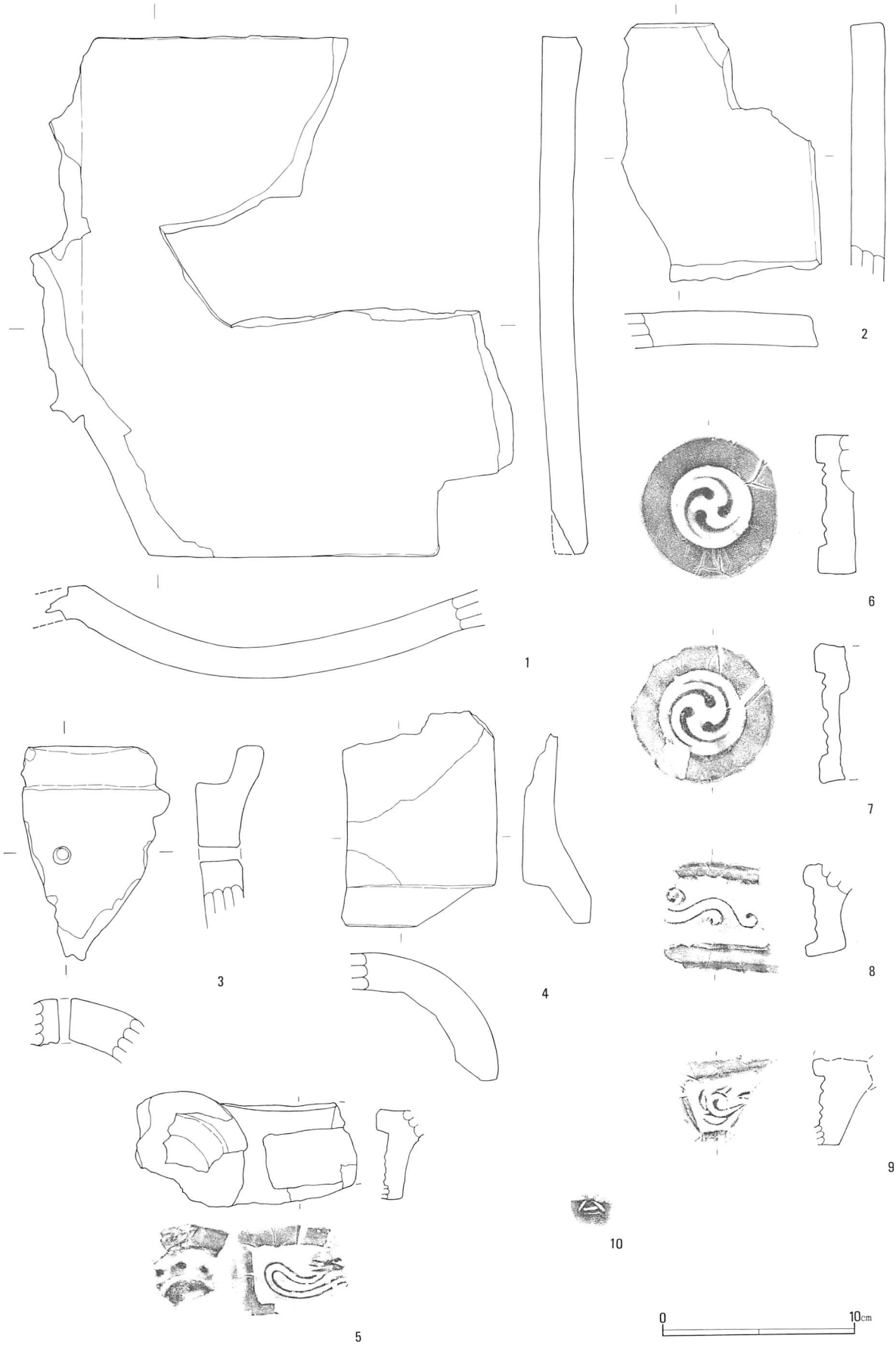
第67図　2面出土土器（1/3）



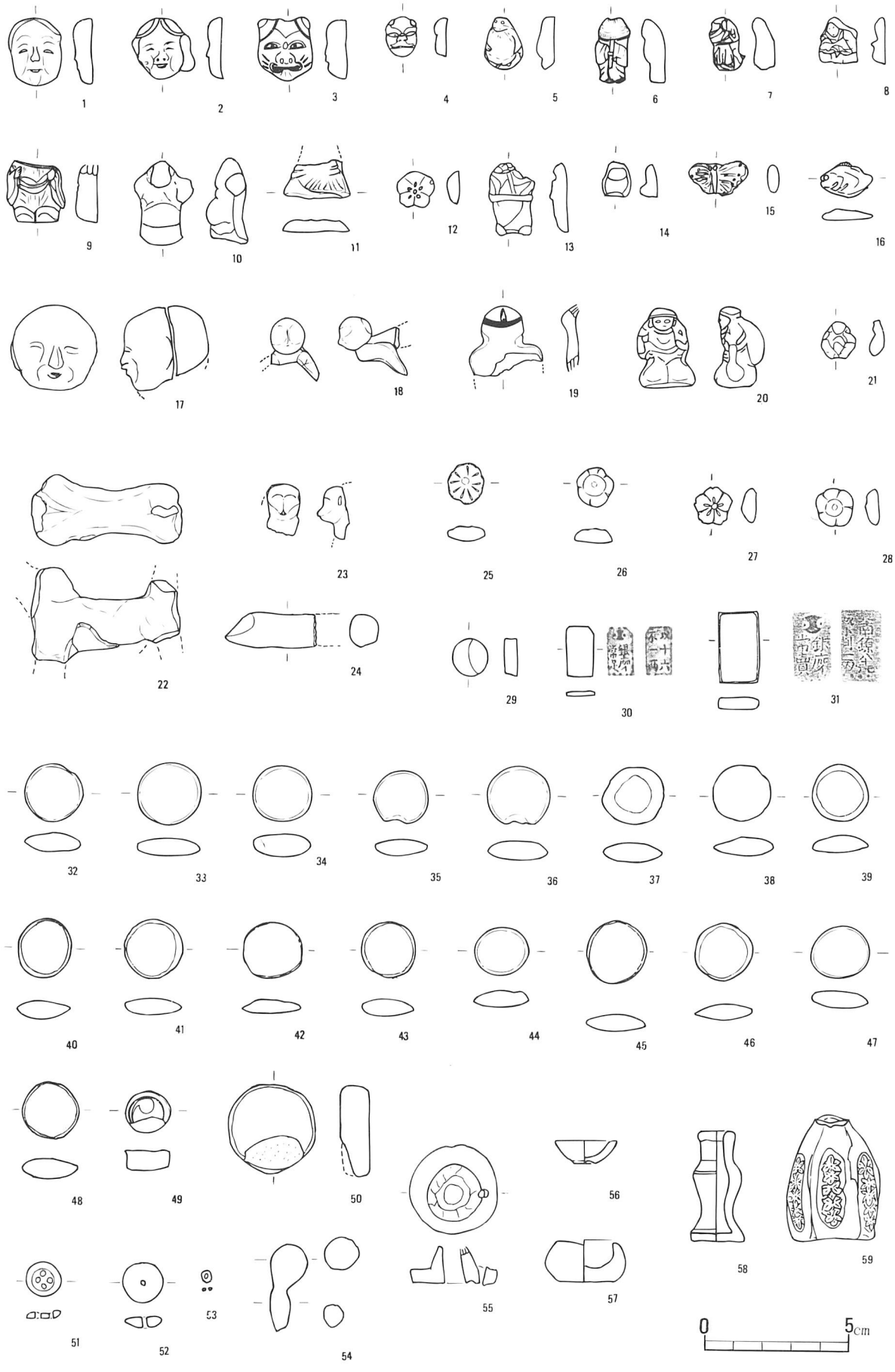
第68図　2面（1・2・5）・3面（3・4・6）出土土器（1/3）



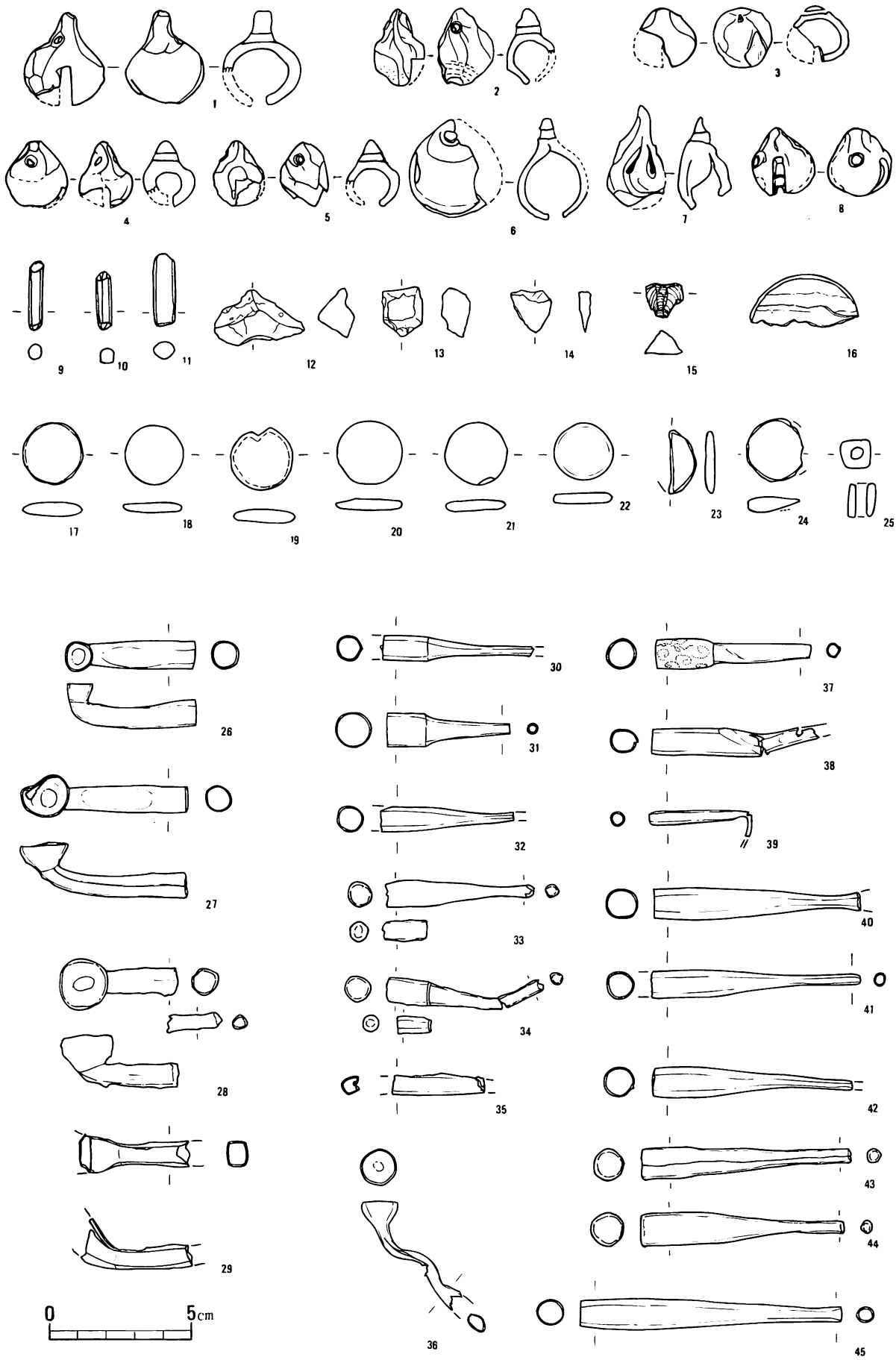
第69図　7号建物裏（撹乱穴）出土磁器・炻器・陶器・土器（1/3）



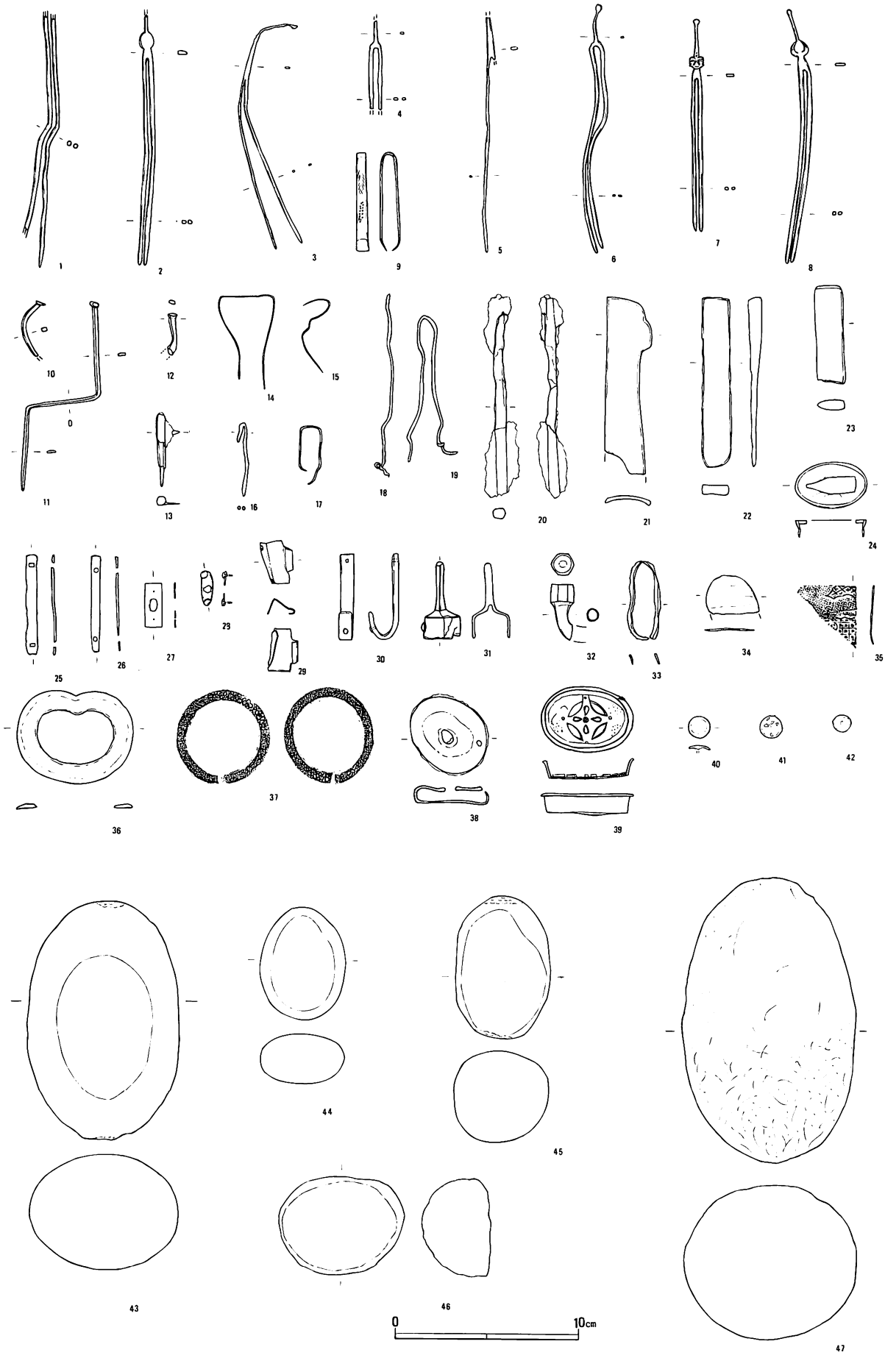
第70図　瓦（1/3）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
5cm

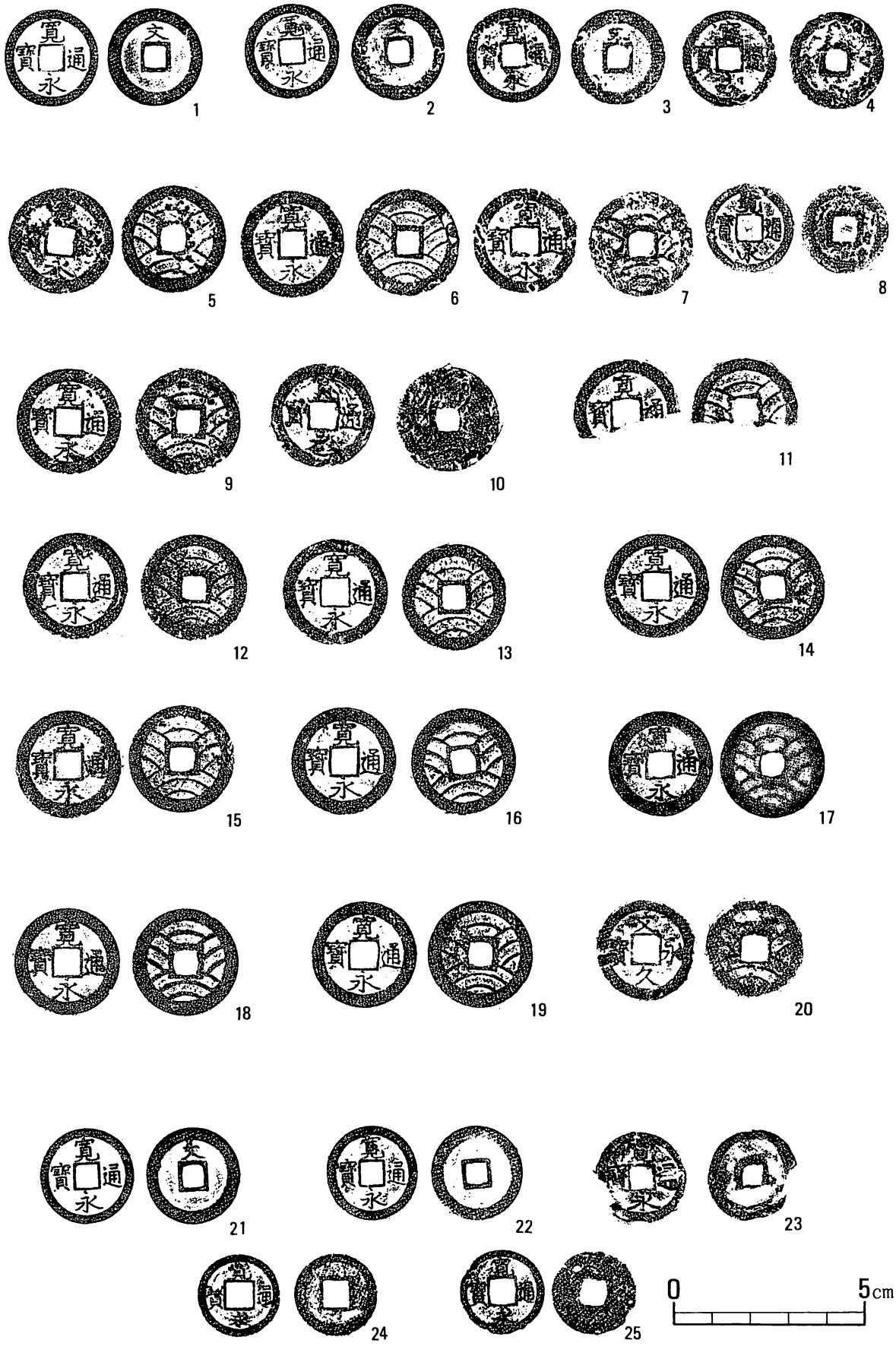
第71図　玩具類・他（1/2）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
5cm

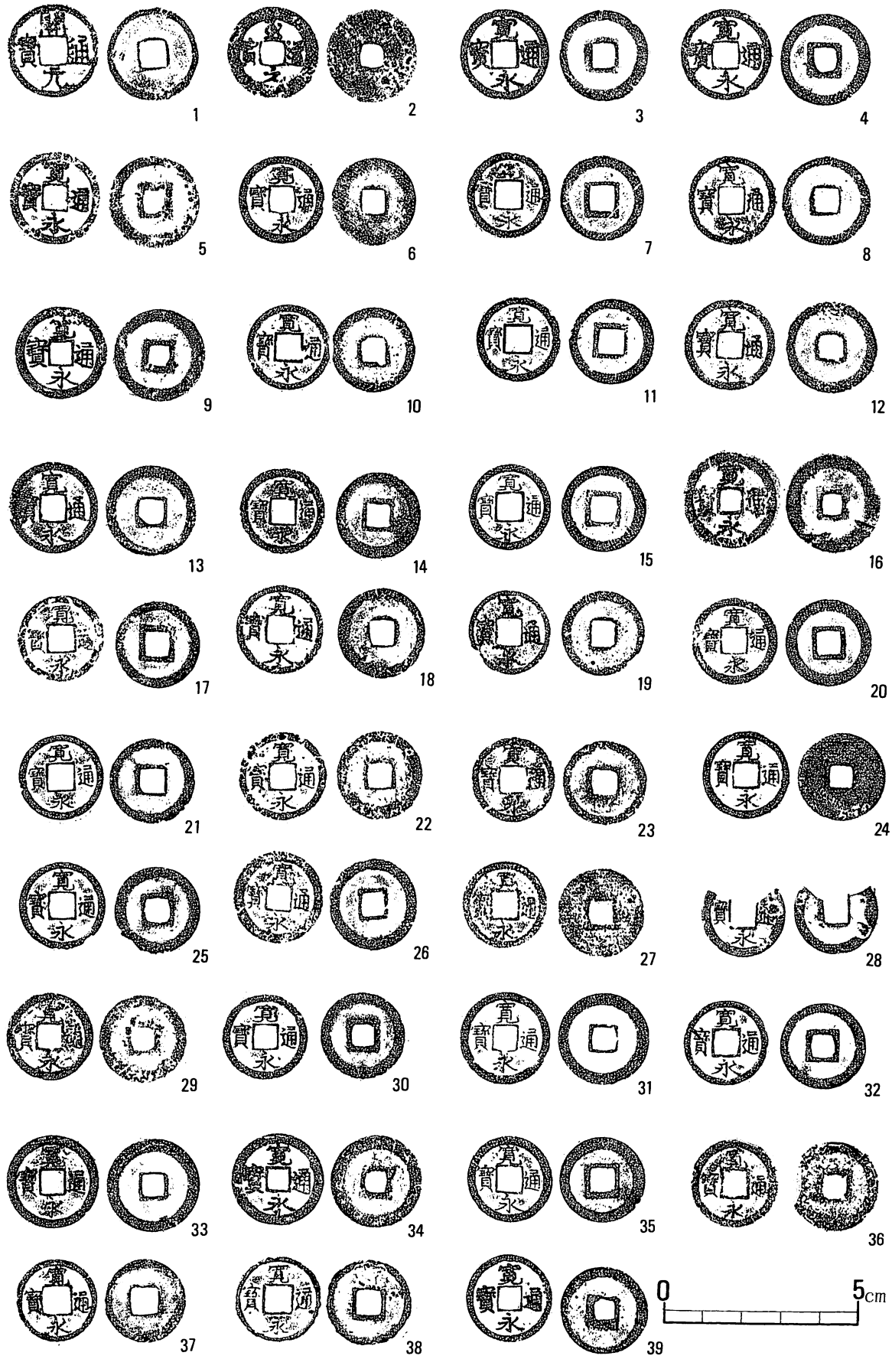
第72図　鈴・煙管・他（1/2）



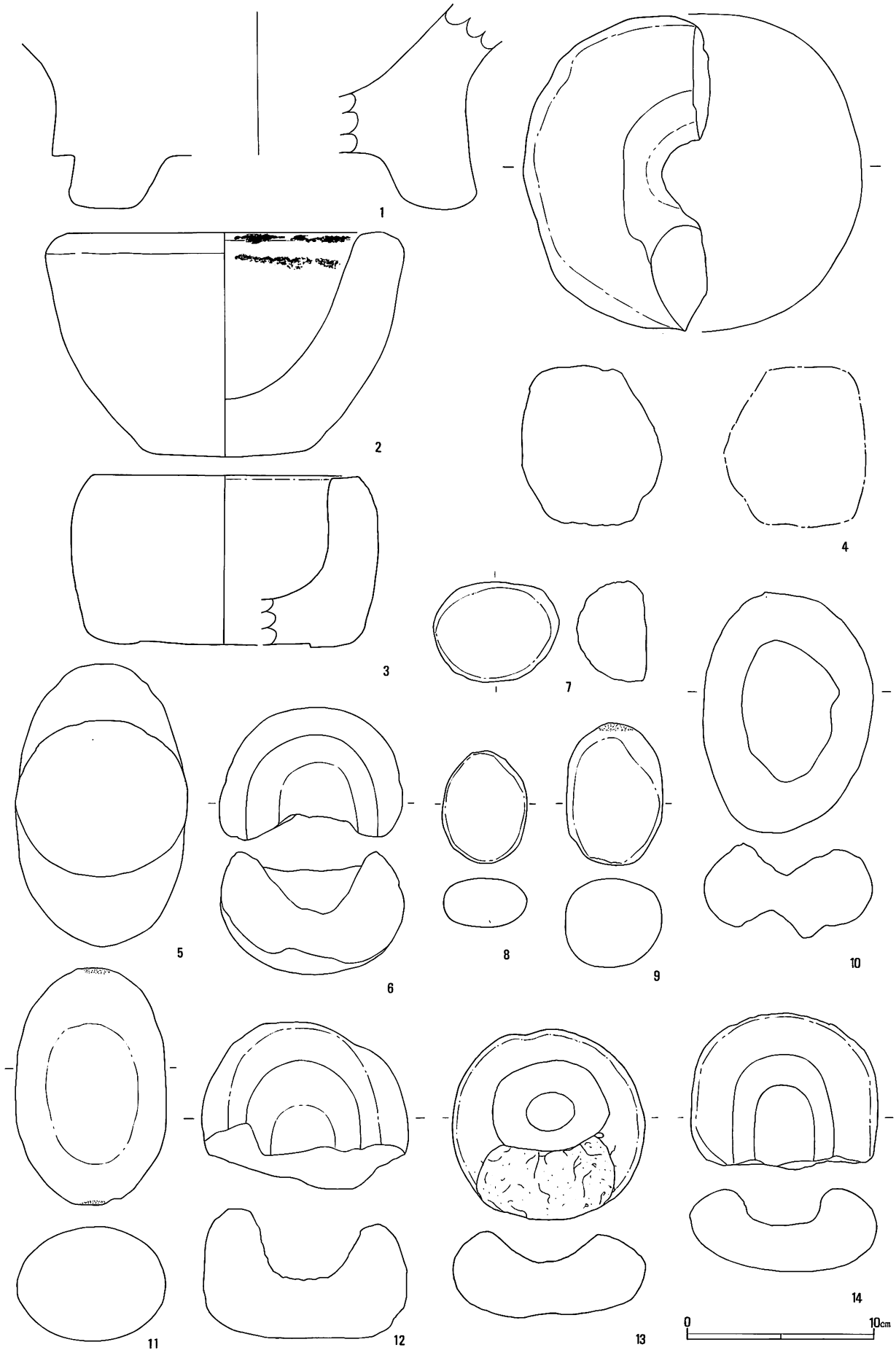
第73図　金属製品・石（1/3）



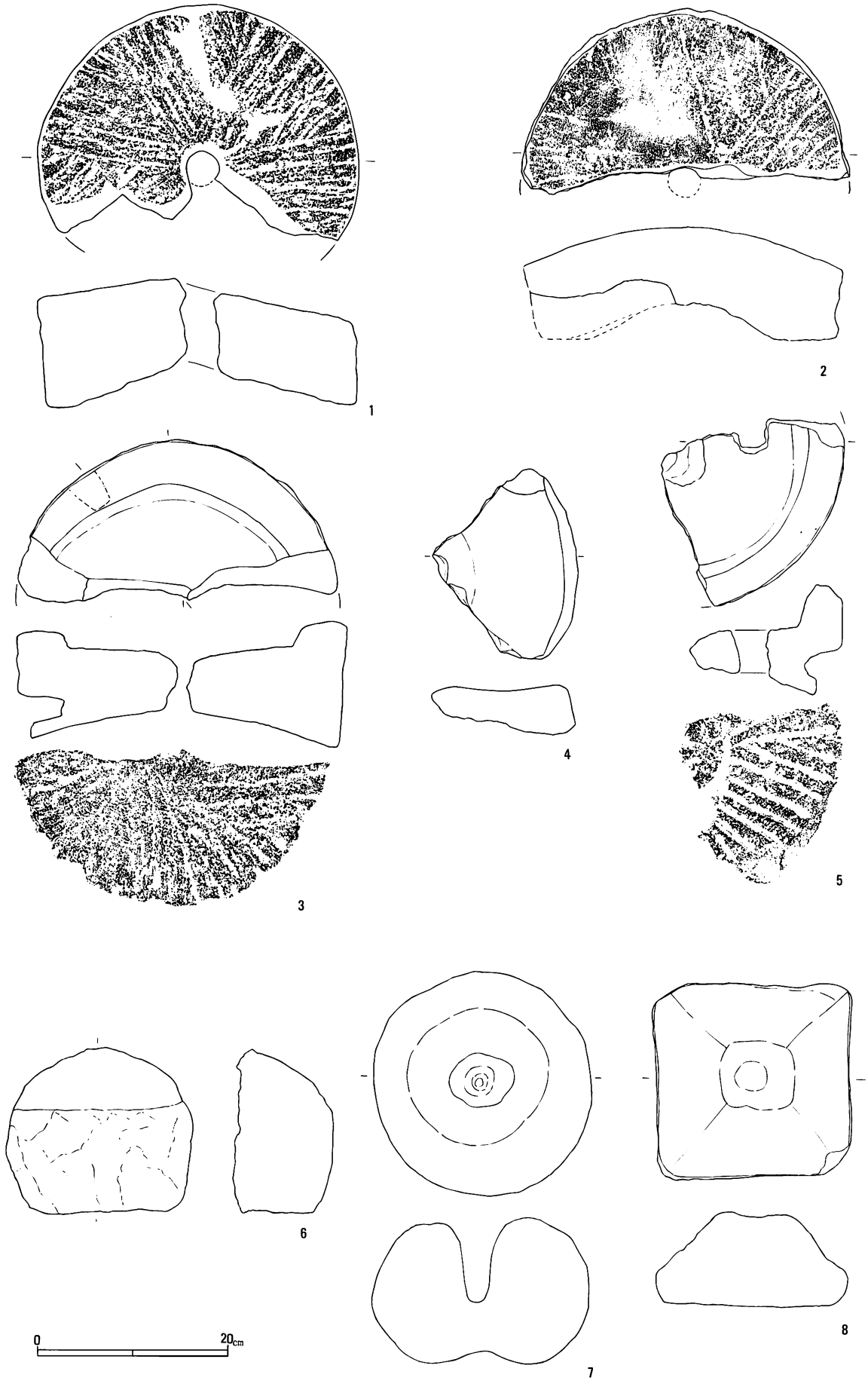
第74図　銭貨①（1/1.5）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
5cm

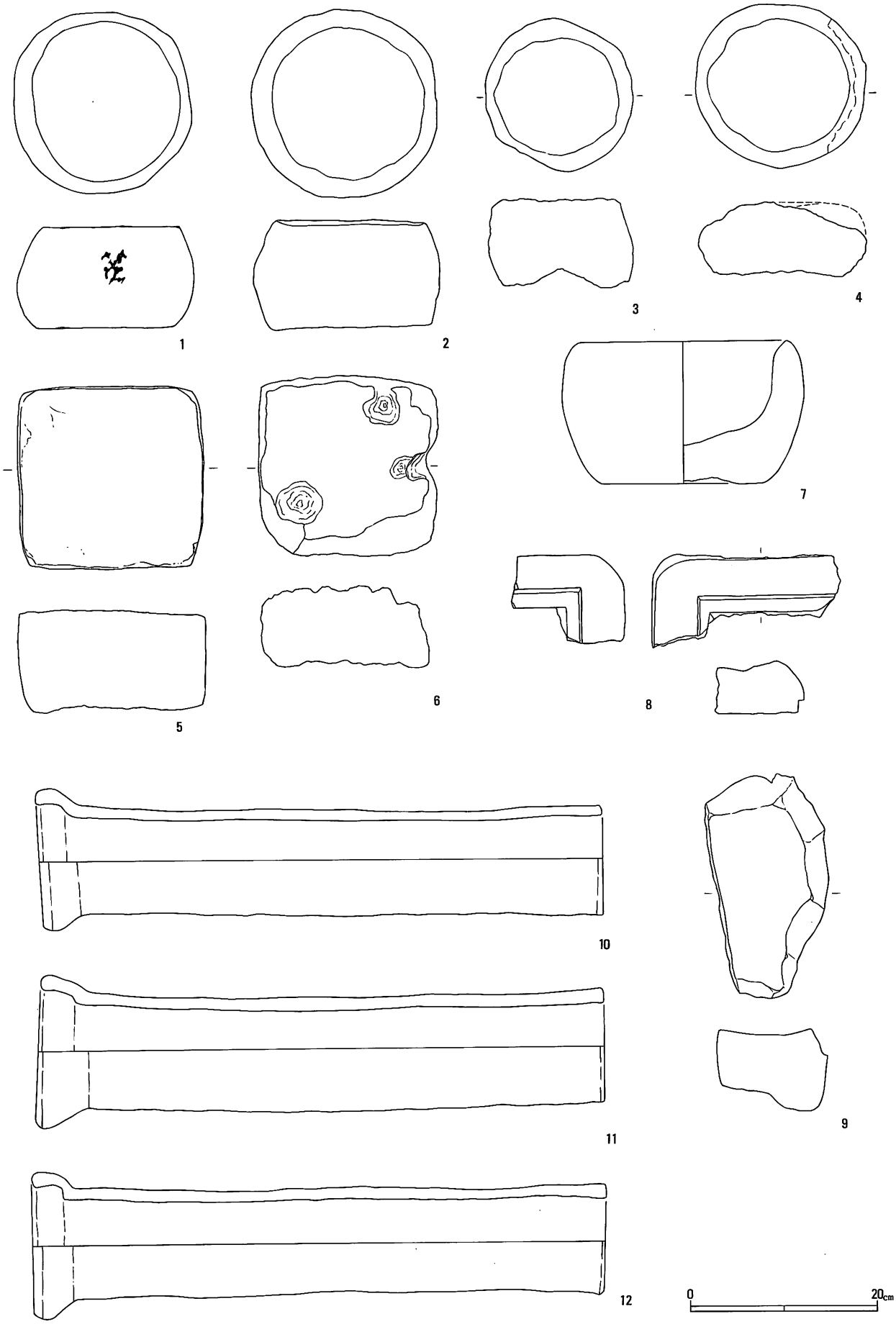
第75図　銭貨②（1/1.5）



第76図　石製品（1/3）

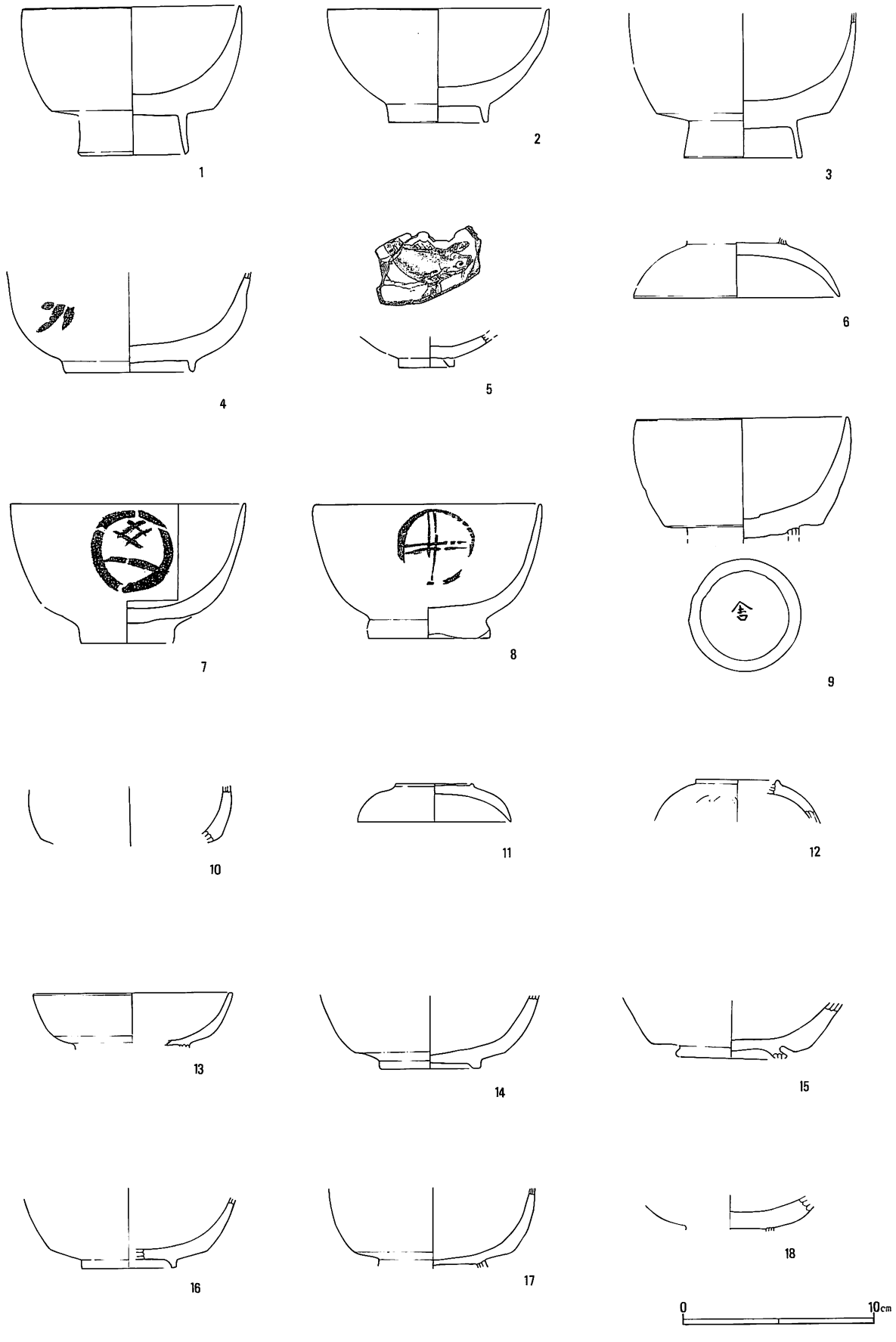


第77図　石製品（1/6）

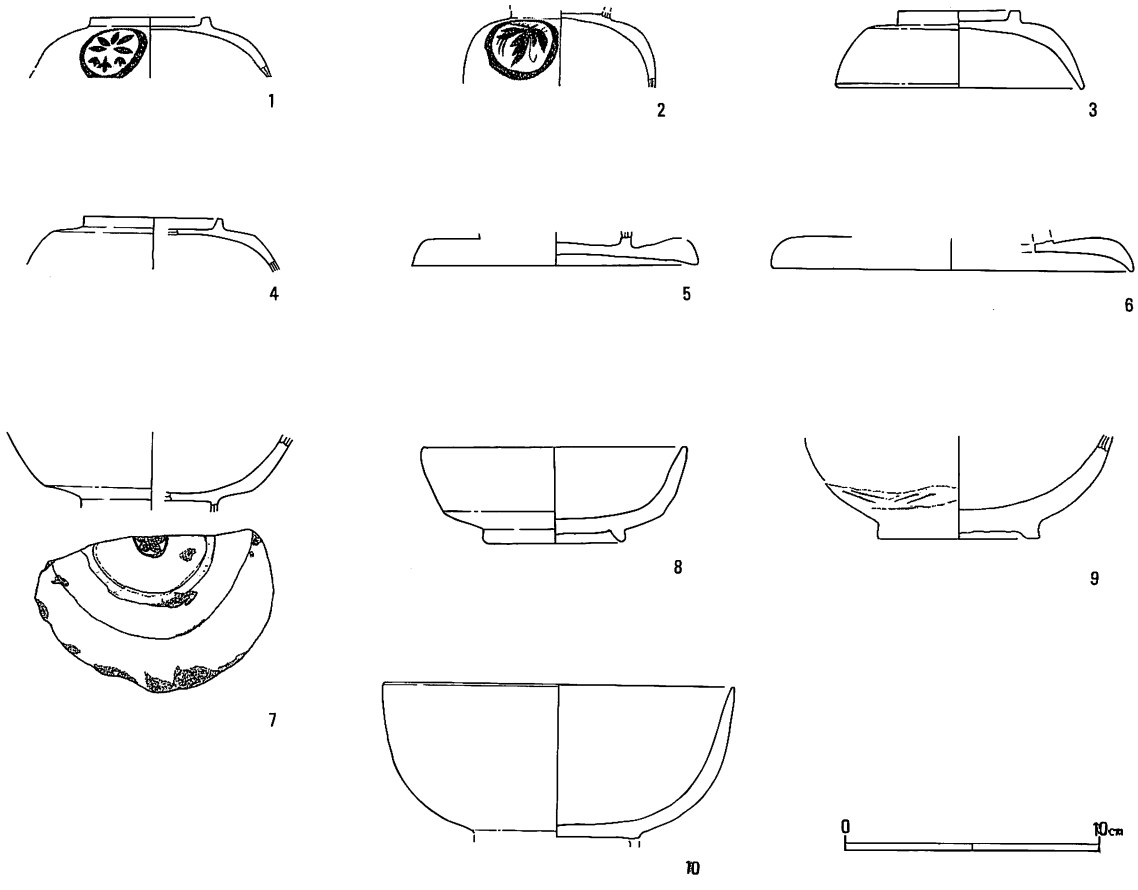


第78図　石製品・土管（1/6）

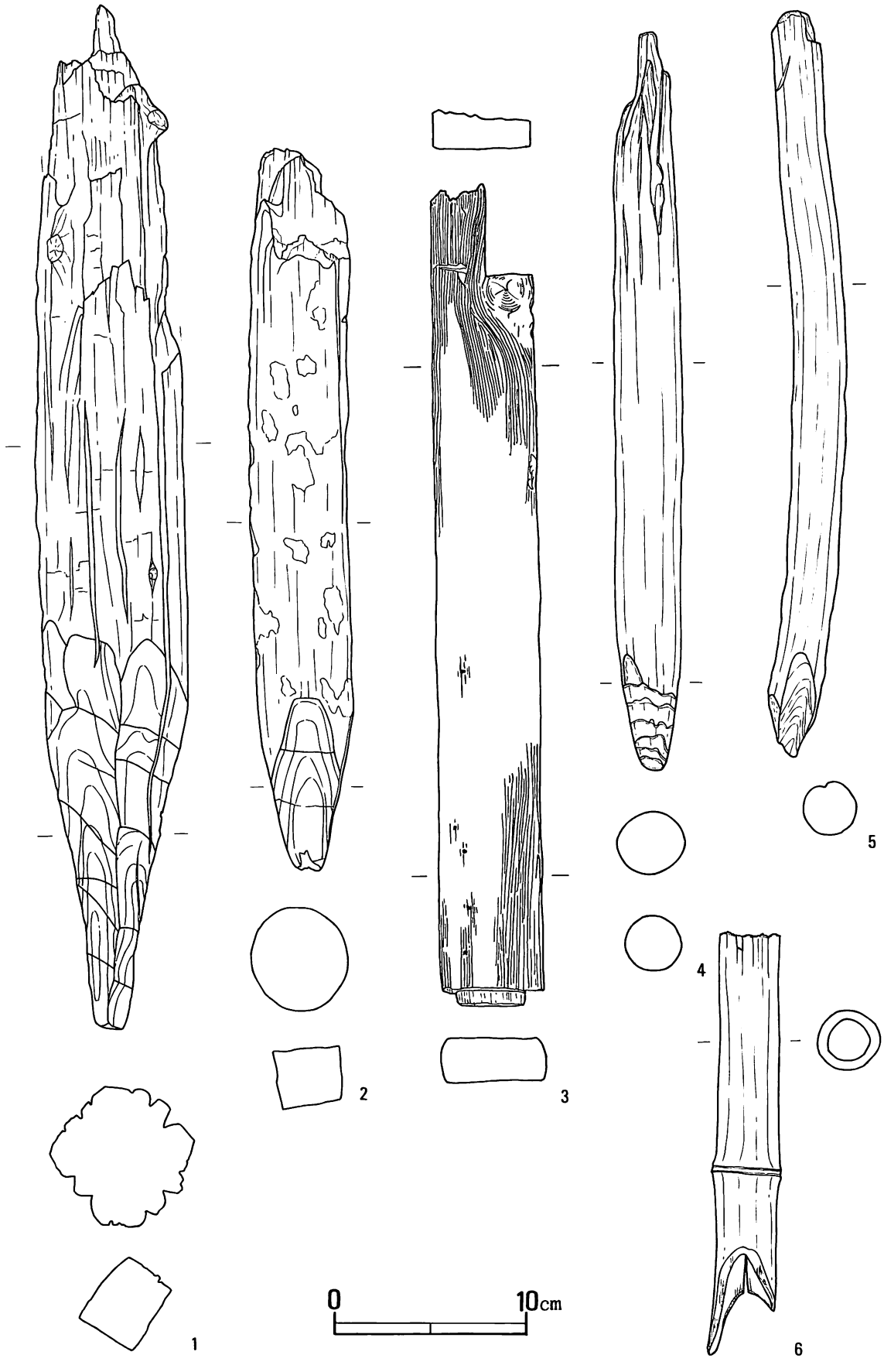
第79図　硯・砥石・ビン類（1/3）



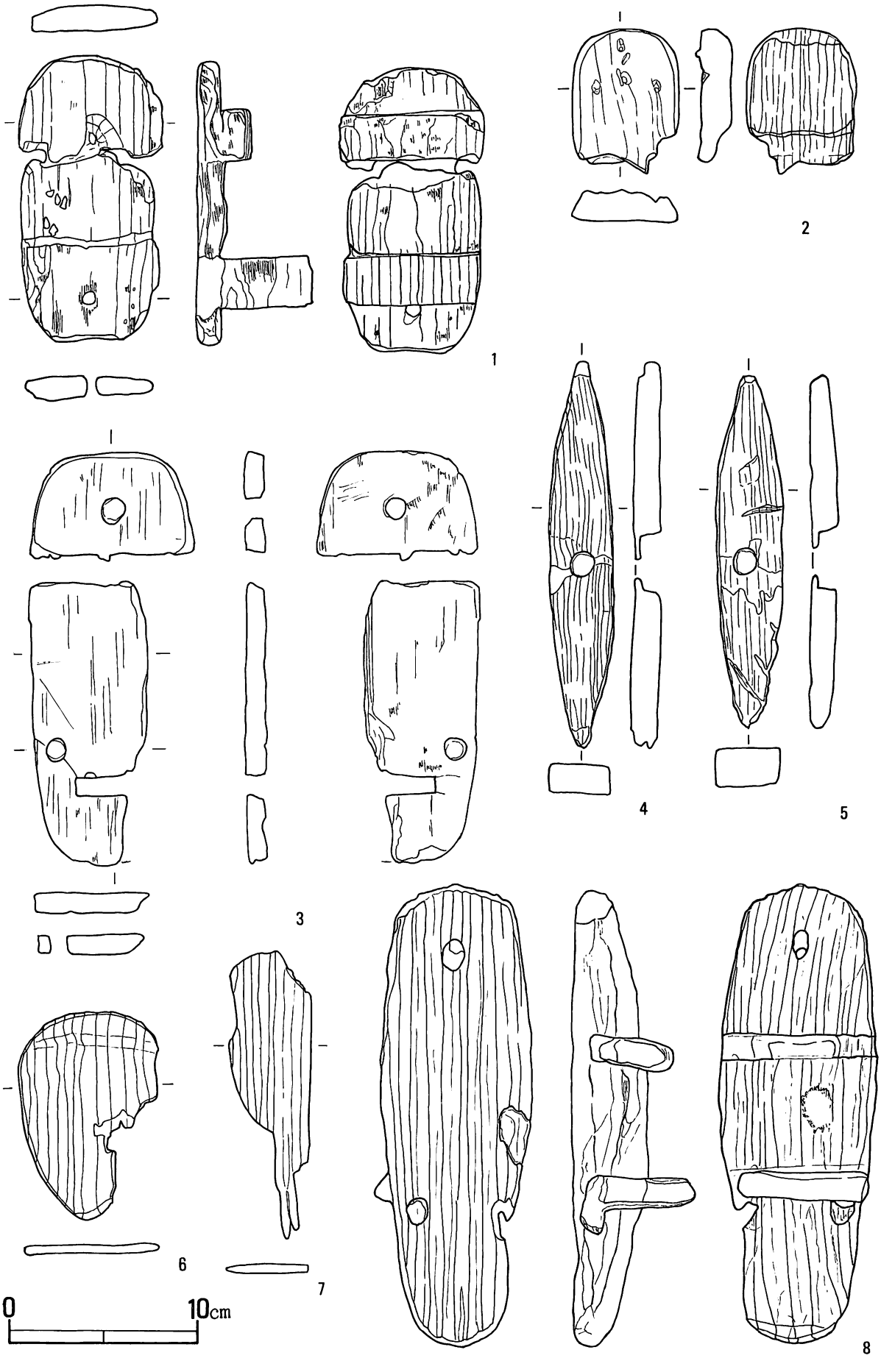
第80図　1溝（1～6）・3溝（7～10）・6溝（11・12）・7溝（13～18）出土椀類（1/3）



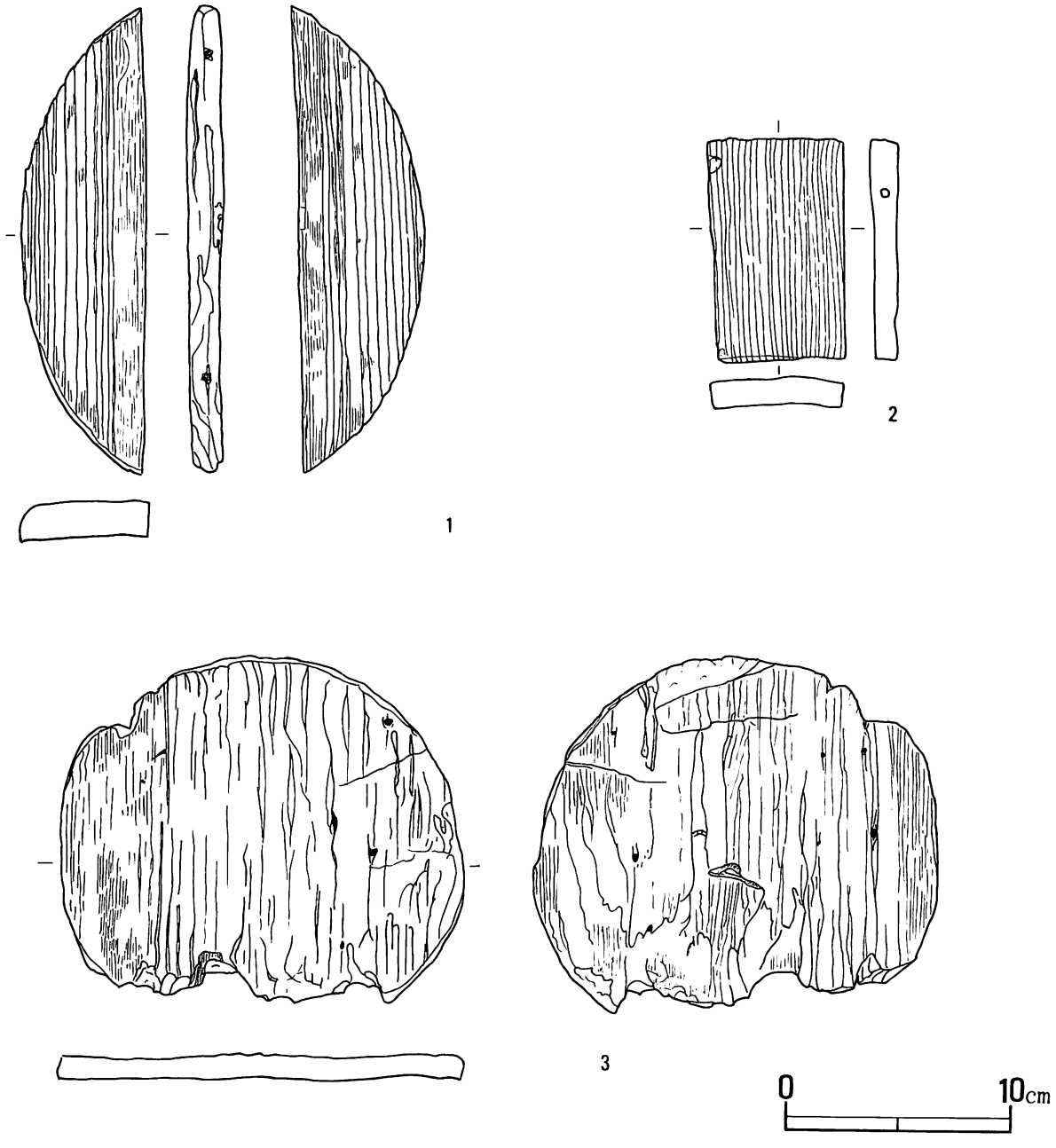
第81図　7溝（1～6）・12溝（7）・13溝（8）・4面（9）・5面（10）出土椀類（1/3）



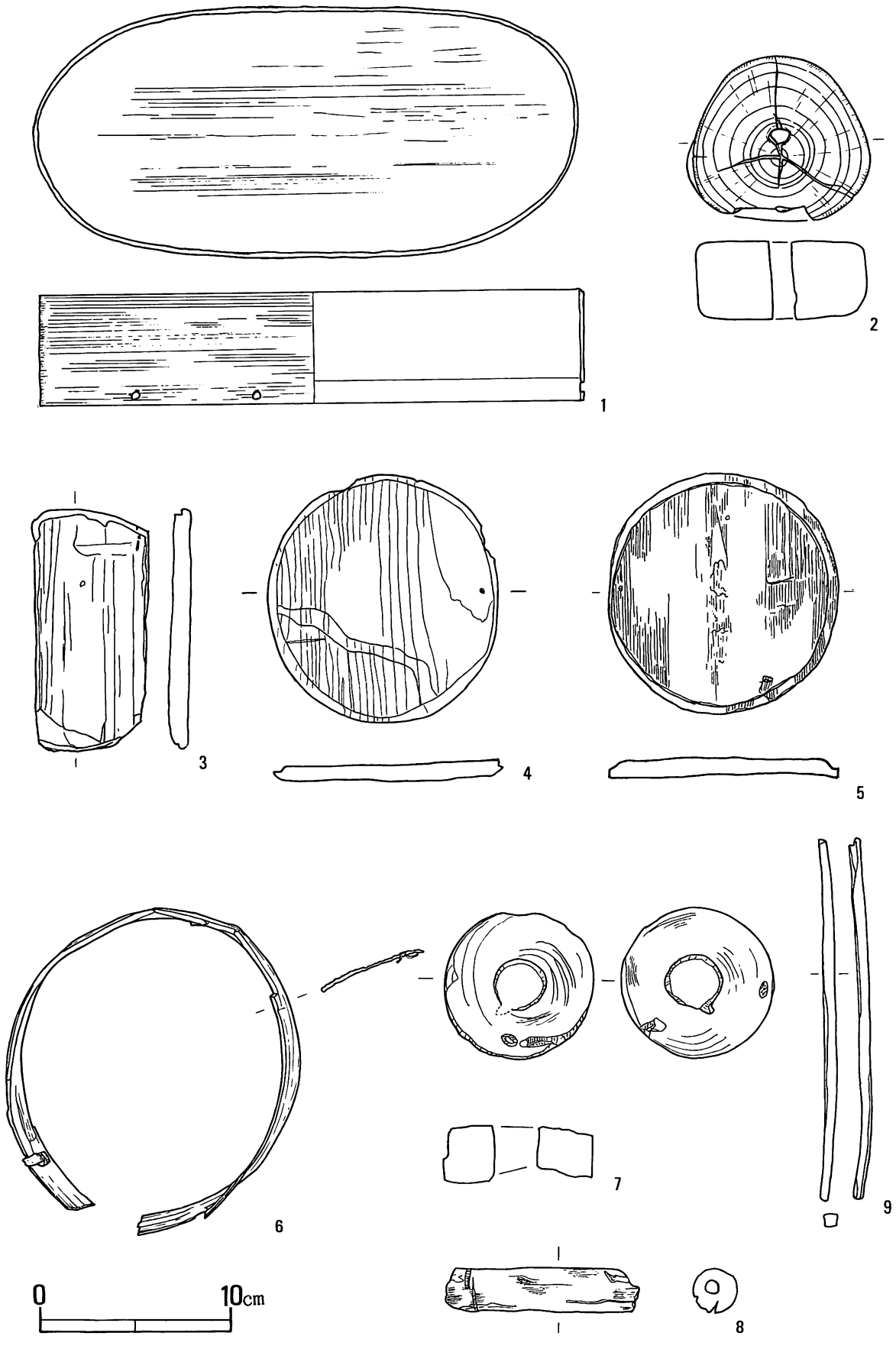
第82図　2号建物出土木製品（1/3）



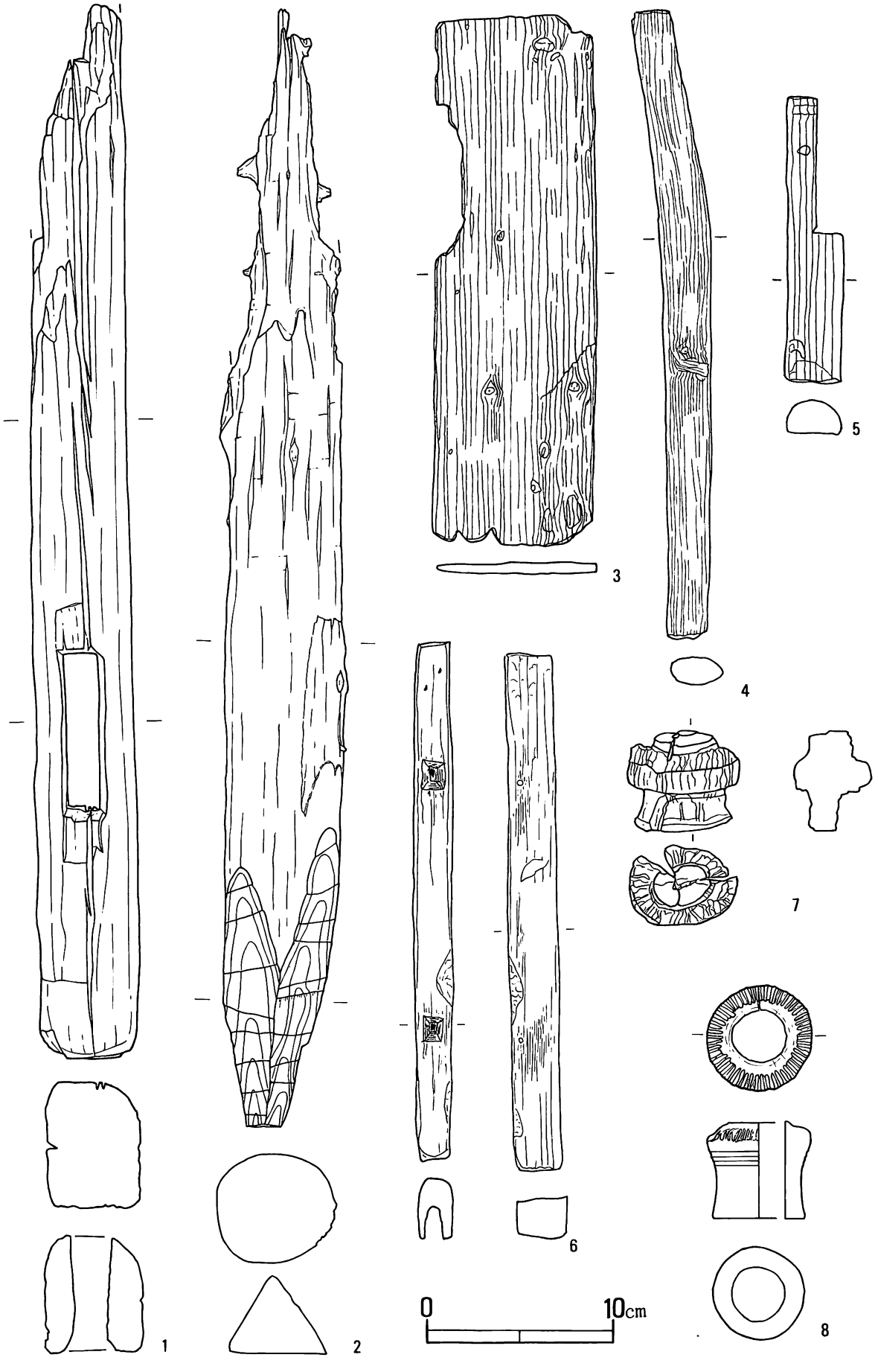
第83図　1号溝出土木製品（1/3）



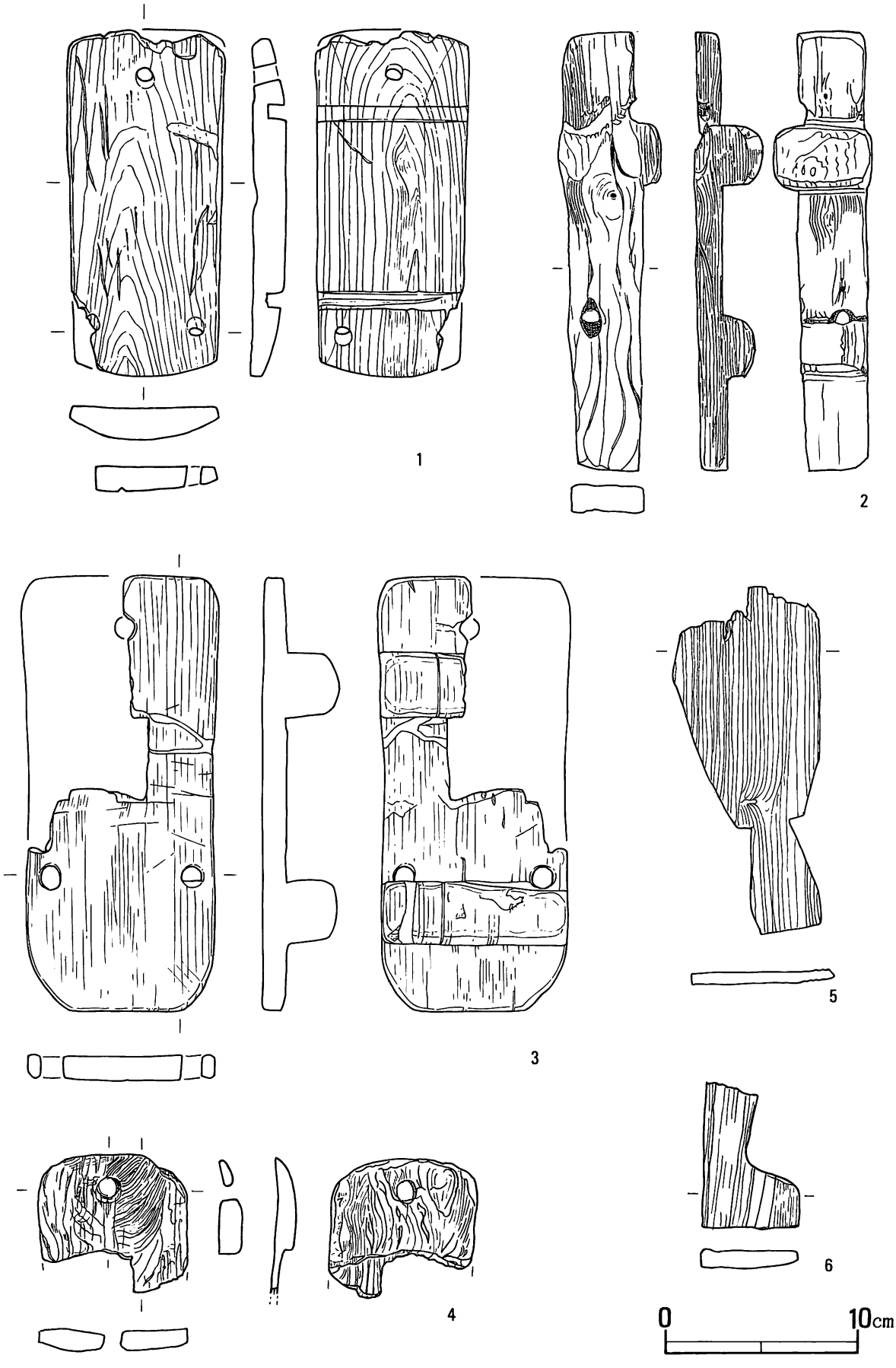
第84図　1号溝出土木製品（1/3）



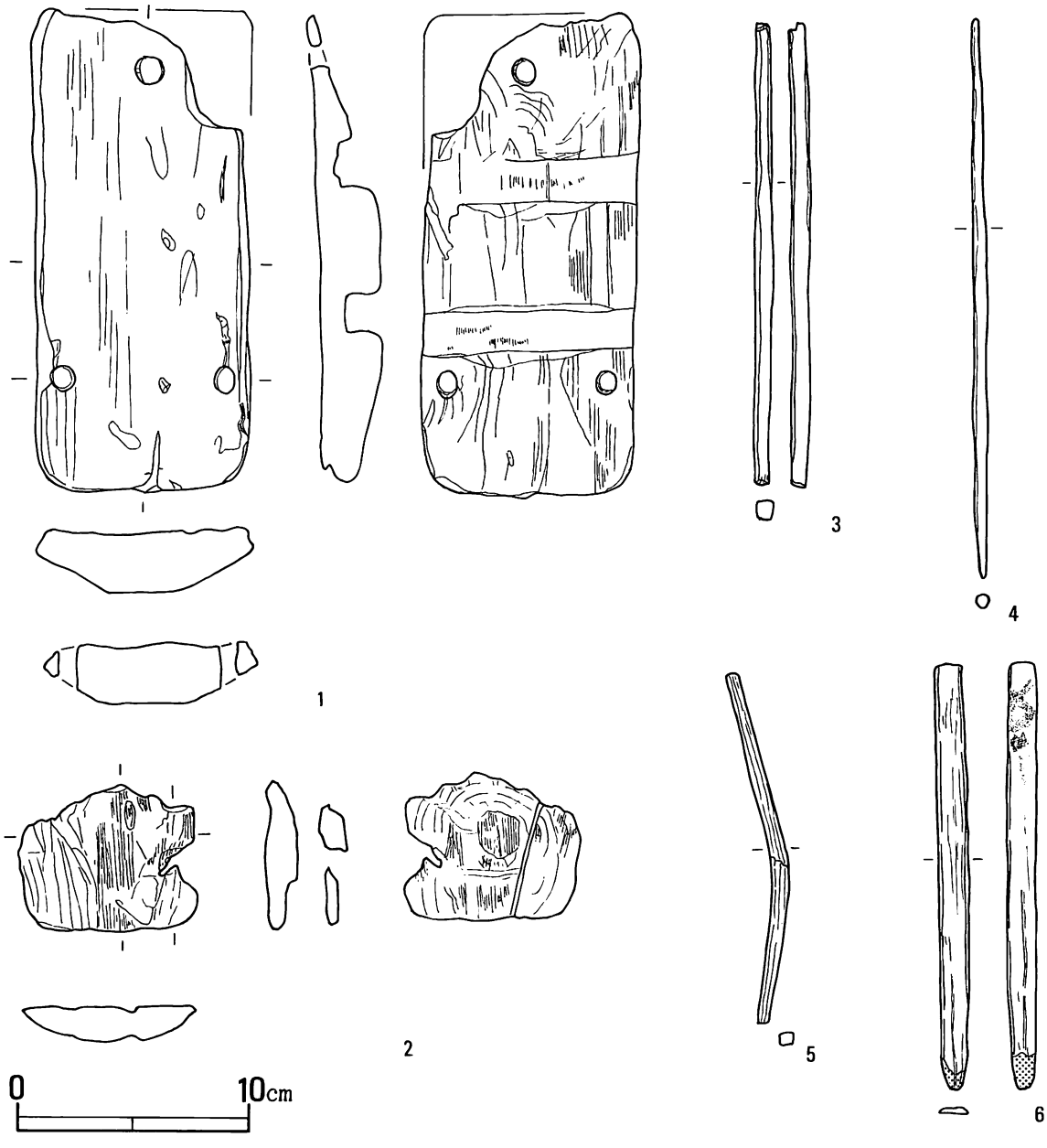
第85図　1号溝出土木製品（1/3）



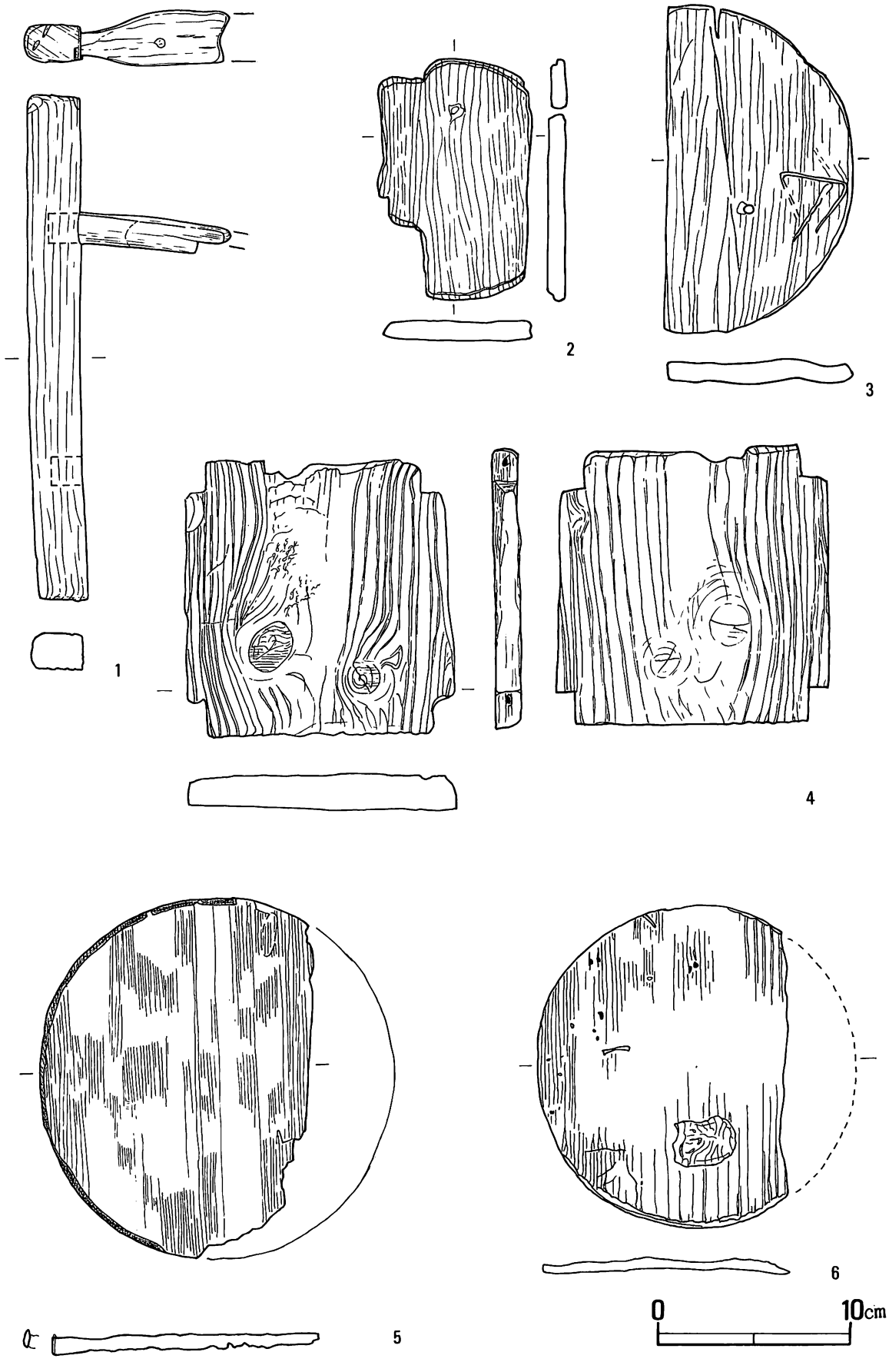
第86図　1号溝出土木製品（1/3）



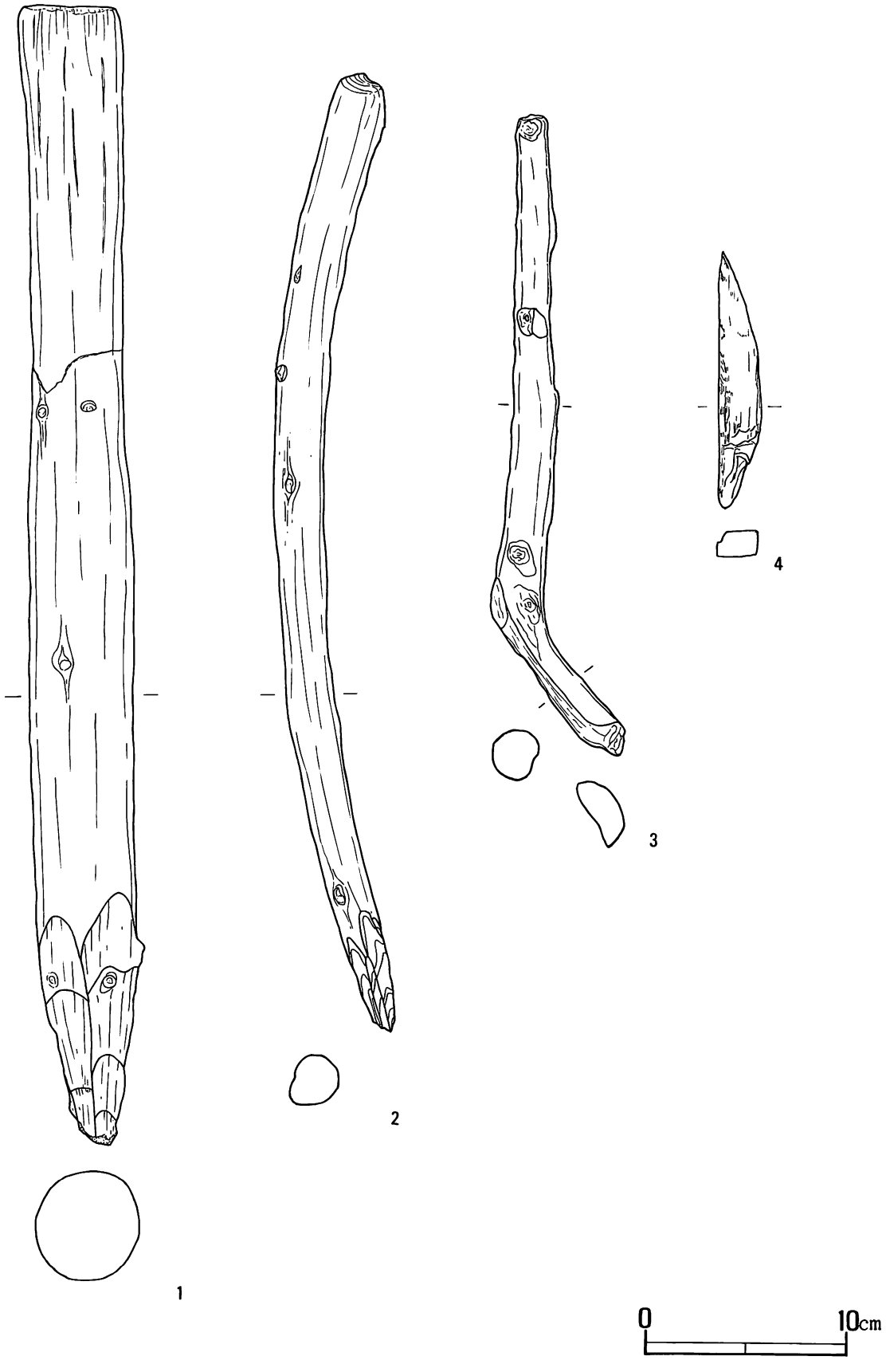
第87図　3号溝出土木製品（1/3）



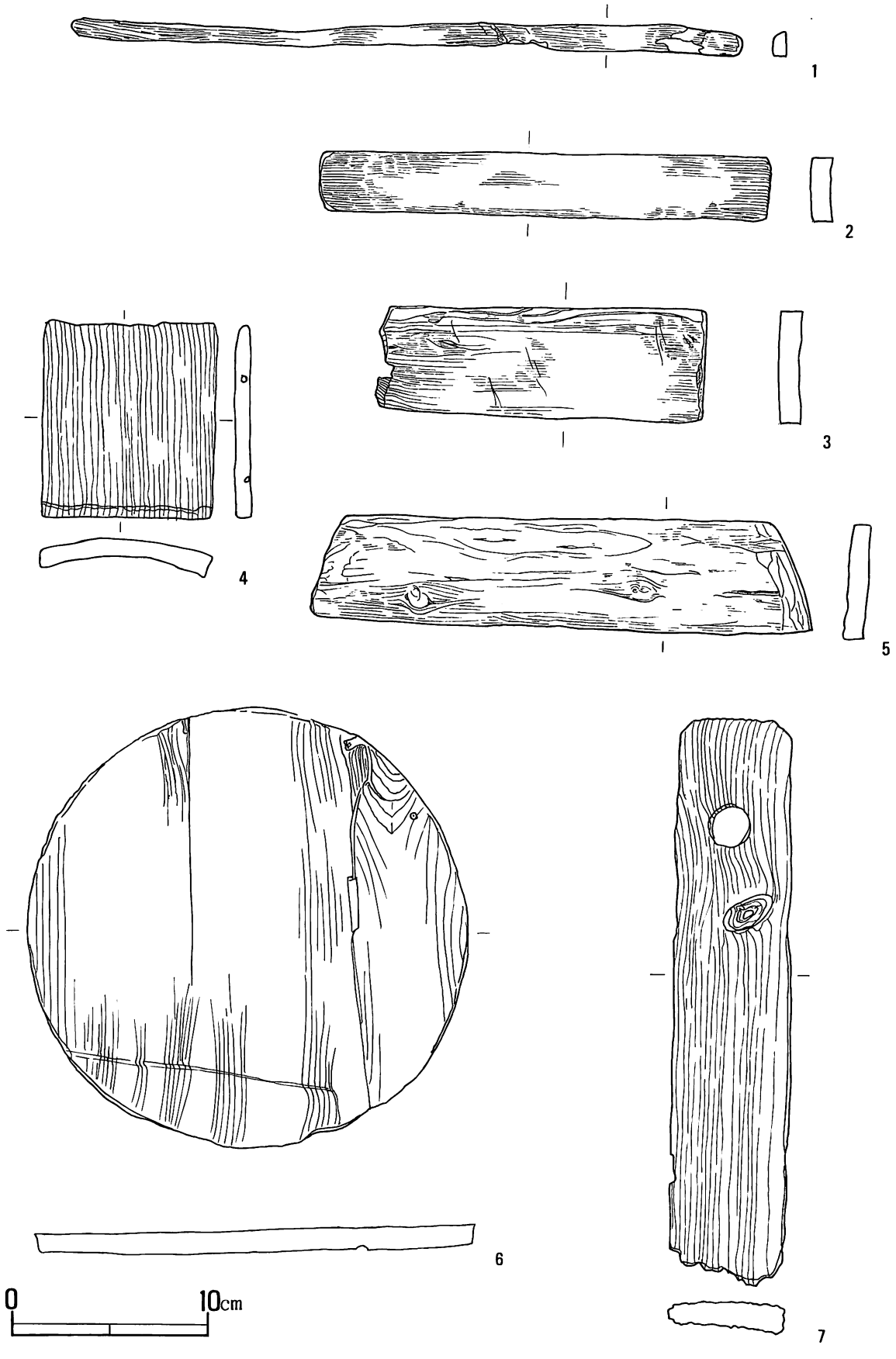
第88図　3号溝出土木製品（1/3）



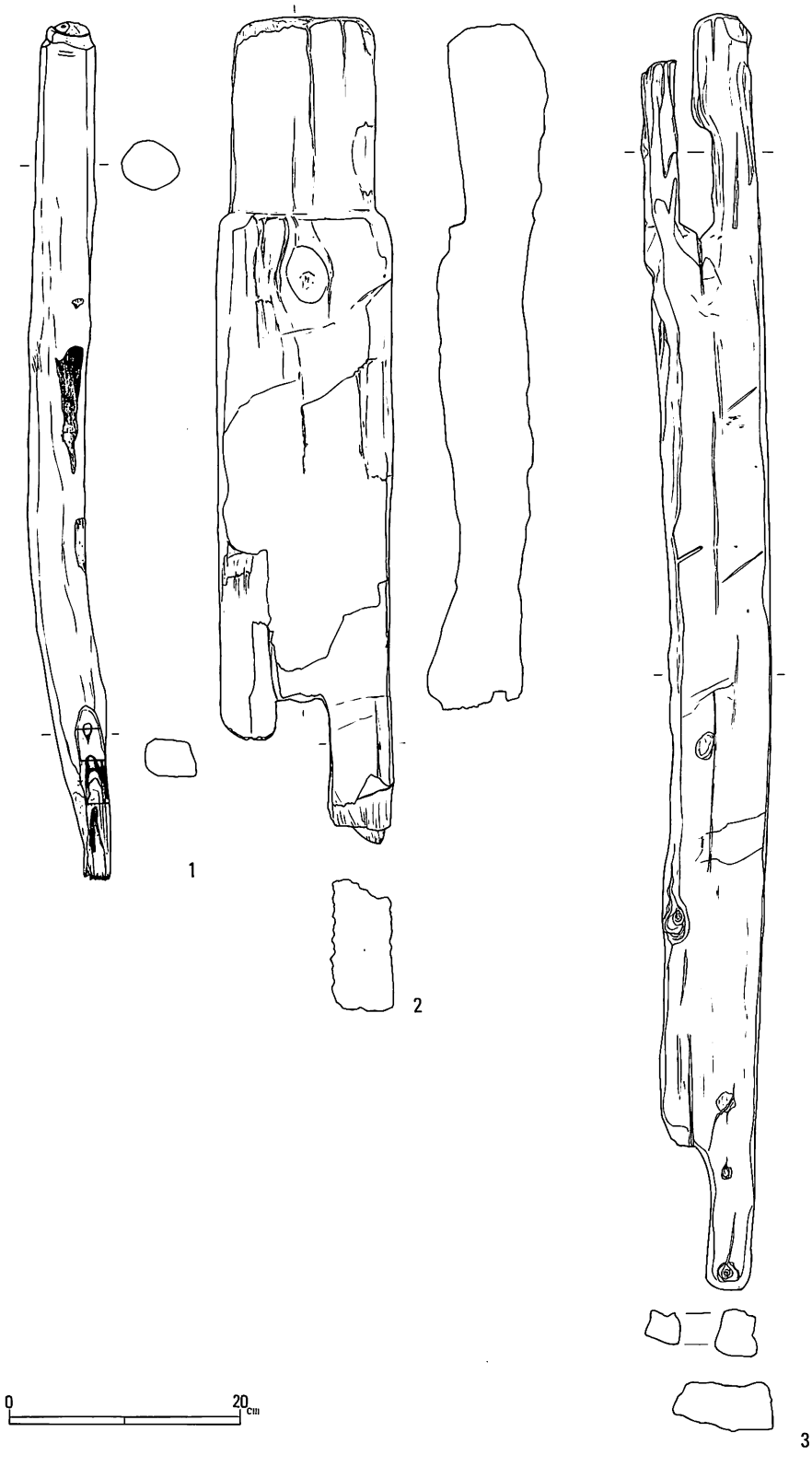
第89図　3号溝出土木製品（1/3）



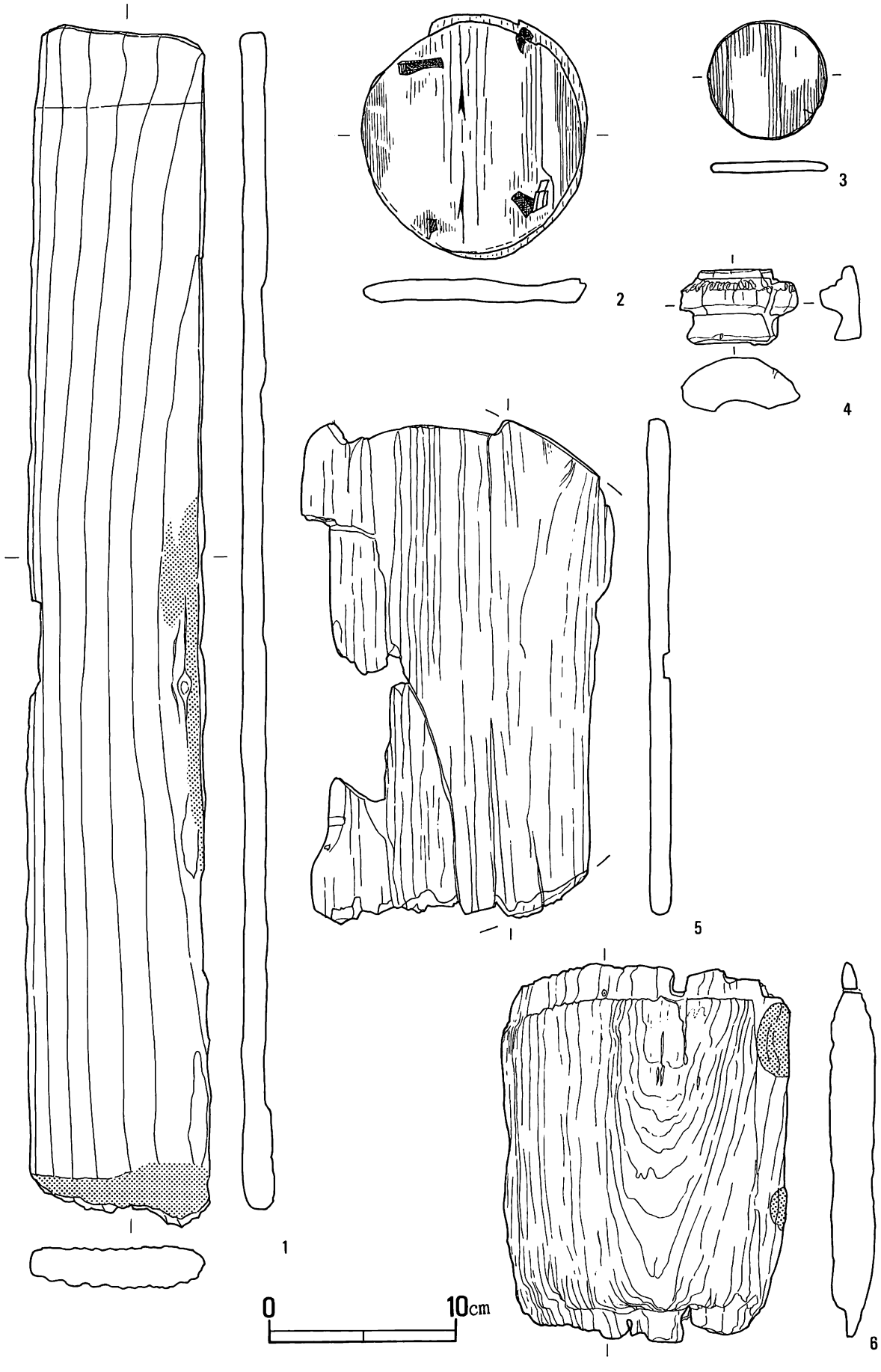
第90図　3号溝出土木製品（1/3）



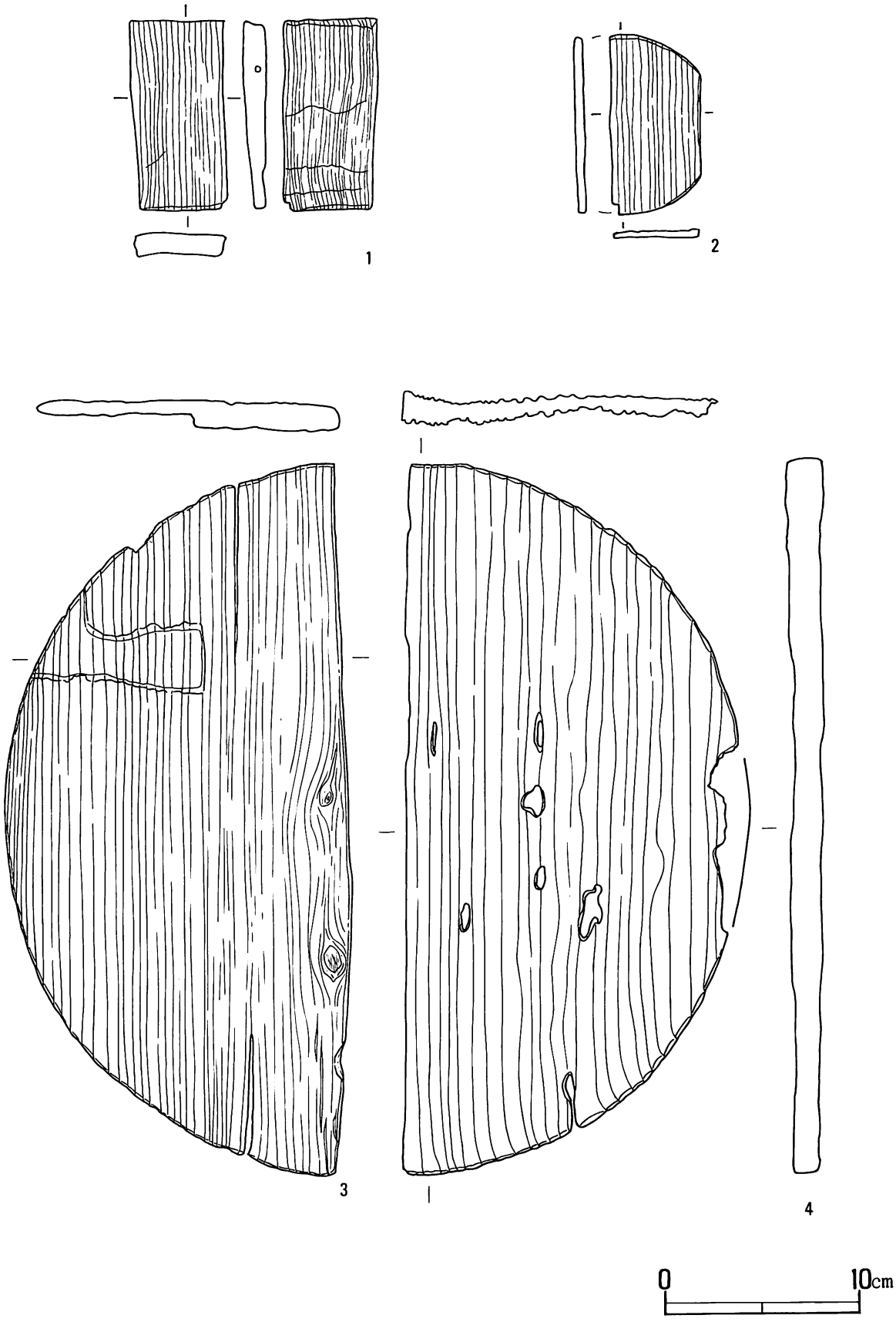
第91図　3号溝（1～5）・6溝（6～7）出土木製品（1/3）



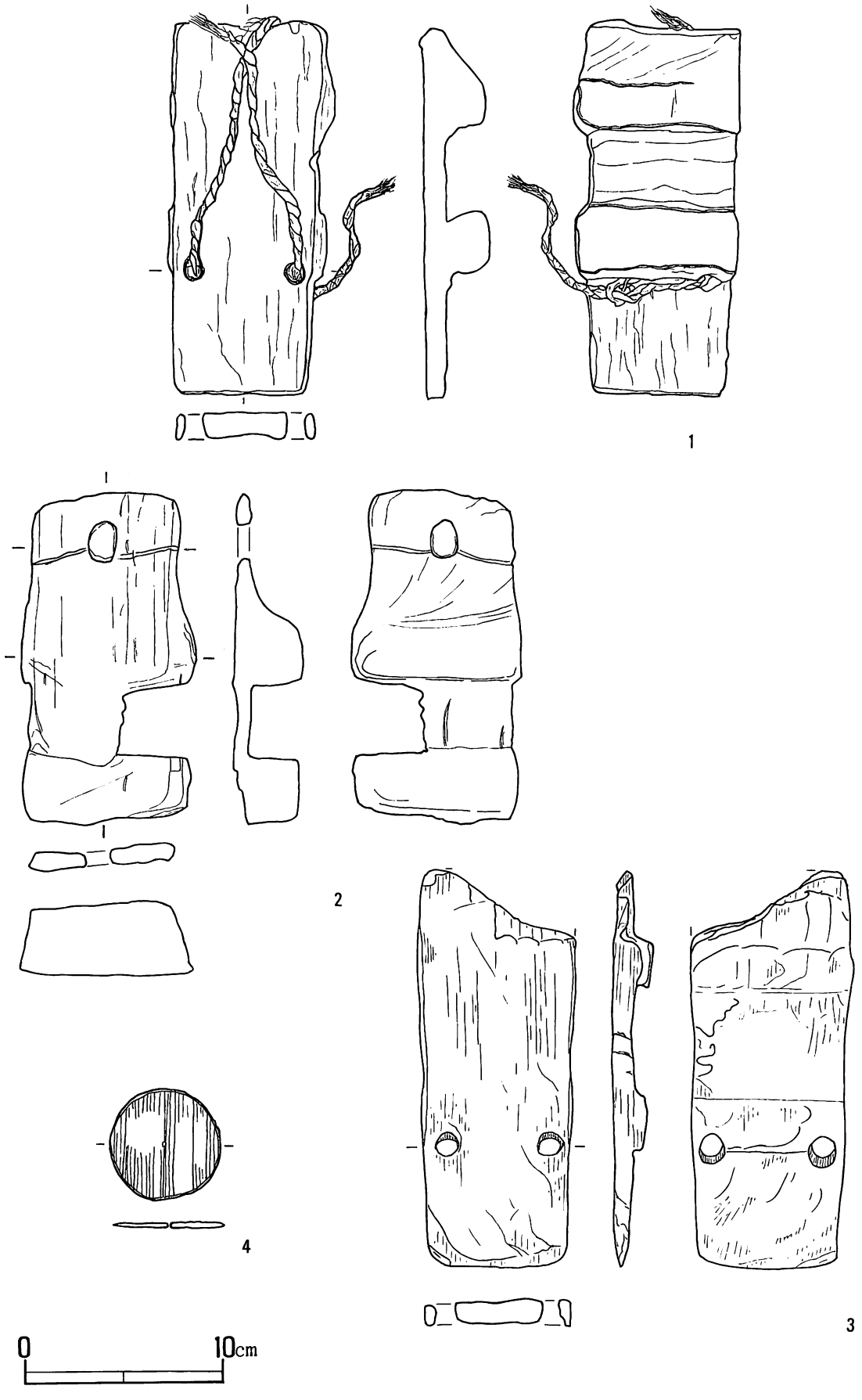
第92図　3号溝（1）・6号溝（2）・7号溝（3）・出土木製品（1/6）



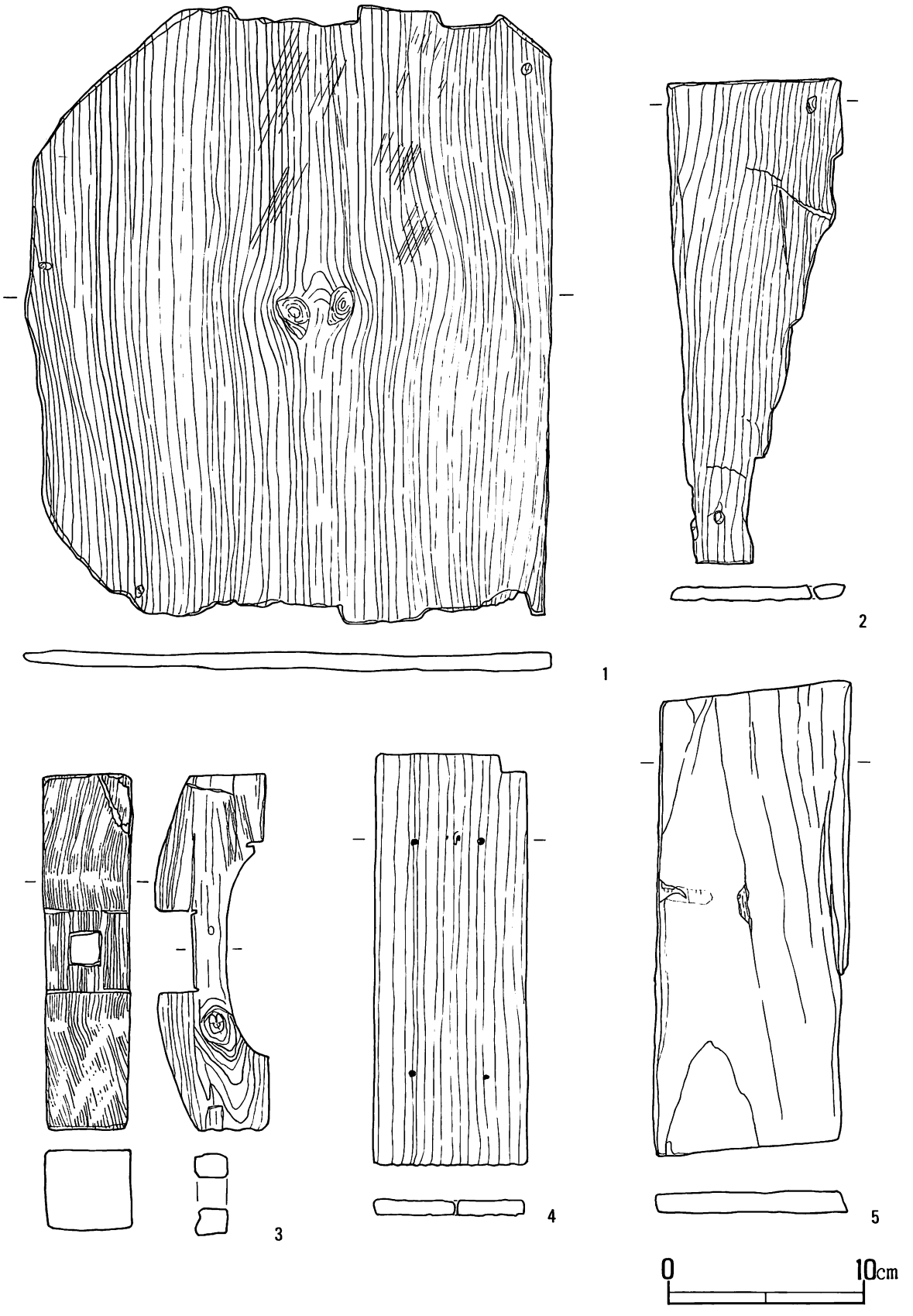
第93図　6号溝出土木製品（1/3）



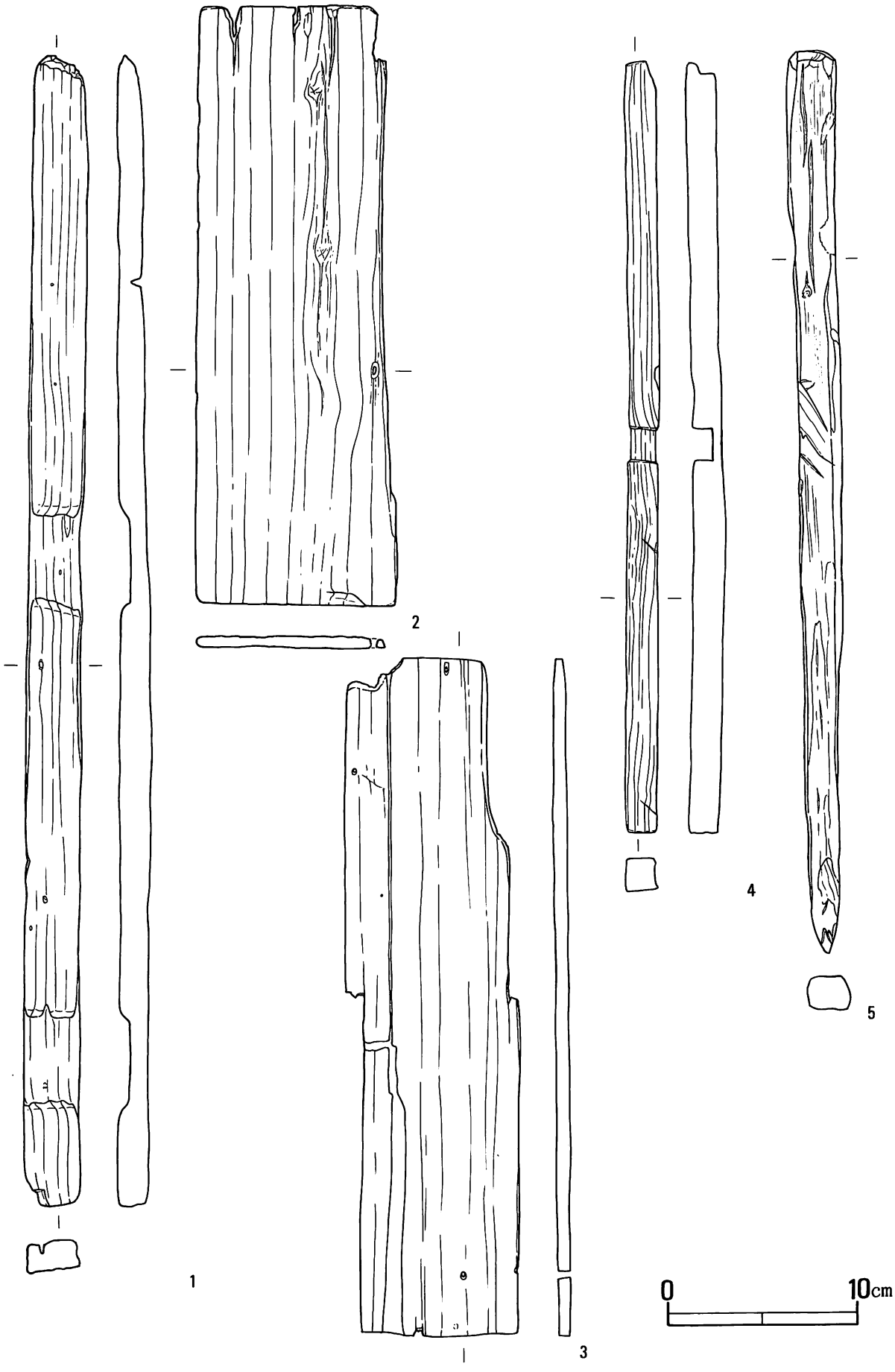
第94図　6号溝（1～2）・8溝（3～4）出土木製品（1/3）



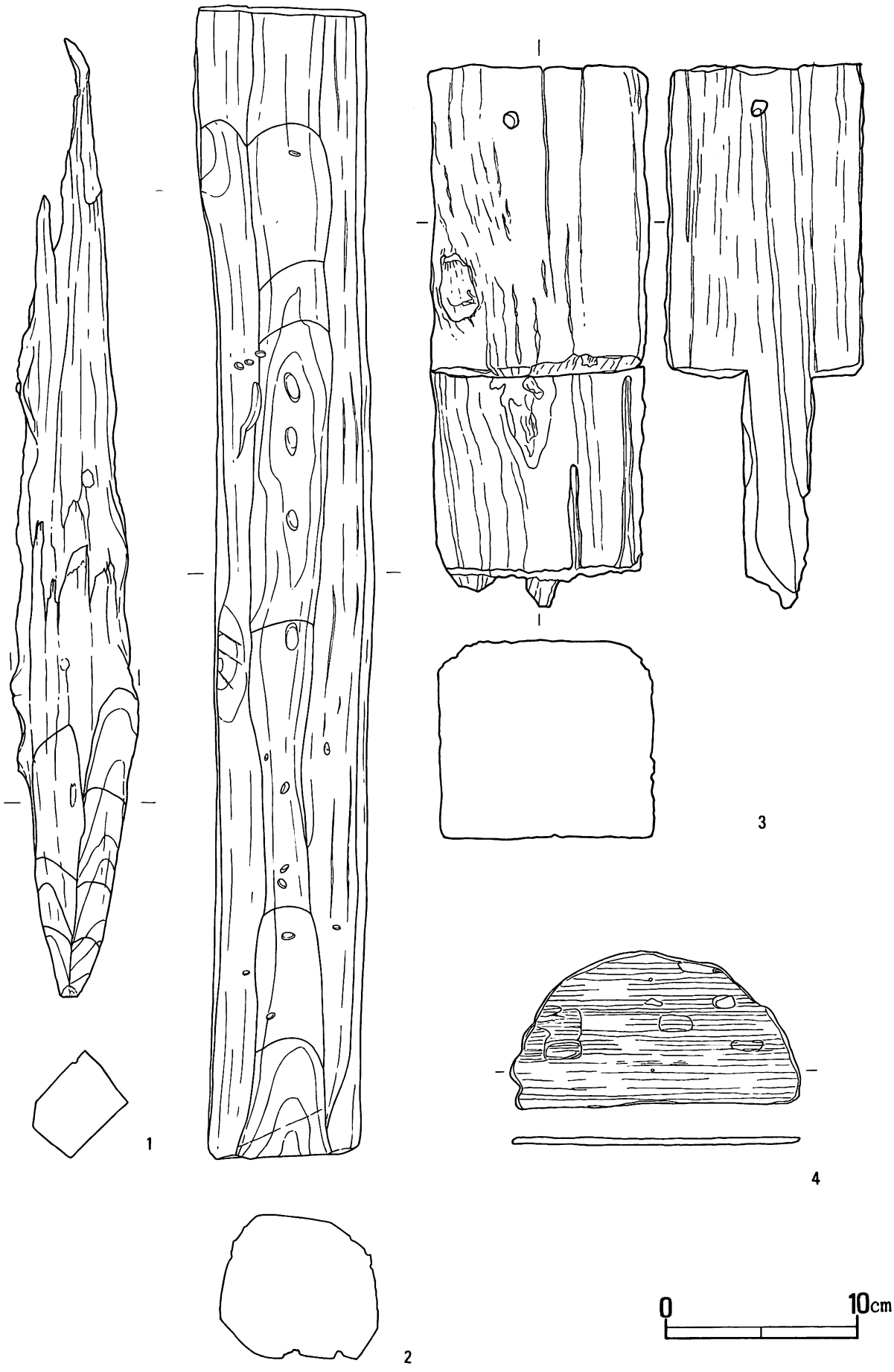
第95図　7号溝出土木製品（1/3）



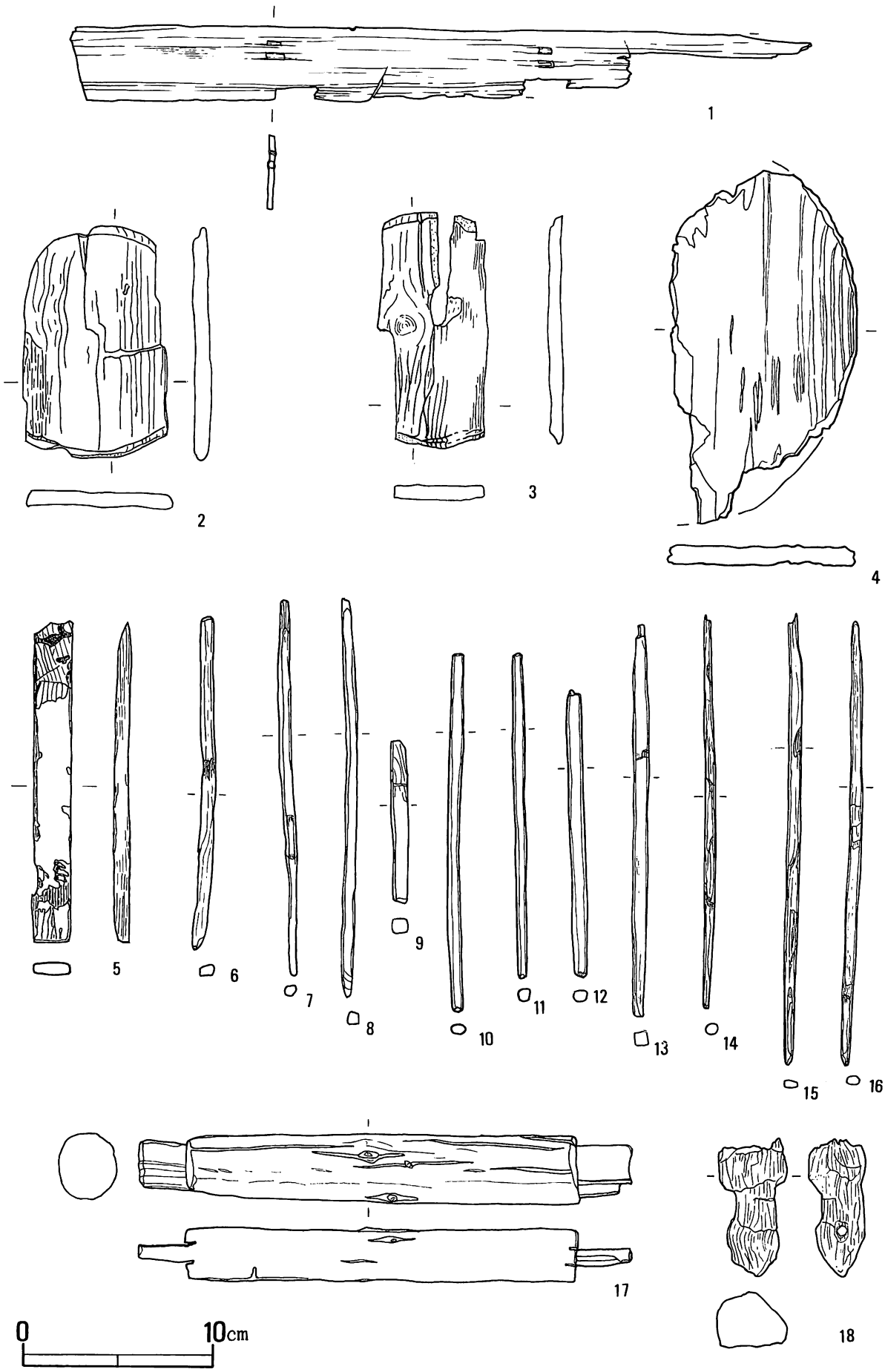
第96図　7号溝出土木製品（1/3）



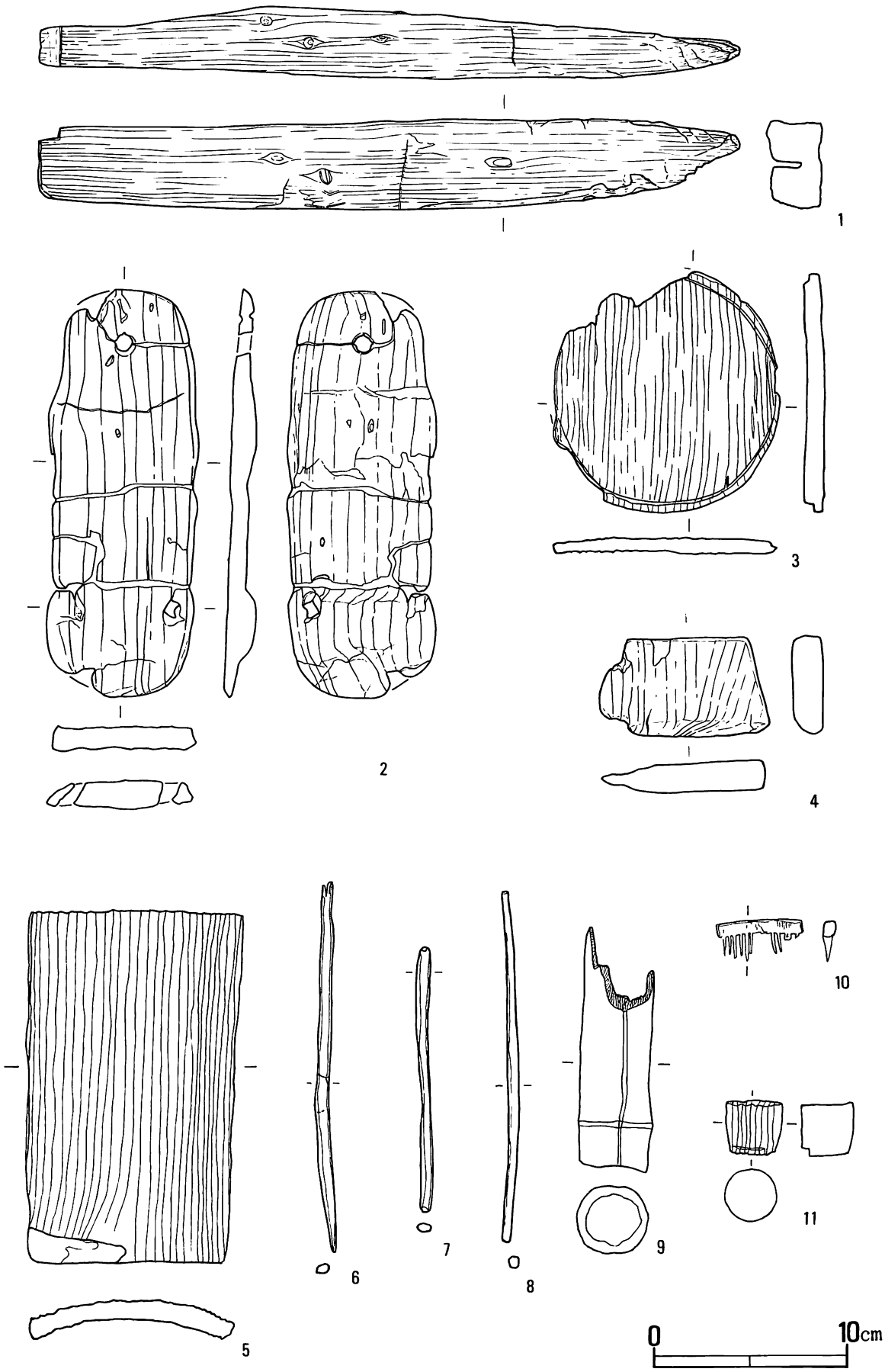
第97図　7号溝出土木製品（1/3）



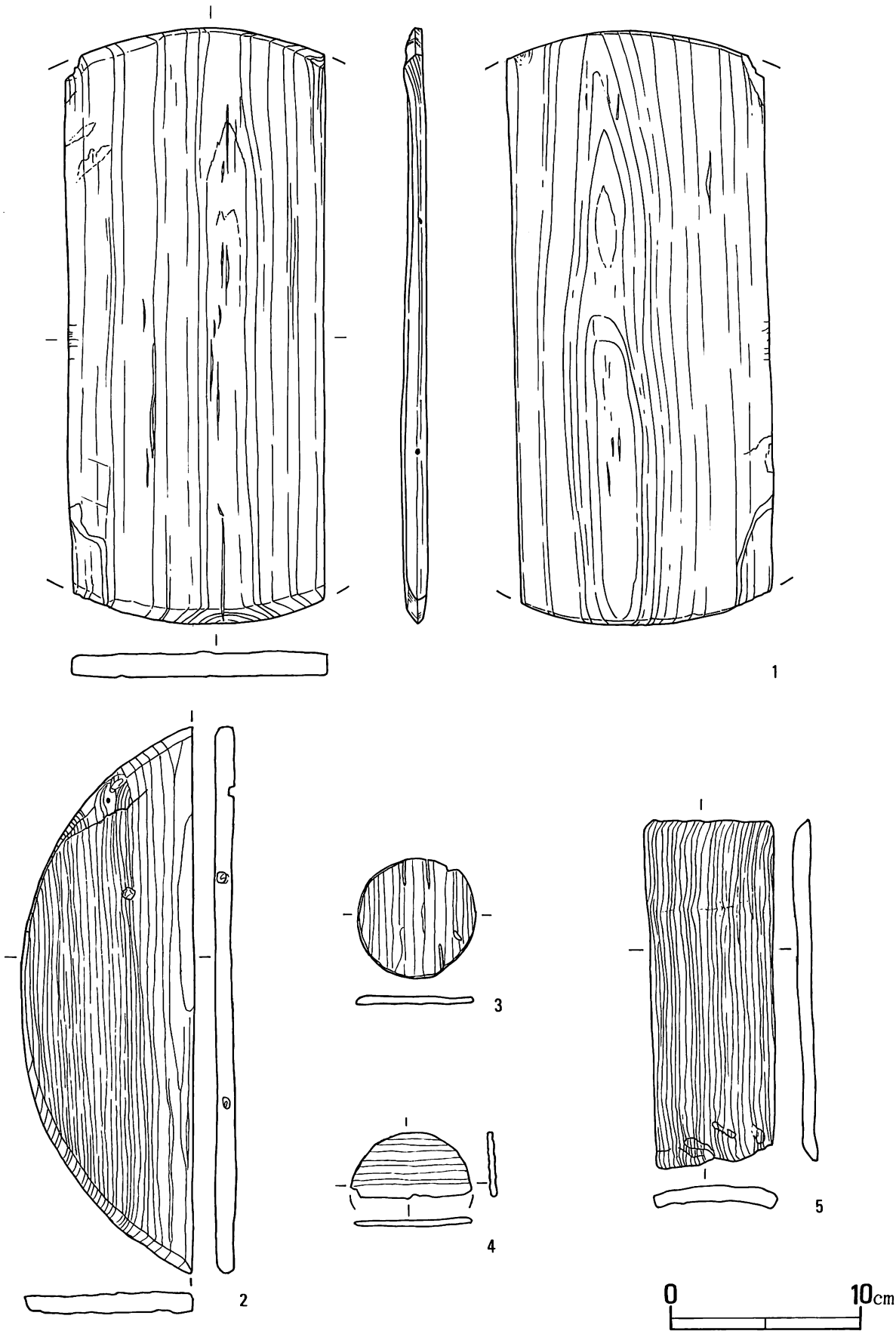
第98図　7号溝出土木製品（1/3）



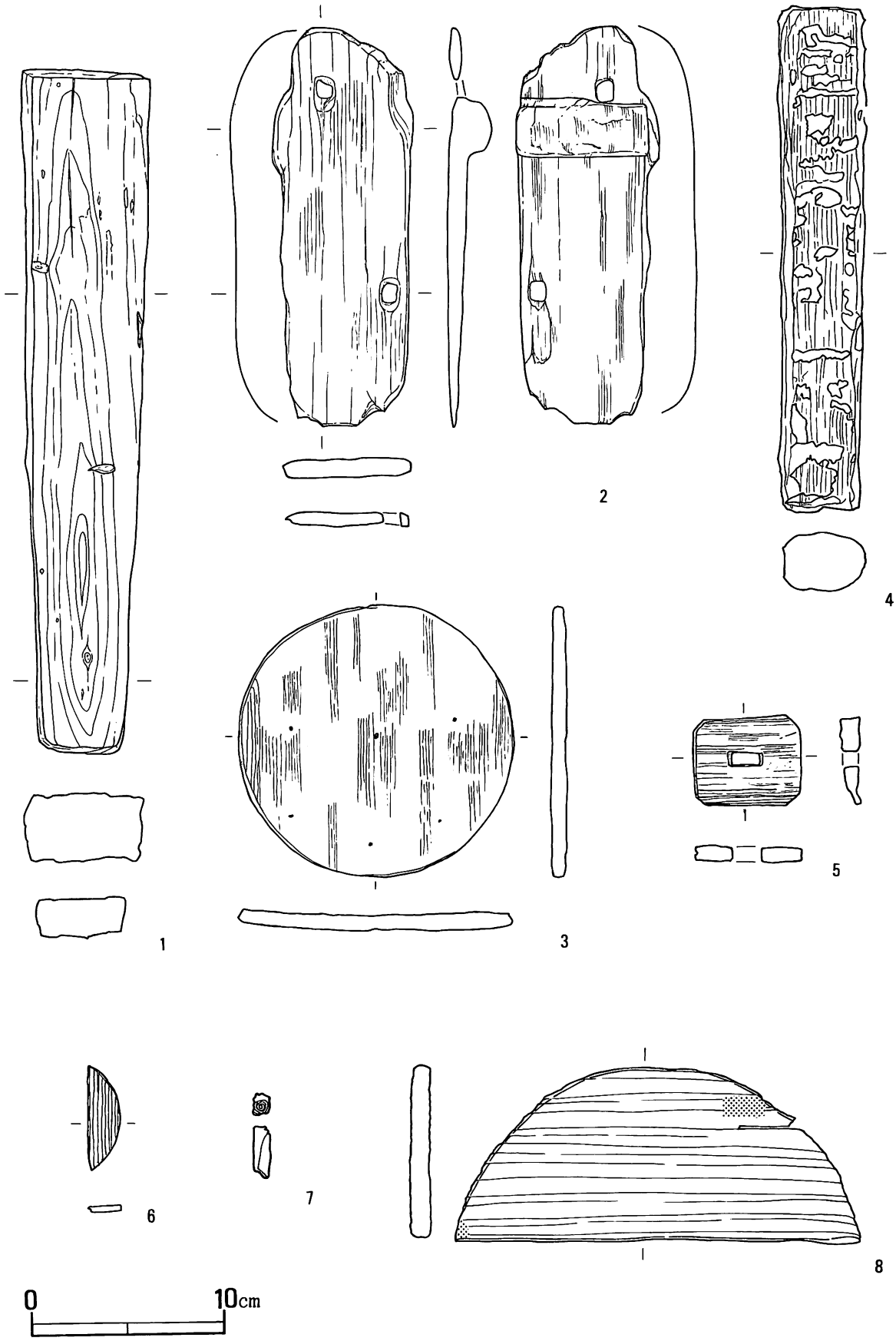
第99図　7号溝・他出土木製品（1/3）



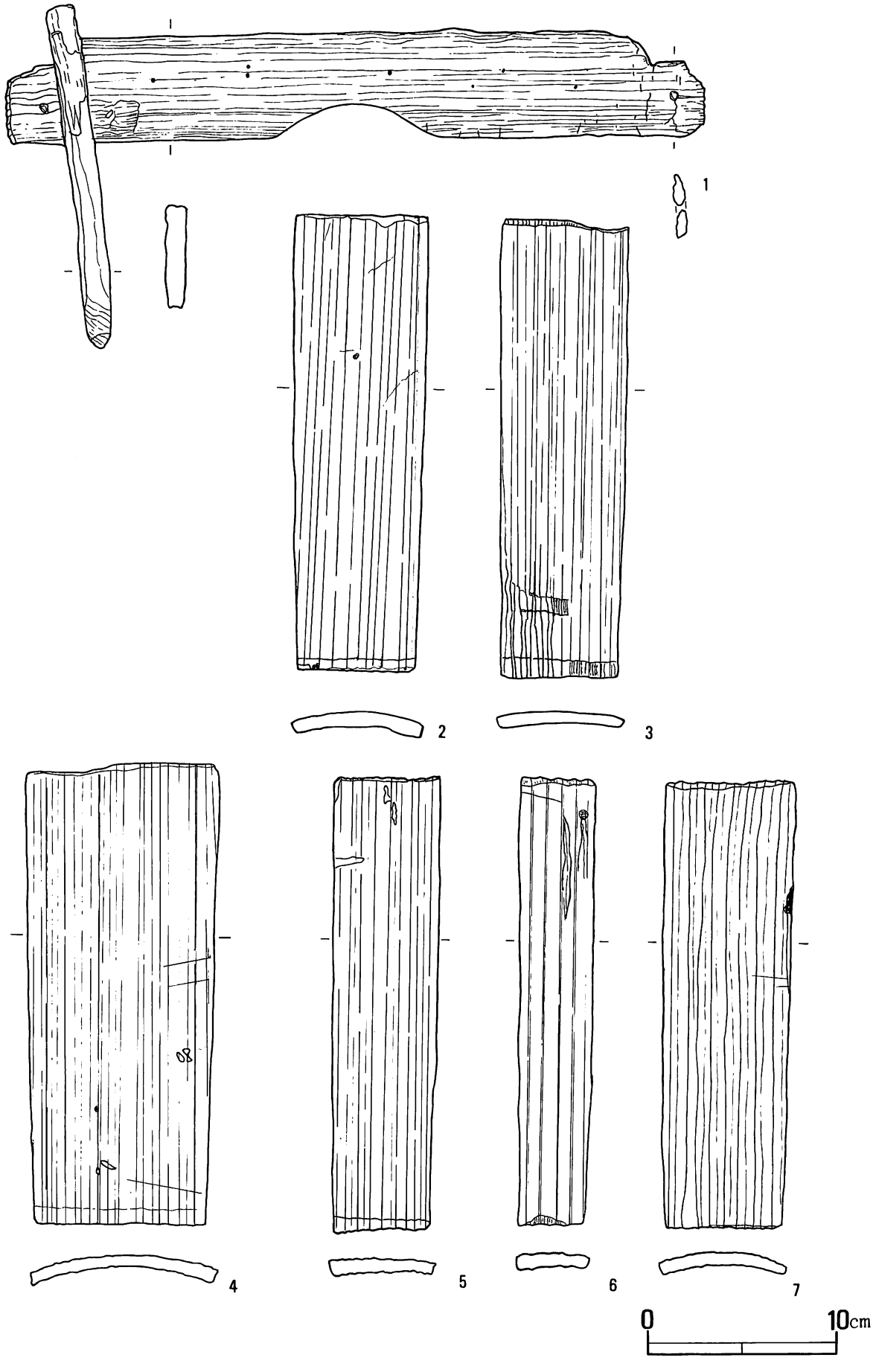
第100図　8号溝（1）・12号溝（2～11）出土木製品（1/3）



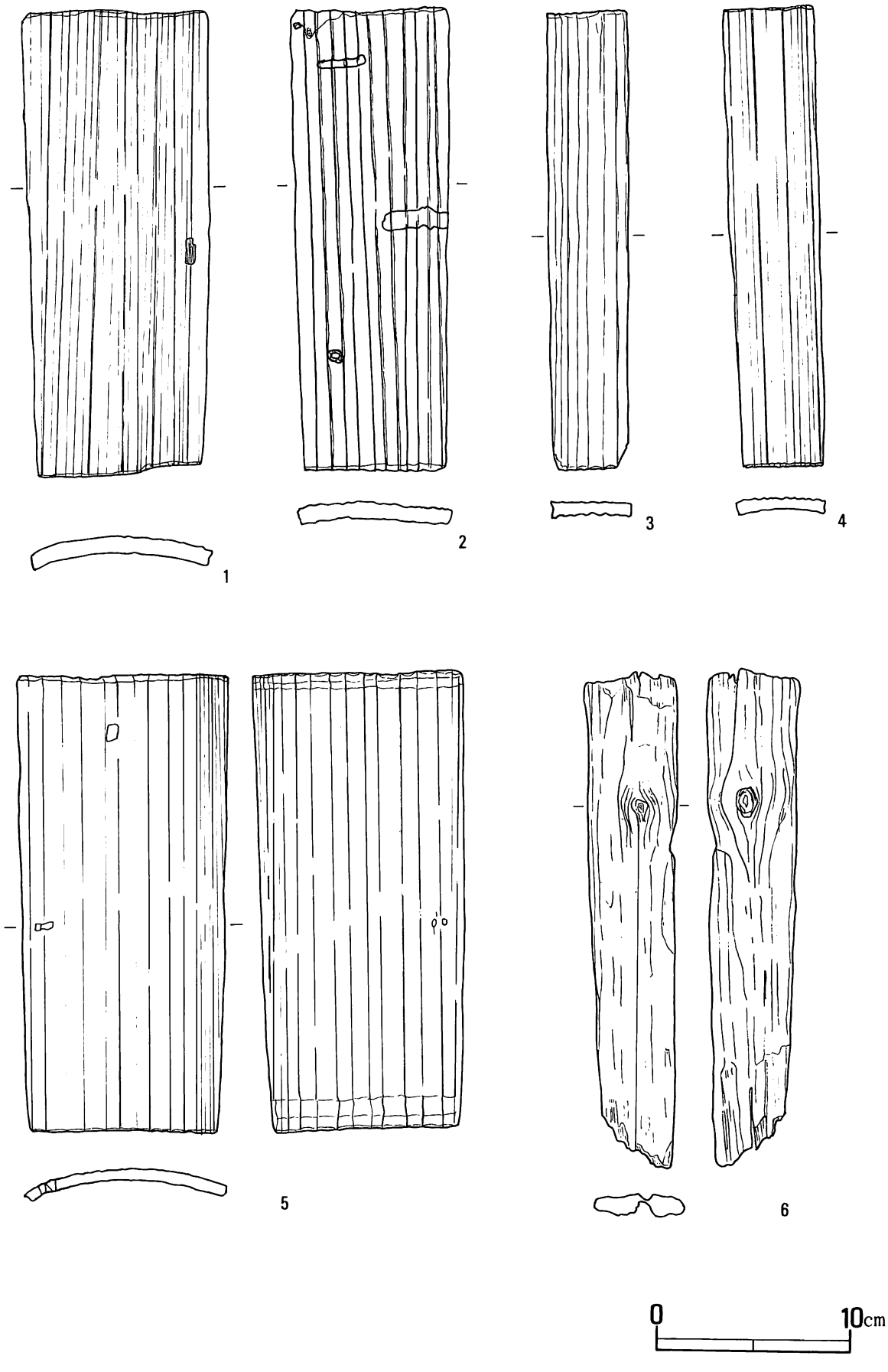
第101図　12号溝出土木製品（1/3）



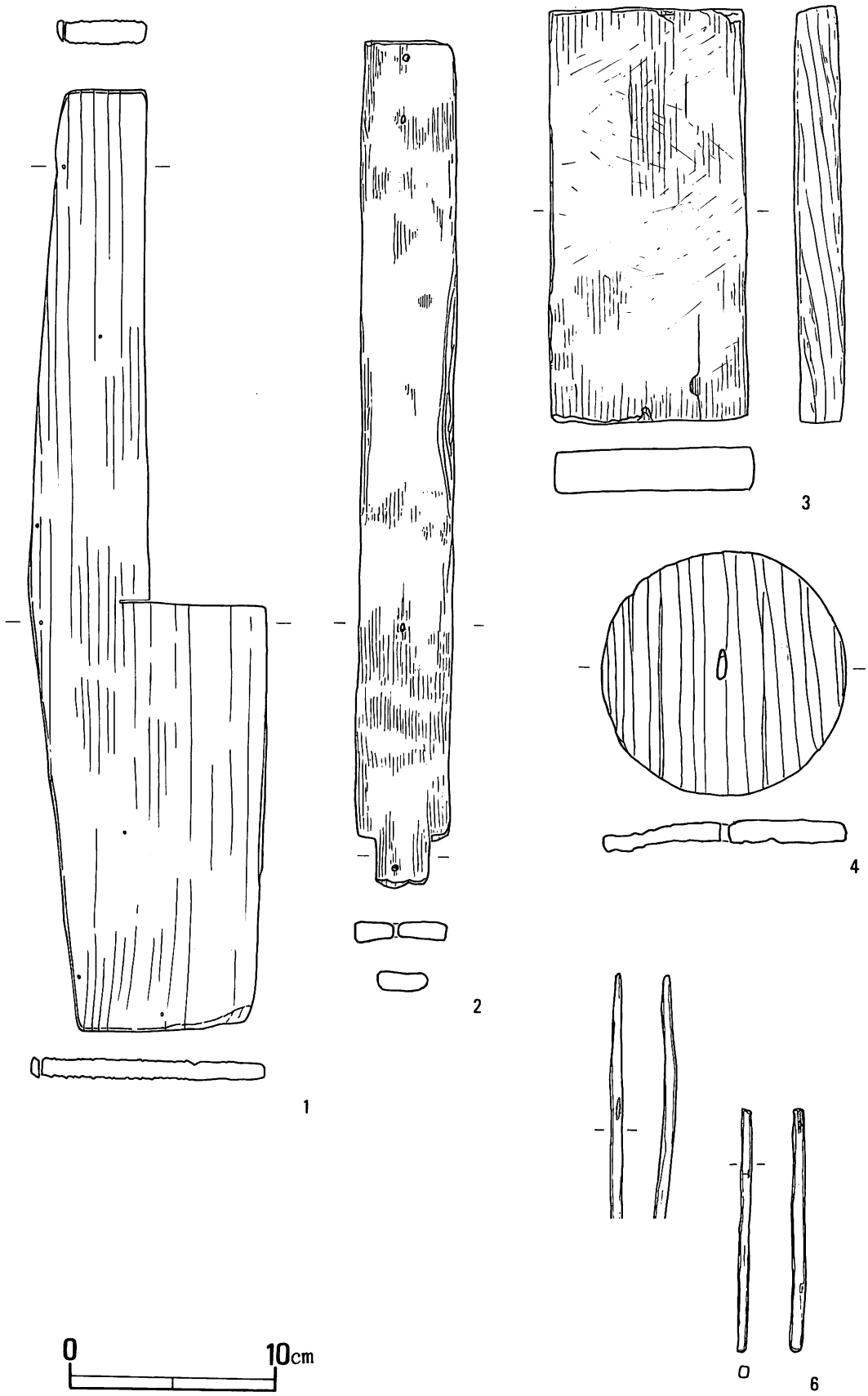
第102図　13号溝（1～5）・15号溝（6）・16号溝（7～8）出土木製品（1/3）



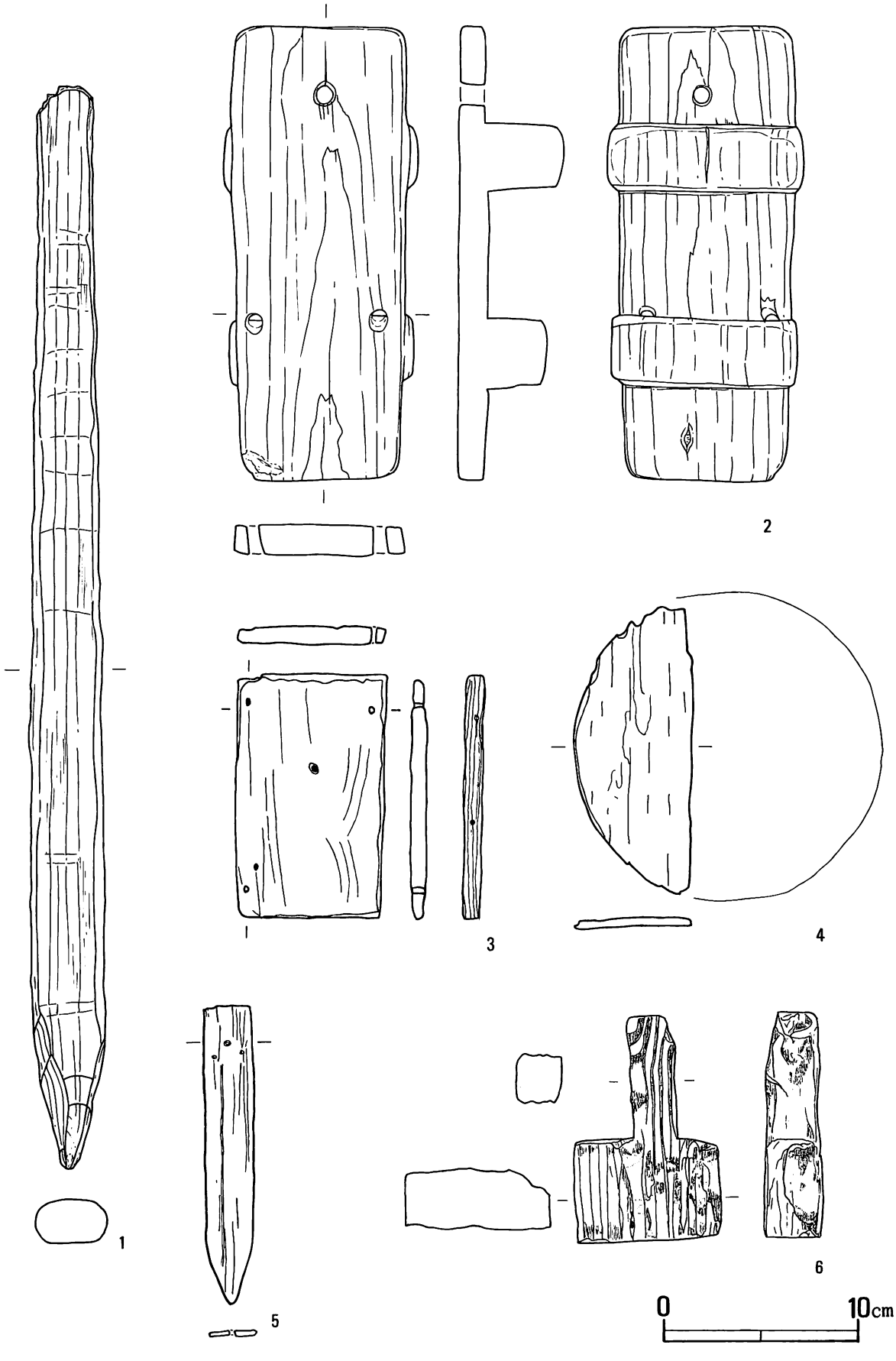
第103図　16号溝出土木製品（1/3）



第104図　16号溝出土木製品（1/3）

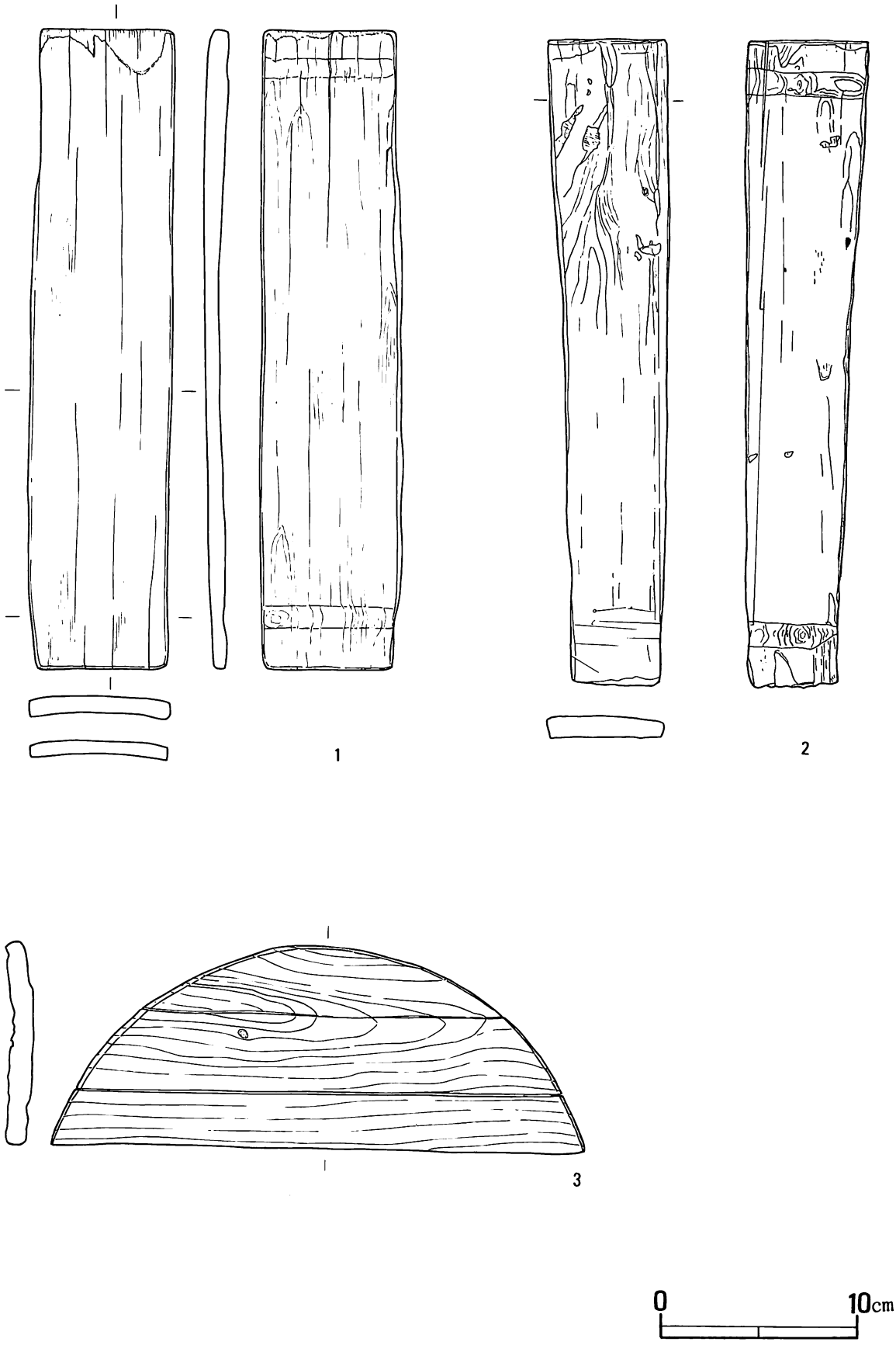


第105図　17号溝（1）・3面出土木製品（1/3）

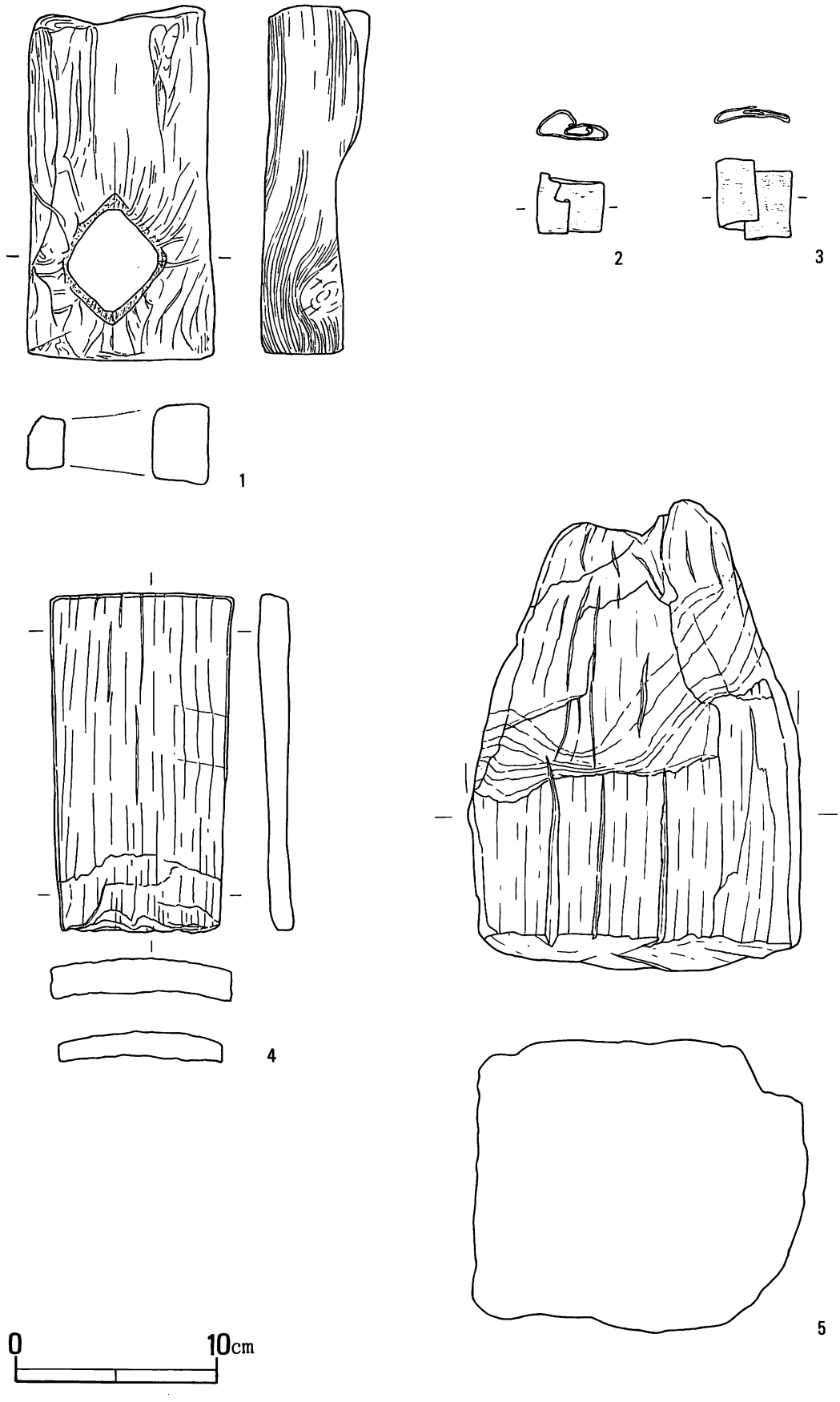


第106図　18号溝（1～5）・17号溝（6）出土木製品（1/3）

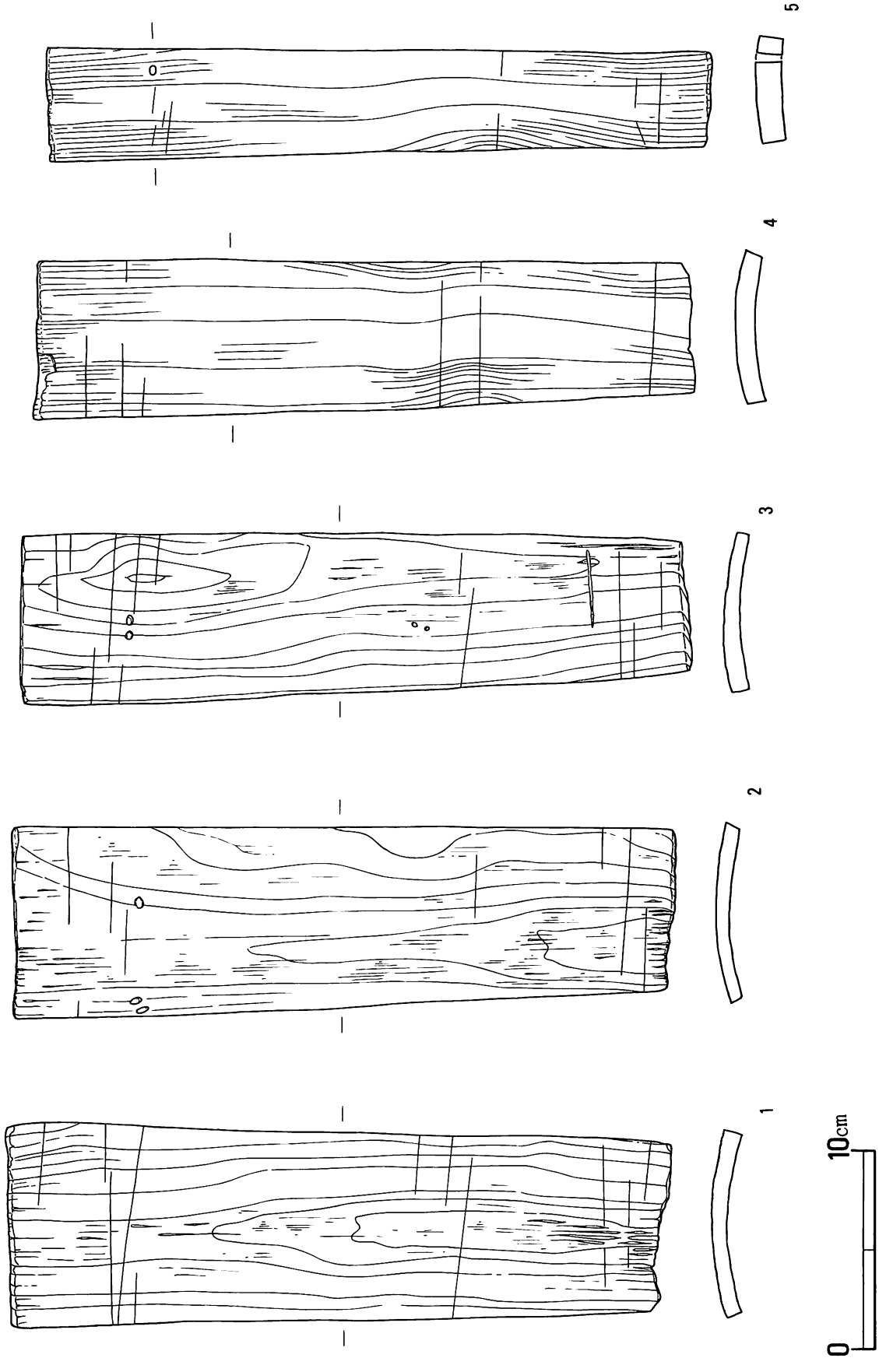
第107図　17号溝（1）・18号溝（2）・20号溝（3）出土木製品（1/3）



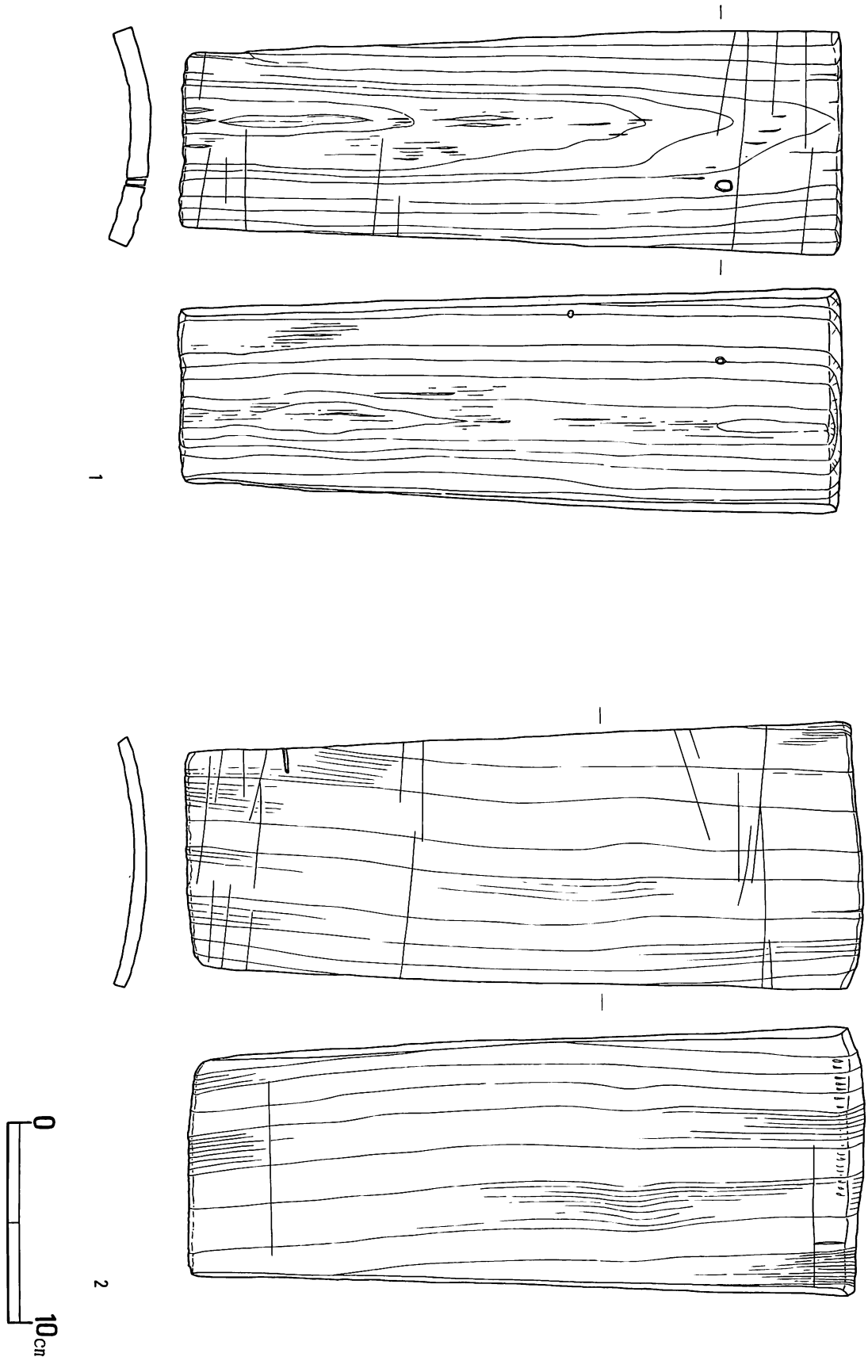
第108図　18号溝出土木製品（1/3）



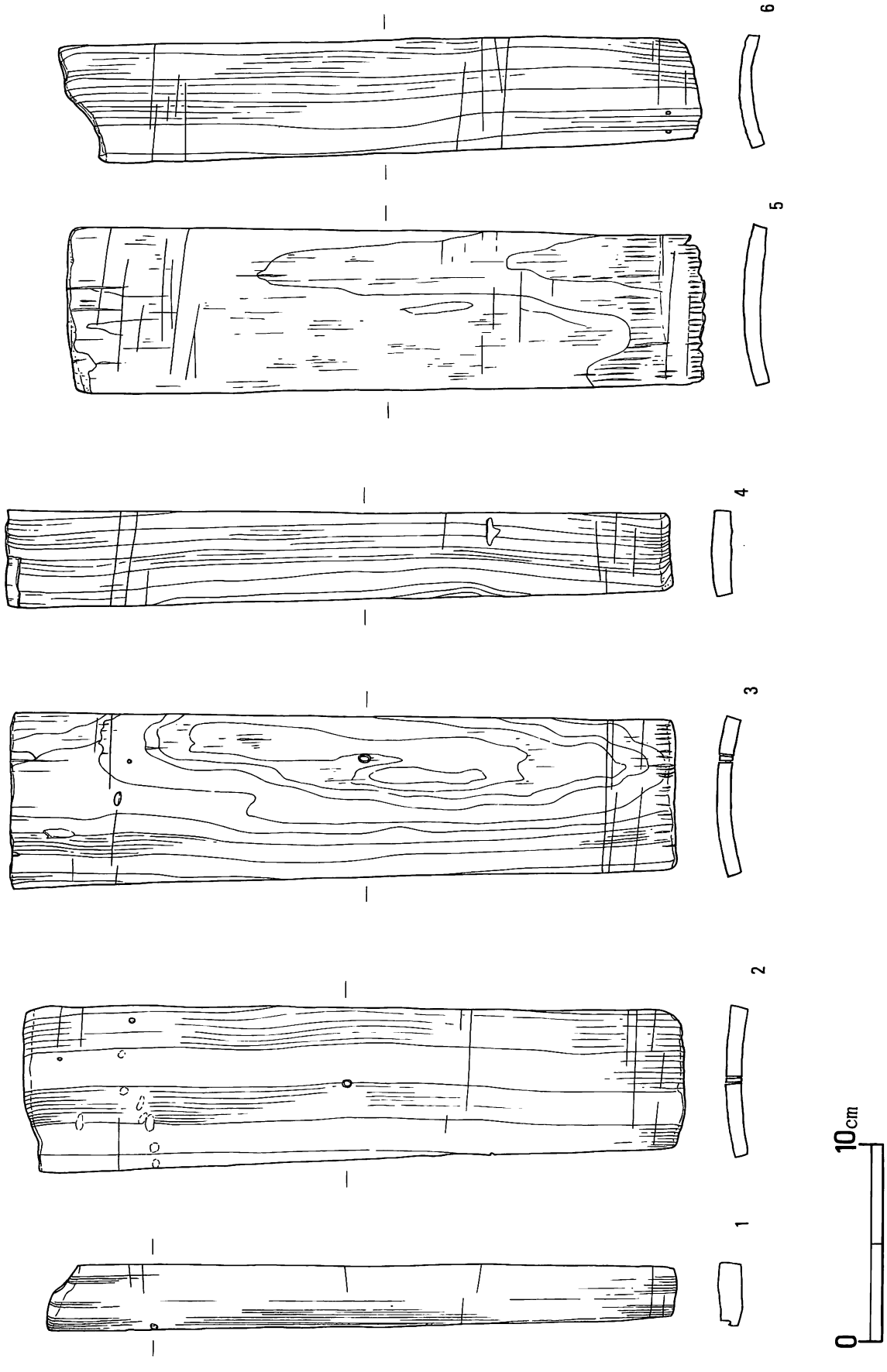
第109図　3号井戸（1～3）・2号井戸（4）・5号建物（5）出土木製品（1/3）



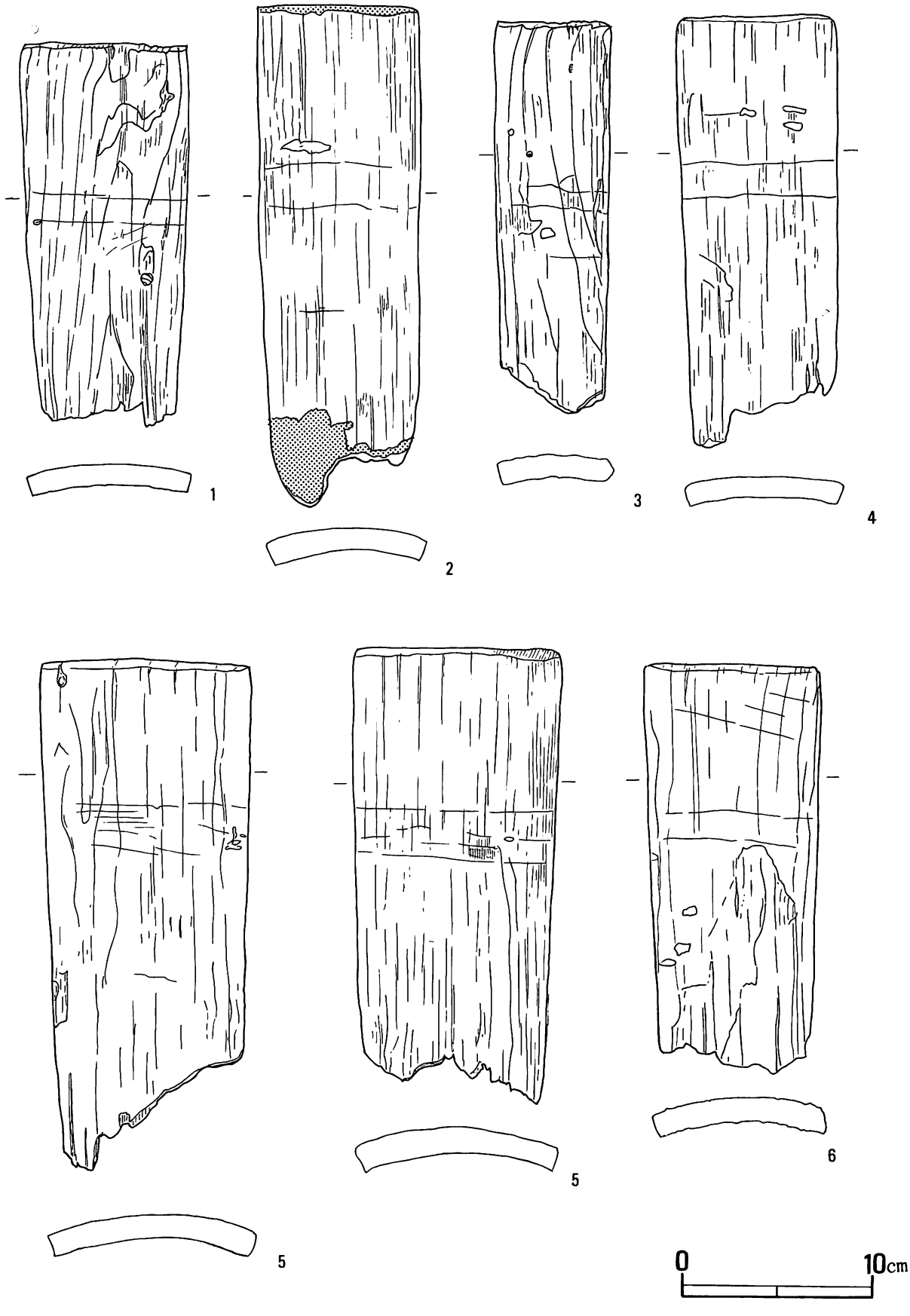
第110図　3号井戸出土木製品（1/3）



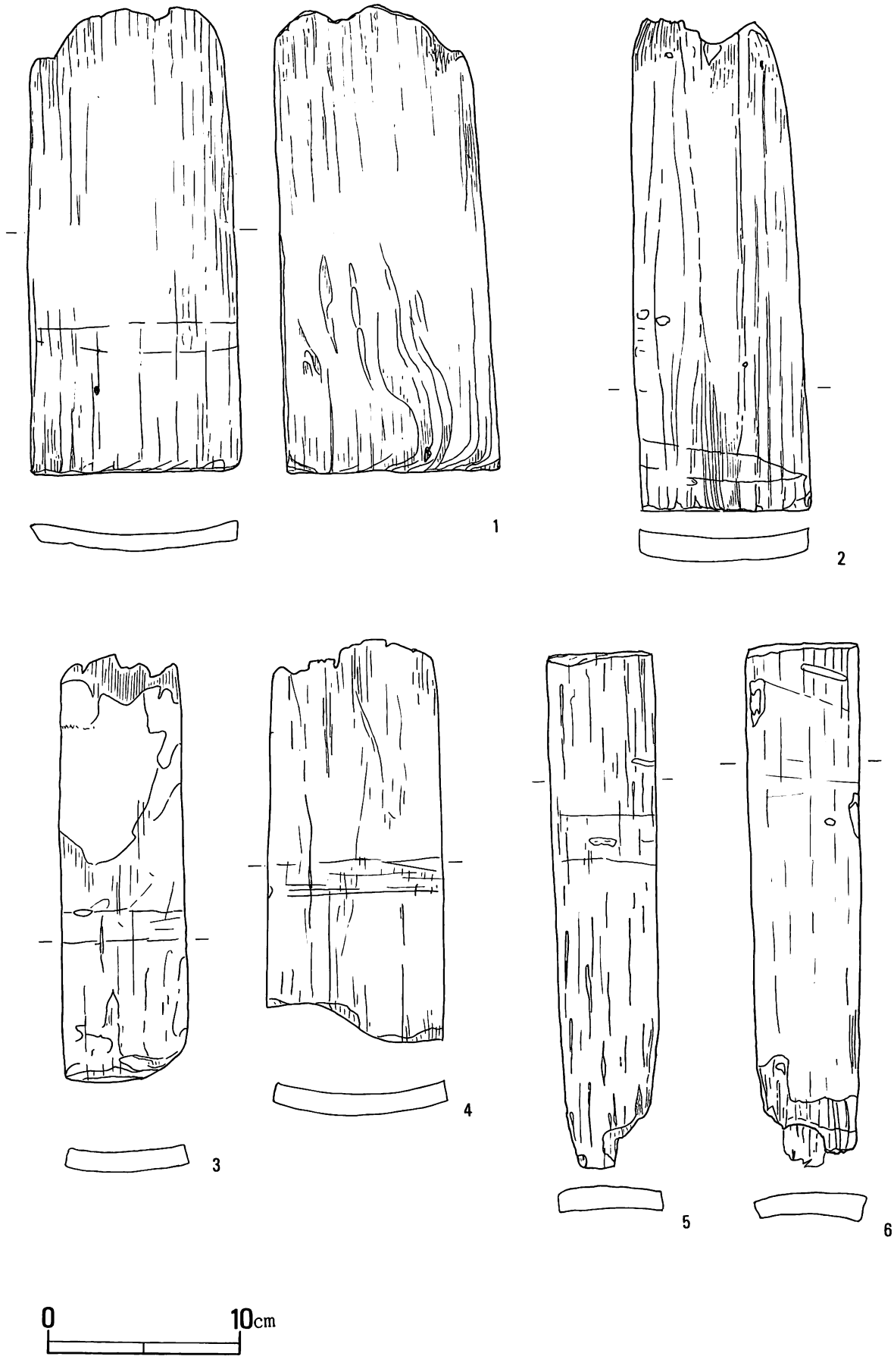
第111図　3号井戸出土木製品（1/3）



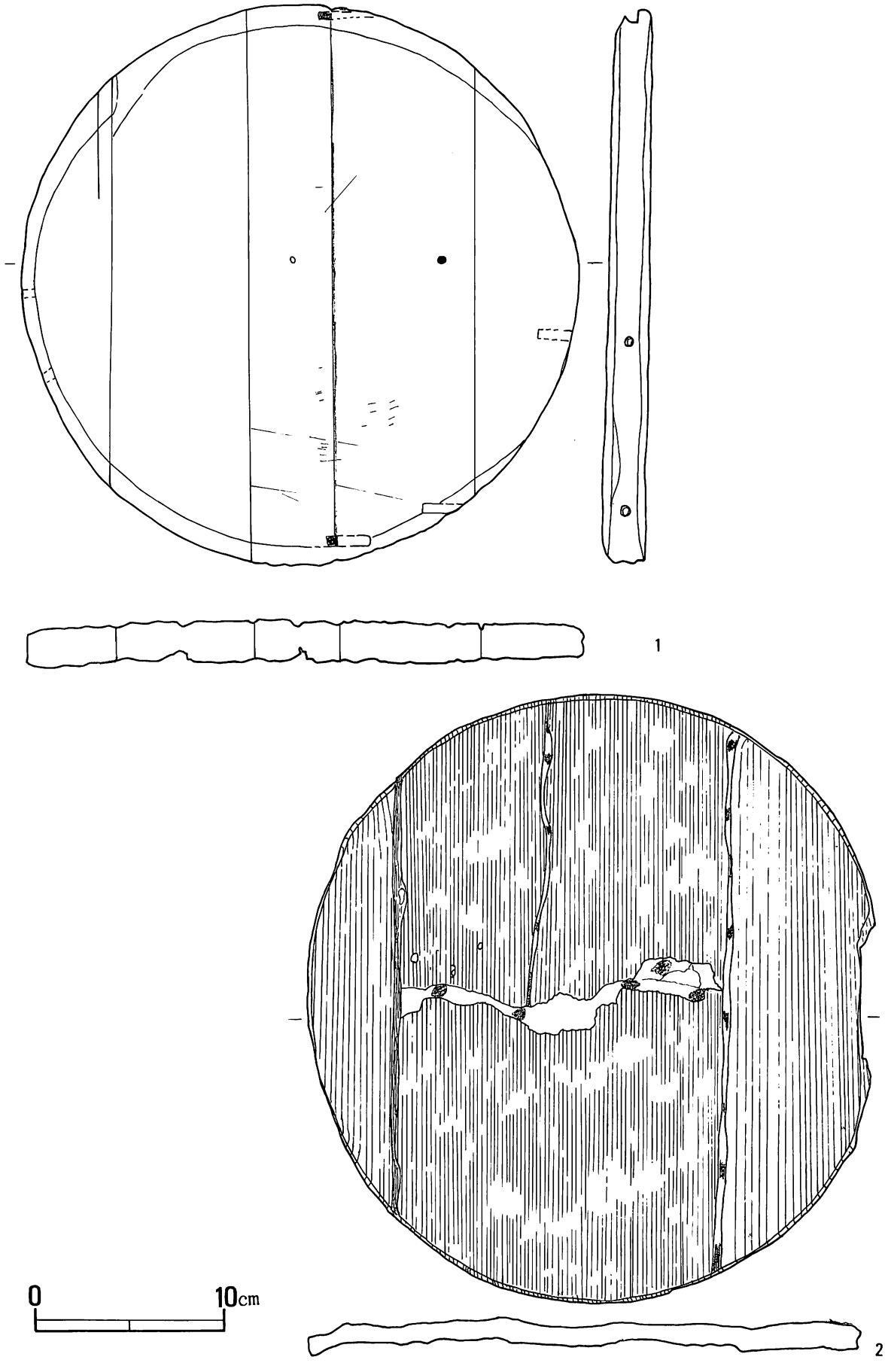
第112図　3号出土木製品（1/3）



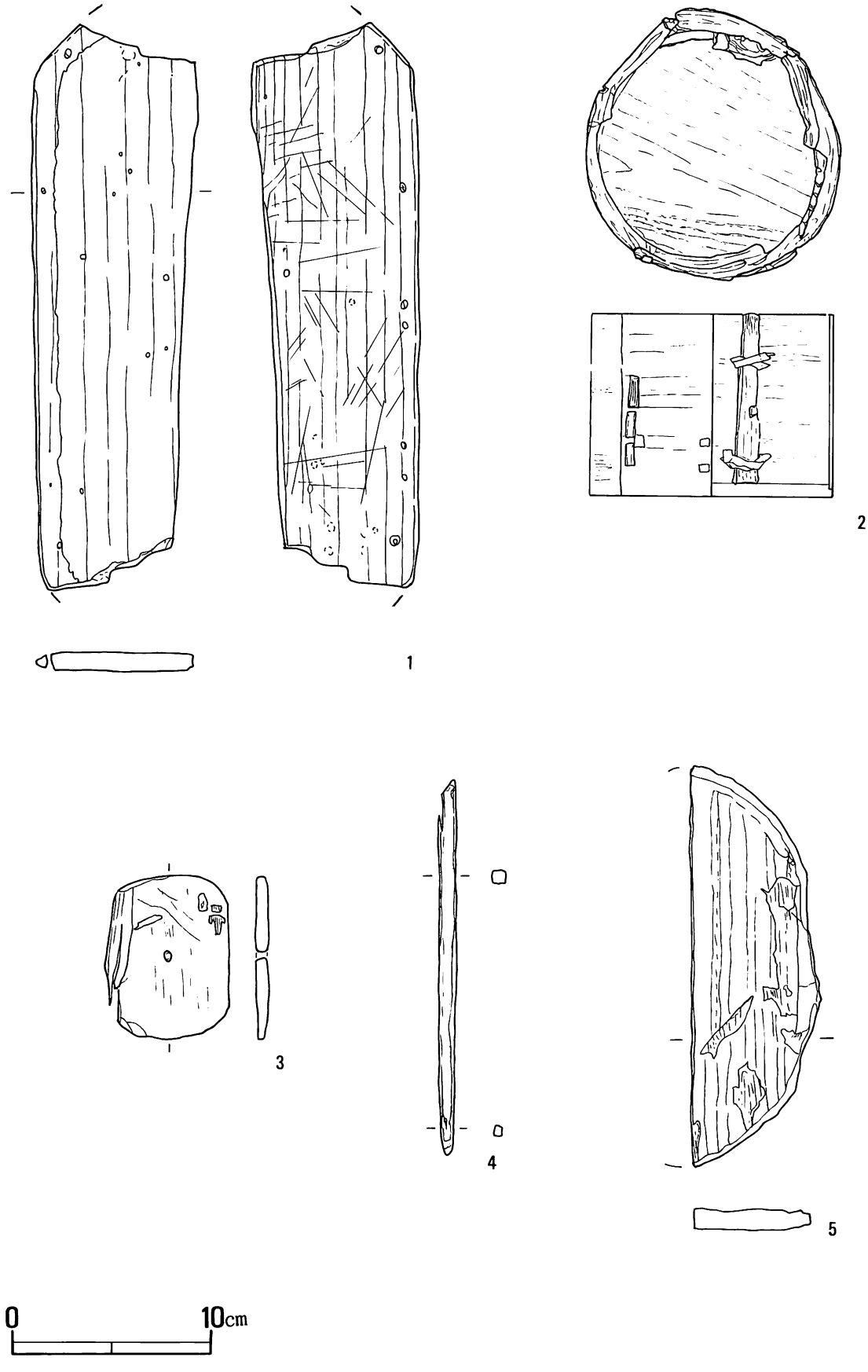
第113図　3号井戸出土木製品（1/3）



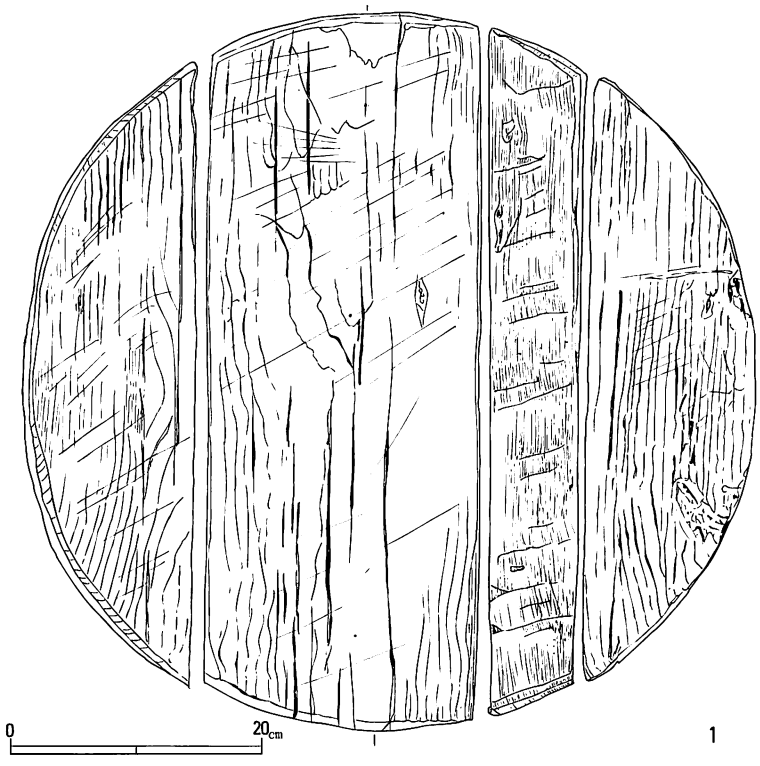
第114図　3号井戸出土木製品（1/3）



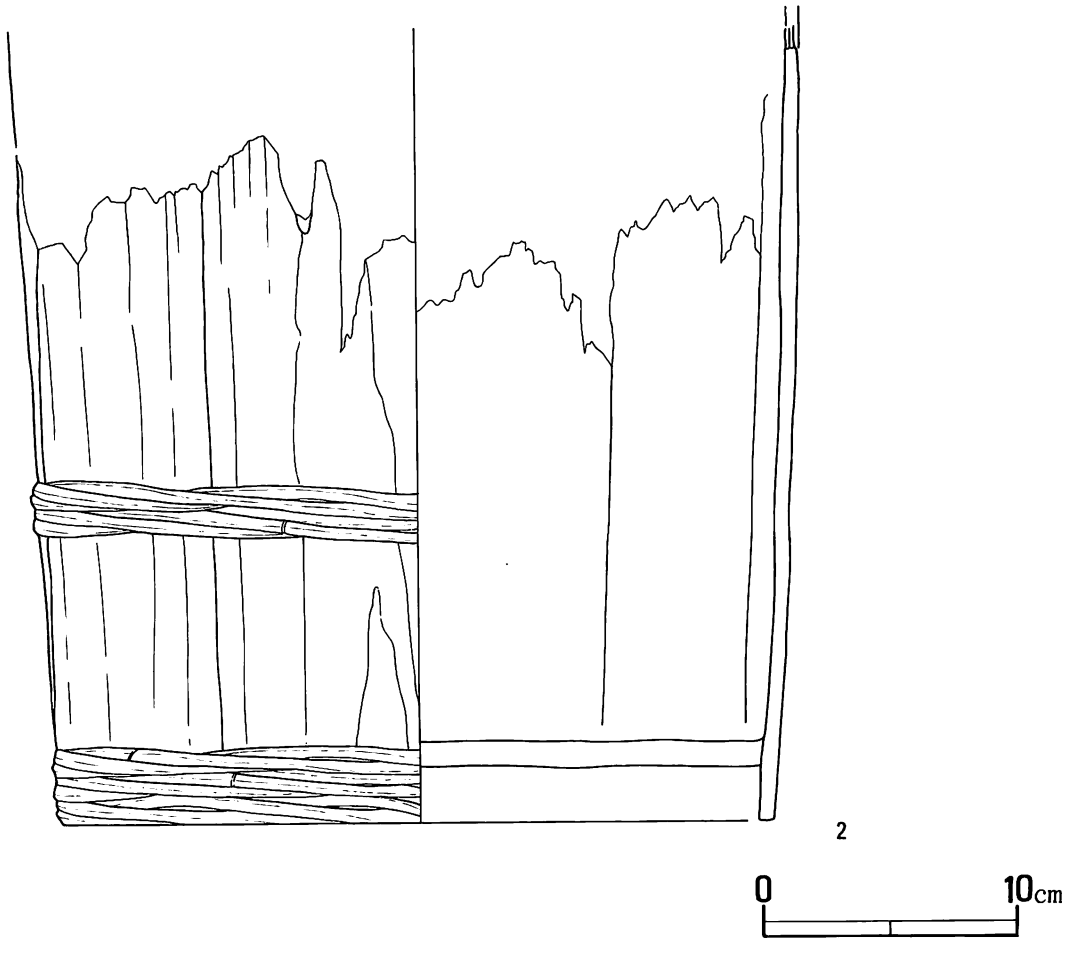
第115図　4号桶（1）・2号桶（2）（1/3）



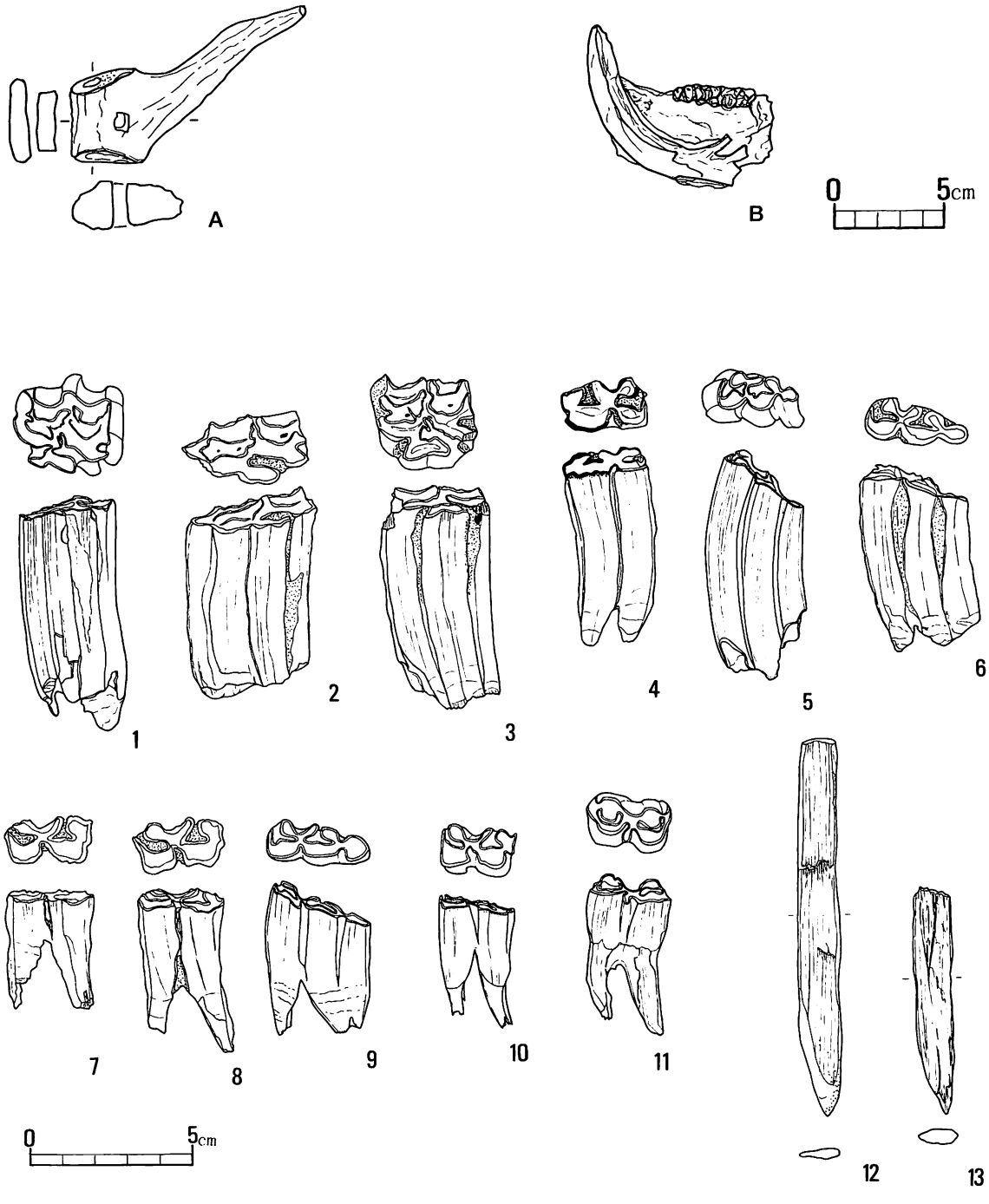
第116図　埋葬人骨（1～2）・4面（3～5）出土木製品（1/3）



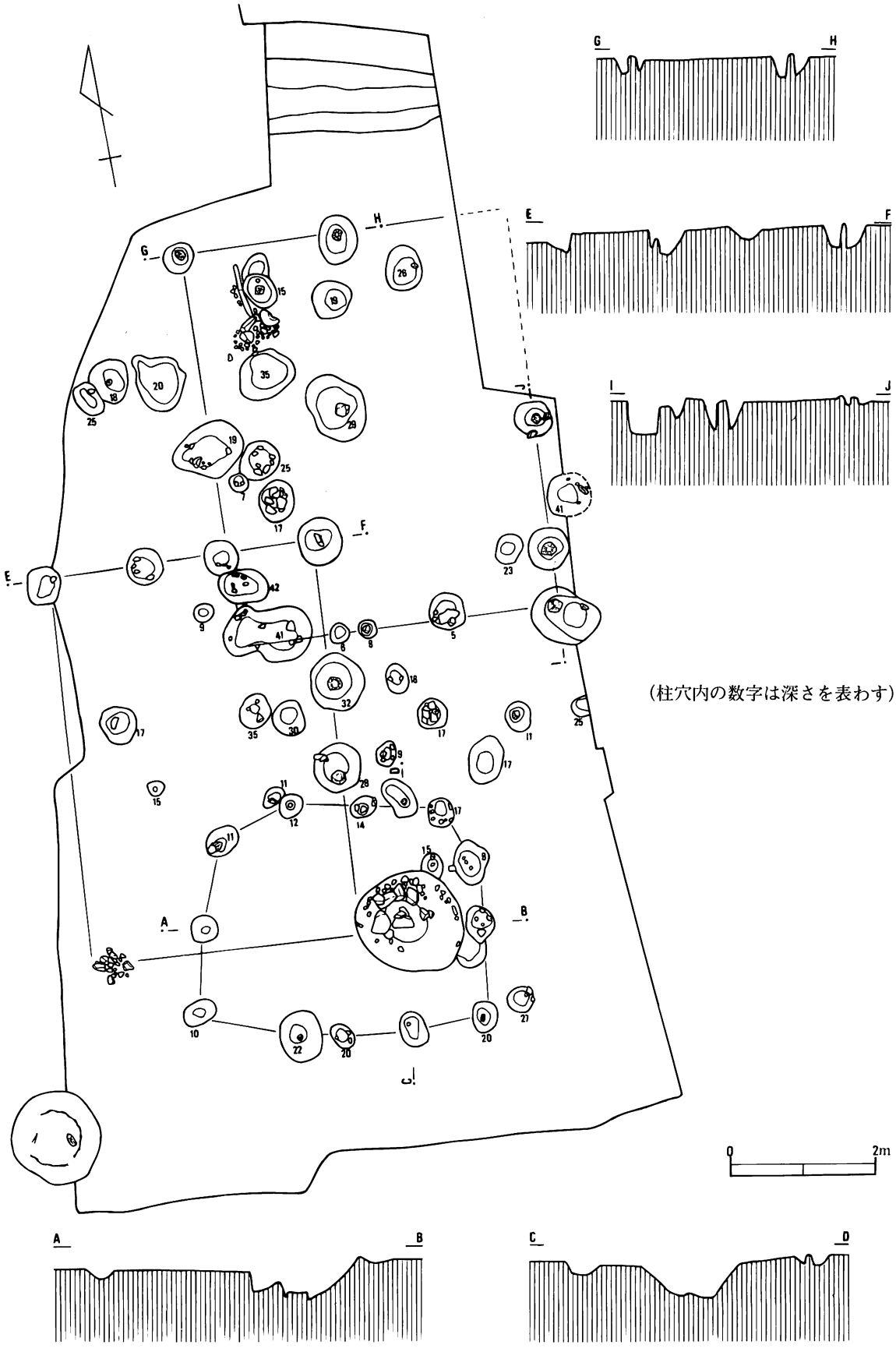
第117図　7溝出土木製品（1/6）



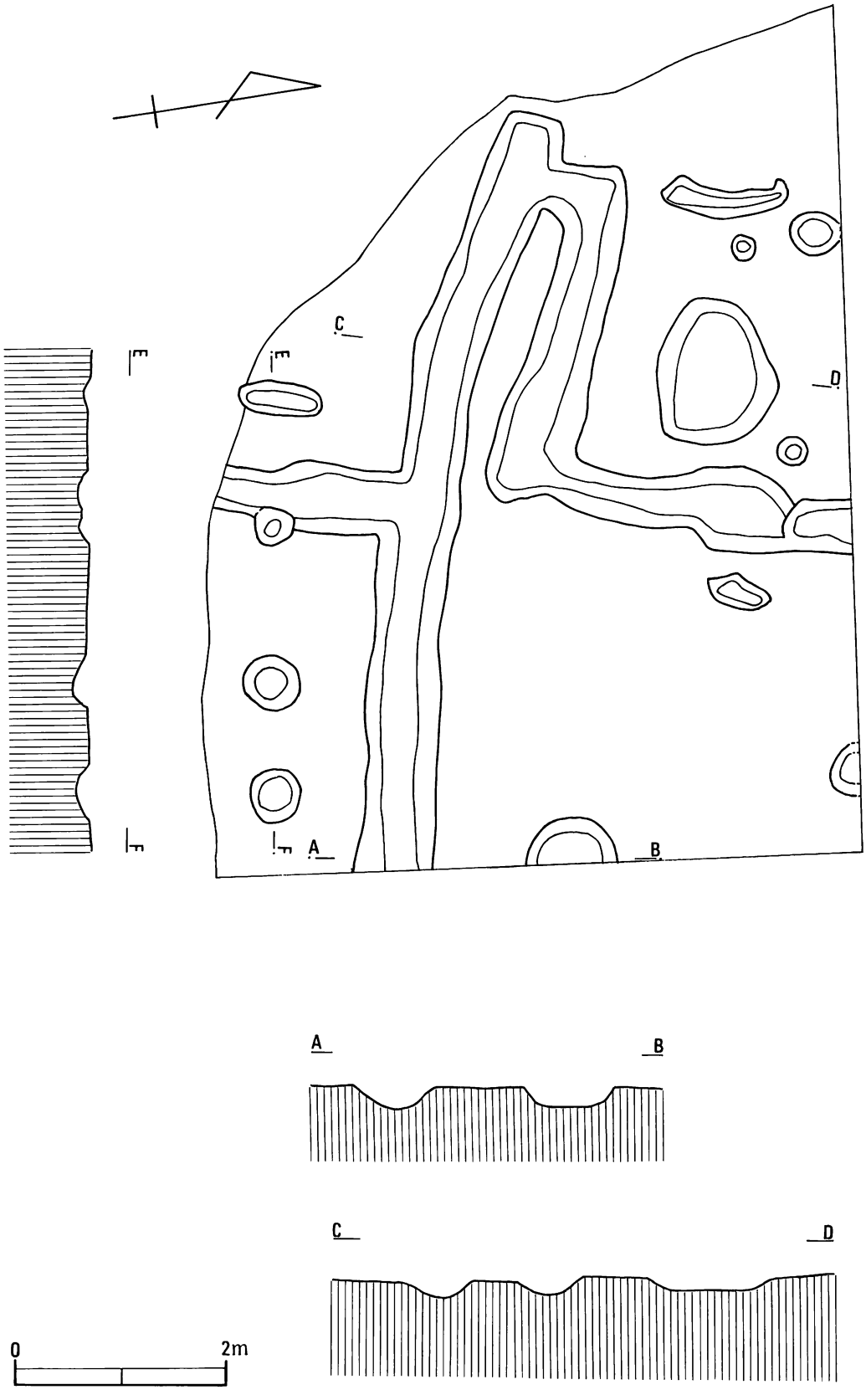
第118図　4号人骨出土桶（1/3）



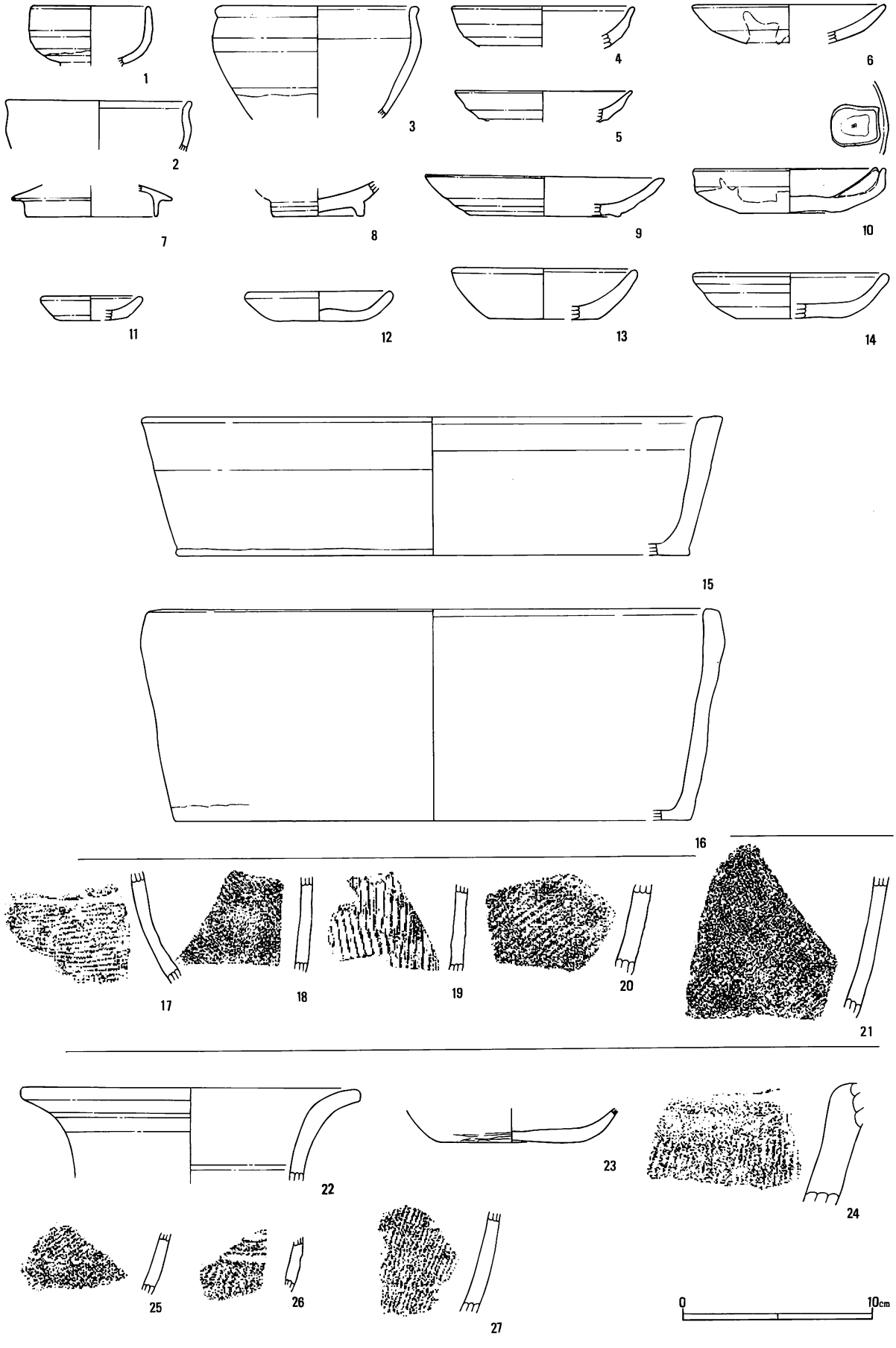
第119図　骨角製品・骨・歯（1/3）（1/2）



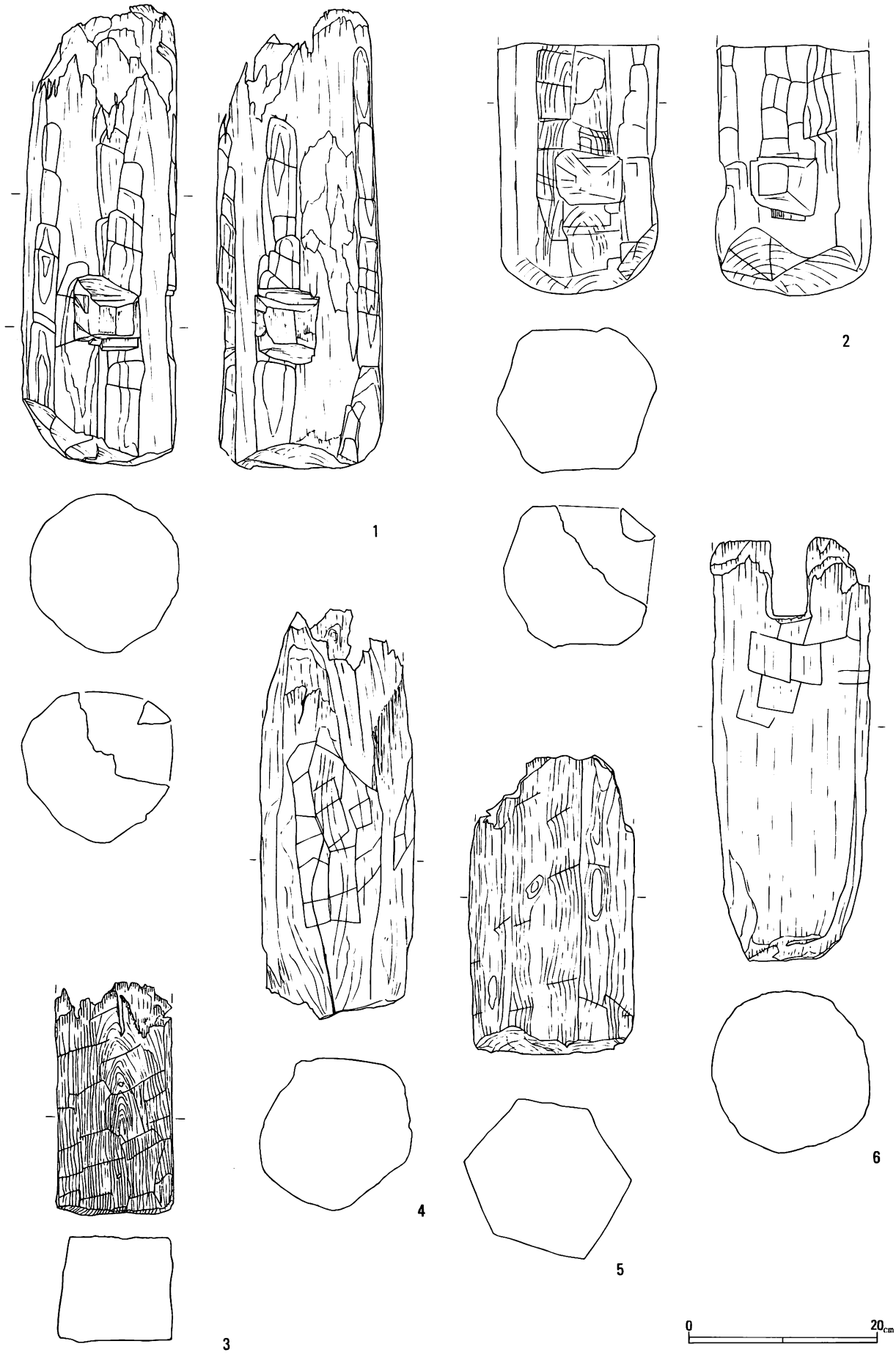
第120図　4面建物群（1/80）



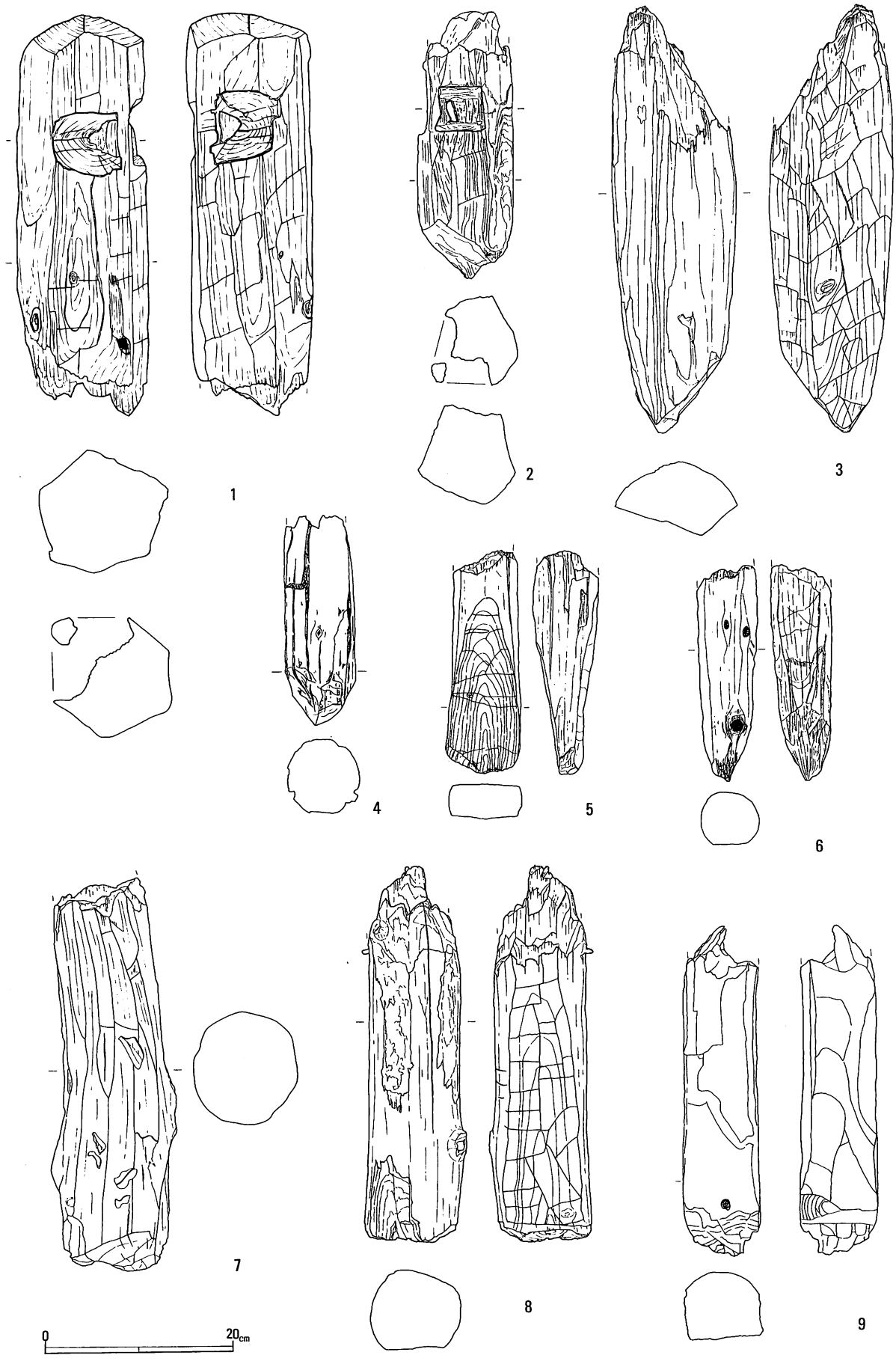
第121図　4面２号溝（１/60）



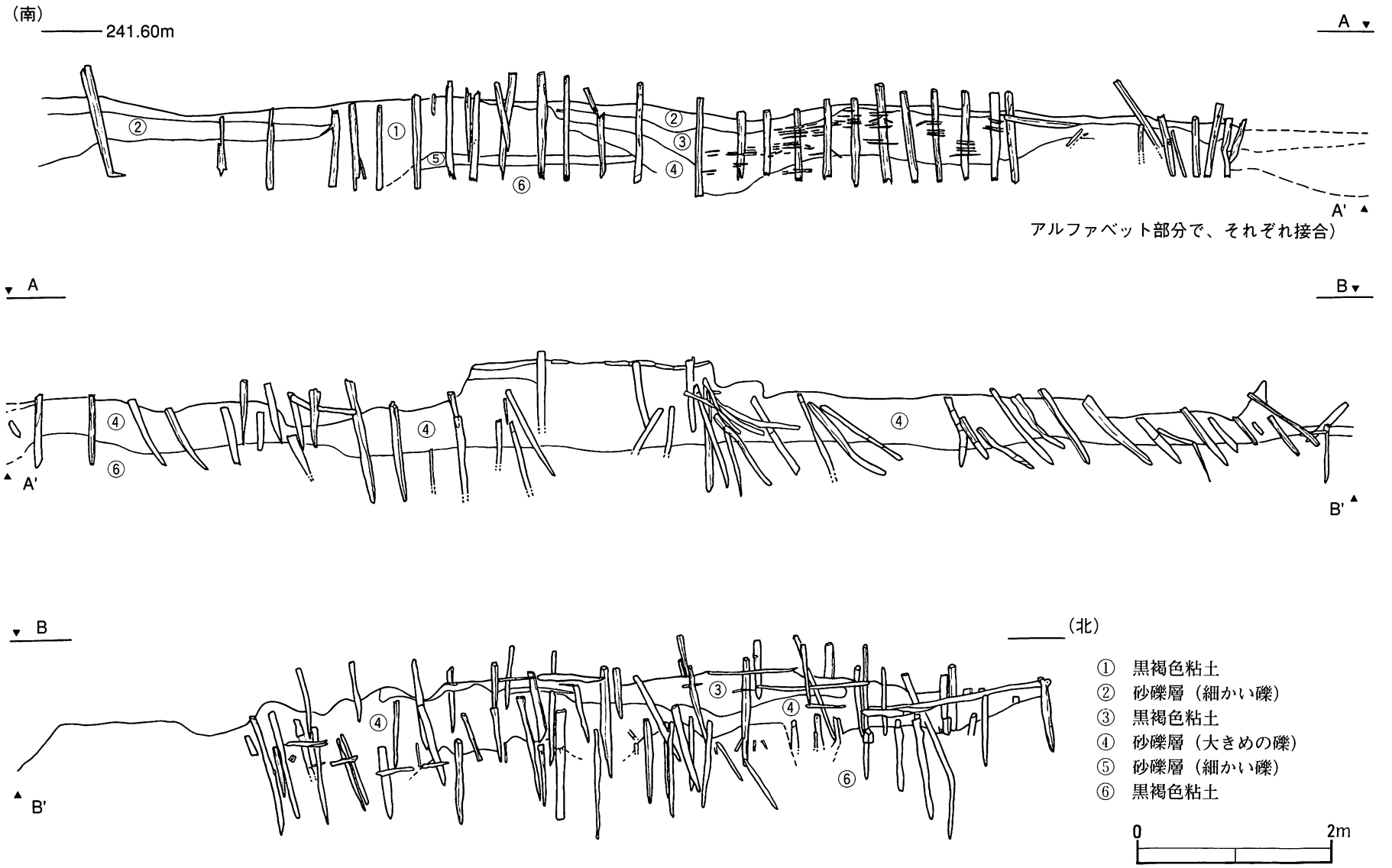
第122図　4面（1～16）・5面（17～21）・6面（22～27）出土陶器・土器（1/3）



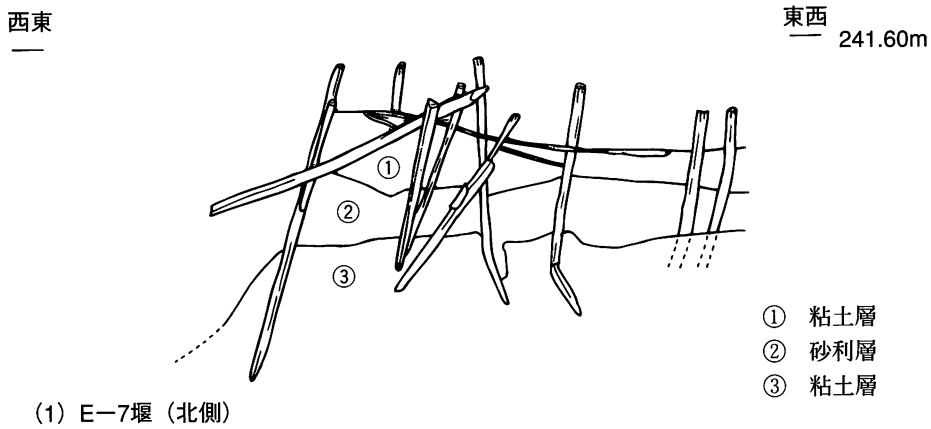
第123図　4面建物出土木製品（1/6）



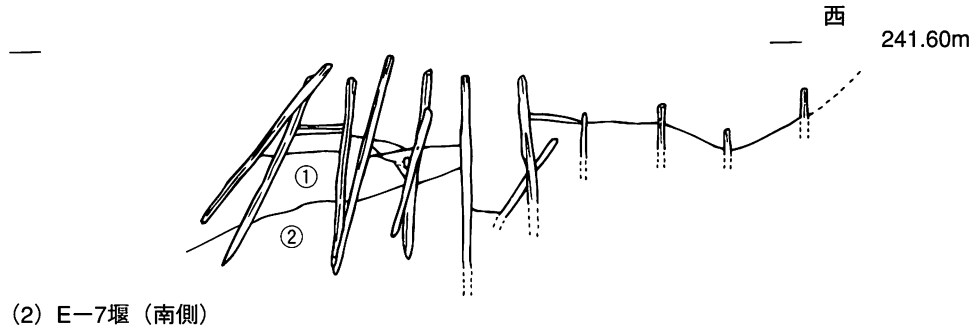
第124図　4面建物出土木製品（1/6）



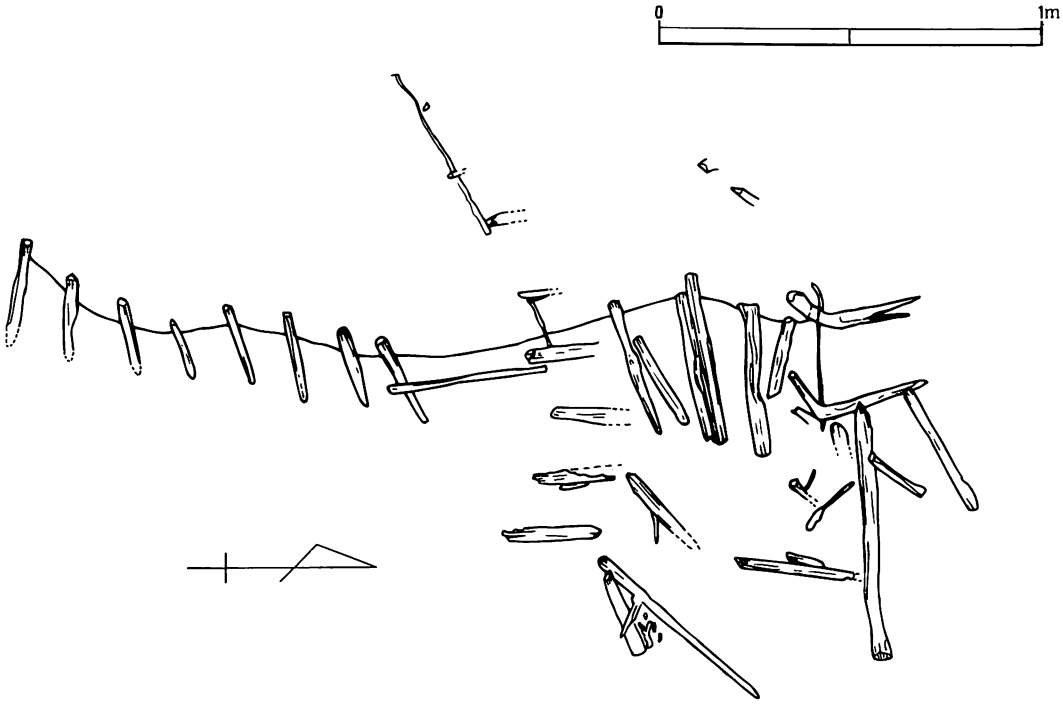
第125図　5面1号杭列（1/60）



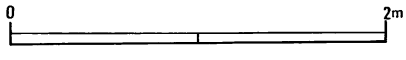
(1) E—7堰（北側）



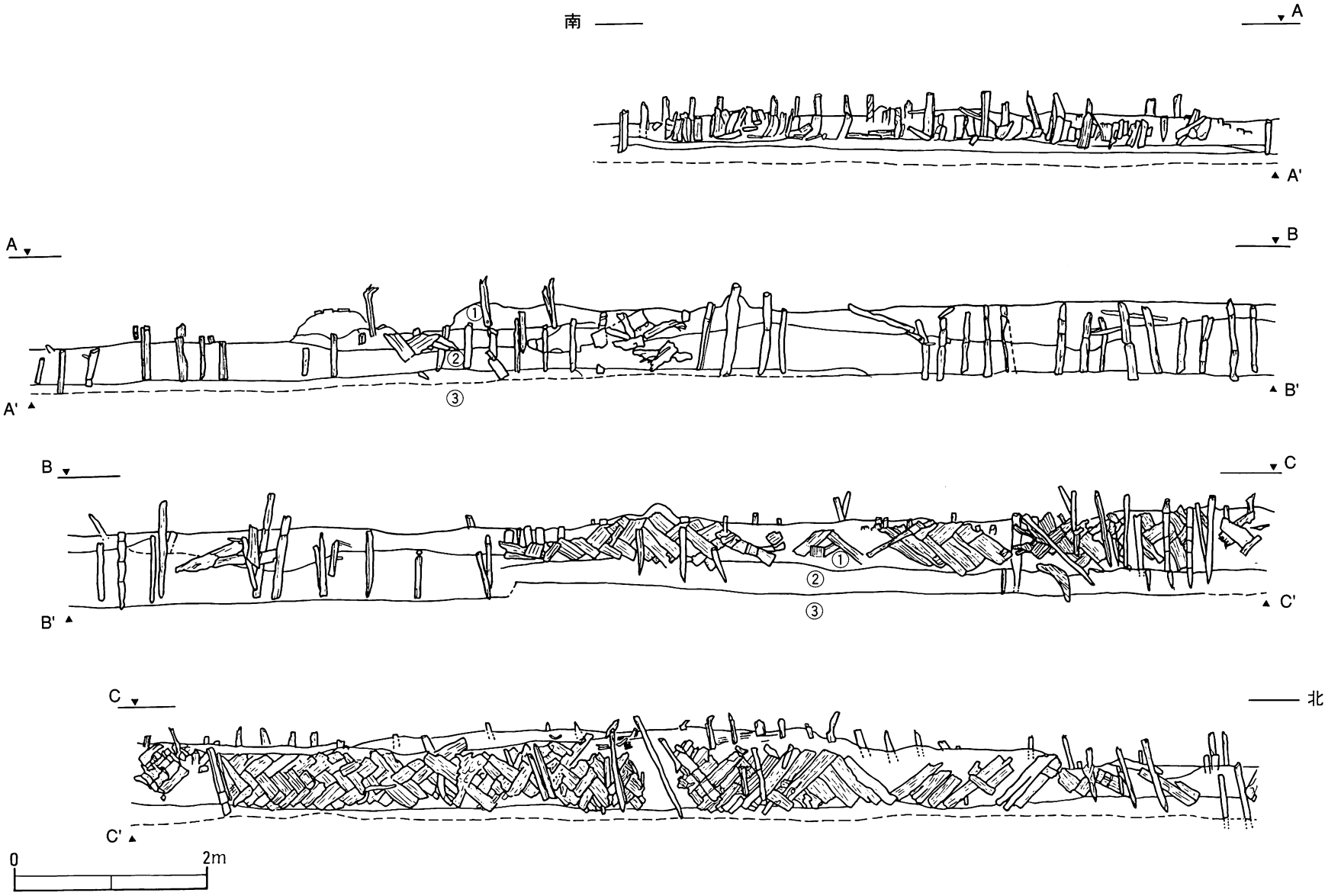
(2) E—7堰（南側）



(3) 1号杭列（部分）

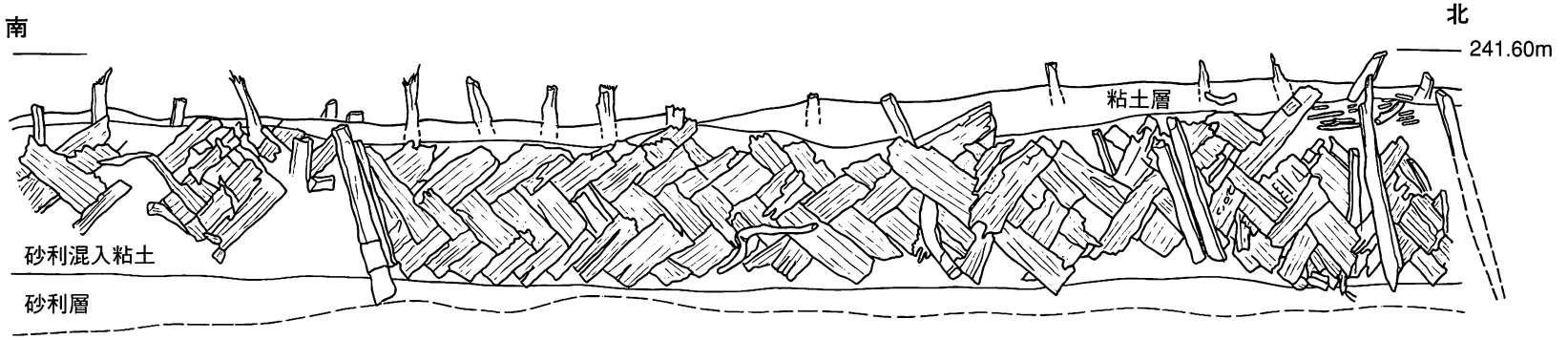


第126図　5面1号杭列（1/40）・E—7堰（南側）・E—7堰（北側）（1/20）

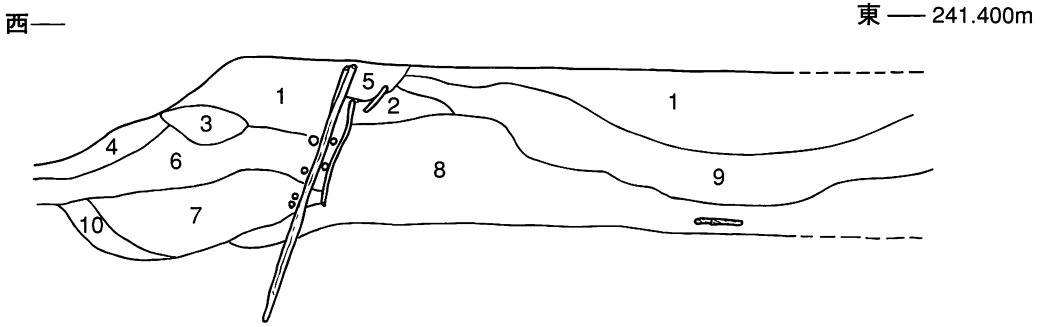


第127図　5面2号杭列（1/60）

(1)2号杭列（部分）

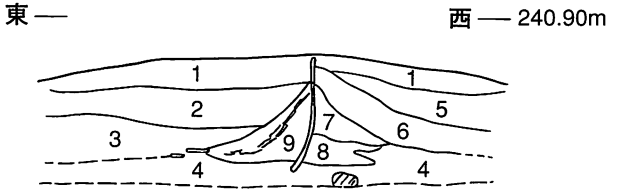


(2)2号杭列北端断面

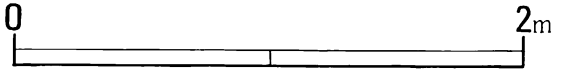


1．砂礫（φ10cm含む）
2．砂礫（小砂利）
3．砂
4．砂十小砂礫
5．褐色粘土と砂礫
6．褐色粘土と砂
7．砂
8．褐色粘土と小礫（しまりつよい）
9．砂礫（砂が中心）
10．砂

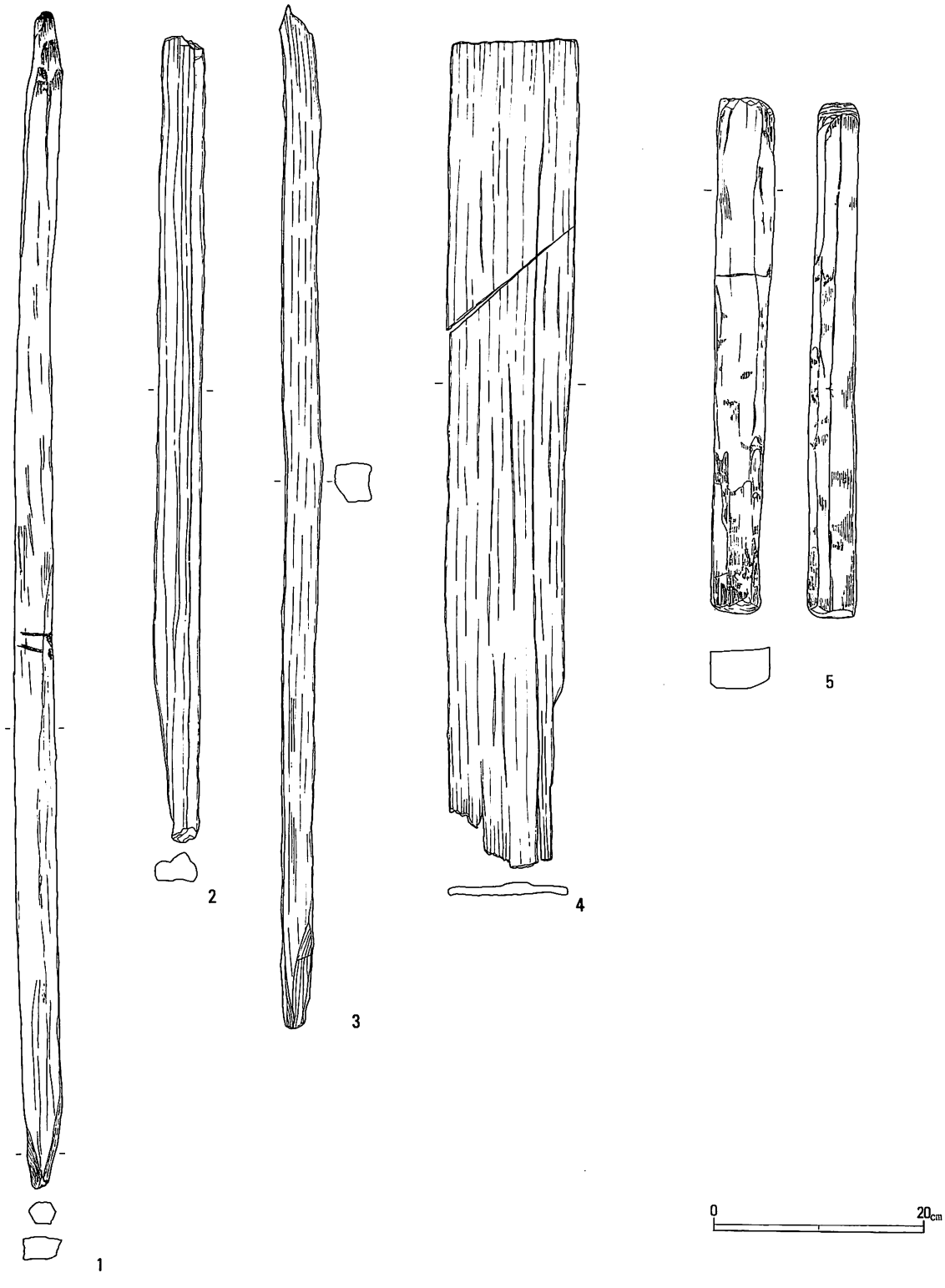
(3)2号杭列南端断面



1．砂礫
2．小砂礫
3．小砂礫
4．小砂礫
5．砂層
6．砂礫
7．細砂層
8．褐色粘土と細砂
9．粘土

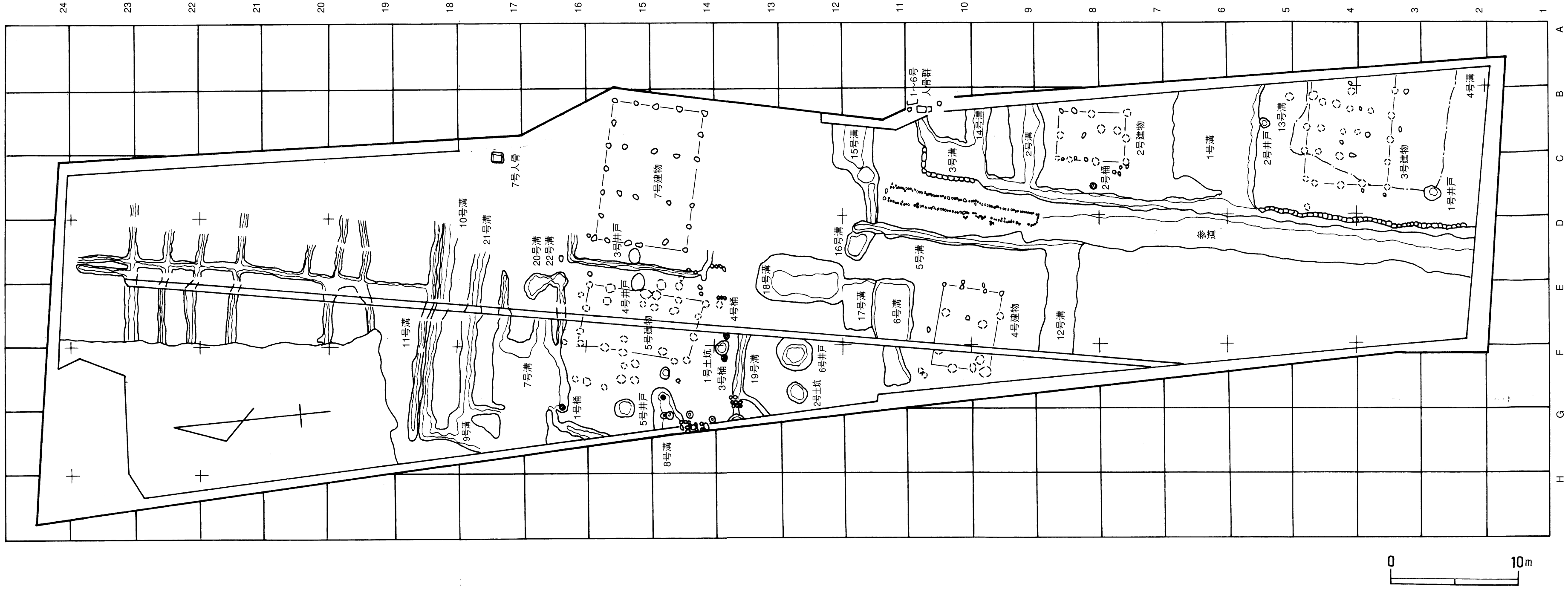


第128図　5面2号杭列・北端断面・南端断面（1/30）



第129図　2号杭列（1/6）

第130図　6面（1/200）



付図1　宮沢中村遺跡２面・３面遺構配置図（１/250）

付図2　宮沢中村遺跡4面・5面・6面遺構配置図（1/250）

遺物一覧表

図示した遺物は、全てこの一覧表にまとめてある。江戸時代以降の陶磁器については時期の欄を設けてあるが、その基準は次のとおりである。

Ⅰ 江戸時代　①18世紀代　②18世紀末～19世紀代

Ⅱ 明治時代　①明治初頭～10年代　②20年代以降

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
29	1	磁器	碗	中	端反形	1号建物	1	(10.2)	—	—	15	瀬戸・美濃	西洋コバルト手描き	花	Ⅰ②
	2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	11.7	4.8	6.1	60	〃	染付	格子文	Ⅰ②
	3	〃	〃	小	丸形	表採	〃	(8.0)	(3.2)	4.8	45	〃	〃	竹	Ⅰ②
	4	炻器	〃	中	広東形	1建周辺	〃	—	5.5	—	40		〃	見込五弁花のくずれ	Ⅰ②
	5	陶器	〃	小	丸形	〃	〃	(8.2)	3.3	4.3	60		緑釉？	丸文	Ⅱ②
	6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(5.8)	(3.4)	3.2	40				Ⅰ
	7	〃	土瓶			1号建物	〃	(7.6)	—	—	20		鉄釉		Ⅰ～Ⅱ
30	1	磁器	碗	中	丸形	2建周辺	2	9.4	3.7	4.8	80	瀬戸・美濃	染付西洋コバルト	見込…蝶　外面…菊	Ⅱ①
	2	〃	〃	〃	端反形	〃	〃	(9.4)	3.3	4.9	60	〃	染付	草花	Ⅰ②
	3	炻器	〃	〃	広東形	2号建物	〃	(10.0)	4.9	5.9	50		〃		Ⅰ②
	4	陶器	〃	〃	端反形	〃	〃	(10.3)	—	—	20	信楽・京都系		白土と鉄釉で梅花	Ⅰ②
	5	磁器	鉢	〃	八角	2建周辺	〃	(16.2)	—	—	20	瀬戸・美濃	染付	梅　焼継跡あり	Ⅰ②
	6	〃	紅皿			〃	〃	(4.8)	—	—	30				Ⅰ
	7	陶器	碗	小	丸形	2号建物	〃	(6.0)	2.3	3.9	50	瀬戸・美濃			Ⅰ
	8	〃	灯明皿			〃	〃	9.8	4.4	2.0	95	〃	鉄釉		Ⅰ
	9	土器	火鉢		三足？	〃	3	(28.0)	22.3	10.2	30				Ⅰ
31	1	磁器	碗	中	丸形	3号建物	〃	9.8	4.0	5.0	35	肥前	染付	二重網目文	Ⅰ①
	2	〃	〃	〃	〃	〃	2	(9.6)	4.2	5.1	60	〃	〃	雪輪梅樹文	Ⅰ①
	3	〃	〃	〃	〃	〃	3	9.1	3.6	5.0	70	〃	〃	〃	Ⅰ①
	4	〃	〃	〃	〃	〃	2	(10.4)	3.6	4.8	25	〃	〃	内外面　菊花散らし	Ⅰ①
	5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(9.1)	3.6	4.6	35	〃	〃	見込　五弁花文 外面　輪宝繋文	Ⅰ②
	6	〃	〃	〃	端反形	〃	3	10.6	—	—	15	瀬戸・美濃	〃	内面　口縁部に墨弾き	Ⅰ②
	7	〃	〃	小	丸形	〃	2	(8.8)	(3.8)	5.5	15	肥前	〃	稲束	Ⅰ②
	8	〃	酒盃			〃	3	6.7	2.4	3.5	75	〃	白磁		Ⅰ
	9	〃	蓋付碗	大	端反形	〃	2	13.1	5.5	7.0	90	〃	染付	見込　松竹梅文 外面　松橋家　焼継痕	Ⅰ②
	10	〃	皿	中		〃	〃	13.8	8.6	3.7	75	〃	〃	内面　雪輪文	Ⅰ
	11	〃	〃	小		〃	〃	(11.2)	(6.4)	2.3	25	〃	〃	内面　菊花散らし	Ⅰ①
	12	〃	そば猪口			〃	〃	(7.8)	(6.0)	6.2	20	瀬戸・美濃	〃	菖蒲	Ⅰ②
	13	〃	火入れ			〃	〃	(6.6)	(6.1)	(6.7)	20	肥前？	〃	風景	Ⅰ
	14	陶器	碗	小		〃	〃	5.6	2.6	3.4	55		灰釉		Ⅰ
	15	〃	〃	〃		〃	〃	8.6	4.0	6.4	80	信楽・京都系			Ⅰ
	16	〃	〃	中		〃	3	(10.2)	(4.7)	6.0	45		鉄釉		Ⅰ
	17	〃	仏飯器			〃	2	(6.4)	3.8	5.0	50		灰釉		Ⅰ
	18	〃	壺			3建北側	3	4.8	5.2	7.9	完			銭貨入り	Ⅰ
	19	〃	土瓶			3号建物	2	(7.4)	—	—	30	瀬戸？		つるかけ部分が破損のため針金で代用	Ⅰ
	20	土器	火鉢			〃	3	(27.2)	24.3	9.6	40			3本脚	Ⅰ
32	1	磁器	碗	小	丸形	B－5	2	8.9	4.0	5.3	90	肥前？	染付	菊花	Ⅰ
	2	〃	〃	〃	〃	B－5、C－5	〃	(9.0)	(4.0)	5.2	40	肥前	〃	菊花散らし	Ⅰ
	3	〃	〃	〃	〃	B－5	〃	(8.4)	3.6	5.1	45	〃	〃	竹笹文	Ⅰ
	4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(8.5)	3.5	5.7	45	瀬戸・美濃	〃	草木文	Ⅰ②
	5	〃	〃	中	〃	〃	〃	9.0	3.1	5.2	90	肥前？	〃	矢羽根文	Ⅰ②
	6	〃	〃	小	〃	A層、B－5	〃	8.7	3.3	5.2	90	〃	〃	〃	Ⅰ②
	7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	8.5	3.5	5.1	95	〃	〃	〃	Ⅰ②
	8	〃	〃	〃	〃	C－5	〃	8.6	3.4	5.3	55	〃	〃	菊花文、他	Ⅰ②
	9	〃	〃	〃	〃	A層、B－5	〃	(8.0)	(3.5)	5.0	30	肥前	〃	〃　〃	Ⅰ②
	10	〃	〃	中	〃	試掘		(9.0)	—	—	10		染付	稲束	Ⅰ②
	11	〃	〃	小	〃	C－5	2	8.4	3.5	5.1	70	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ②
	12	〃	〃	〃	〃	B－5	〃	8.4	3.4	5.3	45	〃	〃	四方だすき文、底焼継	Ⅰ②

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
32	13	磁器	碗	小	丸形			8.6	3.7	6.1	85	肥前？	染付	菖蒲	Ⅰ②
	14	〃	〃	中	〃	B−5	2	9.7	3.7	5.0	95	〃	〃	外面 食物他、焼継痕	Ⅰ②
	15	〃	〃	〃	〃	A層、B−5	〃	9.5	3.6	5.3	90	瀬戸・美濃	〃	食物	Ⅰ②
	16	〃	〃	〃	〃	〃	〃	9.2	3.8	6.0	75	肥前	〃	松	Ⅰ①〜②
	17	〃	〃	〃	端反形	C−5	2	10.6	4.7	6.0	80	瀬戸美濃	〃		Ⅰ②
	18	〃	〃	〃	丸形	B−5	3	10.0	4.0	4.7	80	肥前	〃	雪輪梅樹文	Ⅰ①
	19	〃	〃	〃	〃	C−5	2	(9.8)	3.8	5.0	20	〃	〃	〃	Ⅰ①
	20	〃	〃	〃	〃	D−5	3	11.4	4.2	5.8	85	〃	〃	〃	Ⅰ①
	21	〃	〃	小	筒形	A層、B−5	2	(9.2)	(2.8)	4.1	30	瀬戸・美濃	色絵	花、葉、笹	Ⅰ②
	22	〃	〃	〃	〃	C−5	2	(7.0)	(3.0)	5.9	20	肥前	染付	雲	Ⅰ①〜②
	23	〃	〃	〃	〃	A層、B−5	2	(7.2)	3.8	5.1	55	肥前？	〃	菊花散らし	Ⅰ①〜②
	24	〃	〃	〃	〃	〃	2	(7.8)	4.0	5.2	45	肥前	〃	〃	Ⅰ①〜②
	25	〃	〃	〃	〃	〃	2	(7.0)	4.0	5.3	40	〃	〃	見込五弁花文	Ⅰ①〜②
33	1	磁器	碗	小	筒形	A層、B−5	2	7.2	—	—	60	〃	〃	菊花散らし	Ⅰ①〜②
	2	〃	〃	〃	〃		2	7.4	—	—	60	〃	〃	花	Ⅰ①〜②
	3	〃	〃	〃	〃	A層、B−5	2	7.2	3.7	5.4	70	〃	〃	菊花散らし	Ⅰ①〜②
	4	〃	〃	〃	〃	C−5	2	7.6	3.8	5.9	90	〃	〃		Ⅰ①
	5	〃	〃	〃	〃	B−5	2	7.5	3.6	5.8	80	〃	〃		Ⅰ①
	6	〃	〃	〃	丸筒型	A層、B−5	2	6.8	3.7	4.5	55	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ②
	7	〃	〃	〃	〃	〃	2	6.8	(3.7)	4.8	55	〃	〃	焼継痕	Ⅰ②
	8	〃	〃	〃	〃	B−5	2	6.6	(3.7)	4.9	45	〃	〃	葉	Ⅰ②
	9	〃	〃	〃	〃	A層、B−5	2	(6.8)	(4.2)	5.1	40	〃	〃	水鳥、葉	Ⅰ②
	10	〃	〃	〃	〃		2	7.1	3.7	5.8	70	肥前	〃	蝶、桜	Ⅰ②
	11	〃	〃	〃	〃	A層、B−5	2	(6.8)	5.9	3.4	45	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ②
	12	〃	〃	〃	〃	〃	2	(7.8)	(3.8)	6.2	35	肥前	〃	素描、花	Ⅰ②
	13	〃	〃	〃	〃	B−6、C−5	2	5.2	3.5	6.1	60	瀬戸・美濃	〃	笹	Ⅱ①
	14	〃	〃	〃	端反形	C−5	2	(6.0)	2.7	4.7	55	〃	〃	竹葉、焼継	Ⅱ①
	15	〃	〃	中	〃	B−5	2	(9.5)	3.6	5.3	45	〃	〃	雲	Ⅰ②
	16	〃	〃	小	〃		2	8.0	3.4	4.3	60	〃	〃		Ⅰ②
	17	〃	〃	中	〃	A層、B−5	2	10.5	3.9	5.6	65	〃	〃		Ⅰ②
	18	〃	〃	〃	〃	B−5	2	9.1	3.5	5.1	95	〃	〃		Ⅰ②
	19	〃	〃	〃	〃	A層、B−5	2	10.4	3.7	5.6	65	〃	〃		Ⅰ②
	20	〃	〃	〃	〃	〃	2	10.4	4.4	5.8	85	〃			Ⅰ②
	21	〃	〃	〃	〃	〃	2	(10.7)	4.4	6.0	50	〃	染付		Ⅰ②
	22	〃	〃	大	〃	C−5	2	12.1	4.3	6.4	75	〃	〃		Ⅰ②
	23	〃	〃	中	〃	B−5	2	9.2	3.2	4.0	55	瀬戸・美濃？	色絵、手描き	花、葉、笹	Ⅰ②
	24	炻器	〃	〃	〃	試掘		(10.8)	4.3	6.6	30		染付	牡丹	Ⅰ②
	25	磁器	〃	〃	〃	B−5	2	10.6	—	—	75	瀬戸・美濃	〃	花、雲？	Ⅰ②
	26	〃	〃	〃	〃	試掘		(10.0)	3.8	5.4	55	肥前	〃	一重網目文様	Ⅰ②
	27	〃	〃	〃	〃	B−5	2	11.0	3.5	5.8	60	瀬戸・美濃	〃	焼継	Ⅰ②
34	1	〃	蓋			B−5	2	外径(9.4)		2.9	50	肥前？	〃	素描、梅樹文	Ⅰ②
	2	〃	碗	中	端反形	C−5	2	(10.7)	4.3	6.1	40	〃	〃	〃	Ⅰ②
	3	磁器	碗	中		A層、B−5	2	11.7	4.0	5.6	75	瀬戸・美濃		花	Ⅰ②
	4	〃	〃	〃	〃	C−5	2	10.4	3.9	5.6	90	〃	〃	見込葉	Ⅰ②
	5	〃	〃	〃		A層、B−5	2	(11.7)	4.0	6.4	40	肥前	青磁・染付	コンニャク判五弁花	Ⅰ①
	6	炻器	〃	〃	広東形	〃	2	11.3	5.4	6.6	95		染付	丸文	Ⅰ②
	7	磁器	〃	〃	〃	B−5	2	(11.5)	6.6	6.1	30	肥前	〃		Ⅰ②
	8	〃	酒盃			〃	2	5.7	2.5	4.2	95	瀬戸・美濃	〃	山水	Ⅰ②
	9	〃	〃			C−5	2	(5.7)	2.5	4.3	25	〃	〃	〃	Ⅰ②
	10	〃	〃			A層、B−5	2	6.9	(2.8)	3.4	55	〃	染付、色絵(赤)	外面笹、内面花舟山	Ⅰ②
	11	〃	〃			〃	2	(7.4)	2.3	3.5	25	肥前	染付	笹	Ⅰ
	12	紅皿				〃	2	(2.3)	1.0	(1.2)	40			ミニチュア	Ⅰ

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
34	13	磁器	紅猪口		蜻唐草形	B−5	2	6.2	2.1	1.7	55	肥前		高台松模様	Ⅰ
	14	〃	酒盃			A層、B−5	2	6.4	2.5	3.5	80	瀬戸・美濃？	染付		Ⅰ②
	15	〃	〃			〃	2	(6.9)	2.5	4.3	30	肥前	白磁		Ⅰ
	16	〃	〃			B−5	2	(5.6)	—	—	15	瀬戸・美濃	染付	模様後描き	Ⅰ②
	17	〃	〃			A層、B−5	2	—	(2.6)	—	15	〃	〃	〃	Ⅰ②
	18	〃	〃			C−5	2	(5.4)	(3.4)	5.2	45	肥前？	〃	小鳥、稲束	Ⅰ②
	19	〃	〃			B−5	2	6.1	2.4	2.7	85	瀬戸・美濃？		模様後描き（御茶水）	Ⅰ②
	20	〃	〃			A層、B−5	2	7.2	3.2	3.4	85	瀬戸・美濃	染付	模様後描き、焼継	Ⅰ②
	21	〃	〃			〃	2	7.0	3.0	3.4	80	〃	〃	見込牡丹	Ⅰ②
	22	〃	〃			B−5	2	(6.5)	2.6	2.9	45	〃	〃	模様後描き	Ⅰ②
	23	〃	仏飯器			〃	2	(6.7)	3.8	6.5	65	肥前	〃	梅	Ⅰ
35	1	〃	皿	小		B−5	2	(9.8)	(5.6)	2.5	40	肥前	染付	内面菖蒲、外面唐草文	Ⅰ①
	2	〃	〃	中		試掘	2	(13.5)	(8.4)	3.5	50	〃	〃	内面雪の輪文 外面唐草文	Ⅰ①
	3	〃	〃	〃		C−5	2	13.5	7.4	3.0	90	〃	染付 墨弾き	見込　五弁花文 (コンニャク判)	Ⅰ①
	4	〃	〃	〃		〃	2	(13.8)	7.0	3.0	40	瀬戸・美濃	染付	風景　口錆	Ⅰ②
	5	〃	〃	小		B−5	2	(13.2)	6.4	2.6	55	〃	〃	〃　〃	Ⅰ②
	6	〃	〃	中		A層、B−5	2	(13.7)	7.4	3.5	50	肥前	菊花型打ち白磁	波状口縁	Ⅰ
	7	〃	〃	小		〃	2	(13.4)	(7.8)	3.7	40	〃	染付	見込五弁花文 (コンニャク判)	Ⅰ②
	8	〃	〃	中		C−5	2	14.4	9.1	3.9	80	〃	〃	内面風景	Ⅰ
	9	〃	〃	小		A層	2	(8.2)	3.6	2.4	50	瀬戸・美濃	無地	桜　底『萬王』銘	Ⅰ②
	10	〃	〃	中		C−5	2	21.4	12.7	3.9	85	肥前	染付	内面　椿他　口錆 高台『太明年製』	Ⅰ ①
36	1	〃	盃洗			A層、B−5	2	(17.1)	7.8	8.5	65	肥前	染付	内面　山水、焼継底	Ⅰ
	2	〃	そば猪口			〃	2	7.9	5.0	5.7	78	〃	〃	山水　口錆	Ⅰ
	3	〃	水滴			〃	2	—	—	2.8	30	?	染付、色絵		Ⅰ
	4	〃	瓶			C−5	2	—	5.2	—	75	肥前	青磁		Ⅰ①
	5	〃	蓋			A層、B−5	2	外径 3.9	径 5.4	—	80	瀬戸・美濃	染付	植物	Ⅰ
	6	〃	段重の蓋			〃	2	5.9	—	2.3	98	肥前	染付、色絵	〃　焼継『ニサ』	Ⅰ
	7	〃	碗の蓋				2	9.2	—	2.7	95	瀬戸・美濃	染付	内面　亀模様 外面　鶴雲	Ⅰ ②
	8	〃	〃			B−5	2	10.0	—	2.8	65	肥前？	〃		Ⅰ②
	9	〃	〃			A層、B−5	2	9.4	—	2.6	30	瀬戸・美濃	〃	内面　松竹梅文	Ⅰ②
37	1	陶器	碗	小	丸形	B−5	3	5.8	2.5	3.2	75		灰釉		Ⅰ
	2	〃	〃	〃	〃	〃	3	(5.5)	3.1	3.1	45		〃		Ⅰ
	3	〃	〃	〃	〃	C−5	2	(5.7)	2.8	3.5	40		〃		Ⅰ
	4	〃	〃	小	丸形	B−5	2	(6.7)	3.0	4.0	55		灰釉		Ⅰ
	5	〃	〃	〃	〃	A層、B−5	2	(6.6)	3.2	4.0	45		〃		Ⅰ
	6	〃	〃	中	端反形	C−5	2	9.8	3.6	5.3	85	信楽、京都系	透明釉	白土で梅の花	Ⅰ
	7	〃	〃	〃	平碗	B−5	3	12.4	5.4	3.4	85		灰釉		Ⅰ①
	8	炻器	〃	〃	広東形	〃	2	10.9	5.7	5.4	55	瀬戸・美濃	染付	宝珠文　見込五 弁花のくずれ	Ⅰ
	9	陶器	〃	大	丸形	〃	2	(14.2)	—	—	20		灰釉		Ⅰ①
	10	〃	仏飯器				2	6.2	3.2	3.7	60		〃		Ⅰ
	11	〃	〃				2	6.3	3.8	3.9	65		〃		Ⅰ
	12	〃	〃			B−5	2	6.1	3.5	4.0	70		〃		Ⅰ
	13	〃	〃			〃	2	6.6	3.8	3.9	95		〃		Ⅰ
	14	〃	〃			〃	2	6.7	4.0	4.9	60		〃		Ⅰ
	15	〃	〃			〃	2	(6.2)	3.4	4.4	55		〃		Ⅰ
	16	〃	〃			〃	2	6.2	3.6	4.1	60		〃		Ⅰ
	17	〃	〃			〃	2	(6.4)	3.8	4.5	60		〃		Ⅰ
	18	〃	〃			〃	2	7.0	4.0	4.0	90		〃		Ⅰ
	19	〃	〃			〃	2	(6.9)	4.2	4.4	60		〃		Ⅰ
	20	〃	皿	小		〃	2	(13.0)	6.5	3.0	40		〃	輪禿皿	Ⅰ①
	21	炻器	〃	〃		〃	2	14.1	6.7	3.9	60	瀬戸・美濃	陶器、染付	菊に草、五弁花	Ⅰ②
	22	〃	鉢	中		C−5	2	(18.0)	—	—	20	唐津	灰釉		Ⅰ
	23	陶器	香炉			B−5	2	9.8	7.4	4.6	80	瀬戸・美濃		半菊文様	
	24	〃	〃			〃	3	10.0	—	—	50	〃		〃	
	25	〃	皿	小		〃	3	(13.3)	4.6	4.7	30	京焼風肥前		見込染付山水	

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
37	26	陶器	鉢		練鉢	B−5	2	(20.3)	—	—	25	瀬戸・美濃	灰釉		
	27	〃	〃		土器	B−5	2	18.0	—	—	35		鉄釉		
	28	〃	壺	小		〃	2	(3.3)	—	—	35	唐津	灰釉		
	29	〃	〃			〃	3	—	—	5.0	50		鉄釉		
	30	〃	蓋			A層	2	—	—	—	30				
38	1	〃	鉢			試掘 96T	2	(22.8)	—	—	15		灰釉	縁釉流し掛け 練鉢	Ⅰ
	2	〃	甕	中		B−5 試掘	2	(23.6)	—	—	20	瀬戸・美濃	柿釉	灰釉流し掛け	Ⅰ
	3	〃	〃	〃		B−5	2	(23.0)	—	—	15	〃	〃		Ⅰ
	4	〃	徳利			C−5	2	3.6	8.0	20.6	90	〃	鉄釉	ウノフ釉掛け	Ⅰ
	5	〃	茶入れ			B−5	2	(7.0)	—	—	15	〃	灰釉		Ⅰ①
	6	〃	徳利			〃	2	—	—	—	30	〃		錆徳利（ペコカン）	Ⅰ
	7	〃	〃			C−5	2	—	8.0	—	30		柿釉		Ⅰ
	8	〃	浄瓶			B−5	2	4.4	—	—	30	瀬戸・美濃			Ⅰ
	9	〃	灯明皿			〃	2	10.2	4.9	1.7	99				Ⅰ
	10	〃	〃			試掘 96T	2	(9.7)	(4.4)	2.3	50		長石釉		Ⅰ
	11	〃	〃			B−5	2	(7.1)	2.8	1.5	40				Ⅰ
	12	〃	〃			〃	2	(11.0)	4.3	1.8	35		灰釉		Ⅰ
	13	〃	〃			〃	2	外9.8 内6.6	4.4	1.8	85			受皿	Ⅰ
	14	〃	〃			〃	2	外10.0 内 6.5	4.9	2.2	98		アメ釉	〃	Ⅰ②
	15	土器	皿			〃 A層	2	(3.6)	(2.4)	(0.6)	40			かわらけ	Ⅰ
	16	〃	〃			〃	2	(4.2)	(2.3)	0.7	55			かわらけ、糸切	Ⅰ
	17	〃	香炉			〃	2	(12.0)	9.4	4.9	50				Ⅰ
	18	〃	鉢			C−4	3	—	—	9.0	60				Ⅰ
	19	〃	〃			B−5	2	(28.0)	23.0	21.5	45				Ⅰ
	20	〃	大甕			〃	2	57.5	—	—	40				Ⅰ
39	1	〃	焙烙		内耳	B−5	2	(30.2)	(29.0)	4.7	35				Ⅰ
	2	〃	〃		〃	C−5	2	(30.2)	(28.0)	5.2	35			刻印	Ⅰ
	3	〃	〃		〃			(30.8)	(29.0)	5.0	5				Ⅰ
	4	〃	〃		〃	B−5	2	(22.7)	(30.0)	5.3	20			刻印	Ⅰ
	5	〃	〃		〃	試掘	2	(32.4)	(30.0)	4.6	15			外面全体に煤	Ⅰ
	6	〃	〃		〃	C−5	2	(33.2)	(30.0)	5.6	10				Ⅰ
	7	〃	〃		〃	C−5、石垣裏	2	(32.6)	(30.4)	5.1	5			外面煤	Ⅰ
	8	〃	〃		〃	〃	2	(33.6)	(30.4)	5.3	20				Ⅰ
	9	〃	〃		〃	G−5	2	(33.7)	(32.0)	5.1	10			刻印	Ⅰ
40	1	陶器	皿			4号建物周辺	2	(12.7)	(7.4)	2.8	25	志野焼		菊皿	Ⅰ
	2	〃	灯明皿			〃	2	外10.1 内 7.5	4.6	2.0	完	瀬戸・美濃		重ね焼きの跡	Ⅰ
	3	〃	灯明具			〃	2	(9.0)	—	—	16	〃	鉄釉		Ⅰ
	4	磁器	碗	小	端反形	5号建物	2	6.9	3.5	4.5	80	〃	色絵	底部文字	Ⅰ
	5	陶器	〃			〃	3	—	—	5.3	40	京焼風肥前		山水文	Ⅰ
	6	〃	皿			〃	3	(13.0)	—	—	10	志野焼	長石釉	菊皿？	Ⅰ
	7	土器	かわらけ			〃	2	(6.2)	—	—	45				Ⅰ
	8	〃	〃			〃	3	(8.2)	—	—	30				Ⅰ
	9	〃	〃			〃	3	(10.0)	—	—	25				Ⅰ
	10	〃	〃			〃	3	(12.2)	—	—	25				Ⅰ
41	1	〃	焙烙			5号建物周辺	3	(32.0)	—	—	10				Ⅰ
	2	〃	〃			〃	2	(40.9)	—	—	5			鍔	Ⅰ
	3	〃	火鉢			〃	2	35.0	22.2	21.9	45				Ⅰ
42	1	磁器	碗	中	丸形	7号建物	2	(9.7)	4.0	4.9	60	肥前？	染付	雪輪梅樹文	Ⅰ
	2	〃	〃	小	(筒丸)	〃	2下	(7.0)	3.4	5.1	48	瀬戸・美濃	〃	花	Ⅰ②
	3	〃	〃	〃	(筒丸)	試掘	2	(7.2)	3.6	6.5	60	〃	〃	口縁部に雷文	Ⅰ②
	4	〃	〃	中	端反形	7号建物	2	(9.2)	(3.8)	4.8	20	〃	〃	花？	Ⅰ②
	5	〃	〃	〃	〃	試掘	2	10.5	4.2	5.7	65	〃	〃	菊、見込寿	Ⅰ②
	6	〃	〃	〃	〃	7号建物	2下	10.6	4.4	6.1	完	肥前	〃	帆、 〃	Ⅰ
	7	〃	〃	〃	〃	〃	2	(10.2)	(3.8)	6.7	30	肥前？	〃	内面墨弾き	Ⅰ②
	8	〃	〃		広東形	7号裏	2	—	(5.4)	—	10	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ②
	9	〃	皿	中		7号建物	2	(14.0)	(8.4)	3.5	35	肥前	〃	草花文様	Ⅰ①
	10	〃	碗	〃	丸形	試掘	2	(9.5)	(3.6)	4.7	45	唐津	〃		Ⅰ
	11	〃	〃		〃	7号建物	2下	(3.6)	(1.6)	4.4	45		灰釉		Ⅰ

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
42	12	陶器	碗	小	丸形	7号建物	3	7.8	3.3	3.4	90		鉄釉		Ⅰ
	13	〃	皿			〃	2下	—	(4.0)	—	20	京風肥前焼	灰釉		Ⅰ
	14	〃	鉢			〃	2下	(13.2)	—	—	15	瀬戸・美濃	鉄釉、緑釉、ウノフ釉		Ⅰ
	15	〃	灯明皿			〃	3	10.1	5.7	2.6	95	〃		尾呂	Ⅰ
	16	〃	瓶？			〃	2下		(12.2)		30				Ⅰ①
	17	土器	皿			〃	2下	(10.4)	(5.2)	2.3	40			灯明皿として使用	Ⅰ
	18	〃	〃			〃	3	9.6	5.4	2.1	ほぼ完形			〃	Ⅰ
	19	〃	〃				2	4.8	(3.6)	0.9	50			かわらけ	Ⅰ
43	1	磁器	碗	小	丸形	1溝	2	8.3	3.5	5.0	65	肥前	染付	竹笹文、見込五弁花	Ⅰ①～②
	2	〃	〃	〃	〃	〃	2	(8.0)	3.8	4.9	50	〃	〃	花、見込五弁花	Ⅰ①～②
	3	〃	〃	〃	〃	〃	2	(8.0)	(3.4)	4.9	35	肥前	染付	菊花散らし、見込五弁花	Ⅰ①～②
	4	〃	〃	〃	〃	〃	2	(8.3)	3.4	4.9	50	〃	〃	菊花に蝶、見込五弁花	Ⅰ①～②
	5	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.8	(3.9)	4.7	50	〃	〃	菊花に蝶	Ⅰ①～②
	6	〃	〃	〃	〃	〃	2	8.2	(3.6)	5.2	80	〃	〃	花	Ⅰ①～②
	7	〃	〃	〃	〃	〃	2	8.6	(3.5)	5.1	80	〃	〃	菊	Ⅰ①～②
	8	〃	〃	〃	〃	〃	2	8.0	(3.4)	5.1	45	〃	〃	菊花に蝶	Ⅰ①～②
	9	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.6	—	—	45	〃	〃	〃	Ⅰ①～②
	10	〃	〃	〃	〃	〃	2	8.1	3.5	4.8	60	〃	〃	竹笹文、見込五弁花	Ⅰ①～②
	11	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.6	3.2	4.3	50	〃	〃		Ⅰ①～②
	12	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.7	3.6	5.5	85	〃	〃	唐子、焼継	Ⅰ①～②
	13	〃	〃	〃	〃	〃	2	8.2	3.4	5.2	80	〃	〃	菊他、見込火炎文	Ⅰ①～②
	14	〃	〃	〃	〃	〃	2	8.7	3.3	4.3	85	〃	〃	梵字文のくずし文、見込くずし壽	Ⅰ①～②
	15	〃	〃	〃	筒形	〃	2	(6.8)	3.3	5.0	45	〃	〃	菊花に蝶、見込五弁花	Ⅰ①～②
	16	〃	〃	〃	〃	〃	2	6.2	—	—	55	〃	〃	〃	Ⅰ①～②
	17	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.5	4.0	5.5	85	〃	〃	菊花散らし、見込五弁花	Ⅰ①～②
	18	〃	〃	〃	〃	〃	2	(7.5)	3.8	4.9	45	〃	〃	〃	Ⅰ①～②
	19	〃	〃	〃	〃	〃	2	8.1	—	—	30	〃	〃		Ⅰ
	20	〃	〃	〃	筒丸形	〃	2	7.5	3.7	6.4	75		〃	龍	Ⅰ
	21	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.7	3.5	6.4	65	肥前	〃	竹笹他	Ⅰ
	22	〃	〃	〃	〃	〃	2	(7.9)	3.4	6.4	50	〃	〃	龍他	Ⅰ
	23	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.2	3.6	6.0	80	瀬戸・美濃	〃	菊、蝶、焼継	Ⅰ②
	24	〃	〃	〃	〃	〃	2	6.0	3.9	5.2	75	〃	〃	鳥、葉、高台に「一山」	Ⅰ②
	25	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.4	3.8	5.4	50	〃	〃	縦線文	Ⅰ②
	26	〃	〃	〃	〃	〃	2	(7.3)	(2.6)	6.0	25	〃	〃	〃	Ⅰ②
	27	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.3	3.6	5.9	50	〃	〃	花、焼継	Ⅰ②
	28	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.1	3.7	6.2	65	瀬戸・美濃？	〃	花、松？	Ⅰ②
	29	〃	〃	〃	〃	〃	2	7.2	3.4	5.4	85	瀬戸・美濃	〃	蛸唐草	Ⅰ②
	30	〃	〃	中	広東形	〃	2	10.2	5.3	5.8	75	肥前	〃	柳に旗	Ⅰ②
	31	〃	〃	〃	〃	〃	2	(10.3)	6.2	6.2	45	〃	〃	植物、焼継	Ⅰ②
	32	〃	〃	大	〃	〃	2	12.5	6.4	6.5	50	肥前？	〃	稲束　〃	Ⅰ②
	33	〃	〃	中	〃	〃	2	11.2	5.7	6.0	90	〃	〃	格子文　〃	Ⅰ②

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
43	34	磁器	碗	中	広東形	1溝	2	11.4	5.8	6.1	55	肥前	染付	植物、焼継	Ⅰ②
	35	〃	〃	〃	〃	〃	2	(11.5)	(6.0)	6.5	35	〃	〃	梵字模様	Ⅰ①
	36	〃	〃	〃	〃	〃	2	11.0	5.9	6.0	60	〃	〃	菊花散らし、焼継	Ⅰ②
44	1	〃	〃	〃	端反形	〃	2	(10.5)	4.4	5.8	50	瀬戸・美濃	〃	紅葉	Ⅰ②
	2	〃	〃	〃	〃	〃	2	11.3	5.2	6.5	70	瀬戸・美濃？	〃	風景	Ⅰ②
	3	〃	〃			〃	2	—	4.6	—	40	肥前	〃	格子、焼継	Ⅰ②
	4	〃	〃	中	端反形	〃	2	9.2	4.0	4.7	90	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ②
	5	〃	〃	〃	〃	〃	2	10.8	4.2	6.1	75	〃	〃	紅葉	Ⅰ②
	6	〃	〃	大	〃	〃	2	12.0	4.8	8.7	65	瀬戸・美濃？	〃	風景、口縁部墨弾き	Ⅰ②
	7	〃	〃	中	〃	〃	2	11.2	4.4	6.2	40	瀬戸・美濃	〃	漢文	Ⅰ②
	8	〃	〃	〃	〃	〃	2	(10.7)	4.0	6.1	50	肥前	染付、素描	花	Ⅰ②
	9	〃	〃	大	〃	〃	2	12.7	5.2	7.1	55	肥前？		山水、焼継	Ⅰ②
	10	〃	碗の蓋			〃	2	外径9.0	径 3.4	2.5	75	瀬戸・美濃	瑠璃色	11とセットか？	Ⅰ②
	11	〃	碗	中	端反形	〃	2	10.7	4.4	5.5	70	〃	〃		Ⅰ②
	12	〃	碗の蓋			〃	2	外径 10.3	径 (5.7)	2.9	40	肥前？	染付	鶴、稲	Ⅰ②
	13	〃	〃			〃	2	外径9.3	径 3.7	2.9	65	瀬戸・美濃	〃	花	Ⅰ②
	14	〃	〃			〃	2	外径9.8	径 5.1	2.8	85	肥前？	〃	格子	Ⅰ②
	15	〃	〃			〃	2	外径9.4	径 3.9	3.1	90	瀬戸・美濃	〃	帆、松	Ⅰ②
	16	〃	〃			〃	2	外径9.1	径 3.4	3.9	55	〃	〃	風景	Ⅰ②
	17	〃	〃			〃	2	外径9.0	径 3.4	2.4	80	〃	〃	岩に波	Ⅰ②
	18	〃	〃			〃	2	外径9.2	径 3.4	2.8	70	〃	〃	漢文	Ⅰ②
	19	〃	〃			〃	2	外径9.6	径 5.0	2.6	完	瀬戸・美濃？	〃	葉	Ⅰ②
	20	〃	〃			〃	2	外径 (9.4)	径 3.5	2.9	40	瀬戸・美濃	〃	花	Ⅰ②
45	1	〃	酒盃			1溝、B−5	2	6.2	2.6	3.1	90	瀬戸・美濃？	染付	花	Ⅰ②
	2	〃	〃			〃	2	(7.2)	2.5	3.5	50	肥前	〃	笹文様？	Ⅰ②
	3	〃	〃			1溝	2	7.2	3.3	3.7	70	瀬戸・美濃？	〃	風景	Ⅰ②
	4	〃	〃			〃	2	(5.8)	(3.0)	2.6	40	瀬戸・美濃	〃	焼成後文字焼付	Ⅰ②
	5	〃	仏飯器			〃	2	5.8	4.1	5.4	95	肥前	〃	菊花文	Ⅰ
	6	〃	〃			〃	2	6.6	3.8	6.2	80	〃	〃	梅文	Ⅰ①
	7	〃	〃			〃	2	6.7	4.2	6.0	97	〃	〃	蛸唐草文	Ⅰ①
	8	〃	〃			〃	2	7.0	4.0	6.1	98	〃	〃	〃	Ⅰ①
	9	〃	皿	中		〃	2	14.4	8.0	3.9	99	〃	〃		Ⅰ
	10	〃	〃	〃		1溝、C−5	2	14.4	9.0	3.3	97	〃	〃		Ⅰ
	11	〃	〃	〃		1溝	2	(14.2)	(7.2)	4.3	45	〃	〃	菊、梅	Ⅰ
	12	〃	そば猪口			〃	2	6.3	—	—	50	〃	〃	岩、花、漆継	Ⅰ①
	13	〃	〃			1溝、B−6	2	7.1	5.4	5.9	97	〃	〃	岩、松	Ⅰ①
	14	〃	鉢	中		1溝、C−5	2	14.4	9.6	6.9	80	〃	〃	焼継	Ⅰ①
	15	青磁	花生			1溝	2	—	—	5.5	25	〃			Ⅰ①
	16	磁器	水滴			〃	2	—	—	—	20	〃	染付		Ⅰ
	17	〃	〃			〃	2	—	—	—	10 未満	〃	〃		Ⅰ
	18	〃	〃			〃	2	タテ 7.3	ヨコ 11.1	高 3.6	90	〃	〃	龍文	Ⅰ
	19	陶器	碗	小	丸形	〃	2	6.0	3.0	3.3	75	瀬戸・美濃	灰釉	灰色、内面釉	Ⅰ
	20	〃	〃	〃	〃	〃	2	(5.8)	(2.6)	3.3	45		〃	〃	Ⅰ
	21	〃	〃	〃	〃	〃	2	6.2	2.9	3.3	55		〃	灰オリーブ	Ⅰ
	22	〃	〃	〃	〃	〃	2	(6.1)	3.2	3.9	50		〃	灰白色	Ⅰ
	23	〃	〃		端反形	1溝、B−5	2	(9.3)			40	信楽京都系	透明釉		Ⅰ
	24	〃	〃		平碗	1溝	2	(12.2)			17			淡黄色	Ⅰ
	25	〃	〃		〃	〃	2	(13.4)			10 未満			〃	Ⅰ
	26	〃	〃			〃	2		(5.0)		10 未満	瀬戸・美濃		黒褐色	Ⅰ
46	1	〃	仏飯器			1溝	2	6.2	3.9	3.9	95		灰釉	灰白色	Ⅰ
	2	〃	〃			〃	2	6.0	3.4	4.4	55		〃	明オリーブ灰色	Ⅰ
	3	〃	〃			〃	2	6.3	3.6	4.2	50		〃	灰白色	Ⅰ
	4	〃	〃			〃	2	5.8	3.4	4.3	50		〃	〃	Ⅰ
	5	〃	〃			〃	2	6.1	3.9	4.1	75		〃	〃	Ⅰ
	6	〃	〃			〃	2	6.3	3.4	3.8	60		〃	〃	Ⅰ
	7	〃	〃			〃	2	7.1	4.1	4.7	50		〃	オリーブ灰色	Ⅰ

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				底径	器高	%					
46	8	陶器	片口			1溝	2	14.4			30	瀬戸・美濃	灰釉	灰白色	Ⅰ
	9	〃	〃			〃	2	15.2	6.0	6.8	80	〃	〃	浅黄色	Ⅰ①
	10	〃	甕	中		〃	2			17.0	45	〃	柿釉		Ⅰ
	11	〃	徳利			〃	2			6.6	65	〃	鉄釉	明赤褐色	Ⅰ
	12	〃	蓋			〃	2	7.6		3.2	完	〃	〃 、ウノフ釉	暗赤褐色、灰白	Ⅰ
	13	〃	土瓶			3層、B−6	2	7.8	8.0	9.3	50			松	Ⅰ
	14	〃	急須			1溝	2	5.2	4.6	8.8	60		灰釉	灰色	Ⅰ
	15	〃	土瓶			〃	2	6.2	6.6	9.5	60	瀬戸・美濃	鉄釉、ウノフ釉	黒色、褐色	Ⅰ
	16	〃	秉燭			B−6	2	5.0	3.4	3.5	55		〃	黒褐色	Ⅰ
	17	〃	灯明皿			1溝	2	(9.6)	(4.4)	1.7	40		〃	褐色	Ⅰ
	18	〃	〃			〃	2	(10.1)	(3.7)	1.8	30		灰釉	灰白色	Ⅰ
	19	〃	〃			〃	2	9.4	3.2	2.0	50		〃	〃	Ⅰ
	20	〃	〃			〃	2	(9.7)	(4.0)	2.4	25		〃	〃	Ⅰ
	21	〃	灯明皿受			〃	2	(9.8)	(3.4)	2.0	40		〃	灰オリーブ	Ⅰ
	22	〃	灯明皿			〃	2	(10.0)	(4.3)	1.7	15		鉄釉	褐色	Ⅰ
	23	〃	〃			〃	2	9.4	3.5	2.1	80		〃	暗赤褐色	Ⅰ
47	1	土器	焙烙		内耳	〃	2	(31.4)	(30.0)	4.6	10				Ⅰ
	2	〃	〃		〃	〃	2	(32.8)	(30.0)	4.6	10			刻印「本」	Ⅰ
	3	〃	〃		〃	〃	2	(34.4)	(32.0)	5.4	10				Ⅰ
48	1	陶器	灯明皿		皿受	2溝	2	10.1	5.2	1.9	90	瀬戸・美濃	鉄釉		Ⅰ
	2	土器	かわらけ			〃	2	5.3	4.4	1.2	完			煤あり	Ⅰ
	3	〃	焙烙			〃	2	(26.6)	—	—	10未満				Ⅰ
	4	磁器	碗	小	端反形	3溝	2	(6.7)	3.6	4.6	70	瀬戸・美濃	銅版転写、染付		Ⅱ②
	5	〃	〃	〃	筒丸形	〃	2	6.4	3.7	5.2	90	〃	〃		Ⅱ②
	6	〃	〃	〃	〃	〃	2	6.6	3.4	4.8	60	〃	染付	風景	Ⅱ①
	7	〃	〃	中	丸形	〃	2	(9.8)	4.2	5.1	60	肥前	〃	雪輪梅樹文	Ⅰ①
	8	〃	〃	〃	端反形	〃	2	(10.8)	4.2	6.1	30	〃	〃	舟、林、焼継痕	Ⅰ②
	9	〃	〃	〃	丸形	〃	2	(10.0)	(3.8)	4.8	45	〃	〃	植物	Ⅰ
	10	〃	〃	〃	端反形	〃	2	(10.7)	(3.8)	5.8	50	瀬戸・美濃	〃	菊に蝶	Ⅰ②
	11	〃	〃	〃	丸形	〃	2	(11.4)	(4.0)	5.1	45	〃	染付、型紙摺		Ⅱ②
	12	〃	〃	〃	〃	〃	2	(11.2)	3.9	4.7	40	〃	〃		Ⅱ②
	13	〃	〃	〃	〃	〃	2	(11.0)	3.7	5.0	50	〃	染付		Ⅱ①
	14	〃	紅猪口			〃	2	6.0	3.0	1.8	50	肥前	白磁		Ⅰ
	15	〃	酒盃			3溝、C−13	2	7.0	3.0	3.9	95	〃	染付		Ⅰ
	16	〃	〃			3溝	2	(5.9)	2.4	2.7	50	瀬戸・美濃	〃	焼成後絵付	Ⅰ②
	17	〃	皿	小	菊皿	〃	2	(9.0)	3.5	2.4	70	肥前	〃	花	Ⅰ
	18	〃	〃	中		〃	2	14.8	8.3	4.3	80	瀬戸・美濃	〃 型紙摺		Ⅱ②
	19	〃	〃	小		〃	2	(13.1)	(7.0)	2.6	50	〃	染付		Ⅱ①
	20	〃	〃	〃		〃	2	(13.5)	8.3	4.0	60	肥前	白磁	菊花型打ち	Ⅰ②
	21	〃	徳利			3溝、B−10	2	—	6.0	—	50	瀬戸・美濃	染付 銅板転写	日清戦争	Ⅱ②
49	1	〃	鉢			2溝、3溝	2	18.3	9.4	7.0	70	肥前？	染付	素描、焼継	Ⅰ
	2	〃	段重			3溝、試掘	2	9.1	8.2	3.1	90	瀬戸・美濃？	銅板転写		Ⅱ②
	3	陶器	碗	中		3溝	2	(9.3)	(3.4)	5.8	30	信楽京都系	色絵	松	Ⅰ
	4	〃	皿	小	反皿	〃	2	(12.2)	(7.2)	2.6	40	瀬戸・美濃	灰釉		Ⅰ
	5	〃	壺		双耳壺	〃	2	(5.0)	—	—	40	〃	〃		Ⅰ
	6	〃	急須			〃	2	(5.8)	(5.0)	5.9	40	信楽京都系？			Ⅰ
	7	〃	土瓶			3溝、D−2	2	(9.0)	—	—	45	？			Ⅰ
	8	〃	〃			3溝	2	8.7	7.7	9.3	80	〃			Ⅰ
	9	〃	〃			3溝、B−10	2	10.7	—	—	15	信楽京都系？	手描		Ⅰ
	10	〃	蓋		土瓶の蓋	3溝	2	外径(9.1)	径(7.2)	3.2	60	〃	〃		Ⅰ
	11	〃	〃		〃	3溝、B−3	2	外径(8.6)	径(7.0)	—	45	信楽？	〃		Ⅰ
	12	炻器	〃		〃	3溝、B−10	2	外径 9.8	径 7.4	—	30	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ
	13	陶器	灯明皿		皿受	3溝、C−10	2	(10.4)	(4.5)	1.7	45	〃	鉄釉		Ⅰ
	14	〃	片口			3溝、E−7	2	(21.0)	(11.3)	9.6	30	〃	灰釉		Ⅰ
	15	土器	かわらけ			3溝	2	8.9	6.6	1.8	ほぼ完形			煤あり	Ⅰ
	16	〃	〃			〃	2	(10.6)	5.2	2.7	45				Ⅰ
	17	〃	火鉢			〃	2	26.3	23.1	10.1	80			3足	Ⅰ

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
50	1	磁器	碗	中	丸形	4溝、B−2	3	10.4	4.0	5.5	70	肥前系	染付	雪輪梅樹文	Ⅰ①
	2	陶器	〃	小		〃	3	8.0	3.6	3.9	40	瀬戸・美濃			Ⅰ
	3	〃	仏飯器			4溝、C−2	3	6.8	4.0	5.2	80				Ⅰ
	4	磁器	紅猪口			5溝	2	5.0	—	—	20	肥前			Ⅰ
	5	〃	碗	中	広東形	5溝、D−11	2	11.9	6.4	6.0	20	肥前系		焼継　梵字文様	Ⅰ
	6	〃	酒盃			6溝	2	7.2	3.9	2.7	95	〃	染付	笹文	Ⅰ
	7	〃	碗	中	広東形	〃	2	11.9	6.6	6.1	30	〃	〃	三本線、見込円	Ⅰ
	8	陶器	〃	小		〃	2	(5.6)	2.9	3.1	50				Ⅰ
	9	〃	〃	〃		6溝、F−11	2	(6.4)	(3.0)	3.7	50				Ⅰ
	10	〃	香炉			6溝	2	(10.1)	9.4	7.9	30	瀬戸・美濃	緑釉		Ⅰ①
	11	〃	鉢			6溝、E−11	2	—	14.8	—	40	〃	灰釉		Ⅰ
	12	〃	擂鉢			6溝、F−11	2	—	15.0	—	20	〃			Ⅰ
	13	〃	土瓶			6溝、E−11	2	(6.6)	(6.6)	9.0	70	〃	鉄釉		Ⅰ
	14	〃	蓋			6溝	2	外径 7.4	径 7.0	1.5	ほぼ完形	〃	灰釉		Ⅰ
	15	〃	〃		茶入れの蓋	〃	2	外径 7.0	径 4.0	1.5	50	〃	鉄釉		Ⅰ
	16	〃	灯明皿			〃	2	(10.2)	(4.2)	1.9	50	〃	〃	口縁に煤付着	Ⅰ
	17	〃	〃			〃	2	(10.1)	(4.6)	2.2	45	〃	〃		Ⅰ
	18	土器	十能		把手	〃	2				20				Ⅰ
	19	〃	土製品			〃	2	タテ 4.2	ヨコ 4.0	厚 0.9				七輪の部分？	?
51	1	磁器	碗	小	丸形	7溝、試掘	2	(7.2)	(2.2)	3.9	40	肥前	染付	松、竹文	Ⅰ
	2	〃	〃	中	〃	7溝、G−17 (9号)	2	9.6	4.0	5.0	70	〃	コンニャク判	桐の葉文	Ⅰ①
	3	〃	〃	小	〃	7溝	2	(8.1)	(3.4)	5.1	45	〃	染付	菊に蝶文	Ⅰ①
	4	〃	〃	中	〃	〃	2	10.4	4.8	5.2	90	〃	〃		Ⅰ①
	5	〃	〃	小	〃	G−17 (9号)	2	(7.8)	4.4	2.9	60	〃	コンニャク判	桐の葉文	Ⅰ①
	6	〃	〃	中	〃	7溝	2	10.2	4.1	5.6	70	〃	染付	網目文	Ⅰ①
	7	〃	〃	小	〃	〃	2	(8.1)	(3.4)	5.4	40	〃	〃	牡丹　焼継	Ⅰ①
	8	〃	〃	中	〃	〃	2	—	3.8	—	50	〃	〃	雪輪梅樹文	Ⅰ①
	9	〃	〃	小	筒形	G−17 (9号)	2	6.8	4.2	5.5	70	〃	〃	菊花文	Ⅰ①
	10	〃	〃	〃	端反形	7溝	2	8.7	(3.5)	4.5	50	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ②
	11	〃	〃	中	〃	〃	2	(10.8)	(4.6)	5.9	50	肥前系	〃	内面墨弾き	Ⅰ②
	12	〃	〃	小	筒丸形	〃	2	8.0	—	—	40	瀬戸・美濃？	〃	草花	Ⅰ②
	13	〃	〃	〃	〃	〃	2	(7.7)	4.0	6.2	45	〃	〃	雷文	Ⅰ②
	14	〃	酒盃			F−17	2	(7.8)	5.0	5.8	60	肥前	〃	稲束文	Ⅰ②
	15	〃	〃			G−17	2	(5.3)	(2.6)	3.5	30	〃	〃	葛文	Ⅰ②
	16	〃	〃			7溝	2	(6.8)	2.9	2.8	80	〃	白磁		Ⅰ
	17	〃	〃			〃	2	5.7	2.4	2.6	70	瀬戸・美濃	染付	籠	Ⅰ②
	18	〃	仏飯具			G−17 (9号)	2	—	3.6	—	60	肥前系	染付		Ⅰ
	19	〃	〃			〃	2	—	4.0	—	60	〃			Ⅰ
	20	〃	〃			7溝	2	7.8	4.3	5.3	95	〃	染付		Ⅰ
	21	〃	皿	小	菊皿	〃	2	(10.2)	(5.6)	2.0	50	〃	〃	風景	Ⅰ
	22	〃	〃	〃		〃	2	12.2	6.9	2.7	95	〃	〃	底部角福	Ⅰ
	23	〃	〃	〃		〃	2	(13.2)	(7.7)	2.9	40	〃	〃	五弁花（手描、コンニャク判）	Ⅰ①
	24	〃	〃	中		〃	2	(21.4)	11.5	4.4	60	〃	〃	鼠と大根	Ⅰ
	25	〃	段重			〃	2	(15.0)	(10.0)	5.7	30		色絵		Ⅰ
	26	〃	〃			〃	2	(13.2)	—	—	10未満		〃		Ⅰ
52	1	青磁	灰吹き			〃	2	(6.8)	—	—	15	肥前		キセルを叩いた跡あり	Ⅰ
	2	〃	香炉			9溝	2	(9.8)	—	—	15	〃			Ⅰ
	3	〃	花瓶			7溝	2	—	—	—	40	〃			Ⅰ
	4	磁器	蓋			〃	2	外径 9.6	径 4.5	3.1	90	〃	染付	鶴　内面亀	Ⅰ②
	5	〃	合子(蓋)			〃	2	(5.1)	—	(1.1)	45	肥前？	〃	合せ部に紅付着	Ⅰ
	6	陶器	碗	小	丸形	〃	2	(6.6)	3.1	3.8	60	瀬戸・美濃？			Ⅰ
	7	〃	〃	〃	〃	9溝	2	6.8	3.8	3.9	ほぼ完形	〃			Ⅰ
	8	〃	〃	〃	〃	7溝	2	(7.4)	3.2	4.0	70	〃			Ⅰ
	9	〃	〃	〃	〃	9溝	2	(7.4)	3.5	4.5	95	〃			Ⅰ
	10	〃	〃	〃	〃	G−17	2	8.0	3.4	4.3	80	〃			Ⅰ
	11	〃	〃	〃	〃	〃	2	(7.4)	—	—	20	〃			Ⅰ

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
52	12	陶器	碗	小	丸形	7溝	2	(6.8)	2.7	3.7	50	信楽京都系	絵付	笹？	Ⅰ
	13	〃	〃	〃	〃	G−17	2	8.6	4.6	6.0	80	瀬戸・美濃	灰釉	京都系を真似る	Ⅰ
	14	〃	〃	〃	端反形	7溝	2	(7.6)	—	—	30	信楽京都系		鉄絵	Ⅰ②
	15	〃	〃	〃	筒形	G−17	2	(8.7)	5.1	6.4	60	〃		蓋付　高台に墨書「？」	Ⅰ
	16	〃	仏飯具			9溝	2	(6.4)	3.5	4.2	80				Ⅰ
	17	〃	平碗			〃	2	(19.6)	—	—	15		灰釉		Ⅰ
	18	〃	碗	大		G−17	2	12.9	4.4	5.0	95	京焼風肥前		山水文	Ⅰ①
	19	〃	片口			9溝	2	12.4	5.7	6.4	80	瀬戸・美濃	灰釉　ウノフ釉	三又トチン跡	Ⅰ
	20	〃	行平			7溝	2	(28.6)	8.0	11.0	55	〃	灰釉		Ⅰ
	21	〃	鉢			F−17、G−17	2	19.2	8.7	9.3	60	〃	鉄釉〜化粧かけ十緑釉	印花文	Ⅰ①
53	1	〃	〃			G−17	2	(26.8)	(14.5)	5.6	40	〃	長石釉　鉄絵	笠原鉢	Ⅰ①
	2	〃	火入れ			7溝	2	(10.0)	—	—	30	〃	灰釉　鉄釉		Ⅰ
	3	〃	灰吹き			〃	2	5.0	—	—	40	〃	鉄釉		Ⅰ
	4	〃	香炉			F−15	2	(10.5)	7.4	6.3	40	瀬戸・美濃？	〃	三足	Ⅰ
	5	〃	〃			G−16	2	(10.2)	—	—	30	〃	灰釉　鉄釉		Ⅰ
	6	〃	行平の蓋			7溝	2	外径(16.8)	—	—	20	瀬戸・美濃	灰釉		Ⅰ
	7	〃	瓶			G−17	2	8.4	—	—	15	瀬戸・美濃？	長石釉	草花文	Ⅰ①
	8	〃	仏花器			〃	2	—	5.8	—	25	瀬戸・美濃	鉄釉　灰釉		Ⅰ
	9	〃	〃			7溝	2	—	5.0	—	15		〃		Ⅰ
	10	土器	香炉			9溝	2	13.2	18.9	7.1	90			三足	Ⅰ
	11	陶器	灯明皿			〃	2	10.4	5.5	2.3	70	瀬戸・美濃	鉄釉		Ⅰ
	12	〃	〃			7溝	2	10.2	5.4	2.5	80	黄瀬戸	灰釉		Ⅰ
	13	〃	〃			〃	2	7.4	3.0	1.7	完	瀬戸・美濃	鉄釉		Ⅰ
	14	〃	〃		灯明皿受	〃	2	10.8	(4.4)	2.1	60	〃	〃		Ⅰ
	15	土器	かわらけ			G−17	2	4.8	3.2	1.0	完			中央に穴あき	Ⅰ
	16	〃	〃			F−16	3	5.8	4.1	1.3	70				Ⅰ
	17	〃	〃			7溝	2	(6.2)	(4.8)	1.3	30				Ⅰ
	18	〃	〃			〃	2	(6.4)	(5.0)	1.8	20				Ⅰ
	19	〃	〃			〃	2	9.0	5.2	2.2	80				Ⅰ
	20	〃	香炉			9溝	2	(12.4)	(10.4)	5.0	40			3足	Ⅰ
	21	〃	〃			〃	2	—	(11.4)	—	18				Ⅰ
54	1	〃	内耳			7溝	2	(27.8)	(26.6)	4.8	10未満				Ⅰ
	2	〃	〃			〃	2	(29.8)	(29.0)	5.8	10未満				Ⅰ
	3	〃	〃			〃　G−17	2	(18.0)	(16.2)	5.3	30				Ⅰ
	4	〃	〃			7溝	2	(32.0)	(28.6)	5.6	10未満				Ⅰ
	5	〃	〃			〃　(試掘)	2	32.4	30.2	5.8	80				Ⅰ
	6	〃	火鉢			7溝	2	(26.6)	—	—	10未満				Ⅰ
	7	〃	内耳			13溝	3	(34.0)	(30.0)	5.9	30				Ⅰ
	8	〃	〃			21溝	3	(29.4)	(27.0)	5.7	20				Ⅰ
	9	〃	〃			〃	3	(31.6)	29.0	5.0	20				Ⅰ
	10	〃	〃			〃	3	32.8	30.0	5.8	30				Ⅰ
55	1	磁器	瓶			1溝	2	—	5.8	—	40	肥前系	染付		Ⅰ①
	2	〃	〃			7溝	2	—	9.0	—	50	〃	〃	竹	Ⅰ①
56	1	陶器	擂鉢			8溝	2	(23.4)	—	—	10	瀬戸・美濃	鉄釉		Ⅰ
	2	土器	焙烙			〃	2	(28.0)	—	—	10				Ⅰ
	3	〃	十能			〃	2	—	—	—	60				Ⅰ
	4	磁器	碗			9溝	2	(11.0)	—	—	15	肥前	染付	雪輪梅樹文	Ⅰ①
	5	陶器	〃			〃	2	(8.0)	—	—	20	瀬戸・美濃	灰釉		Ⅰ
	6	〃	擂鉢			〃	2	(21.6)	(9.4)	9.0	15	丹波系			Ⅰ
	7	土器	かわらけ			〃	2	10.3	5.8	2.9	完			煤多い、底糸切	Ⅰ
	8	〃	焙烙			〃	2	(33.8)	(30.4)	6.0	10				Ⅰ
	9	〃	〃			〃	2	(34.0)	(29.0)	7.2	10				Ⅰ
	10	陶器	皿			14溝	3	11.9	6.8	2.2	90		灰釉、型紙摺	鉄絵	Ⅰ
	11	〃	碗	中		〃	3	(9.6)	—	—	15	唐津	鉄釉に長石釉？	刷毛目碗	Ⅰ①
	12	〃	天目茶碗	〃		10溝	3	(10.7)	—	—	10	瀬戸・美濃	鉄釉		Ⅰ①

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
57	1	磁器	碗	小	端反形	15溝	3	8.2	3.7	4.6	85	瀬戸・美濃？	染付	見込「太化年制」外面小鳥、松、花	Ⅰ②
	2	〃	〃		丸形	〃	3	—	4.6	—	10	肥前	〃 コンニャク判	見込五弁花	Ⅰ①
	3	陶器	片口			〃	3	(18.0)	—	—	5	瀬戸・美濃			Ⅰ
	4	〃	灯明皿			〃	3	9.7	3.8	2.2	ほぼ完形	瀬戸・美濃？	鉄釉	外面煤	Ⅰ②
	5	〃	〃			〃	3	6.7	3.5	1.5	95	〃 ？	〃		Ⅰ②
	6	〃	〃			〃	3	7.2	3.4	1.6	完	〃 ？	〃		Ⅰ②
	7	磁器	碗	中		16溝	3	(10.3)	4.2	5.9	25	〃 ？	染付	見込「寿」	Ⅰ②
	8	〃	紅皿			〃	3	(4.1)	(1.4)	1.3	35	肥前			Ⅰ
	9	陶器	碗	小		〃	3	6.0	2.8	3.3	ほぼ完形		灰釉		Ⅰ
	10	〃	土鍋			〃	3	(15.3)	—	—	30	瀬戸・美濃	鉄釉		Ⅰ
	11	磁器	瓶？			〃	3	—	—	7.0	10	〃	〃 ？	底部「壽福」	Ⅰ②
	12	陶器	秉燭			〃	3	—	(6.0)	—	50			糸切り痕	Ⅰ
	13	〃	灯明皿			〃	3	(10.0)	4.6	1.6	50		鉄釉		Ⅰ
	14	〃	〃			17溝	3	9.9	5.0	1.8	55		灰釉		Ⅰ
	15	土器	かわらけ			18溝	3	6.0	3.9	1.4	ほぼ完形			糸切り痕	Ⅰ
	16	陶器	碗	小		18溝	3	(6.8)	(3.4)	3.6	25		灰釉		Ⅰ
	17	〃	鉢	〃		〃	3	(7.2)	(6.0)	3.8	45		〃		Ⅰ
	18	土器	かわらけ			〃	3	(10.0)	(8.0)	2.1	30			糸切り痕、煤付着	Ⅰ
	19	〃	〃			〃	3	8.0	6.2	1.7	90			糸切り痕	Ⅰ
	20	陶器	碗	中	丸形	〃	3	(12.3)	(5.0)	8.0	60	瀬戸・美濃	サビ釉→鉄釉→ウノフ釉	尾呂茶碗	Ⅰ①
	21	磁器	〃	〃	〃	21溝	3	10.1	4.1	4.8	55	肥前	染付	風景	Ⅰ①
	22	陶器	灯明受皿			〃	3	外径(11.7) 内径(5.2)	5.1	2.4	50	志土呂		鉄錆	Ⅰ①
	23	〃	鉢			〃	3	—	8.3	—	10		灰釉		Ⅰ
	24	〃	擂鉢			〃		(27.5)	11.0	11.1	35	瀬戸・美濃	鉄釉		Ⅰ①
58	1	磁器	碗	中	丸形	1号井戸	3	—	4.0	—	30	肥前	染付	網目文	Ⅰ①
	2	〃	〃	〃	〃	2号井戸	3	10.1	3.9	5.0	70	〃	〃	内外面菊花散らし	Ⅰ①
	3	陶器	皿	小	菊皿	4号井戸	3	(12.2)	(7.0)	2.1	50	瀬戸・美濃	長石釉	志野	Ⅰ①
	4	土器	焙烙			2号井戸	3	32.1	29.6	5.5	80			刻印あり	Ⅰ
	5	磁器	碗	小	筒丸形	C−8、C−9	2	(7.2)	3.4	6.2	60	瀬戸・美濃	染付	花	Ⅱ①
	6	〃	〃	〃		〃	2	(6.9)	(4.8)	4.7	40	肥前		花	Ⅱ②
	7	〃	〃	〃	丸形	試掘	2	8.3	3.8	6.0	ほぼ完形	〃	染付	あやめ	Ⅰ②
	8	〃	〃	中		C−9	2	12.0	4.2	5.2	60	瀬戸・美濃	銅版転写	松、竹、梅	Ⅱ②
	9	〃	そば猪口			試掘	2	(7.0)	(5.3)	5.5	50	肥前	染付	蛸唐草	Ⅰ①
	10	青磁	香炉			B−9	2	(7.5)	(7.0)	5.9	40	〃		三足（？）	Ⅰ
	11	磁器	皿	中		〃	2	(14.8)	8.0	4.0	40	〃	染付 コンニャク判	五弁花見込	Ⅰ①
	12	〃	鉢			〃	2	(14.5)	(5.6)	5.2	40	瀬戸・美濃	染付	龍	Ⅱ②
	13	〃	〃		八角	B−9、B−10	2	(19.6)	9.3	7.6	80	肥前	〃	麒麟　焼継	Ⅱ①
59	1	〃	碗	小	腰張形	C−6	2	(7.4)	3.1	3.5	55	瀬戸・美濃	型紙摺	菊、桜、小鳥	Ⅱ②
	2	〃	〃	〃	筒丸形	試掘	2	6.7	3.6	4.5	50	〃	染付	風景	Ⅱ①
	3	〃	〃	〃	〃	D−2、他	2	(7.0)	3.9	4.8	45	〃	〃	鳥、食物、焼継底	Ⅰ②
	4	〃	〃	〃	丸形	試掘	2	7.3	3.7	5.0	ほぼ完形	〃	〃		Ⅰ②
	5	〃	〃	〃	〃			(8.4)	(3.1)	4.9	〃	〃	〃	花	Ⅰ
	6	〃	〃	中	〃	C−6	2	10.0	4.0	5.4	60	〃	〃	雪輪梅樹文	Ⅰ①
	7	〃	〃	〃	〃	C−10	2	(10.0)	4.0	5.3	40	〃	〃	〃	Ⅰ①
	8	〃	〃	〃	〃	D−16	2	9.6	3.9	4.9	75	〃	〃	〃	Ⅰ①
	9	〃	〃	〃	〃	F−17	2	(10.0)	4.0	5.1	55	〃	〃	〃	Ⅰ①
	10	〃	〃	〃	〃	C−10	2	(8.8)	3.2	4.7	55	肥前	〃	外面梵字文のくずれ文様	Ⅰ①
	11	〃	〃	〃	〃	D−2	2	(10.8)	3.4	5.2	40	瀬戸・美濃	〃	笹、焼継痕	Ⅱ①
	12	〃	〃	〃	〃	〃	2	(11.1)	3.7	5.1	70	〃	〃		Ⅱ①

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				底径	器高	%					
59	13	磁器	碗	中	丸形	試掘	2	(10.8)	(3.9)	5.5	55	〃	〃	花、見込松竹梅	Ⅱ①
	14	〃	〃	〃	筒形	D−17	2	(10.2)	—	—	10	肥前	〃		Ⅰ
	15	〃	〃	小	〃	G−17	2	7.2	3.3	5.6	80	〃	〃	菊花散らし	Ⅰ①〜②
	16	〃	〃	〃	〃	E−13	2	(8.2)	3.5	6.5	25	〃	青磁　染付	見込五弁花	Ⅰ
	17	〃	〃	〃	〃	D−17	2	7.8	3.5	6.6	85	〃	〃	〃	Ⅰ
	18	〃	〃	中	端反形	D−2	2	11.2	4.0	5.8	55	瀬戸・美濃	染付	花	Ⅱ①
	19	〃	〃	小	〃	D−16	2	(8.8)	(3.4)	4.6	45	〃	色絵	花　源氏香文	Ⅰ②
	20	〃	〃	中	〃	C−12	2	(9.6)	(4.0)	5.2	30	肥前	染付	網目文	Ⅰ②
	21	〃	〃	〃	〃	G−15	2	(9.8)	(3.8)	4.6	55	瀬戸・美濃	〃	鳥、花、口錆	Ⅰ②
	22	〃	〃	〃	〃	F−9	2	(10.5)	(4.2)	6.2	35	〃	〃		Ⅰ②
	23	〃	〃	〃	〃	30？		10.5	—	—	70	肥前	〃	素描	Ⅰ②
	24	〃	蓋付碗	中	広東碗	D−7	2	10.7	5.2	6.2	75	肥前	染付	笹	Ⅰ②
60	1	磁器	紅猪口			D−2	2	6.8	2.2	1.7	60	〃			Ⅰ②
	2	〃	酒盃			D−15	2	6.2	2.8	3.1	70	瀬戸・美濃	無地		Ⅰ②
	3	〃	〃			C−11	2	7.2	2.8	2.9	60	瀬戸・美濃？	〃		Ⅰ②
	4	〃	〃			D−3	2	6.1	2.1	2.5	90	〃	〃		Ⅰ②
	5	〃	仏飯器			表採		(6.3)	4.4	5.8	70	瀬戸・美濃	赤絵	菊	Ⅰ②
	6	〃	〃			D−2	2	(7.1)	3.6	6.0	55	肥前	染付	蛸唐草文	Ⅰ②
	7	〃	〃			E−17	2	(8.1)	4.4	6.0	40	〃	〃	雨降り文	Ⅰ①
	8	〃	?				2	—	—	7.9	—	〃	〃		Ⅰ
	9	〃	皿	小		D−2	2	(10.2)	5.8	2.5	40	〃	〃	山水　口錆	Ⅰ
	10	〃	〃	〃		E−11	2	9.9	2.4	5.5	60	〃	〃	〃　〃	Ⅰ
	11	〃	〃	〃		D−17	2	(13.4)	3.6	6.4	40	瀬戸・美濃	〃、	蛇の目高台	Ⅰ②
	12	〃	〃	〃		試掘　F−17	2	13.4	3.0	8.1	50	肥前	〃	見込五弁花	Ⅰ①
	13	〃	〃	〃		試掘	2	12.6	6.8	3.4	90	瀬戸・美濃	〃	蛇の目高台　焼継	Ⅰ②
	14	〃	段重			E−8	2	(7.0)	6.4	2.5	15	肥前	〃	蛸唐草文	Ⅰ
	15	〃	〃			D−2	2	(6.6)	3.7	3.2	15	〃	染付　色絵	焼継	Ⅰ
	16	〃	香炉			B−10	2	(9.1)	7.4	4.6	20	〃	青磁　染付	蛇の目高台(鉄錆？)	Ⅰ
	17	〃	〃			G−17、F−17 F−18	2	(9.9)	6.4	6.2	15	〃	青磁		Ⅰ
	18	〃	〃	小		D−2	2	9.9	5.6	2.3	85	肥前？		見込「壽」	Ⅰ
	19	〃	油壺			C−10	2	2.3	—	—	10	肥前	染付	梅	Ⅰ
	20	〃	水滴			G−18	2	タテ (6.8)	—	3.2	20	〃	染付　色絵	菊　型押し	Ⅰ
	21	〃	烱徳利			D−11	2	2.9	18.4	5.6	75		銅板転写	山水　焼継	Ⅱ②
	22	陶器	植木鉢				2	18.2	9.3	14.1	85		染付	食物	Ⅱ
61	1	磁器	碗の蓋			B−10	2	9.4	—	2.6	75	瀬戸・美濃	〃	内面　松竹梅文	Ⅰ②
	2	〃	〃			D−2	2	(9.0)	—	2.8	30	肥前	〃	素描 内外面梅樹文	Ⅰ②
	3	〃	土瓶の蓋			C−5	2	7.3	—	—	50	〃	〃	竹笹文	Ⅰ
	4	〃	碗の蓋			一括	2	(14.6)	—	4.5	15	瀬戸・美濃		国民食器	昭和
	5	陶器	碗	小	丸形	F−17	2	5.9	2.9	3.7	90	〃	灰釉　ウノフ釉		Ⅰ
	6	〃	〃	〃	〃	D−17	2	(7.6)	3.5	4.9	60	〃	鉄釉　〃		Ⅰ
	7	〃	〃	中	〃	F−18	2	(9.5)	4.5	7.0	50	肥前	透明釉		Ⅰ
	8	〃	〃	〃	〃	D−4	2	(9.5)	5.2	6.3	60	瀬戸・美濃	鉄釉　灰釉	腰サビ碗	Ⅰ①
	9	炻器	〃	〃	広東形	B−2	2	(11.5)	—	—	60	〃	染付	半菊　五弁花	Ⅰ②
	10	陶器	〃	〃		D−16	2	(11.8)	—	—	20	〃	鉄釉 長石釉ちらし	げんこつ茶碗	Ⅰ①
	11	〃	天目茶碗	〃				(12.0)	—	—	10	〃			Ⅰ①
	12	〃	平碗	大				(18.4)	—	—	15		灰釉		Ⅰ
	13	〃	仏飯器			B−10	2	—	—	—	30	瀬戸・美濃	鉄釉		Ⅰ
	14	〃	〃			D−17	2	—	4.7	—	40		灰釉		Ⅰ
	15	〃	〃			E−17	2	(8.6)	4.6	5.5	50		〃		Ⅰ
	16	〃	皿	小			2	12.4	7.0	2.8	85	瀬戸・美濃	長石釉	志野	Ⅰ①
	17	〃	〃	〃			2	12.0	6.5	3.2	ほぼ完形	〃	〃	〃	Ⅰ①
	18	〃	〃	〃		D−3	2	(11.6)	(4.2)	3.1	25		内面青緑釉 外面透明釉	蛇の目釉剥ぎ	Ⅰ①

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%				
61	19	陶器	皿	中		D−17	2	(15.2)	6.7	3.0	25	瀬戸・美濃	ウノフ釉 型紙摺り	鉄絵摺絵皿	Ⅰ
	20	〃	〃	〃		E−11	2	(22.0)	8.2	5.3	20	〃	灰釉	輪禿げ灰釉中皿	Ⅰ
	21	〃	土鍋			D−18	2	(16.0)	—	—	10 未満		〃		Ⅰ
	22	〃	片口			F−16	2	(18.6)	—	—	15	瀬戸・美濃			Ⅰ
	23	〃	片口			B−10	2	—	6.4	—	40	瀬戸・美濃	鉄釉ウノフ釉	見込三又トチンの跡	Ⅰ
62	1	〃	鉢			F−17	2	(20.2)	8.2	8.8	50	肥前	灰釉	見込に呉須で模様	Ⅰ
	2	〃	〃			E−15	2	(27.0)			10	唐津	ワラ灰		Ⅰ
	3	〃	行平			D−3	2	(16.7)			5	瀬戸・美濃	柿釉		Ⅰ
	4	〃	擂鉢			F−17	2	(14.4)			5		鉄釉		Ⅱ〜
	5	〃	〃			D−18	2	(28.0)	11.8	11.2	45		〃		Ⅰ
	6	〃	〃				2	27.8	13.2	10.6	75		〃		Ⅰ
	7	〃	〃				2	26.1	12.4	8.7	70		〃		Ⅰ
63	1	〃	植木鉢			D−2	2	(16.6)			10	瀬戸・美濃	鉄釉　緑釉		Ⅰ
	2	〃	〃			E−11	2	(31.4)			20	〃	灰釉　鉄釉 ウノフ釉		Ⅰ
	3	〃	〃				2	17.2	9.0	14.4	80	〃	鉄絵		Ⅰ
	4	〃	甕			一括	2	(18.2)			25	唐津	白化粧土	はけ目	Ⅰ①
	5	〃	灰吹き			グリット	2	(3.5)			30	瀬戸・美濃	鉄釉　灰釉	櫛描　ヘラ削り	Ⅰ
	6	〃	花瓶			D−17	2	(24.4)			40	〃	鉄釉		Ⅰ
	7	〃	土瓶			グリット	2	(10.2)			25	〃			Ⅰ
	8	〃	〃				2	8.2			50	〃	灰釉　長石釉		Ⅰ
	9	〃	土瓶の蓋			D−3	2	径 3.5		2.3	90	〃	鉄釉　灰釉		Ⅰ
	10	〃	〃			D−17	2	径 10.2		4.4	45		(素焼)		Ⅰ
	11	〃	有耳壷			D−3	2	(7.0)			30	瀬戸・美濃			Ⅰ
	12	〃	水甕			D−17	2	(43.0)			20	常滑			Ⅰ
64	1	〃	秉燭？			C−10	2	(6.6)	—	—	10 未満				Ⅰ
	2	〃	秉燭			D−17	2	(5.6)	—	4.3	70		鉄釉		Ⅰ
	3	〃	〃			E−11	2	—	4.0	—	60		〃		Ⅰ
	4	〃	〃			D−10	2	(4.0)	3.9	4.3	80		柿釉		Ⅰ
	5	〃	灯明皿			C−11	2	(7.1)	(3.0)	1.4	40		鉄釉		Ⅰ
	6	〃	〃			B−2	2	(8.6)	3.6	1.6	50		〃		Ⅰ
	7	〃	〃			B−10	2	10.0	4.4	2.2	70		〃		Ⅰ
	8	〃	〃			〃	2	8.7	3.8	1.9	ほぼ 完形		〃		Ⅰ
	9	〃	〃			〃	2	9.2	4.0	1.5	70		〃		Ⅰ
	10	〃	〃			F−17	2	(11.2)	(4.2)	1.9	40		〃		Ⅰ
	11	〃	〃			E−12	2	(11.2)	(4.4)	2.0	45		〃		Ⅰ
	12	〃	〃			F−17	2	10.4	4.4	2.6	90		〃		Ⅰ
	13	〃	〃			D−2	2	外径 8.3 内径 6.1	3.5	1.7	80		〃		Ⅰ
	14	〃	〃			B−11	2	外径(8.9) 内径(6.0)	(4.5)	2.1	30		〃		Ⅰ
	15	〃	〃			B−10　C−10	2	外径(8.7) 内径(5.6)	(4.7)	2.0	30		〃		Ⅰ
	16	〃	〃			F−17	2	外径(10.0) 内径 (7.4)	(4.2)	2.0	50		〃		Ⅰ
	17	〃	〃			D−17	2	外径 (9.8) 内径 (7.2)	(4.6)	2.3	55		鉄釉　長石釉		Ⅰ
	18	〃	〃			B−16	2	外径(10.2) 内径 (7.5)	(4.9)	2.1	50		鉄釉		Ⅰ
	19	〃	〃			B−10	2	外径(10.8) 内径 (8.0)	(4.8)	2.0	45		〃		Ⅰ
	20	〃	〃			F−17	2	外径9.8 内径6.4	4.8	1.4	80		〃		Ⅰ
	21	〃	〃			D−16	2	(11.3)	—	—	20		〃		Ⅰ
	22	土器	かわらけ				2	5.0	3.6	1.1	55				Ⅰ
	23	〃					2	4.2	4.0	0.9	55				Ⅰ
	24	〃	かわらけ				2	5.2	3.9	1.6	70				Ⅰ

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				底径	器高	%					
	25	土器	かわらけ			D−9	2	(4.6)	(2.4)	1.0	30				Ⅰ
	26	〃	〃			D−11	2	(6.3)	(4.0)	1.4	30				Ⅰ
	27	〃	〃			F−17	2	(5.4)	(3.1)	1.3	50				Ⅰ
	28	〃	〃			D−9	2	—	2.6	—	18			磨滅している	Ⅰ
	29	〃	〃			F−17	2	(9.8)	(6.0)	2.1	40				Ⅰ
	30	〃	〃			G−18	2	(7.9)	4.4	2.2	50				Ⅰ
	31	〃	〃			F−17	2	(9.0)	5.0	2.5	80			煤付着、灯明用	Ⅰ
	32	〃	香炉			E−17	2	—	(12.5)	—	10未満				Ⅰ
	33	〃				D−17	2	—	7.6	—	25			全体に煤付着	Ⅰ
	34	〃				試掘	2	—	3.0	—	10				Ⅰ
	35	土製品				F−11	2				90				Ⅱ
	36	磁器	仏飯器			F−15	3	(7.1)	—	—	15	肥前	型紙摺	桐葉文	Ⅰ①
64	37	〃	碗	中	丸形	B−9	3	(9.4)	(3.1)	5.2	40	〃	染付	雪輪梅樹文	Ⅰ①
	38	〃	〃	〃	〃	D−2	3	9.2	3.9	5.1	80	〃	〃	〃	Ⅰ①
	39	〃	〃	〃	〃	B−7	3	(10.0)	(3.6)	5.0	60	〃	〃	〃	Ⅰ①
	40	〃	〃	〃	〃	C−8	3	(9.1)	(4.0)	5.2	40	〃	コンニャク判	蔦の葉文様	Ⅰ①
	41	〃	〃	〃	〃	C−10	3	(11.6)	4.4	6.2	60	〃	染付	梅樹文、見込釉剥ぎ	Ⅰ①
	42	〃	〃	〃	〃	C−5	3	(10.3)	4.4	5.1	30	〃	〃	雪輪梅樹文 見込釉剥ぎ	Ⅰ①
	43	〃	〃	〃	〃	〃	3	(11.7)	(4.6)	5.7	45	〃	〃	梅樹文、見込釉剥ぎ	Ⅰ①
	44	〃	酒盃			B−10	3	(7.0)	(3.0)	4.7	40	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ②
	45	〃	碗	中	丸形	C−8	3	(10.1)	(4.0)	4.9	40	肥前		口錆が施されている	Ⅰ①
	46	〃	〃	大	端反形	グリット杭	3	(12.1)	3.9	5.4	40	瀬戸・美濃？	染付	植物、見込岩に砕ける波濤か？	Ⅰ②
	47	〃	酒盃			〃	3	(6.9)	3.0	3.0	60	肥前？	赤絵	桜（花びら）	Ⅰ②
	48	〃	〃					—	2.4	—	50	瀬戸・美濃	焼成後絵付	再度焼成	Ⅰ②
	1	〃	仏飯器			グリット	3	—	4.2	—	55	肥前	染付	蛸唐草文	Ⅰ
	2	〃	〃			E−16	3	(7.0)	4.4	6.3	65	〃	〃	〃	Ⅰ
	3	〃	皿			F−12	3	(13.8)	(8.2)	3.8	15	〃	〃	内面笹、松	Ⅰ
	4	〃	瓶			B−11	3	—	(8.0)	—	10未満	〃	青磁	底部釉剥ぎの後、鉄銹	Ⅰ①
	5	〃	灰吹き			E−13	3	6.5	(5.6)	8.1	40	肥前	青磁	風景　底部鉄銹	Ⅰ
	6	陶器	碗	小	丸形	C−12、C−13	3	(6.7)	(4.1)	3.3	35	瀬戸・美濃	灰釉		Ⅰ
	7	〃	〃	〃	〃	B−11	3	7.0	3.7	3.8	75	瀬戸・美濃？	〃		Ⅰ
	8	〃	センジ碗	〃	〃	C−5	3	(8.6)	—	—	10	瀬戸・美濃	縦半分を鉄釉と灰釉	実測可能部分は鉄釉	Ⅰ①
	9	〃	仏飯器			B−11	3	4.9	—	—	30	〃	灰釉		Ⅰ
	10	〃	〃			B−5	2 3	6.7	3.5	3.7	65		〃		Ⅰ
	11	〃	皿				3	—	4.6	—	45	京焼風肥前	灰釉、手描き	底部刻印「新」	Ⅰ
	12	〃	〃	小		D−6	3	(12.0)	7.4	2.4	40	瀬戸・美濃		志野、口錆	Ⅰ①
65	13	〃	香炉			C−74	3	—	(7.0)	—	15	〃	鉄釉		Ⅰ
	14	〃	〃			E−11 F−15	2 3	(11.3)	—	—	15	〃	ウノフ釉		Ⅰ
	15	〃	〃			B−13 E−14	2 3	(12.0)	8.6	7.3	25	〃		半菊	Ⅰ
	16	〃	擂鉢			F−16	3	(23.0)	—	—	10		鉄釉		Ⅰ
	17	〃	片口			C−6	3	(14.5)	(8.4)	9.3	15		〃		Ⅰ
	18	〃	徳利			C−8	3	—	—	—	25		灰釉に緑釉の流し掛け		Ⅰ
	19	〃	水注			D−74	3	(3.3)	—	—	50		鉄釉		Ⅰ
	20	〃	灯明皿					9.9	4.7	2.2	90		アメ釉、ウノフ釉	削り込み高台	Ⅰ
	21	〃	〃			E−11	3	(10.2)	(4.6)	1.7	30		鉄釉、内面に灰釉の粒がとんでいる		Ⅰ
	22	〃	〃			D−16	3	10.0	4.4	2.4	80		灰釉		Ⅰ
	23	陶器	秉燭			B−12	3	(5.6)	—	5.2	30		鉄釉	底部　糸切り痕	Ⅰ
	24	土器	かわらけ			E−23	3	(4.8)	(3.0)	1.2	20			〃	Ⅰ

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量(cm)			残存	産地	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				底径	器高	%					
65	25	土器	秉燭			D−23	3	外径(3.5) 内径 0.8	(3.0)	1.5	35			底部　糸切り痕	Ⅰ
	26	〃	かわらけ				3	(9.4)	(5.6)	2.7	45		黒色	〃	Ⅰ
66	1	磁器	烟徳利				2	—	(5.0)	—	10	瀬戸・美濃		「巨摩郡五明村 (西) 川酒造店」	Ⅱ② 〜
	2	〃	〃			C−8、B−9	2	—	6.3	—	40	〃	染付	風景（松、海、家）	Ⅰ②
	3	〃	蓋				2	外径 9.5	径 3.4	2.6	95	〃	〃	太化年製	Ⅰ②
	4	〃	〃				2	外径(10.0)	径 5.8	2.5	60	肥前	〃	太明年製	Ⅰ①
	5	〃	〃				2	外径 (9.9)	径(5.7)	2.9	40	〃	〃		Ⅰ
	6	〃	散蓮華			B−9	2				30	瀬戸・美濃	〃		Ⅰ② 〜 Ⅱ①
	7	陶器	碗	小		C−9	2	6.5	3.5	4.2	70	〃			Ⅰ
	8	〃	〃	〃		〃	2	(7.2)	—	—	30	〃			Ⅰ
	9	〃	〃	中	丸形	B−9	2	—	5.2	—	30	〃	灰釉（緑釉 流し掛け）		Ⅰ
	10	〃	〃	〃		C−9	2	(12.9)	4.8	5.0	40	京焼風肥前	山水文は呉須	山水文	Ⅰ①
	11	〃	練鉢			B−9	2	(19.0)	—	—	15		灰釉		Ⅰ
	12	〃	〃			〃	2	(24.7)	—	—	10 未満				Ⅰ 以前
	13	〃	鉢			〃	2	(15.4)	—	—	10 未満	唐津			Ⅰ
	14	〃	香炉			C−9	2	9.4	6.8	4.4	80				Ⅰ
	15	〃	秉燭			〃	2	—	4.0	—	80	瀬戸・美濃			Ⅰ
	16	〃	〃			〃	2	4.6	4.3	3.6	80				Ⅰ
	17	〃	蓋		水注の蓋	〃	2	外径 3.4	—	1.5	ほぼ 完形		鉄釉		Ⅰ
	18	〃	?			B−9	3	—	—	—			鉄釉		Ⅰ
	19	土器	かわらけ			〃	3	(11.4)	—	—	20				Ⅰ
	20	〃	〃			C−9	3	9.0	5.4	2.6	80			灯明皿として使用	Ⅰ
	21	〃	火鉢？			B−9	3	—	7.5	—	30			三足、内面煤あり	Ⅰ
67	1	〃	〃			D−18	2	(45.6)	—	—	10				Ⅰ
	2	〃	焙烙		内耳	F−17	2	(31.6)	(29.6)	5.9	20				Ⅰ
	3	〃	〃		内耳	試掘	2	(31.0)	(29.6)	4.5	10				Ⅰ
	4	〃	〃		鍔	D−8	2	(14.4)	—	—	10				Ⅰ
	5	〃	〃		〃	D−17	2	(30.0)	—	—	15				Ⅰ
	6	〃	〃		〃	〃	2	(23.5)	(20.0)	8.1	15				Ⅰ
	7	〃	〃		(内耳)	G−7	2	(30.1)	(26.4)	7.1	10				Ⅰ
	8	〃	火鉢			E−17	2	(27.5)	(20.6)	16.2	50			三足	Ⅰ
	9	〃	甕				2	(52.8)	—	—	10				Ⅰ
68	1	〃	焙烙		内耳	B−9	2	(30.6)	(27.8)	6.3	20				Ⅰ
	2	〃	〃		〃	B−9、C−9	2	(31.8)	(27.6)	7.0	15				Ⅰ
	3	〃	〃		〃	B−9	3	(30.2)	(27.0)	6.6	30				Ⅰ
	4	〃	〃		〃	C−9	3	(35.4)	—	—	10				Ⅰ
	5	〃	〃		(内耳)	B−9	2	(37.0)	(34.0)	9.8	10 未満				Ⅰ
	6	〃	〃		〃	〃	3	(37.0)	(31.0)	9.6	10 未満				Ⅰ
69	1	磁器	酒盃			7建裏撹乱穴		7.8	2.8	3.0	75	瀬戸・美濃	無地	内面「醤酒？」金字	Ⅰ②〜
	2	〃	碗	中	端反形	〃		9.2	3.4	4.6	80	瀬戸・美濃？	色絵		Ⅰ②
	3	〃	〃	大	丸形	〃		(12.7)	4.2	5.6	45	瀬戸・美濃	染付	素描、焼継	Ⅰ②
	4	〃	〃	中	端反形	〃		10.4	3.4	5.5	95	〃	染付、型紙摺り		Ⅱ②
	5	〃	蓋			〃		9.8	—	3.3	50	〃	染付		Ⅰ②
	6	〃	皿	中		7建裏撹乱穴		(15.8)	7.6	(3.9)	30	瀬戸・美濃	染付、型紙摺り		Ⅱ②
	7	〃	〃	〃		〃		15.2	7.2	4.1	50	〃	〃		Ⅱ②
	8	〃	鉢	小		〃		13.6	7.8	5.5	20	〃	染付		Ⅱ①
	9	炻器	蓋			〃		(16.6)	—	2.7	20	〃	〃		Ⅱ
	10	陶器	土鍋			〃		(14.8)	—	—	15	〃	〃		Ⅱ
	11	〃	皿			〃		(10.3)	4.9	2.0	25	〃	長石釉	志野	~Ⅰ①
	12	土器				〃		—	—	—	—			七輪の一部	Ⅱ〜

図	番号	種　別	種類	法　量（cm）						重量	出土位置	面	備　　考
				タテ	ヨコ	厚	高	長	φ	(g)			
70	1	桟瓦	黒	27.2		1.8					D−3	2	
	2	〃	〃			1.8					1溝	2	
	3	丸瓦	〃			2.2					〃	2	
	4	〃	〃			2.0					B−5	2	
	5	軒桟瓦	〃	4.6？							〃	2	右巻三巴　鳳凰
	6	〃	〃			2.1			7.4		1溝	2	左巻三巴
	7	〃	〃						7.2		B−4	2	〃
	8	〃	〃	4.8							試掘　93T		鳳凰
	9	〃	〃	4.4							G−5	2	花？
	10	択本のみ									B−5	2	山二マーク

図	番号	種　別	形状・モチーフ	材質	法　量（cm）				重量	出土位置	面	備　　考
					タテ	ヨコ	厚	φ	(g)			
71	1	泥面子	顔	素焼	2.4	1.9	0.7		2.2	試掘　93T		
	2	〃	〃	〃	2.2	(2.0)	0.5		(2.1)	E−12	2	
	3	〃	獅子頭	〃	2.2	1.9	0.8		2.7	B−5	2	
	4	〃	〃	素焼	1.4	1.1	0.5		0.6	B−6	2	
	5	〃	タヌキ	〃	1.8	1.4	0.7		1.2	C−6	〃	
	6	〃	虚無僧	〃	2.3	1.2	0.9		1.7	A層、B−5	〃	
	7	〃	人物	〃	1.8	1.3	0.8		1.0	D−8	〃	
	8	〃	〃	〃	1.6	1.4	0.5		0.9		〃	
	9	〃	七福神	〃	(2.1)	2.1	0.8		(3.2)	D−9	〃	
	10	人形類	〃	〃	3.0	2.1	1.3		6.1	C−11	〃	
	11	泥面子	？	〃		2.4	0.4		(1.5)	〃	3	
	12	〃	花	〃	1.3	1.4	0.5		0.6	D−9	2	
	13	〃	鉢植の花	〃	2.5	1.7	0.7		2.0	D−8	〃	
	14	〃	だるま	〃	1.2	1.0	0.6		0.5	C−11	3	
	15	〃	蝶	〃	1.2	2.1	0.4		0.8	B−7	〃	
	16	〃	魚	〃	1.2	1.8	0.5		0.6	B−10	〃	
	17	人形類	顔	〃	3.0	3.1	3.1		16.6	A層、B−5	2	
	18	〃	赤ちゃん？	〃	2.3	(1.6)	(2.5)		(2.9)		〃	
	19	〃	相撲取り？	〃	(2.5)	2.6	0.6		(3.1)	D−2	〃	
	20	〃	七福神	〃	2.7	2.5	1.8		6.6	C−4	〃	
	21	人形類		素焼	1.3	1.2	0.5		0.5	B−5	〃	
	22	〃	土馬	〃	2.4	(5.3)	(3.3)		(24.7)	F−14	〃	
	23	〃	サルの顔	〃	1.8	1.9	1.1		1.1	B−7	3	
	24	棒状製品	？	〃	3.1	(1.6)	1.3		(6.2)	F−11	〃	
	25	泥面子	花	〃	1.4	1.3	0.5		0.6	A層、B−5	2	
	26	〃	〃	〃	1.4	1.3	0.5		0.6	〃	〃	
	27	〃	〃	〃	1.3	1.4	0.6		0.6	1溝	〃	
	28	〃	〃	〃	1.3	1.3	0.5		0.7		〃	
	29	〃	おはじき？	〃	1.3	1.3	0.5		0.9	2建周辺	〃	
	30	〃	貨幣	〃	1.8	1.0	0.2		0.5		〃	
	31	〃	〃	〃	2.5	1.5	0.5		1.8		〃	
	32	〃	碁石状	〃	2.0	2.1	0.7		2.0	試掘10T	〃	
	33	〃	〃	〃	2.2	2.2	0.6		2.5	3建周辺	〃	
	34	〃	〃	〃	1.9	2.0	0.8		2.6	〃	〃	
	35	〃	〃	〃	(1.8)	1.9	0.6		1.6	〃	〃	
	36	〃	〃	〃	(2.0)	2.2	0.6		2.8	7建周辺	3	
	37	〃	〃	〃	2.0	2.2	0.7		2.4	D−17	2	
	38	〃	〃	〃	2.0	2.1	0.6		2.1	7溝	〃	黒色残存
	39	〃	〃	〃	2.0	2.0	0.6		1.9	〃	〃	
	40	〃	〃	〃	2.1	2.1	0.6		1.9	〃	〃	
	41	〃	〃	〃	2.1	2.1	0.6		1.9	〃	〃	
	42	〃	〃	〃	2.0	2.0	0.6		1.9	〃	〃	黒色残存
	43	〃	〃	〃	1.9	1.9	0.6		1.8	〃	〃	
	44	〃	〃	〃	1.6	1.9	0.6		1.6	〃	〃	
	45	〃	〃	〃	2.2	2.2	0.6		2.4		〃	
	46	〃	〃	〃	2.0	2.0	0.6		1.8	G−15	〃	
	47	〃	〃	〃	1.8	2.0	0.6		1.7	D−16	3	
	48	〃	〃	〃	2.0	2.0	0.7		1.9	7溝	〃	
	49	〃	おはじき	〃	1.4	1.6	0.7		1.7	D−8	2	

図	番号	種別	形状・モチーフ	材質	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	φ	重量(g)	出土位置	面	備考
71	50	泥面子		素焼	3.0	3.0	1.0		11.6	5建周辺	2	
	51	ボタン		磁器	1.2	1.2	0.3		0.5	B−9	〃	
	52	〃		〃	1.4	1.4	0.4		1.0		〃	
	53	ビーズ		ガラス	0.3	0.3	0.2		0.1		〃	
	54	ビン蓋		〃	3.2	1.3	1.1		5.8	C−11	3	
	55	秉燭？		素焼					8.5	E−18	2	
	56	ミニチュア	碗 白	磁器					3.0	3溝	〃	
	57	〃	碗	素焼					8.2	E−18	〃	
	58	〃	花瓶	陶器					11.2	3層	〃	
	59	〃	六角徳利	〃					(18.5)	7溝	〃	軟質陶土製、緑釉、型打文様
72	1	鈴		素焼	3.3	2.9	0.4		10.2	F−11	2	
	2	〃		〃	2.7	2.0	0.2		3.5	F−9	〃	
	3	〃		〃	2.1	2.0	0.3		3.0	B−10	〃	
	4	〃		〃	2.3	1.8	0.4		4.0	3溝	〃	
	5	〃		〃	2.1	1.7	0.4		2.9	D−11	〃	
	6	〃		〃	3.3	(2.4)	0.3		8.3	B−2	〃	
	7	〃		〃	3.3	2.0	0.4		3.6	B−5	〃	
	8	〃		〃	2.4	2.5	0.3		5.2	D−2	〃	

図	番号	種別	種類	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	高	長	φ	重量(g)	石質	出土位置	面	備考
72	9	石筆						2.4	0.5	1.4	ろう石	C−11	3	
	10	〃						2.0	0.5	1.1	〃	〃	〃	
	11	石筆						2.5	0.7	2.1	ろう石		3	
	12	灯打石		2.0	3.2	1.3				5.7	チャート？	B−5	2	
	13	〃		1.8	1.5	1.0				3.3	石英		3	
	14	〃		1.5	1.5	0.5				0.6	〃	2建周辺	〃	
	15	〃		1.2	1.3	0.8				1.1	黒曜石	D−9	2	
	16	〃						(1.9)	(3.9)	4.1		B−9	3	

図	番号	種別	形状・モチーフ	材質	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	φ	重量(g)	出土位置	面	備考
72	17	碁石	黒	石	2.2		0.5		2.6	7建周辺	2	石に黒塗り痕
	18	〃	〃	〃	2.1		0.3		2.4	6溝	〃	
	19	〃	〃	〃	2.3		0.5		3.3	F−16	〃	
	20	〃	〃	〃	2.3		0.4		3.3	B−3	3	
	21	〃	〃	〃	2.2		0.3		2.6	D−8	〃	
	22	〃	〃	〃	2.0		0.4		2.2	D−15	〃	
	23	〃		〃	2.2		0.4		1.0	〃	〃	石に黒塗り痕
	24	〃		〃	2.2		0.6		2.1	F−12	〃	〃
	25	石製品		〃	1.0	1.1	0.3		2.2	B−6	2	ベンガラ付

図	番号	種別	種類	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	高	長	φ	重量(g)	出土位置	面	備考
72	26	煙管雁首						4.6	1.0 1.0	6.7	D−3	2	φ欄 上火皿径 下接合部径
	27	〃						6.0	1.7 1.0	5.8	C−7	3	〃
	28	〃						4.2	0.9 0.5	5.9	3建周辺	〃	〃
	29	〃						(4.0)	(1.2) 0.9	3.2	1溝	2	〃
	30	煙管吸口						(5.5)	(0.3) (0.9)	1.9	7溝	〃	φ欄 上吸口径 下接合部径
	31	〃						4.4	0.4 1.2	3.4	〃	〃	〃
	32	〃						(4.8)	(0.3) (0.9)	4.3	D−16	〃	〃
	33	〃						5.3	0.5 0.9	2.8	3建	3	〃
	34	〃						5.6	0.5 0.9	4.1	〃	〃	〃

図	番号	種別	種類	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	高	長	φ	重量(g)	出土位置	面	備考
72	35	煙管吸口						(3.3)	(0.6) (0.7)	1.4	G−15	2	φ欄 上吸口径 下接合部径
	36	煙管雁首						(5.0)	1.3 (0.6)	2.6	B−6	〃	φ欄 上火皿径 下接合部径
	37	煙管吸口						5.5	0.5 1.1	5.8		4	φ欄 上吸口径 下接合部径、唐草模様
	38	〃						(6.0)	(0.5) 0.8	3.6	1号土坑	3	φ欄 上吸口径 下接合部径
	39	〃						(4.2)	(0.2) 0.5	2.3	C−5	2	〃
	40	〃						(7.3)	(0.7) 1.0	6.7	ゴミ穴	1	〃
	41	〃						(7.4)	0.4 (1.0)	5.6	3建	3	〃
	42	〃						(7.1)	(0.4) 1.0	6.9		2	〃
	43	〃						7.4	0.5 1.1	7.2		〃	〃
	44	〃						7.2	0.4 1.2	7.5	C−7	〃	〃
	45	〃						9.2	0.6 0.9	11.1	D−3	〃	〃

図	番号	種別	種類	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	高	長	φ	重量(g)	出土位置	面	備考
73	1	金属製品	かんざし					(13.7)	0.2	5.2	3建	2	銅
	2	〃	〃			0.2		(13.3)		8.3	B−5	〃	〃
	3	〃	〃			0.1		12.1		2.9	〃	〃	〃、耳かき付
	4	〃	〃			0.1		(4.8)		1.7	B−6	〃	〃、渡銀
	5	〃	〃			0.1		(12.6)		2.0	C−7	〃	〃
	6	〃	〃			0.1		13.3		4.7	3溝	〃	〃、耳かき付
	7	〃	〃			0.2		11.3		5.1	1号井戸	3	鉄、耳かき付き
	8	〃	〃			0.2		13.1		9.3	3号建物	2	銅、耳かき付き、渡銀
	9	〃	毛抜き	5.3	0.7	0.1				5.2	6号溝底	〃	
	10	〃	釘			0.2		(3.2)		0.7	1溝	2	
	11	〃	〃			0.2		13.4		6.5	F−14	3	
	12	〃	〃			0.2		(2.2)		0.4		2	
	13	〃				0.5		4.0		1.5	E−14	3	
	14	〃	銅線					12.3	0.1	0.5	1溝	2	
	15	〃	〃					6.2	0.1	0.2	B−6	〃	
	16	〃	針金					3.9	0.2	0.3	1号土坑	〃	
	17	〃	〃					3.1	0.1	0.2	G−14	3	
	18	〃	〃					9.7	0.2	0.6	7溝	2	
	19	〃	〃					15.8	0.2	1.1	〃	〃	
	20	〃				0.5		10.8		19.8	F−15	3	
	21	〃		(9.4)	2.4	0.2				26.3	E−15	〃	
	22	〃	楔	9.0	1.5	0.7				35.5	D−18	2	
	23	〃	小柄のえ	5.2	1.5	0.5				8.6	E−11	〃	
	24	〃	刀の鍔の金具	3.8	3.0	0.2				12.3	E−14	〃	
	25	〃		5.4	0.7	0.1				0.9	B−3	〃	
	26	〃		5.2	0.5	0.1				0.8	3建	〃	
	27	〃		2.3	0.9	0.1				0.9	B−5	〃	
	28	〃		1.9	0.5	0.1				0.2	7溝	〃	
	29	〃	蝶番い	2.3	1.7	0.1				1.5	1溝	〃	
	30	〃	掛け金具	4.6	0.7	0.4				8.8	3溝	〃	
	31	〃			2.0	0.1	4.0			5.7	D−3	〃	
	32	〃						3.0	1.2	5.6	3溝	〃	
	33	〃				0.1		9.2		3.1		〃	
	34	〃		(2.0)	2.8	0.1				1.6	B−3	〃	
	35	〃	鏡	(3.3)	(3.2)	0.1				4.4	7溝	〃	
	36	〃	金具	5.0	5.8	0.2				11.9	3号桶	〃	

図	番号	種別	種類	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	高	長	φ	重量(g)	出土位置	面	備考
73	37	金属製品							外径 4.9 内径 4.0	8.0		2	
	38	〃	水滴	4.6	3.7	0.1				16.4	E−15	〃	
	39	〃		3.5	5.0	0.2	1.1			18.4	本堂	〃	
	40	〃	飾り止め			0.1			1.2	0.3		〃	
	41	〃	鉛玉						1.2	10.0	D−15	〃	
	42	〃	〃						1.0	4.9	A層、B−5	〃	

図	番号	種別	種類	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	高	長	φ	重量(g)	石質	出土位置	面	備考
73	43	石製品	磨石	12.6	8.2	6.3				970	安山岩	試掘 96T	2	
	44	〃	〃	6.0	4.6	2.6				99	斑レイ岩	B−8	〃	
	45	〃	〃	7.6	5.2	4.8				272	安山岩	B−2	〃	
	46	〃	丸石	5.3	6.9	3.8				74	〃	B−8	3	
	47	〃	〃	15.2	9.3	8.3				1104	〃	C−3	〃	

図	番号	名称	材質	法量(cm) 外径	内径	重量(g)	文様 表	裏	背文	出土位置	面	備考
74	1	寛永通寶	銅	2.5	0.7	3.3			文	6号人骨上	2	
	2	〃	〃	2.5	0.7	2.6			〃	D−8	〃	
	3	〃	〃	2.5	0.7	3.1			〃	表採	〃	
	4	〃	〃	2.5	0.6	2.8				C−8	〃	
	5	〃	〃	2.7	0.7	4.0			11波	C−3	〃	
	6	〃	〃	2.7	0.7	5.1			〃	7溝	〃	
	7	〃	〃	2.7	0.7	3.4			〃	3溝	〃	
	8	〃	〃	2.3	0.7	3.1				表採	〃	
	9	〃	〃	2.7	0.7	4.1			11波	B−8	〃	
	10	〃	〃	2.7	0.7	4.6			波がある？	B−3	〃	
	11	〃	〃	2.8	0.7	2.3			波あり	B−5	〃	半欠
	12	〃	〃	2.7	0.7	4.1			11波	2溝 4の1	〃	
	13	〃	〃	2.7	0.7	4.1			〃	〃 4の2	〃	
	14	〃	〃	2.7	0.7	5.6			〃	〃 4の3	〃	
	15	〃	〃	2.7	0.7	4.1			〃	〃 4の4	〃	
	16	〃	〃	2.7	0.7	5.0			〃	C−9	〃	
	17	〃	〃	2.8	0.7	5.0			〃	B−2	〃	
	18	〃	〃	2.7	0.7	5.0			〃	2溝	〃	
	19	〃	〃	2.7	0.7	4.7			〃	〃	〃	
	20	文久永寶	〃	2.6	0.8	2.1			〃	D−11	〃	
	21	寛永通寶	〃	2.5	0.6	3.6				5号人骨	〃	
	22	〃	〃	2.4	0.6	4.1				〃	〃	
	23	〃	〃	2.4	0.6	2.2				〃	〃	
	24	〃	〃	2.1	0.7	1.1				〃	〃	
	25	〃	〃	2.2	0.7	1.7				〃	〃	
75	1	開元通寶	〃	2.4	0.7	2.6				E−9	5	
	2	通寶	〃	2.4	0.6	2.6				F−16	3	
	3	寛永通寶	〃	2.4	0.6	2.9				C−5	2	
	4	〃	〃	2.4	0.7	2.7				16溝	3	
	5	〃	〃	2.3	0.6	2.7				F−16	〃	
	6	〃	〃	2.3	0.6	1.8				表採		
	7	〃	〃	2.2	0.7	2.3				F−18	2	
	8	〃	〃	2.3	0.6	1.9				C−5	〃	
	9	〃	〃	2.4	0.6	3.2				E−15	〃	
	10	〃	〃	2.2	0.7	1.7				C−8	〃	
	11	〃	〃	2.2	0.7	1.8				B−8	〃	
	12	〃	〃	2.4	0.7	2.4				3建周辺	〃	
	13	〃	〃	2.4	0.7	2.5				〃	〃	
	14	〃	〃	2.2	0.6	2.3				〃	〃	
	15	〃	〃	2.3	0.7	2.3				3建	〃	
	16	〃	〃	2.5	0.6	2.7				D−14	〃	
	17	〃	〃	2.2	0.6	1.8				B−10	〃	
	18	〃	〃	2.3	0.7	2.4				C−12	〃	
	19	〃	〃	2.2	0.7	2.2				B−8	〃	
	20	〃	〃	2.3	0.7	1.6				B−3	〃	

図	番号	名称	材質	法量(cm) 外径	法量(cm) 内径	重量(g)	文様 表	文様 裏	文様 背文	出土位置	面	備考
75	21	寛永通寶	銅	2.2	0.6	1.9				E−16	2	
	22	〃	〃	2.3	0.7	2.2				D−3	〃	
	23	〃	〃	2.2	0.7	1.5				F−12	〃	
	24	〃	〃	2.3	0.6	2.1				F−11	〃	
	25	〃	〃	2.2	0.7	2.1				B−3	〃	
	26	〃	〃	2.4	0.6	2.4				D−16	〃	
	27	〃	〃	2.2	0.7					6井戸	3	
	28	〃	〃	2.2	0.6	1.1				B−4	2	
	29	〃	〃	2.3	0.6	2.7				〃	〃	
	30	〃	〃	2.2	0.6	3.0				B−6	〃	
	31	〃	〃	2.4	0.6	2.0				1号人骨棺蓋上	〃	
	32	〃	〃	2.2	0.6	2.5				〃	〃	
	33	〃	〃	2.4	0.6	3.5				〃	〃	
	34	〃	〃	2.4	0.5	3.3				1号人骨棺内	〃	
	35	〃	〃	2.2	0.6	1.9				1号人骨棺内	2	
	36	〃	〃	2.2	0.6	2.0				〃	〃	
	37	〃	〃	2.1	0.7	1.9				〃	〃	
	38	〃	〃	2.2	0.7	1.7				1溝	〃	
	39	〃	〃	2.3	0.6	3.8				D−3	〃	

図	番号	種別	種類	法量(cm) タテ	法量(cm) ヨコ	法量(cm) 厚	法量(cm) 高	法量(cm) 長	法量(cm) φ	重量(kg)	石質	出土位置	面	備考
76	1	石製品	鉢		低径 22.4		—			1152.1	安山岩	3溝	2	
	2	〃	ヒデ鉢	口径 19.4	9.0		12.0			1606.0	〃	21溝	3	
	3	〃	鉢	口径 14.4	低径 14.0		9.0			477.3	〃	D−6	2	
	4	〃	軸受名？	(16.9)	(10.1)	8.6				1451.0	〃	C−7	〃	
	5	〃	磨石	15.2	9.3	8.3				1105.0	〃	C−3	3	
	6	〃	凹石	(7.1)	9.9	6.5				260.7	〃	C−5	2	
	7	〃	磨石	6.9	5.3	3.8				75.0	〃	B−8	3	
	8	〃	〃	6.0	4.7	2.6				98.7	〃	B−12	2	
	9	〃	〃	7.6	5.2	4.8				271.9	〃	B−2	〃	
	10	〃	凹石	12.9	9.1	5.1				551.2	〃	B−4	3	
	11	〃	磨石	12.6	8.2	6.3				971.6	〃	試掘		
	12	〃	凹石	(8.9)	11.2	7.1				719.1	〃	E−15	2	
	13	〃	〃	10.1	10.4	4.7				558.0	〃	B−3	〃	
	14	〃	〃	(8.3)	10.0	4.5				470.8	〃	C−8	3	
77	1	〃	石臼(下)		33.5	13.0				(14.0)	〃	5号建物	2	
	2	〃	〃		34.4	11.7				(7.5)	〃	参道	〃	
	3	〃	〃(上)		33.2	13.0				(7.2)	〃	2溝	3	
	4	〃	〃(下)		15.2	5.2				(1.5)	〃	F−15		
	5	〃	〃(上)		18.9	11.3				(3.5)	〃	7溝	2	
	6	〃	風空輪		19.4	17.2				4.6	斑レイ岩	3溝		
	7	〃	水輪		23.0	15.4				9.5	安山岩		2	
	8	〃	火輪		20.8	10.1				5.4	〃	B−5	4	
78	1	〃	水輪		19.0	10.8				5.0	〃	本堂裏	2	梵字
	2	〃	〃		20.0	11.8				5.0	〃	5号建物	〃	〃
	3	〃	〃		15.8	9.7				3.0	〃	B−9	〃	
	4	〃	〃		18.2	7.9				(2.5)	〃	4号建物下部	3	
	5	〃	地輪		20.1	11.1				7.4	〃	本堂裏	2	各面に梵字あり
	6	〃	〃		19.4	8.7				(4.4)	〃	G−17	〃	
	7	〃	鉢				15.1			5.0	〃		〃	口径 22.0 底径 17.0
	8	〃	台			5.6				(2.5)	〃		〃	
	9	〃	鉢							(2.5)	〃		〃	
	10	土製品	土管					61.1	外径 15.0 内径 9.0	4.4		暗渠	1	
	11	〃	〃					61.5	外径 16.0 内径 9.0	5.0		〃	〃	
	12	〃	〃					62.2	外径 15.6 内径 9.2	4.5		〃	〃	
79	1	石製品	硯	(6.9)	(6.3)	3.0				116.6	粘板岩	C−4	2	
	2	〃	砥石	10.0	5.8	1.0				71.5	砂岩	C−5	〃	

図	番号	種別	種類	法量(cm) タテ	ヨコ	厚	高	長	φ	重量(kg)	石質	出土位置	面	備考
79	3	石製品	砥石	(6.2)	3.7	0.7				26.0	砂岩	C−5	2	
	4	〃	〃	10.7	5.9	1.5				117.6	〃	A層、B−5	〃	
	5	〃	〃	(11.5)	3.7	2.5				194.9	〃	1溝	〃	
	6	〃	〃	8.8	2.7	1.9				60.9	〃	A層、B−5	〃	
	7	〃	〃	9.6	3.6	1.8				154.6	〃	D−13	〃	
	8	〃	〃	11.5	6.4	1.5				138.6	〃	G−14	3	
	9	〃	〃	10.2	3.6	3.1				143.6	〃	B−8	〃	
	10	〃	軽石	(3.8)	3.7	1.2				7.3		B−5	2	
	11	ガラス製品	容器？	口 4.2						8.8		1号土坑	2	
	12	〃	ラムネ壜	底 4.0			(16.1)			392.3		G−9	1	

図	番号	種別	法量(cm) 口径	底径	器高	樹種	出土位置	面	備考
80	1	漆碗	(11.6)	(5.5)	7.8		1溝	2	内外面黒漆
	2	〃	11.8	5.3	6.0		〃	〃	〃
	3	〃	—	6.2	—		〃	〃	〃
	4	〃	—	(6.8)	—		〃	〃	内面赤漆、外面黒漆
	5	〃	—	(3.4)	—		〃	〃	金鯉、内外面赤漆
	6	(漆碗の) 蓋	径(10.8)	—	—		〃	〃	内面赤漆、外面黒漆
	7	漆碗	(12.5)	(6.3)	7.0		3溝	〃	〃 、 〃 、外面記号あり朱色
	8	〃	12.2	6.3	7.0		〃	〃	内外面黒漆、外面記号あり朱色
	9	〃	(11.2)				〃	〃	内外面黒漆、底部赤漆で『舎』
	10	〃	—	—	—		〃	3	内外面赤漆
	11	(漆碗の) 蓋	径 8.2	—	2.0		6溝	2	内面赤漆？、外面黒漆
	12	〃	—	—	—		〃	〃	内面赤漆、 〃
	13	漆碗	(10.6)	—	—		7溝	〃	内外面赤漆
	14	〃	—	5.4	—		〃	〃	内面赤漆、外面黒漆
	15	〃	—	(5.6)	—		〃	〃	〃 、 〃
	16	〃	—	5.0	—		〃	〃	〃 、 〃
	17	〃	—	—	—		〃	〃	〃 、 〃
	18	〃	—	—	—		〃	〃	〃 、 〃
81	1	(漆碗の) 蓋					7溝	2	外面竹笹文様、内面赤漆、外面黒漆
	2	〃					〃	〃	〃 、 〃 、 〃
	3	〃	9.8		3.0		〃	〃	内外面赤漆
	4	〃					9溝	〃	内外面赤漆、高台は黒漆
	5	〃	11.4				7溝	〃	内外面黒漆
	6	〃	14.2				〃	〃	〃
	7	漆碗					12溝	〃	内外面赤漆
	8	〃	(10.6)	(5.7)	3.8		13溝	3	〃
	9	〃		6.3			1号土坑	4	内面赤漆、外面黒漆
	10	〃	(14.0)				E−7	5	内外面黒漆

図	番号	種別	法量(cm) 長さ	幅	厚	樹種	出土位置	面	備考
82	1	杭	(52.6)	7.7	7.2		2号建物下部	2	
	2	〃	(37.1)	径 5.4			〃	〃	
	3		42.4	5.4	2.2		〃	〃	
	4	杭	(38.1)	径 3.2			〃	〃	
	5	〃	(38.7)	径 2.7			〃	〃	
	6	竹杭	21.8	径 3.3			〃	〃	
83	1	下駄	15.0	7.6	6.1	キハダ	1溝	2	
	2	〃	7.6	5.6	2.0	広葉樹（散孔材）	〃	〃	
	3	〃	21.7	8.7	1.2	ケヤキ	〃	〃	
	4	糸巻	20.4	3.4	1.5	クリ	〃	〃	
	5	〃	18.5	3.6	1.5	〃	〃	〃	
	6	しゃもじ	11.0	7.4	0.5	〃	〃	〃	
	7	〃	15.3	4.4	0.5	〃	〃	〃	
	8	下駄	24.4	8.2	6.4		〃	3	

図	番号	種別	法量(cm) 径	幅	厚	樹種	出土位置	面	備考
84	1	桶底	20.8	5.7	1.7	スギ	1溝	2	
	2	桶側板	長10.0	6.1	1.4	〃	〃	〃	
	3	桶底	15.4	18.0	1.2	マツ属単維管束亜属	〃	〃	

図	番号	種　別	法　量（cm）			樹　種	出土位置	面	備　考
			径	幅	厚				
85	1	曲物	径 28.6	高　5.7			1溝	2	
	2	輪切	8.7	9.6	4.0	ケヤキ	〃	〃	
	3	曲物底	12.5	6.1	1.1		1溝	〃	
	4	〃	12.8	12.1	0.9	マツ属単維管束亜属	〃	〃	桜皮付き
	5	〃	12.5	12.0	1.1	〃	〃	〃	
	6	曲物	43.0	5.8	0.3		〃	〃	
	7	輪切	7.7	7.8	2.9	ケヤキ	〃	〃	8とセット
	8	棒	長10.2	2.3	2.3	ヒサカキ	〃	〃	7とセット
	9	箸	長18.6	0.8	0.7	ヒノキ属	〃	〃	
図	番号	種　別	法　量（cm）			樹　種	出土位置	面	備　考
			長	幅	厚				
86	1	棒（杭）	55.7	5.5	6.5	マツ属複維管束亜属	1溝	2	ほぞ穴あり
	2	杭	59.0	7.0	5.8		〃	〃	
	3	膳	28.0	8.6	0.6	マツ属単維管束亜属	〃	〃	赤漆塗り
	4	柄	33.2	3.5	1.5	ツガ属	〃	〃	
	5	棒　状	15.2	3.0	1.9	モミ属	〃	〃	
	6	柄	27.3	2.1	3.2		〃	〃	
	7	傘の部品	径　5.8	高　4.5			〃	〃	
	8	〃	径　5.5	高　5.0			〃	〃	
87	1	下　駄	17.9	8.2	1.7	ケヤキ	3溝	〃	
	2	〃	22.7	(5.4)	3.6	モミ属	〃	〃	
	3	〃	22.5	10.1	4.0	トネリコ属	〃	〃	
	4	〃	(7.0)	9.8	1.3	ヒノキ属	〃	〃	
	5	しゃもじ	(18.0)	7.6	0.6	モミ属	3溝	〃	
	6		(7.5)	5.2	1.0		〃	〃	
88	1	下駄	20.9	9.5	2.9	オニグルミ	3溝	〃	
	2	〃	(6.4)	(7.8)	1.4	〃	〃	〃	
	3	箸	(20.0)	0.8	0.9	モミ属	〃	〃	
	4	〃	24.0	0.6	0.6		〃	〃	
	5	〃	15.1	0.7	0.5		〃	〃	
	6	斎串	18.3	1.3	0.3		〃	〃	
89	1	糸巻	26.0	(10.6)	1.9	ツガ属	〃	〃	
	2	曲物底	径12.4		1.0	マツ属単維管束亜属	〃	〃	
	3	桶底	径16.8		1.4		〃	〃	
	4	組板	14.2	14.0	1.9		〃	〃	
	5	盆	径(18.2)		1.0	マツ属単維管束亜属	〃	〃	
	6	桶底	径16.5		1.0		〃	〃	
90	1	杭	57.2	径　5.4	—		3溝	〃	
	2	〃	46.8	3.1			〃	〃	
	3		33.6	2.6			〃	〃	
	4		13.1	2.2	1.4		〃	〃	
91	1	棒	34.6	1.3	0.7	ヒノキ属	3溝	〃	
	2	桶・側板	23.3	3.4	1.1	〃	〃	〃	
	3	〃	16.8	5.8	1.1	〃	〃	〃	
	4	〃	10.1	8.8	1.1	スギ	〃	〃	
	5	桶・底	25.7	5.8	1.1	ヒノキ属	〃	〃	
	6	〃	径22.5		1.2		6溝	〃	
	7	桶・側板	28.6	6.1	1.6	ヒノキ属	〃	〃	貫通孔有
92	1	杭	73.8	5.2	4.2		3溝	〃	
	2	建築材	71.2	15.4	8.4		6溝	〃	
	3	角材	109.5	10.1	4.0	クリ	7溝	〃	
93	1	板	62.6	9.0	14.2		6溝	〃	焼け跡一部
	2	曲物底	径12.8		1.2		〃	〃	
	3	円板	径6.1		0.4		〃	〃	
	4	傘の一部	4.0	6.2	(2.0)	エゴノキ属	〃	〃	
	5	（膳）折敷	(26.3)	(16.7)	1.1	樹　皮	〃	〃	全体に黒漆
	6	板	(20.0)	(15.2)	2.4	マツ属複維管束亜属	〃	〃	焼け跡一部
94	1	桶側板	9.8	5.0	1.2	スギ	6溝	〃	
	2	曲物底	径9.2		0.4	ヒノキ属	〃	〃	
	3	桶	径36.7	(17.8)	1.4	スギ	8溝	〃	同一か？
	4	〃	径36.7	(17.4)	1.8	〃	〃	〃	〃

図	番号	種　別	法　量（cm）			樹　種	出土位置	面	備　考
			長	幅	厚				
95	1	下駄	19.0	7.4	3.2		7溝	2	
	2	〃	16.8	8.8	3.6	コナラ族コナラ亜属コナラ節	〃	〃	
	3	〃	20.2	8.2	2.0		〃	〃	
	4		径5.6		0.3		〃	〃	
96	1	膳	32.0	27.6	1.0	マツ属複維管束亜属	7溝	〃	
	2	〃	25.0	9.0	0.7	〃	〃	〃	
	3	脚　台	18.4	4.6	5.8	モミ属	〃	〃	
	4	板	21.2	8.0	0.8	〃	〃	〃	
	5	〃	24.2	10.2	1.0		〃	〃	
97	1	組板	60.0	3.0	1.6	スギ	7溝	〃	
	2	板	31.4	10.7	0.7	ヒノキ属	〃	〃	
	3	〃	35.6	9.2	0.8	〃	〃	〃	
	4	組角棒	40.5	1.7	1.7	モミ属	〃	〃	
	5	杭	47.5	2.7	1.8	ヒノキ属	〃	〃	
98	1	杭	49.7	6.5	5.5	ヒノキ属	7溝	〃	
	2	丸　太	59.5	9.2	7.6		〃	〃	
	3	角　材	28.2	11.5	10.3		〃	〃	
	4	桶　底	7.9	15.2	0.5	ヒノキ属	〃	〃	
99	1	曲物　側面	39.3	4.0	0.5	ヒノキ属	7溝	〃	
	2	曲物　底	径12.0		0.8	マツ属単維管束亜属	〃	〃	
	3	曲物　底	12.2	6.0	0.8	〃	〃	〃	
	4	桶	径18.2		1.0		〃	〃	
	5	塗もの	16.6	2.1	1.0		〃	〃	
	6	箸	17.1	1.5	0.6		〃	〃	
	7	〃	19.4	0.7	0.5	ヒノキ属	〃	〃	
	8	〃	20.5	0.7	0.6		〃	〃	
	9	〃	8.3	1.0	0.8		〃	〃	
	10	〃	18.5	0.7	0.5	ヒノキ属	〃	〃	
	11	〃	16.8	0.8	0.7	〃	〃	〃	
	12	〃	14.9	0.9	0.6	〃	〃	〃	
	13	〃	20.3	0.8	0.7	〃	〃	〃	
	14	〃	20.3	0.6	0.6	〃	〃	〃	
	15	〃	23.3	0.7	0.4	〃	3号人骨	〃	
	16	〃	23.0	0.8	0.5	〃	〃	〃	
	17	組棒	26.1	3.5	3.0	〃	7溝	〃	
	18	栓	7.4	3.6	3.0	〃	〃	〃	
100	1	杭	36.6	4.7	3.0	モミ属	8溝	〃	
	2	下駄	21.0	7.7	1.5	オニグルミ	12溝	〃	
	3	曲物底	径12.5		1.0	マツ属単維管束亜属	〃	〃	
	4	下駄（歯）	5.2	8.6	1.7		〃	〃	
	5	桶側板	11.2	11.0	1.0		〃	〃	
	6	箸	19.1	0.9	0.5		〃	〃	
	7	〃	13.7	0.8	0.5		〃	〃	
	8	〃	17.9	1.2	0.7		〃	〃	
	9	竹	12.5	4.0	3.5	イネ科タケ亜科	〃	〃	
	10	櫛	2.1	5.5	0.7	ツゲ	〃	〃	
	11	栓	2.8	3.0	2.7	モミ属	〃	〃	
101	1	桶底	30.9	(13.6)	1.2	ヒノキ属	12溝	〃	
	2	桶蓋	28.3	9.0	1.1	〃	〃	〃	
	3	円板	径　6.2		0.4	〃	〃	〃	
	4	〃	径　6.4		0.4	〃	〃	〃	
	5	桶側板	18.0	6.8	0.9	〃	〃	〃	
102	1	角材	35.4	6.7	3.6		13溝	3	
	2	下駄	20.5	(7.4)	2.5		〃	〃	
	3	曲物底	径14.0		0.9		〃	〃	
	4	棒	26.0	4.4	3.0		〃	〃	
	5	板	4.6	5.5	1.0		〃	〃	
	6	円盤	径5.5		2.5		15溝	〃	
	7	桜の皮	2.6				16溝	〃	
	8	桶底	径21.0		1.1		〃	〃	

図	番号	種　別	法　量（cm）			樹　種	出土位置	面	備　考
			長	幅	厚				
103	1	桶把手	36.8	5.7	1.2		16溝	3	
	2	桶側板	23.8	7.2	1.4		〃	〃	
	3	〃	24.0	6.6	0.8		〃	〃	
	4	〃	24.0	10.2	1.6		〃	〃	
	5	〃	24.0	5.6	0.8		〃	〃	
	6	〃	23.6	4.0	0.9		〃	〃	
	7	〃	23.6	6.9	1.2		〃	〃	
104	1	桶側板	24.0	9.6	1.5		16溝	〃	
	2	〃	23.6	8.3	1.2		〃	〃	
	3	〃	23.6	4.2	0.8		〃	〃	
	4	〃	23.6	4.6	0.8		〃	〃	
	5	〃	23.4	10.8	1.6		〃	〃	
	6	板	25.2	4.8	1.2		〃	〃	
105	1	板	45.5	11.4	1.1		17溝	〃	釘つき２コ　穴５コ
	2	〃	40.8	4.6	0.9		F－11	〃	
	3	〃	20.1	9.6	2.0			〃	組板として再利用
	4	円板	径11.7	11.8	1.4		D－16	〃	中心に穴
	5	箸	18.0	1.3	0.5			〃	
	6	〃	11.7	0.6	0.5			〃	
106	1	杭	55.7	3.8	2.2		18溝	〃	
	2	下駄	23.4	9.0	9.4		〃	〃	歯　削り出し
	3	板	12.5	7.8	0.9		〃	〃	表に赤漆　木釘穴５コ
	4	曲物底	(14.7)	(6.1)	0.4		〃	〃	
	5	板	15.3	2.5	0.3		〃	〃	上部に穴３コ
	6	〃	11.0	7.5	2.5		17溝	〃	
107	1	〃	46.4	8.5	2.1		〃	〃	
	2	杭	42.6	5.2	3.3		18溝	〃	
	3	板	16.6	10.2	6.2		20溝	〃	
108	1	桶	32.5	7.3	1.2		18溝	〃	
	2	〃	32.8	6.2	1.2		〃	〃	
	3	桶底（蓋）	27.2	(10.1)	1.8		〃	〃	
109	1	板	17.6	9.4	4.0		３号井戸	〃	
	2	桜の皮	3.0	3.4	1.2		３号井戸底	〃	
	3	〃	4.0	3.6	0.6		３号井戸底	〃	
	4	桶	16.6	9.0	2.0		２号井戸	〃	
	5	柱根	23.2	17.0	14.4		５号建物	2	
110	1	桶	33.4	10.2	1.6		３号井戸	3	内側桶６
	2	〃	33.4	12.6	1.2		〃	〃	内側桶３
	3	〃	33.6	10.0	1.3		〃	〃	内側桶12
	4	〃	33.2	8.0	1.6		〃	〃	内側桶１
	5	〃	33.4	5.8	1.1		〃	〃	内側桶２
111	1	桶	33.2	11.2	2.0		３号井戸	〃	内側桶13　穴あり
	2	〃	34.0	13.4	1.7		〃	〃	内側桶11
112	1	桶	32.0	3.4	1.2		３号井戸	〃	内側桶９
	2	〃	33.4	8.4	1.0		〃	〃	内側桶10　穴あり
	3	〃	33.6	8.8	1.2		〃	〃	内側桶４　穴あり
	4	〃	33.6	4.8	1.0		〃	〃	内側桶５
	5	〃	32.4	8.0	1.3		〃	〃	内側桶７
	6	〃	32.6	6.0	1.0		〃	〃	内側桶８
113	1	桶	20.0	8.6	1.6		３号井戸	〃	外側桶５
	2	〃	26.2	8.8	1.8		〃	〃	外側桶10　煤あり
	3	〃	20.4	6.2	1.6		〃	〃	外側桶８
	4	〃	22.4	8.4	1.5		〃	〃	外側桶９
	5	〃	26.6	11.2	2.3		〃	〃	外側桶12
	6	〃	23.8	11.2	2.2		〃	〃	外側桶７
	7	〃	21.4	9.4	2.0		〃	〃	外側桶11
114	1	桶	23.8	10.9	1.4		３号井戸	〃	外側桶１
	2	〃	25.4	8.7	1.2		〃	〃	外側桶２
	3	〃	21.8	9.9	1.4		〃	〃	外側桶３
	4	〃	20.6	9.2	1.8		〃	〃	外側桶４
	5	〃	26.4	5.6	1.4		〃	〃	外側桶６

図	番号	種別	法量(cm) 長さ	幅	厚	樹種	出土位置	面	備考
114	6	桶	26.8	6.0	1.4		3号井戸	3	外側桶13

図	番号	種別	法量(cm) 径		厚	樹種	出土位置	面	備考
115	1	〃	29.2		2.2		4号桶	3	
	2	〃	31.6		1.8	ヒノキ属	2号桶	〃	

図	番号	種別	法量(cm) 長さ	幅	厚	樹種	出土位置	面	備考
116	1	折敷	(28.1)	(8.3)	0.9	ヒノキ属	1号人骨棺下	2	全体に黒漆、俎板に使用
	2	ひしゃく	径12.0		高9.0		7号棺脇	〃	
	3	円盤	8.0	6.1	0.6		1溝	4	中心に穴
	4	箸	18.5	0.8	0.7		〃	〃	
	5	曲物底	19.7	6.5	1.2		B−4	2	

図	番号	種別	法量(cm) 径		厚	樹種	出土位置	面	備考
117	1	桶底	56.5		1.1		1号桶	2	7溝中
118	1	桶	—	底径 28.5	—	スギ	4号人骨	2	

図	番号	種別	法量(cm) 長さ	幅	厚	出土位置	面	備考	時期
119	A	骨角製品	7.2	5.4		3号建物	2	鹿角を加工	江戸
	B	猪牙	3.9	4.4			4	下顎骨	戦国
	1	馬歯	7.3	3.2		F−18	2		江戸
	2	〃	6.5	3.9		〃	〃		〃
	3	〃	6.9	3.7		〃	〃		〃
	4	〃	6.1	2.6		D−12	5		鎌倉
	5	〃	7.2	3.0		D−6	〃		〃
	6	〃	5.8	3.6		D−12	〃		〃
	7	〃	3.7	2.7		D−13	〃		〃
	8	〃	4.9	2.8		〃	〃		〃
	9	〃	4.7	3.2		〃	〃		〃
	10	〃	4.1	2.4		〃	〃		〃
	11	牛歯	4.8	2.3		D−15	6		〃
	12	斎串	11.6	1.4	0.3	E−7	5	焼跡あり	〃
	13	〃	7.0	1.2	0.5	E−7	5		〃

図	番号	種別	器種 種類	分類	形状	出土場所	面	法量(cm) 口径	底径	器高	残存 %	絵付・釉薬	備考	時期
122	1	陶器	碗	小		B−4、B−5	4	(6.3)	—	—	30			江戸
	2	〃	〃	中	端反形	C−4、D−4	〃	(9.8)	—	—	10	鉄釉	「鉄釉端反碗」	戦国~江戸
	3	〃	〃	〃		1号土坑	〃	(10.8)	—	—	40		天目茶碗	〃
	4	〃	皿	小	丸皿	〃	〃	(9.8)	—	—	10	灰釉	「大窯」	〃
	5	〃	〃	〃	〃	C−3	〃	(9.4)	—	—	10	長石釉	志野	〃
	6	〃	灯明皿			B−3	〃	(10.2)	—	—	15	鉄釉		江戸
	7	〃	蓋			B−12	〃	(8.4)	—	—	10		土瓶の蓋	〃
	8	〃	碗	中		B−4	〃	—	4.8	—	20	鉄釉	「天目茶碗」	戦国~江戸
	9	〃	皿	小	丸皿	B−3、B−4	〃	(12.7)	(7.8)	2.1	10		「志野丸皿」	〃
	10	〃	灯明皿				〃	(10.0)	(5.3)	2.3	40	鉄釉、ウノフ釉		江戸
	11	土器	かわらけ			B−4	〃	(5.6)	(3.8)	1.2	40		糸切り痕	戦国~江戸
	12	〃	〃			〃	〃	(7.6)	4.8	1.6	40		糸切り痕	〃
	13	〃	〃			C−12	〃	(10.0)	(6.0)	2.7	30		糸切り痕	〃
	14	〃	〃			C−3、C−4	〃	(10.4)	(5.8)	2.4	30		糸切り痕	〃
	15	〃	焙烙			1溝下	〃	(30.1)	(27.4)	7.3	10		内耳か？	〃
	16	〃	〃			B−4	〃	(30.2)	(27.4)	11.1	10		内耳か？	〃
	17	〃	土器			E−6	5	—	—	—			弥生中期	弥生
	18	〃	須恵器			E−13	〃	—	—	—				古墳
	19	〃	〃			D−6	〃	—	—	—				〃
	20	〃	〃			D−5	〃	—	—	—				〃
	21	〃	〃			D−6	〃	—	—	—				〃
	22	〃	土師器			6面	6	(18.0)	—	—				〃
	23	〃	〃		盤状坏	E−18	〃	—	(7.6)	—	10			奈良

図	番号	種別	器種		形状	出土場所	面	法量（cm）			残存	絵付・釉薬	備考	時期
			種類	分類				口径	底径	器高	%			
122	24	土器	須恵器			F−19	6	—	—	—				古墳
	25	〃	土器			F−17	〃	—	—	—			弥生後期	弥生
	26	〃	〃			E−16	〃	—	—	—			弥生中期	〃
	27	〃	須恵器			E−22	〃	—	—	—				古墳

図	番号	種別	法量（cm）			樹種	出土位置	面	備考
			長さ	幅	厚				
123	1	柱根	(47.6)	15.5	16.7	モミ属	建物	4	六角
	2	〃	(26.7)	17.4	15.2	〃	建物	〃	〃
	3	〃	(24.5)	13.0	11.4	〃	建物	〃	四角
	4	〃	(43.1)	16.4	16.0			〃	六角
	5	〃	(31.5)	17.7	16.0	カラマツ	建物	〃	〃
	6	〃	(44.7)	16.7	17.0				〃
124	1	柱根	(42.2)	13.9	12.8		建物	4	六角
	2	〃	(28.0)	10.3	9.2		建物	〃	〃
	3	〃	(44.7)	13.1	7.7	ツガ属	建物	〃	角面取り
	4	〃	(22.1)	7.5	7.6		建物	〃	
	5	〃	(23.4)	8.1	3.7		建物	〃	
	6	〃	(22.7)	6.4	5.6			〃	
	7	〃	(41.5)	13.5	12.0		建物	〃	
	8	〃	(39.8)	11.0	8.6		建物	〃	
	9	〃	(34.8)	8.2	7.2		建物	〃	
129	1	杭	110.7	3.8	2.1		2号杭列	5	
	2	〃	76.6	4.5	2.8		〃	〃	
	3	〃	97.5	4.5	3.7		〃	〃	
	4	網代	79.4	12.7	1.3		〃	〃	
	5	杭	49.0	5.5	3.8		〃	〃	

写 真 図 版

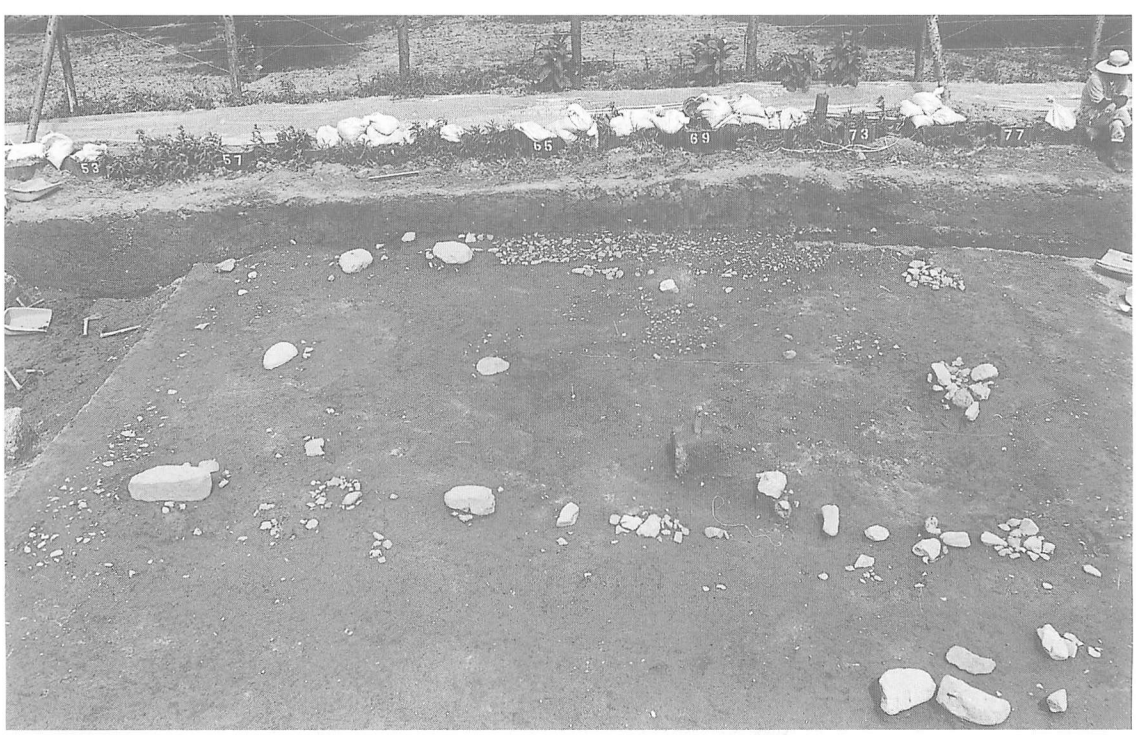
図版1

1．遺跡上空（南より）

2．遺跡上空（北より）

図版2

1．1号建物

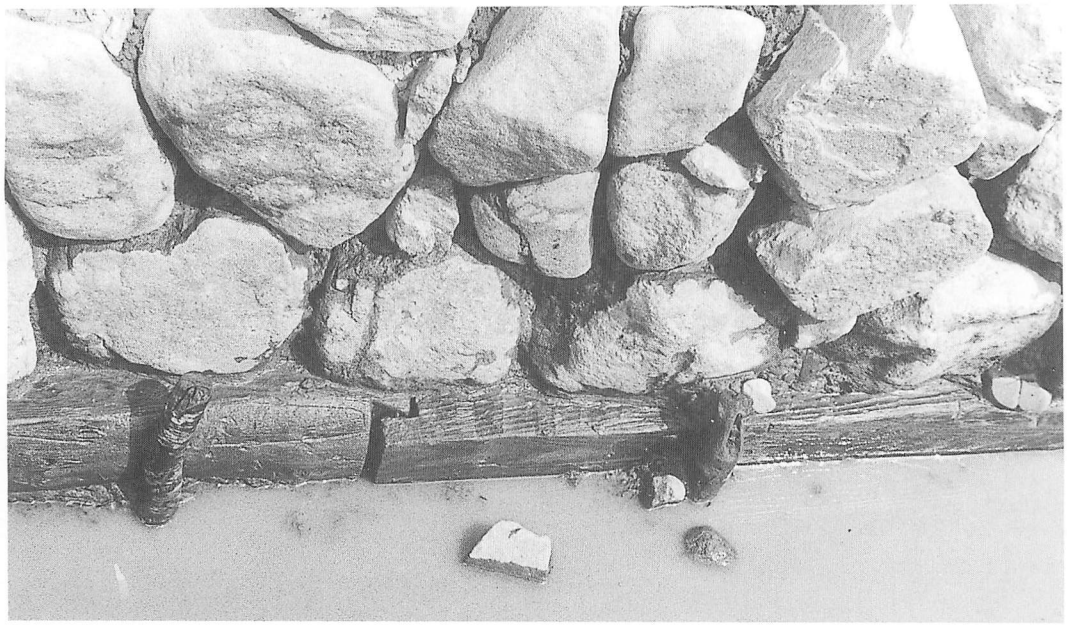


2．2号建物

1．3号建物全景と1号溝・参道

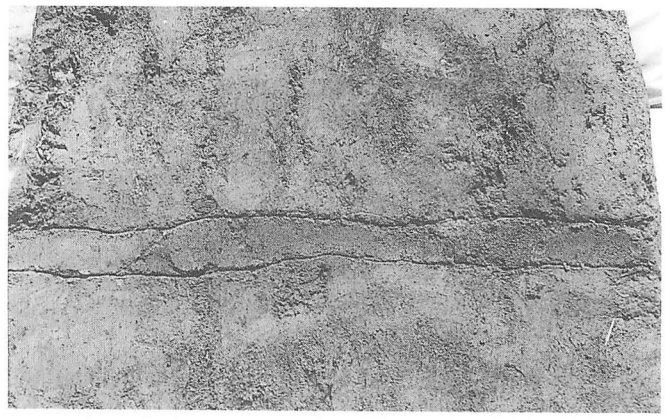
2．参道の並木根と周辺の遺構

図版 4



1． 3 号建物の石垣と胴木

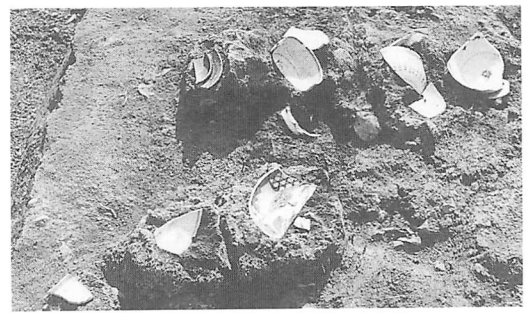
2．石垣と3号溝



3. 3号建物に堆積した、逆流による洪水砂

1．3号建物全景

2．礎石の根石



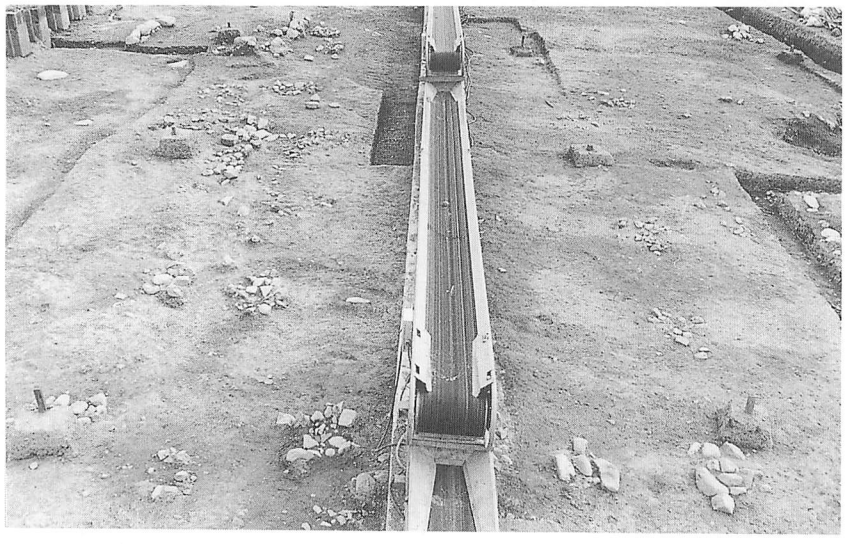
4．磁器類の出土

3．根石の断面

5．陶器の出土

図版 6

1．4号建物（七面堂）



2．5号建物（庫裏）

3．平成８年調査の７号建物（本堂）

1．本堂の南に広がる遺構群

2．平成 6 年調査の 7 号建物（本堂）

図版 8

1．参道全景

2．参道（部分）

1．３号溝と石垣（手前）・参道（中央）・4号建物（奥）

2．南側からみた参道石敷と3号溝（右）

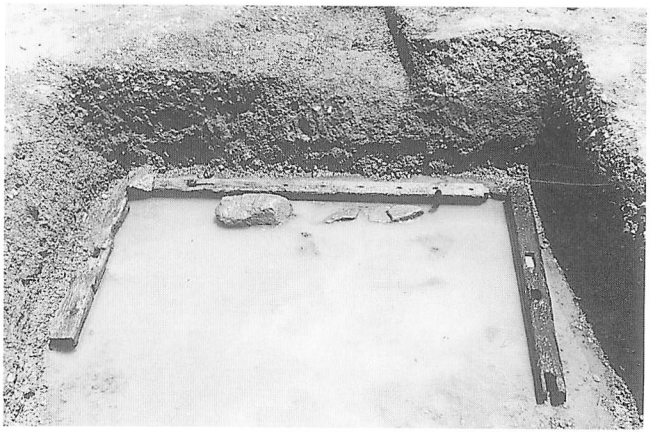
図版10

1．６号・17号・18号溝（池）

18号溝（池）

17号溝（池）

６号溝（池）



2．６号溝（池）の胴木

1．18号溝（池）と出土遺物

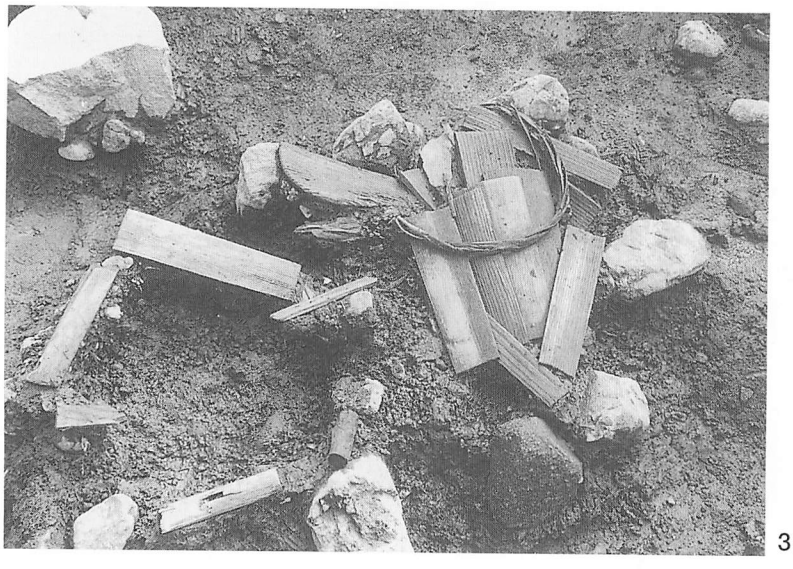
2．18号溝（池）全景

3．７号・９号溝（池）

図版12

1．18号溝全景

2．16号溝全景



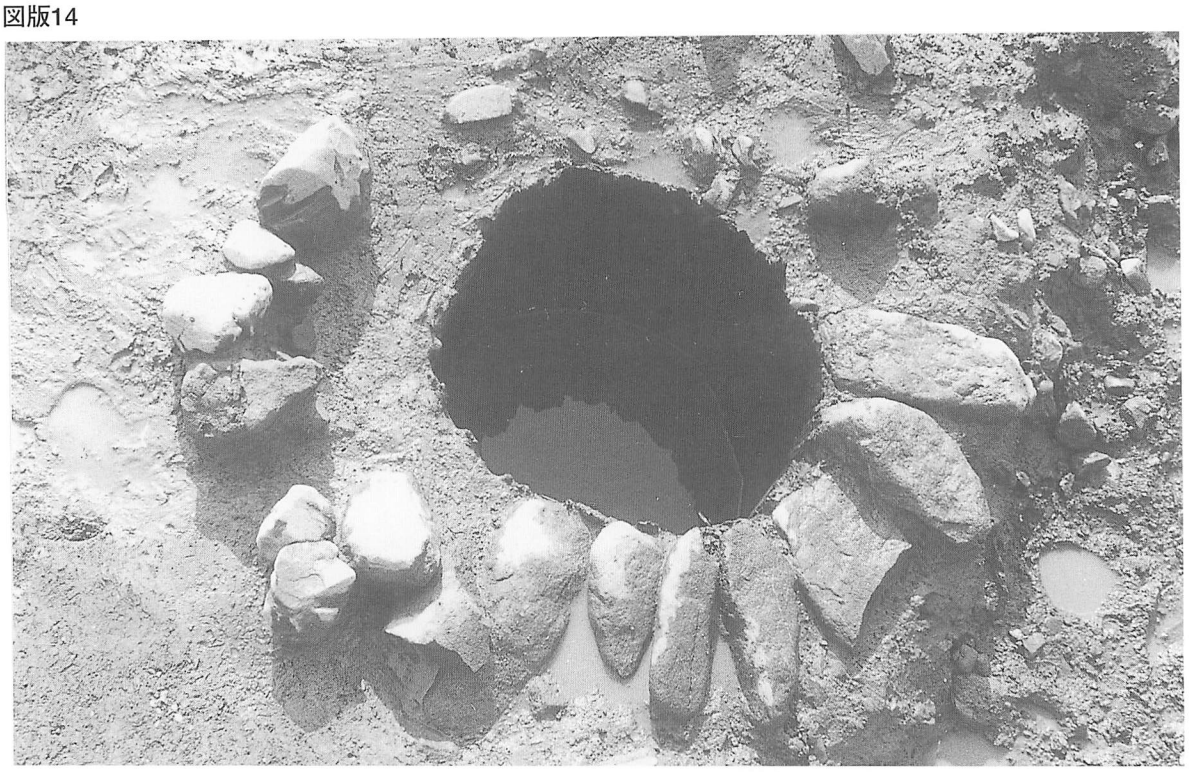
3．16号溝の桶出土状況

1. 10号・11号・21号溝

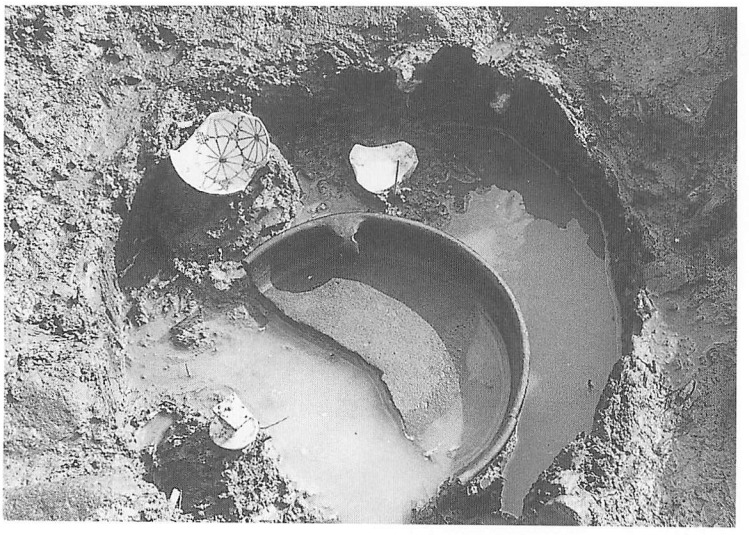
2. 1号井戸全景

3. 1号井戸内埋設竹

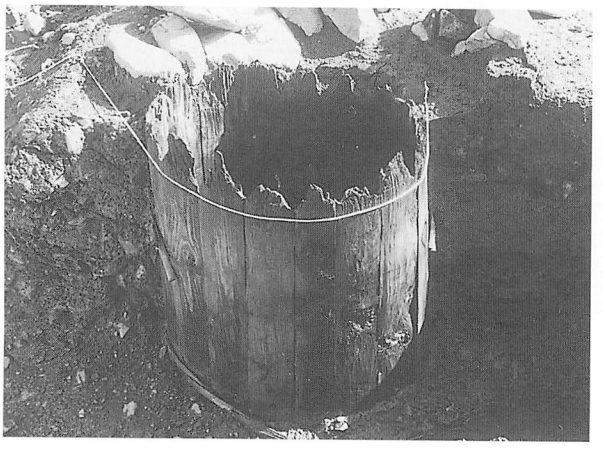
図版14



1．2号井戸全景



2．2号井戸上面の遺物



3．2号井戸の桶枠

1．3号井戸桶枠（外側）

2．3号井戸桶枠（内側）

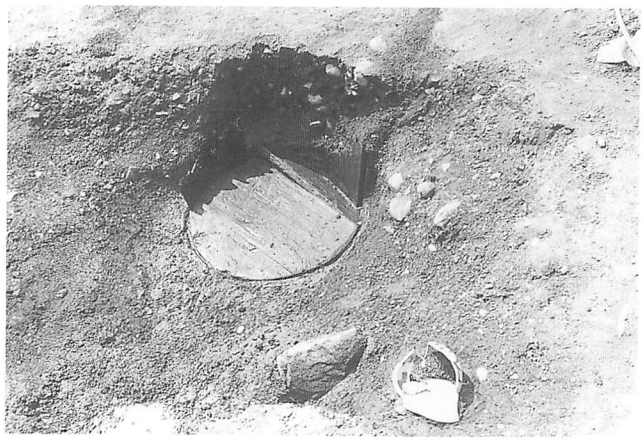
3．5号井戸掘方

図版16

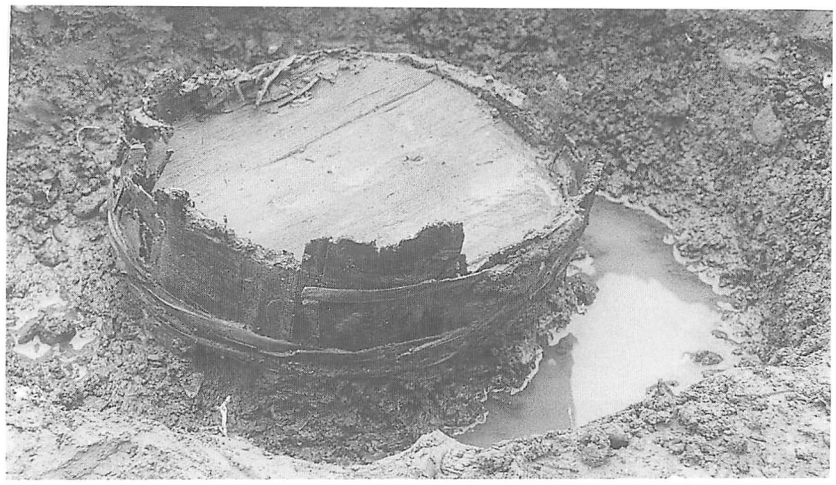
1．6号井戸掘方

2．6号井戸埋設竹

3．6号井戸と2号土坑



1．1号桶（7号溝岸）

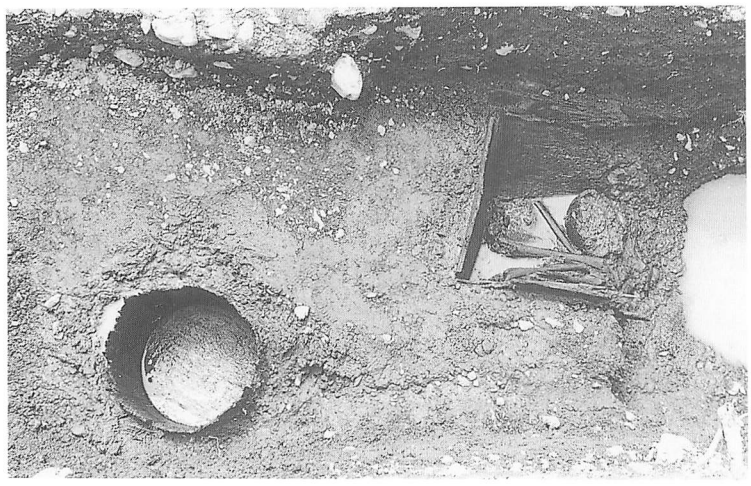


2．2号桶（2号建物脇）

3．3号桶（左）と4号桶

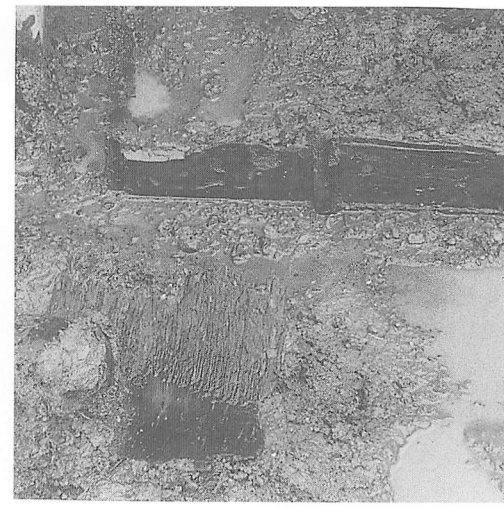
図版18

1．1号人骨棺

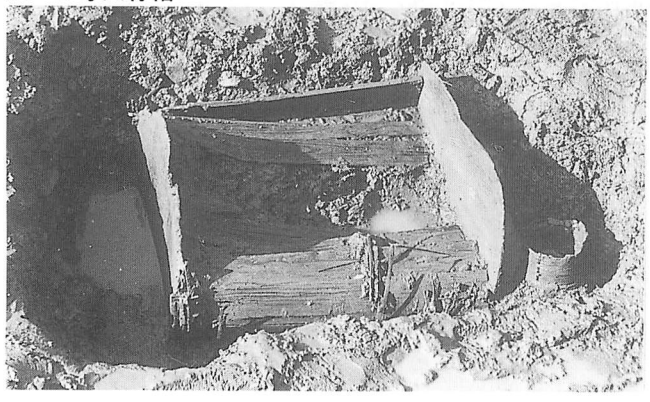


2．2号人骨棺（右）と4号人骨の桶棺

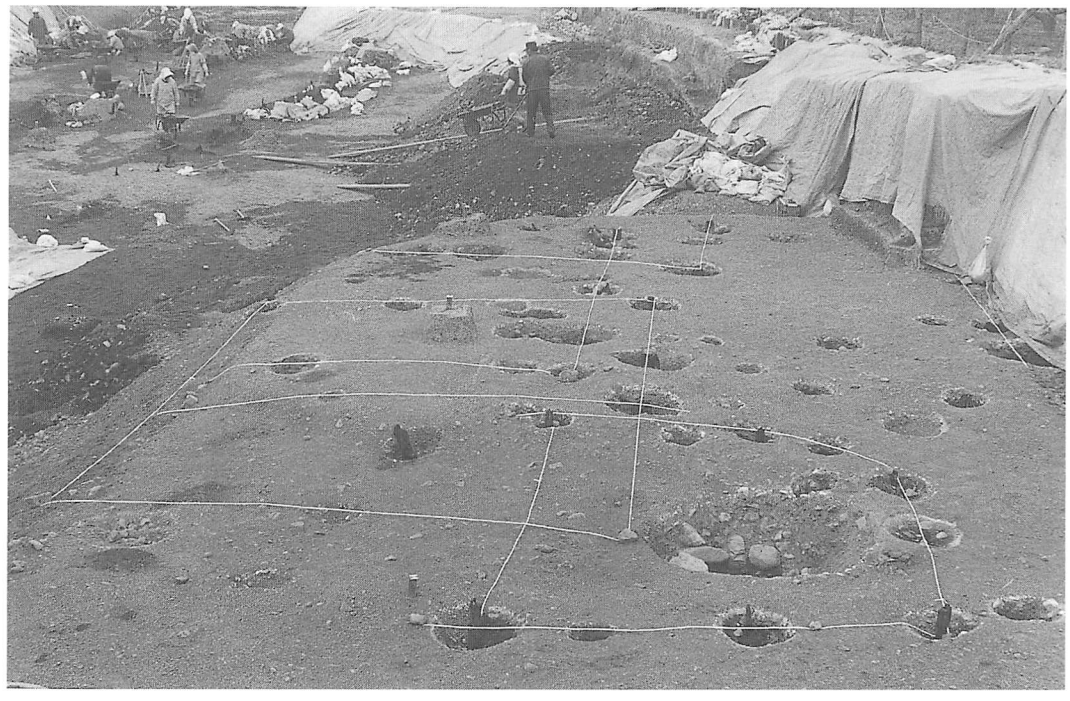
3．6号人骨棺



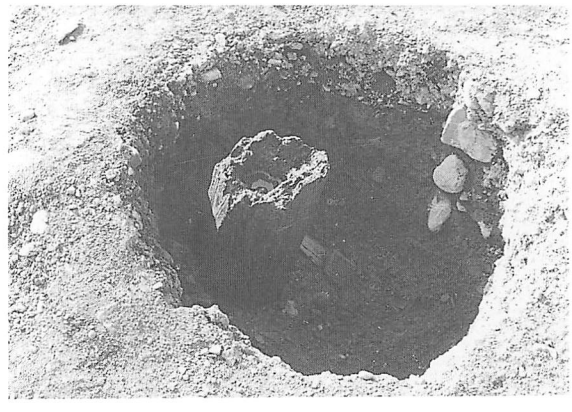
4．6号人骨棺と5号人骨棺（手前）



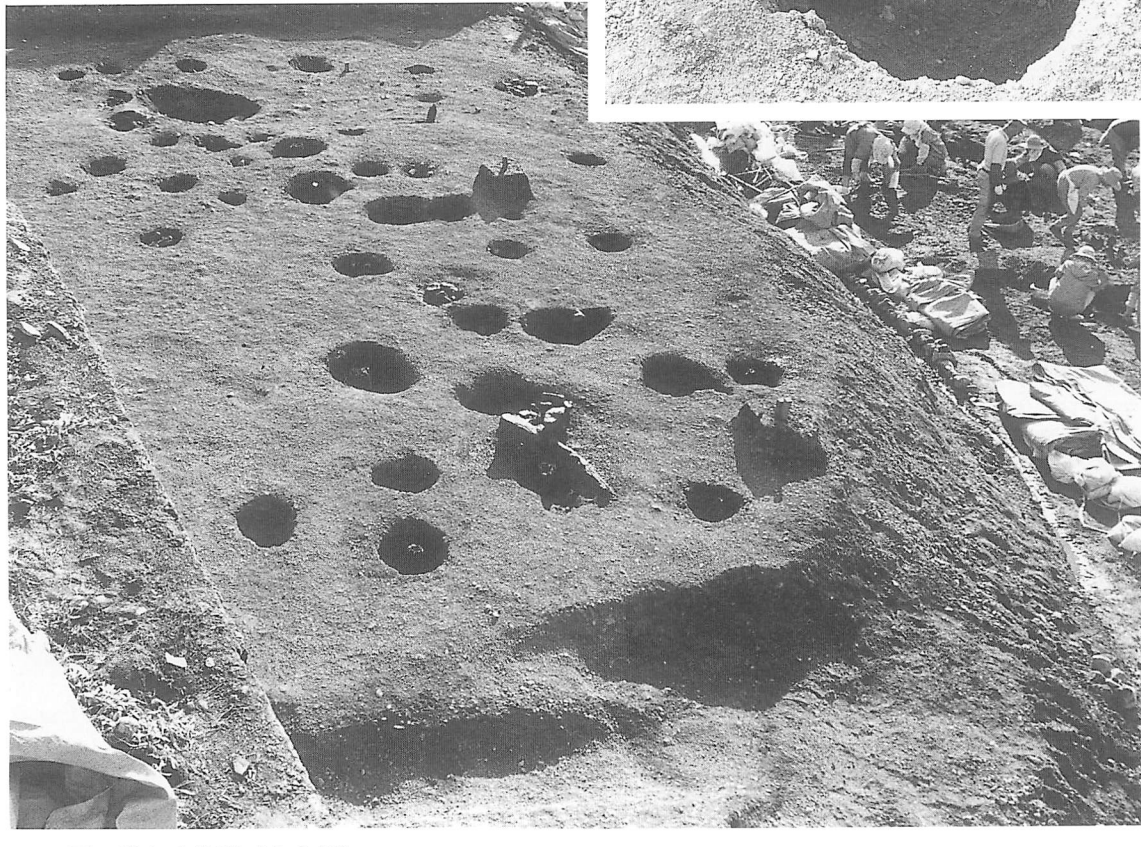
5．7号人骨棺



1．４面の建物群（南より）



2．柱穴内の柱根



3．4面の溝と建物群（北より）

図版20

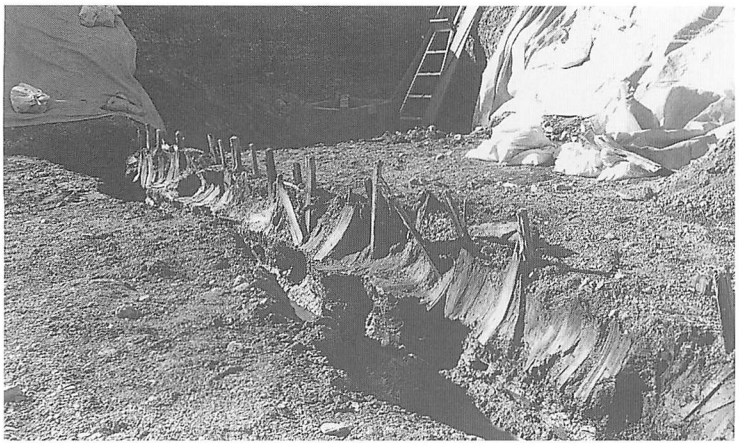
1．５面の調査風景（右下の高い面は４面建物群）

2．５面１号杭列（奥）と2号杭列（手前）

1．５面１号杭列の洪水による傾斜としがらみ

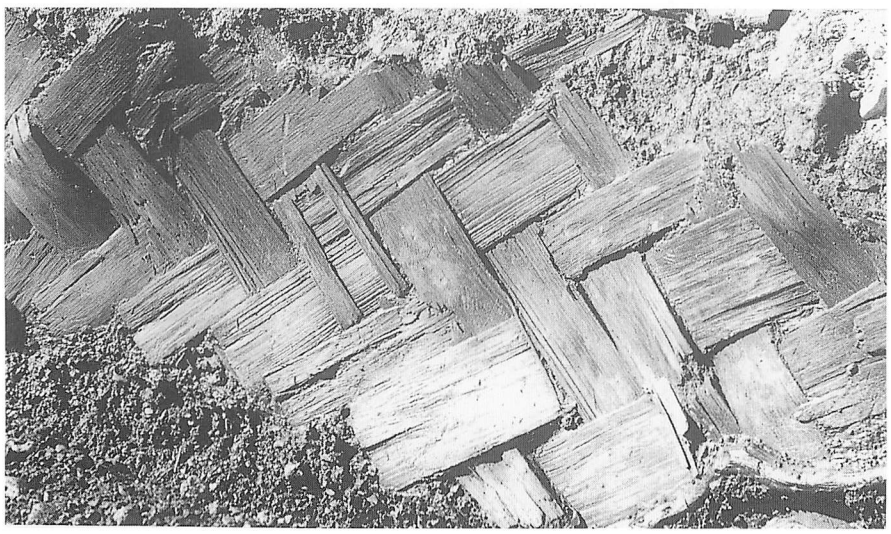
2．５面１号杭列の全景（北より）

図版22



1．５面２号杭列（南部）

2．５面２号杭列（北部）

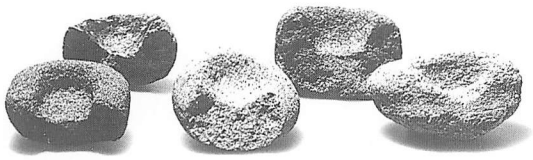


3．５面２号杭列の網代

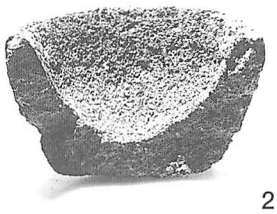
1． 発掘区西壁の土層（上面が２・３面、最下層が６面）

2． ６面の水田跡

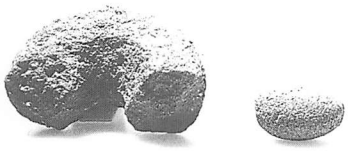
図版24　石製品



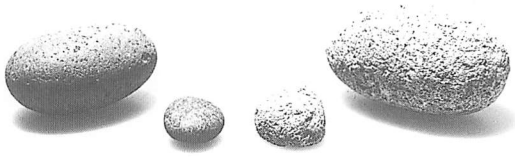
1．凹石



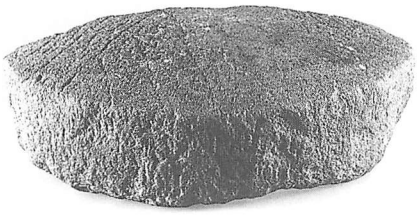
2．石鉢



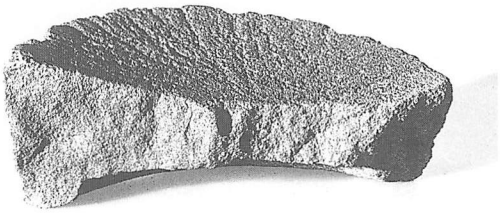
3．軸受石、磨石



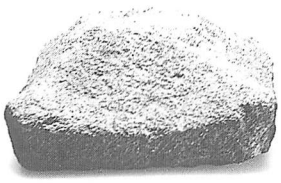
4．磨石

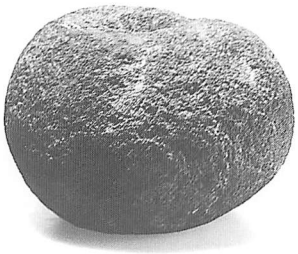


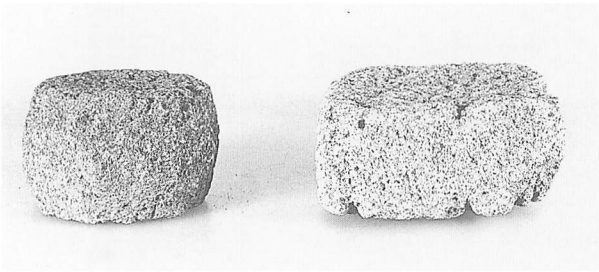
5．石臼

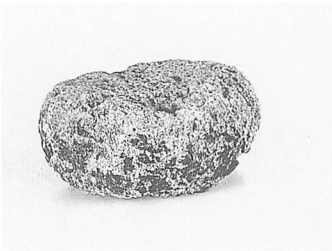


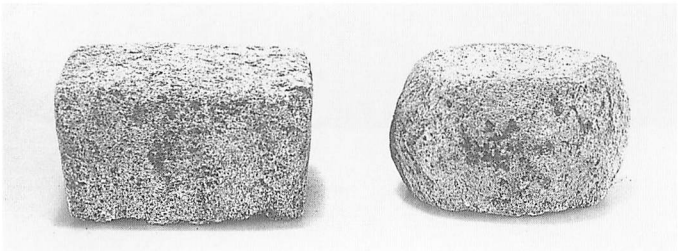
6．石臼

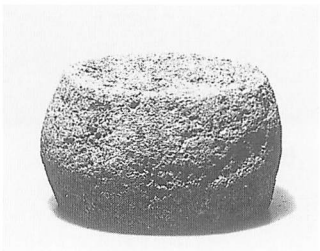












7．五輪塔各部位

報告書概要

フリガナ		ミヤザワナカムライセキ	
書名		宮沢中村遺跡	
副題		一般国道52号改築・中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第181集	
著者名		新津健・田口明子	
発行者		山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京第二建設局	
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話		山梨県東八代郡中道町下曽根923　〒400－1508　055－266－3881	
印刷所		株式会社ヨネヤ	
印刷日・発行日		平成12年3月21日・平成12年3月27日	
ミヤザワナカムライセキ		所在地	山梨県中巨摩郡甲西町宮沢字東宮沢
宮沢中村遺跡		25,000分の1地図名・位置・標高	小笠原　北緯 35° 34′ 36″
			東経138° 28′ 30″　標高 244 m
概要	主な時代	江戸時代後期・中世	
	主な遺構	江戸末の民家、寺院跡、中世の護岸、水田	
	主な遺物	陶磁器、土器、木製品、古銭、土製品、動植物遺存体	
	特殊遺構	網代を用いた杭列（護岸）	
	特殊遺物	木製品	
	調査機関	平成6年4月25日～平成7年1月20日	
		平成8年7月1日～7月11日	
		平成8年11月26日～12月16日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第181集

宮沢中村遺跡

印刷日　2000年3月21日
発行日　2000年3月27日

編集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
TEL 055－266－3881
発行　山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局
印刷　株式会社ヨネヤ